
山田町にようこそ

瓦vもすけ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

山田町によっこそ

【Nコード】

N6748H

【作者名】

瓦Vもすけ

【あらすじ】

日本一の資産家、山田貴久鉢の元に、孫がやってきた。「俺の名は大飛鴻^{だいひこう}。忍者でござる」「おまえは命を狙われてござる」「少年の育ての親や、母の親友にその娘、愛らしい動物までも巻き込んで山田町は大騒動に。どたばたコメディー。ほのぼのライト現代物。PDF縦書き読書、推奨。

プロローグ 父と母との結婚式（前書き）

もくじ

プロローグ 父と母との結婚式

第一章 山田貴久鉢、忍者を雇う

第二章 ファンシーモンスターは忍者羊の夢を見るのか

第三章 山田飛鴻に、アキラちゃんの挑戦状

第四章 山田グループの攻防

第五章 柳生の魔の手——敵は愛天使教会にあり

第六章 問答無用の要塞戦

第七章 姫と忍者の要塞戦

エピローグ

プロローグ 父と母との結婚式

わたしのゆめ

一ねん一くみ やまだようこ

わたしのゆめはやまだグループのそうさいになることです。

そうさいになったらファンシーチョコは3こふやします。

ファンシーカレーはおいもをふやします。

ファンシーランドはおおきくします。

それからひゃっかいをこえるビルをやまだちょうにたてたいです。
たてたらみんなをしょうたいします。

だけどそうさいになるにはいっぱいべんきょうしないとだめなの
です。

そうさいがばかだとみんながくろうするとごんろくさんもいって
ました。

いっぱいいっぱいべんきょうしてりっぱなそうさいになりたいで
す。

はやくおとなになってそうさいになりたいです。

わたし、何で生まれてきたのかな？

馬鹿ね、それを見つけない

・・・

さあ、多恵^{たえ}ちゃん。今日は何してあそぼっか？

プロローグ 父と母との結婚式

プライド・メイドに先導されて、新婦とその父親が、バージン・

ロードを歩いていく。

純白のドレスに身を包んだ新婦さんは、にまにまと誇らしげに。父親の方は仏頂面で。時折首を横に振っては、ため息を吐いている。

ゆっくりゆっくり親子は歩いた。重いような、軽いような足取りで。真新しい赤い絨毯の上を、祭壇に向かって歩いていく。

祭壇の前に到着すると、新婦さんは、「ふう」と小さく一息ついた。それから、父親に顔を向けて。にんまり、と勝ち誇るように笑った。絡めた左腕を、ゆっくりとほどいて。父の隣から、新郎の隣へと。遠慮がちに歩みより。

賛美歌の斉唱。

聖書の朗読、祈祷に説教。

結婚式は、滞りなく進んでいくのに。

新婦の笑みは、徐々に小さくしぼんでいつて。そわそわして、いらいらして。

さあ、いよいよ誓いの言葉。

「——あなたは陽子^{ようこ}を妻とし、いかなる時も、愛と誠実を尽くすことを誓いますか？」

「誓います」

新郎は、高らかに答えた。

牧師さんは、満足そうにうなずき、新婦さんに向き直って。

「——あなたは歳三^{としぞう}を夫とし、いかなる時も、愛と誠実を尽くすことを誓いますか？」

「……………」

返事はかえって来なかった。

新婦さんは、新郎でも牧師でもなく、ぼんやりと、大きな掛け時計を見上げていた。ゆっくりと、牧師さんに向き直り。

「ねえ？ 時間。ずれて、ないかな？」

ちよつと弱気な笑顔で尋ねた。

「さあ、どうでしょうかね？」

牧師さん。首を傾げた。

こほん、と咳払いしてから、もう一度。

「あなたは歳三を夫とし、いかなる時も、愛と誠実を尽くすことを誓いますか？」

「うー……。……どうしよつかないー。よし、……。あと、5分だけ」

新婦さんは、心を決めたように、あと5分に力を込めて、宣言した。

新婦、新郎、牧師。三人並んで、掛け時計を睨み始めた。

チャペルの中は、がやがやと少し騒々しくなっている。

そして、チャペルの外では。

「第16迎撃ライン！ 突破されました！」

教会前で最終ラインを統率する村雨小五郎むらさめ こごろうに、部下の報告が届く。恋愛物の王道に、結婚式に恋人が乱入して花嫁を掠っていく、というラストシーンがある。あれを、山田グループ総裁・山田貴久やまだ きくはち鉢のわがまま娘こと、山田陽子がやりたがった。

だけど普通に乱入して掠られるだけじゃ、面白くないよね？ どうせなら派手にやりたいよね？ と彼女はのたまい。

山田町近隣の警備会社が、恋路を邪魔する馬の役として駆り出され、村雨小五郎は栄えある【馬総合監督】と、【強敵と書いて親友トモ】と呼ぶ馬の役を押しつけられていた。

新婦を奪われる新郎の役は、新婦の幼なじみで、土方歳三。迎えに来る色男の役は、馬鹿なりにカンフーの達人の馬鹿、大飛ダイフェイ龍イロン。大飛龍には三人の仲間が友情で協力することになった。

以上が、

『花嫁の花嫁による花嫁のための結婚式』

と、花嫁自らによって名付けられた、今日の出来事の概要である。そんな結婚式にも、円滑に進めるため、最低限の約束事がある。配られた冊子にも『ルール』として明記されている。

ひとつめ。『攻撃側は、大飛龍^{ダーフェイロン}、艾愛玲^{アイアイリン}、梁一傑^{リャンイージェ}、王毅^{ワンイー}の四人のみ。馬側は、近隣の警備会社のみ』……収拾できない混乱を避けるための人数制限だった。しかし警備会社によつては日雇いで増員したところも多く、攻撃側にも闇の協力者が幾人か暗躍していて、十分混乱していた。

ふたつめ。『武器は一切持ち込まない・使用しない・使用させない。特に愛玲^{アイリン}』……双方、平気で使用している。特に愛玲。

みつめ。『行軍は、必ず道しるべに従つて指定のルートをお進みください』——と、攻略ルートも厳密に設定されており、ついでに各警備会社の受け持ち場所も決められていた。のだが。このルートも守られておらず、抜け駆けをする警備会社が多発。警備会社同士の抗争が勃発、半分開所の関所は、敵が来る前に崩壊してしまっていた。のだが。知らない大飛龍たちはそんな関所をショートカットしようとしたようで……山に踏み込み、迷子になり、かなりの時間をロスしていた。

そして、よつめ。ある意味で勝敗を決定する、最重要の約束。制限時間。

『昼の十二時を超すと、魔法が解けます。私は土方になります』……すでに一時間、オーバーしていた。

と、何もかもがぐだぐだだが、イベントは今も続いていた。

『第19迎撃ライン！……突破されました——よかった、やっと来ます！』

無線連絡を担当している部下が、喜々として叫んだ。

その報告に少し遅れて、武道着に身を包んだ人間が4人、攻略ルートを駆け足で進軍してくる。

「……これも仕事だ。——やるぞ！」

小五郎は、床几から立ち上がると、部下に命じた。

『おうっ！』

活きの良い応えがあった。

この作戦に参加させた彼の部下は、いずれも武道の心得がある。

総勢25名のうち5名は、達人レベルに達している。そして残りの20名。腕はともかく、とてもノリが良いのを選んだ。

ノリの良さで抜擢された部下の一人が、迎え撃とうと単独で陣形から飛び出した。

先頭を駆けてくる青年・大飛龍と、激突する。一秒も持たない。交錯してすぐ、吹き飛ばされた。大飛龍は、走る足すら緩めない。その前を、三人が連携を取って封鎖する。

が。二人は即座、沈められる。

しかし残りの一人。達人レベルが大飛龍の攻撃をかくぐった。そのまま渾身の蹴りを大飛龍の腹部に、放り込む。綺麗に入った。大飛龍の躰が折れ、足が浮く。2メートルほど後退したが、彼は倒れまではしなかった。

「ふはははっ、珍しいな、飛龍。おまえが呼吸を乱すなど！」
蹴りを放った達人レベル——の中でも特にノリの良い増田ますだが、叫ぶ。

確かに、大飛龍の息はあがっている。だが、
「フオオオアアア」

大飛龍は、乱れた呼気のまま雄叫び、強引に間合いを詰めた。腰に手を当てポーズを決めて次のセリフを喋りかけていた増田に反応できる速度ではなかった。増田は盛大に殴り飛ばされた。

大飛龍が、駆ける。

その前に、小五郎が立ちふさがった。

大飛龍の足が止まる。が、すぐに動いた。大飛龍の中段蹴り。小五郎は弧を描くように足を運び、捌いた。流れる動作で体を密着させ、青年の脇腹に掌を当てる。慌てて大飛龍が離れようとする動きも利用、身体全体を捻るようにして力を生み出し、強く突き圧す。大飛龍は3回転ほど無様に転がってから、立ち上がった。

小五郎はゆったりと戦場を見渡した。

大飛龍の仲間、三人の協力者の一人。容色の美女・艾愛玲アイ・アイリンはあまり乗り気ではないようで、数人に取り囲まれた状態で、あくびをか

み殺していた。細身の美丈夫・梁一傑リャン・イーシェにいたっては、馬役の一人（女性）と談笑しているありさまだ。

最後の一人、巨漢の年長者・王毅ワンイーだけは、やる気に満ちあふれていた。王毅は黄金のオーラを立ち上らせ、暴れに暴れ回っており、復活した増田を含む達人レベル5人とノリの良い14人の合計19人が、なんとか食い止めている状態だった。

大飛龍には、小五郎が一人で相対している。

「どうした、飛龍。そろそろ式も終わりに近いぞ？」

顔を歪め、腹部を押さえ、息を整える青年に、小五郎は揶揄を投げた。

ぎろりと目を剥き。遮二無二、大飛龍が飛びかかってきた。

飛龍の直線に、小五郎は円の運びで、応戦する。ここまでの行軍で意外と体力を削がれたのか、大飛龍の動きには、普段のキレが（ノリも）、まるでない。疲れ果てた猛牛だ。ひらりひらりと小五郎は、涼しい顔でいなしていく。

「愛玲！ あと何分だ！？」

転がり、そして立ち上がり、大飛龍が叫んだ。けだるげに美女――

――艾愛玲が、腕時計を確認する。

「ん……あと、3分ね」

飛龍の表情から、すうっと強張りが消えた。ふしゅー、と息を吸い。ぴたり、と構えた。荒かった呼気が、留まっていた。どうやら、キレがないのは、疲れよりも焦りや雑念――小五郎は口元で僅かに笑むと、ふわりと構えた。来るだろう渾身の攻撃に備える。

「フオオオオオオオオアア」

絶叫。大地が揺らぐような感覚。大飛龍が、撥ねた。

繰り出して来た攻撃は、予想通り、予想の範疇。彼らしい、純朴な直拳。それを、小五郎は、捌き――きれなかった。強烈な拳撃が、小五郎の防御する手をはじき飛ばし、胸板を叩いた。小五郎は独楽のように回転しながら、派手に吹き飛んだ。

「くそっ！ ……見事だ」

顔を上げた小次郎が短く賛辞を送ったときには、すでに大飛龍は走り出していた。

「だが、もう一時間は過ぎているぞ！」

その背中に呼びかける。

小次郎の一言に、走る大飛龍の足が止まった。

急いで駆け戻ってきて、小五郎の差し出す懐中時計を、のぞき込む。青年は、悲愴な顔で、愛玲を振り返った。

愛玲は、欠伸をかみ殺してから、ゆったり自分の時計を確認して、周りにいる【馬】が差し出す時計を三人分、のぞきこんで、

「あつ、ごめん……私の時計、狂ってるみたいだわ」

大して悪いとも思っていない口調で、謝った。

哀愁を漂わせ、うつむく青年。と、部下を数人ぶら下げたまま、がつくり膝を屈する巨漢の男、王毅。黄金色のオーラは茶色く変色してしぼんでいく。

だが、飛龍はすぐに立ち上がると「フオアアアアー」と何故か叫んで、教会の階段を駆け下りていった。

「……まあ、おめでとつ」

小五郎は、口元を苦笑でゆがめた。部下に肩を借りながら、ゆつくりと立ち上がる。胸部の痛みに、顔をしかめる。服の埃を払う。制限時間を守りきれば勝ちのゲームで、その制限時間がうやむやにされたのだ。その時点で、馬の出る幕はなかったし、勝負の行方も決まっていた。

ビデオカメラを構えて、この茶番劇を査定と称して撮影していた山田屋敷の人間たちも、撤収を開始していた。きつとこういう仕事は、もうこれが最後のだろう。

小五郎は、梁一傑と馬役の一人（女性）が木陰に座って酒盛りしている様を目の端に捕らえつつ、渡された台本に、「戦い終わった二人には友情が芽生えます。酒を酌み交わそう！」と書かれていたことを、ふと思ひ出す。「酒なぞ飲み交わしてたら時間に間に合わないのでは？」との小五郎の指摘に、山田陽子によって素早く削除

されたけれども。

村雨小五郎は、なんとなく、空を仰いだ。
気球を飛ばすには最高の、雲一つ無い青空だった。

山田貴久鉢の娘、山田陽子が結婚すると宣言したのは、つい2週間ほど前だった。

相手は幼なじみの土方歳三。
ひじかたとしぞう

式場は、彼女ご自慢の要塞。……の、地下深くに広がる大聖堂。大聖堂は、ただ、広大だった。

新郎新婦の座る席から末席まで、500メートルの距離がある。天井も無駄に高く、3階分はあった。色とりどりのシャンデリアが煌々と輝き、熟れた果実のようにぶら下がっている。その下では、純白のシルクに覆われた丸テーブルが所狭しと並び、料理の花を咲かせている。

挙式には、そうそうたる顔ぶれが集まっていた。

半数程度は陽子の知り合いや山田グループの関係者なのだが、残りの半数は、全く面識のない人たちだった。陽子は招待状を、手当たり次第、思いつくまま送りつけたようである。

壁際には、大げさなカメラが並んでいる。それは各国のマスコミにまで、山田陽子が招待状を送りつけた結果だ。

式は、とくに佳境に入っていた。

大方の者が、不安そうにしている。少数の者が、わくわくしている。

山田貴久鉢は、イライラと足で床を叩いていた。

結婚式は、滞りなく進行していた。つい50分ほど前までなら。

本当に陽子の奴は、歳三と結婚する気なのではないか？　そう貴久鉢ですら、思ってしまうほどに。

だが、

「……………あと、5分だけ」

陽子が、7回目のあと5分を告げる。

いまはもう、どうとでもしてくれ、と言う気持ちの貴久鉢だった。
「……………あと、じゃあ……………10分……………だけ……………」

山田陽子が、5分刻みを諦めて、10分まとめて延長したとき、
バアーーンツと、大聖堂のドアが開いた。青年が飛び込んでく
る。同時に、その場がライトアップされる。

「陽子おおおお……………！……………！」

「おっそ……………い！」

陽子が、拡声器を持って怒鳴り返す。

「すまぬ！ 道に迷った」

「迷わないよう地図を渡して、看板も立てて！ 道に赤い絨毯まで
敷き詰めておいたのよ！ 何であなたはそう容易くどこでもいつで
も気軽に道に迷えるのよ！」

叫んでから、陽子が拡声器を足下に投げつけた。キューンとい
う異音が響いた。

「すまぬ。愛玲が……………」

青年が首をすくめ、怒鳴り返す。すこし眉をへならせて。

「ええいつ！ そやつを捕らえよ！」

山田貴久鉢は、……………とりあえず青年を指さして、がなった。

列席者の中に紛れ込んでいた警備会社の人間たちが、素早く立ち
上がり、青年を取り囲んだ。手には警棒を所持している。

青年の眉が跳ね上がり、鷹のような目が、鋭さを増した。

「参る！」

青年が叫んだ。と、同時に、跳躍していた。5メートル近い距離
を一息に跳んで、タキシード警備員2人を軽く踏みつけるように蹴
り倒す。囲みの外側に着地する。

あわてて振り返るタキシードたちを置き去りにして、青年は、駆
ける。500メートルの大聖堂を。次々と群がる警備員を倒しなが
ら。

何も知らされていない観衆たちは、大あわてだ。右往左往し、混
乱に拍車をかける。テーブルや椅子が倒れ、食器が滑り落ちて、碎

けちつて。さらに無数の靴によって、踏み荒らされ。地下聖堂に怒号が渦巻く。

そんな中、ついに青年が、祭壇まで、陽子の元まで、たどり着いた。

息を落ち着け。心を落ち着け。

そして、青年は、告げる。

「愛してる！ 俺と、結婚してくれ！」

しかし、山田陽子は真っ赤な顔でぶすつと頬をふくらませ、そっぽを向いた。

青年の眉が、へなる。傍目にもおろおろと。

しばらく、重い空気が流れた。

新婦は、飛龍ではなくそわそわと新郎に向き直った。両手をもじもじとして。

「ごめんね、歳三……あのね」

新郎は笑顔で首を左右に振ると、白い手袋に包まれた右手を、差し出した。

「君のことは忘れない。あちらに行っても、どうかお元気で」

「うん」

泣き笑いの顔で、山田陽子は差し出された手を、握りかえした。

貴久鉢が執事から渡された台本では、もう少しクサイ劇が延々とおこなわれるはずだったのだが……時間が押しているようで、娘は省略したようだった。ちなみにその台本には、お父さんには内緒、と書かれていたりする。そういうわけで、貴久鉢が台本を渡されていることは、陽子には内緒になっているはずなのだが——内緒なのに、私のセリフが娘の字で書き込まれているのは………どういう事なのだろうか？ という疑問を貴久鉢は、娘に尋ねたかったのだが、聞けずじまいで今日に至っていた。

「これみち惟道！」

ぱつと右手を振り上げて、陽子が執事の名を呼んだ。

それを合図に、祭壇の向こう、天使の聖画が描かれた壁が、ゆっ

説となる。

それから7年。

享年26歳――

山田陽子、中国四川省、びやうこてら白虎寺にて、没。

ブログ 父と母との結婚式（後書き）

個人的に一番気に入っている自作品です。

スロースタートで、二章、六章、最終章あたりにゆるいギャグが多いです。

改行や行間は、オンライン体裁になっていません。

続きを読まれる方は、『PDF小説ネット』でのPDF縦書き読書をお勧めします。

<http://pdfnovels.net/>

一章 山田貴久鉢、忍者を雇う（一）

やまだ きくはち
山田貴久鉢。

御歳82才のおじいちゃん、頭髪と眉は白いものに占拠されている。

ひよろひよろと痩せてもいる。肌の色は、青白い。

一見して不健康ではあるが、されど眼光は異様に鋭く、背筋も曲がってはいない。

山田貴久鉢は、尋常の金持ちではなかった。

山田町に古くから君臨する山田家の現当主であり、町の土地の半分（大半は山）を所有している素封家である。

さらに彼は、日本に名だたる企業集団 山田グループ を、たった一代で築き上げた人物でもある。

財界に君臨する首領であり、未曾有の 怪物 である。

山田貴久鉢。

今もまだその頂点に座り続けて、狭い日本列島に睨みをきかし続けている。

山田貴久鉢は良く働く。

日曜も祝日も良く働く。

死ぬときは総裁席に座って死にたい。そう公言して、それを目指して一生懸命頑張っている。

今日も朝からフライングダック（山田自動車の中堅車種）の後部座席に納まって、山田山の広大なお屋敷から、山田タワーへと出発したのは、そういうわけだ。

山田屋敷の正門は、江戸の初期からあったとされる古びた桜材の門である。山田貴久鉢が待たされるのを嫌うために、古木の門は前もって開けられていた。門わきでは、二人の門衛が敬礼して見送っている。

何ら代わり映えのしない、ノンビリとした朝だった。

八月十日の朝だった。日曜である。

もうすぐ、この町から山田陽子が居なくなってから、12年が経とうとしていた。

快晴だった。

山田町は、うつらうつらと眠り続けている。

暑い日差しの下。

車が塀に沿って、50メートルをすぎた辺りで、事件は起こった。桜並木の下で揺らめく影が、もっと揺らめき、ふわりと何かを吐き出したのだ。

子供だった。

子供が跳び出してきたのだ。

間一髪でフライングダックは急停車。タイヤを軋ませ、砂埃をまき上げた。後部座席に鎮座する山田貴久鉢は、前のめりに突っ伏して、座席の背もたれに頭をぶつけそうになった。

山田貴久鉢。平素から声が大きい。

「何事じゃ！」

その大きな声で、間髪入れずに喚いた。車の外にまで、声は漏れているほどだ。

運転手は、人の良さそうな顔に、人の良い愛想笑いを浮かべて、後部座席を振り仰いだ。

「申し訳ございません、旦那様あ。車の前に突然、子供が飛び出してきましたですねぇ……」

卑屈に揉み手しながらのんびり言った。

その話を、山田貴久鉢は半ばまでしか、聞いていなかった。最後まで聞かずに、何かを喚こうとした。

喚こうとして、沈黙した。

視線は、フロントガラスの向こう側、路上の子供に向けられていた——子供が、車の中を睨んでいる。

子供は、ゆつたりとした紺色の小袖を纏っていた。下は薄墨色の

ズボン。上下ともに大きめで、はたはた風にたゆたっている。胸元からは、黒のメッシュがのぞいている。両腕を胸の前で組んで、車の中を睨み付けている。視線の先は、一直線に、山田貴久鉢――。

山田貴久鉢。

気も短い。

こういう場合――渋滞していたり、赤信号に連続して捕まったり、寒かったり暑かったり、子供が飛び出してきたり、その上睨まれたり――つまりは何か気に入らない事態に遭遇した場合、決まって罵詈雑言をわめき散らした。

だから運転手は、貴久鉢の口が大きく開いた瞬間、反射的に首を引つ込めたのだが……来るはずの叱責が来ないので、恐る恐るといった体で、後部座席の主をうかがう。

山田貴久鉢は、ぽっかりと口を開けて、固まっていた。

山田貴久鉢のとなりには、貴久鉢とは古い付き合いになる医者ごんろくの権六が座っているのだが、彼も同様、口を開けて固まっている。

助手席には、土方多恵ひしかたたえという名の秘書が座っていた。

お多恵さんたえ、と上品に呼ばれることが多い。

癖のない艶やかな黒髪を、肩よりも少し下でゆったり一括りにして、透き通るほど白いうなじに垂らしている。スタイルはほっそりとしていて、表情はおっとりとしている。胸はふっくらとしている。彼女はいつも乗車中は微睡んでいて、この程度の騒ぎでは起きない。なのに今日は珍しく覚醒していて、目を見開き少年を見つめている。

少年は、もう車内を見てはいなかった。

彼の目の前に現れた、二人の門衛を睨み上げていた。

通り名は、マサとヤス。自称山田町の阿仁王と咩仁王。マサは髪を赤く染めていて、ヤスは青く染めている。いわゆるヤンキーである。

二人の門衛は、門からここまで走ってきたのだろう、桜の並木を指し示しつつ、荒い息で少年に話しかけている。もちろん、主人の

車を通せんぼする少年に、そこを退くよう説得しているのだが、少年からカツアゲしている駄目な大人のようにも窺えて、微妙だった。それに対して、少年は無言。口元をきつく引き結んでいる。両腕を胸の前で組んだまま、真っ向から二人を睨み付けて、微動だにしない。

業を煮やしたマサとヤスは、少年の肩に荒々しく手を置いて、強制的に排除しようとした。

車内で見ていた貴久鉢は、顔をしかめ、腰を浮かせて――。

そのとき、少年が、動いた。

ぐつと身を沈めたかと思うと、次の瞬間、両腕を羽ばたくように振り上げ、肩を掴んでいたマサとヤスの手をはじき跳ばした。車内四人が「あっ」と言った時には、そのまま流れる動作で少年の左肘がマサの鳩尾を痛打して、少年の右足がヤスのすねを弾いていた。

少年は何事もなかったかのように、また車の中を睨んでいる。その足下では、マサとヤスが、「おおうつ」「ああつ」「呻いていた。

呆然と見つめる貴久鉢、権六、運転手。しかし、助手席のお多恵さんだけは、目をつむって額を抑え、「はぁ」と小さく溜息を吐いた。それから、いたずらっぽい笑みを浮かべて、車を降りた。

山田貴久鉢も、慌てて降りた。

「山田貴久鉢で、ござるな？」

まだ幼い声で、少年が問う。貴久鉢をまっすぐに見据えて。

貴久鉢は、答えなかった。秘書の差し出す日傘の下で、彼女に支えられるようにして、呆けたように少年を見返していた。

大きな目が、爛々と輝いて、貴久鉢を見上げていた。

眉は長くて、心持ち太くて、きりつと凛々しく跳ね上がっている。すじの通った鼻梁の下では、小さな口がへの字に引き結ばれていた。

あごは、ほんの少し尖り気味で、顔全体は小さく、輪郭は、ほんのちよつと、縦長だった。

髪は、つややかに黒い。それを、短く切って、無造作にちらして

いる。胸の前で組んだ腕は、日焼けしていて、逞しかった。

年の頃10才にしては、引き締まった体のせいか、真剣な表情のせいか、大人びて、見えた。

「違うので、ござるか？」

少年が、再度、問う。

心配そうに、貴久鉢を見つめていた。りりしかった眉が、へなつていた。

「ああ、いや！ いや！ 儂が貴久鉢じゃ！」

声を張り上げて、貴久鉢は答えた。ついでに、右手もぶんぶん振っている。

少年は安心したようだ。

眉が、くりつと凜々しく、跳ね上がった。

少年は、一度大きく頷いてから、両腕を胸の前で組み直して、

「俺の名は大飛鴻^{だーふえいふうあん}。忍者でござる」

名乗った。

精一杯、威厳を出そうとしているのか、ふんぞり返っている。

その足下では、マサとヤスが、うずくまっでいて、そこいらで、

蝉が鳴いている。

暑い夏の、朝だった。

山田貴久鉢と、その孫、山田飛鴻^{やまだふえいふうあん}との出会いだった。

江戸の昔から、山田屋敷の外観は、純然たる日本家屋……だった。

しかし平成の今はそうでもなく、怪しげな建て増し部分が随所に見かけられた。

長い年月を生き抜いた屋敷には、よくあること……とも言いきれない。

大半の【混じり物】は、20年から10年前というごく限られた期間に、山田陽子が増改築を繰り返した結果であったから。

庭も落ち着いた日本庭園……だったのだが……。

彼女の成長に併せて、一つ二つと異質な建物が出現していき、彼女が結婚する頃には敷地全域をファンシーに覆い尽くしていた。

そんな庭は、動植物の宝庫でもある。

池や河があり、鯉が泳いでいる。鮒も泳いでいるし、ドジョウも泳いでいる。ザリガニもいるし、ゲンゴロウもいる。時には、ラッコも泳いでいたりする。

山田陽子が捕らえて放した奴らが、根付いたものであった。

池の周りでも、猫や犬や鶏や、大なり小なりのアライグマが、我が物顔で闊歩している。

食堂の南は、一面のガラス窓になっており、その有様が一望できるのだが…………… 貴久鉢はあまりカーテンを開けたがらない。

さて。

そんなカーテンのかかった食堂に。

一同が会していた。

貴久鉢と、医者はにわこれみちの権六と、お多恵さんと、飛鴻少年と……………さらには、執事長の埴輪はにわこれみち惟道である。

山田貴久鉢の孫、山田飛鴻ふえいふあんが、母の生まれ育った祖父の実家に初めて招かれて。

祖父に対して最初に言った言葉は、

「おじいちゃん、元気だった。会いたかったよ」

などという軟弱な言葉では毛頭なく、

「おまえは命を狙われて、ござる」
だった。

「忍者でござる」

と、いきなり出現した孫なので、そう不思議でもない。

それから少年は、懷に手を入れて、封書を取り出した。貴久鉢に差し渡す。

貴久鉢は封を開いて、じつと文面を読む。

「……………詳しい話を聞かせてくれ」

当然のように、質問した。

ただし、言ったのは、山田貴久鉢ではなく、飛鴻少年であつたりする。

正確には、

「……詳しい話を聞かせてくれ……………でござる」
だつたりした。

山田貴久鉢は返答に窮していた。

少年が持参してきた手紙が、テーブルの上に横たわっている。

——拝啓、山田貴久鉢さま。飛鴻は忍者です。ちやお。あいあいりん 艾愛玲。
それだけが書かれている。

署名にある艾愛玲とは、貴久鉢の一人娘で飛鴻の母・山田陽子の悪友中の悪友である。陽子亡き後、飛鴻の保護者代わりに収まっている。

彼女はいったい何を企んでいるのか？ 貴久鉢には皆目、見当も付かなかった。

今までに幾度となく、お多恵さんが少年を引き取りたいと、交渉して来たのだが、愛玲はそれを頑なに拒み続けて来たのだ。つい数週間前にも、交渉は決裂している。突然、何の前触れもなく少年を帰してよこすなど、何か、裏があるはずだった。

子育てに自信が持てなくなったとか、母親ごっこに飽きてしまったとか、そういう理由はあの艾愛玲に限って言えば、考えにくいだろう。

だいたい忍者とは、いったいどういうことなのか？ 「おまえは命を狙われてござる」と続けば、まるで嫌がらせか、いたい宗教の勧誘である。

いやがらせ？

貴久鉢はあることに思い至った。

陽子の誕生日。娘の誕生日が近づいている。

門を出ようとしたら自動車ごと落とし穴に落とされたり、鯉にえさをやるうとして池に行ったらワニがグラブ郎のプラモデルをくわ

えて出てきたり、会社に行ったら机一面に【ふあんしーしーる】が張られていたり、家中の時計の七割程度が2分30秒ぐらい狂っていたり、と。

陽子が結婚して出て行ってから、まるで「忘れてないでしょうね」と言わんばかりに、それらの嫌がらせが繰り返されて来た彼女の誕生日が、もう間近に迫っていた。

抗議の電話をかけると、

あははははははははっ

と、嘲笑される、あの誕生日だ。

あと四日で、陽子の誕生日になる。

まさか。

貴久鉢は頭を横に振った。

陽子が他界してから、嫌がらせは止まっていた。いまさらこのタイミングで再開されるとは、到底思えなかった。

しかし一度思い至ったその考えを、貴久鉢はなかなか捨てること出来なかった。同時に、娘の思い出が脳裏に蘇って来る。熱くあった目頭を押さえる。少々、歳を取って涙腺が緩んでいるようだ。

ことり、と音がした。

貴久鉢は、つられるようにそちらを見た。

少年だった。少年がコップを置いた音だった。コップは、空になっっている。

少年と目が合う。

貴久鉢は、少年に向かい笑いかけた。なれない動作で少々頬がりそうになるが、がんばる。

少年が頷いた。そして、言った。

「詳しく教えてくれ、でござる」

山田貴久鉢。

ぴきりと固まった。

質問に対する解答など、何一つ、思いついていなかった。落ち着け。

落ち着いて考えるんだ、わし。

少年は言った。

——俺の名は大飛鴻

色々なルートを辿って写真や映像は送られてくる。間違いなく、一人娘の生んだ、たった一人の孫、飛鴻である。

少年は、こうも言った。

——忍者でござる

に、にんじゃ？

——おまえは命を狙われてござる

——詳しく教えてくれでござる

と続けば、

……さっぱり、何がなんだか分からなかった。

室内には、逆に夏を感じさせる冷えた空気が漂っていたが、貴久鉢の手のひらは、じつとりと汗ばんでいた。

パタンッと扉が開いた。貴久鉢はびくりとそちらを見た。メイドだった。メイドがにこにこやって来て、少年のコップにジュースを注ぐ。少年がお辞儀する。メイドがにっこり会釈した。手を振り帰って行く。少年がグラスを傾け、ストローを使ってジュースを飲む。ことりとグラスを戻す。少年が顔を上げて貴久鉢を見た。貴久鉢の手のひらは、どんどん汗ばんでいく。心臓がどくんどくと脈打っていた。少年が貴久鉢を見ていた。どうにもこうにも空気が薄く、息が苦しい。貴久鉢は息継ぎするように、顔を背けた。少年も、視線をコップに移した。

そして。もしや。

貴久鉢の頭の端を、ある考えがよぎった。

少年の瞳を見つめる。

澄んだ美しい瞳が、貴久鉢を見返した。

むう。……違うようだった。彼は嘘を付いていない。純真無垢な瞳がそれを物語っている。つまり彼も、騙されているのだ！……少しだけ、ほんの少しだけど、少年が陽子や愛玲と一緒にになってか

らかっているのではないかと疑った自分が、情けなくて恥ずかしかった。恥じ入りながらも、山田貴久鉢は、純真無垢な子供を弄ぶ謎の人物、おそらくは陽子が愛玲に、汗ばむ手を握りしめつつ、激しい憤りを燃え上がらせていた。

少年が、うなずいた。

おお、少年も同意し……………貴久鉢は、目を2、3度はちくりさせて――

はっと気づいた。

違う！ 促しているのだ――返答を！。

彼と出会った門前からここに至るまでに、貴久鉢は気の利いた台詞を幾通りも考えていたのだが、残念なことにどれも煙のように消えてしまっていた。……………もつとも、この場面で役立ちそうな台詞はトコトンなかったのだが。

貴久鉢は、助けを求めるように、ドアの横にいる執事長の惟道を見た。彼はおいおい泣き崩れていて、こちらの視線にすら気付かない。

あきらめて、貴久鉢は横を向いた。貴久鉢の隣には、医者の権六が座っている。

権六は、馬鹿丸出しで、ぽっかりと口を開けていた。そして馬鹿丸出しで、お茶を眺めている。彼は、貴久鉢の視線に気付いた。権六は、にやりと笑ってから……………大きく目を反らした。まじめな顔をして、今度はカーテンを見つめ始めた。このじじいも頼りにならない……………分かつてはいたけれど。

少年に視線を戻す。

眉が少し下がりがみで、少年の目は、少し潤んで泣きそうになっていた。

此処に至り、山田貴久鉢は確信していた。

間違はなくこれは嫌がらせで、仕組んだのは陽子だと！ 彼女なら死ぬ前に仕組んでいても不思議はないというか何も仕込んでない方が不思議だった。

あはははははつ、という高笑いを張り上げて、老若様々な陽子が、貴久鉢の頭の中を、かけずり回っている。落書きをしている。変な建物を建てている。パンダに乗ってはしゃいでいる。

貴久鉢はぶんぶん頭を振って、陽子たちを脳内から振り落とした。

それから貴久鉢は、縋るような目で、少年の横に座っている秘書のお多恵さんをつかかった。

お多恵さんは、少年の持参した手紙を読み直していた。眉間にしわを寄せて、口元あたりもぴくぴくと痙攣している。すこぶる機嫌が悪いようだった。

貴久鉢が目を反らすべきか思案していると、彼女は顔を上げた。貴久鉢と目があつた。取り繕ってにつこり微笑む彼女に、貴久鉢はアイコンタクトで必死に助けを求めた。

おお、通じたのか、彼女はうなずき、横に座る少年に視線を移し、「ねえ、飛鴻君。その話は誰から聞いたの？」

やんわりと尋ねた。

少年は、横を向いて、お多恵さんを見つめた。貴久鉢は、息を殺して注視した。

少年の眉が、更にへなつた。

「えっと……」

お多恵さんは唇に指を当てて、少しひるみながらも、

「おじいちゃんが狙われているって言ったのは、愛玲？ それもお父さんが？」

少年の眉が、くりつと跳ね上がって、

「飛龍——父だ」

自信たつぷり答える。

「飛龍くんが？」

少年はうなずいているが、お多恵さんは首を傾げていた。愛玲でなくて、意外だったのだろう。

大飛龍——だーふえいろんかなりのあほうだが、このような無意味なことはしな

い。いや、思いつかないだろう。奴は脳から足のつま先まで筋肉がみっちり詰まっている霊長類ヒト科筋肉族に属している。そう言う意味では、愛玲も似たような種族なので、やはり陽子が仕組んだことなのだ。

お多恵さんが、辛抱強く質問していく。

ぽつりぽつりと、少年は答えていく。父・大飛龍から、

「山田貴久鉢が危ない。日本に行け」

と言われたそうだ。

護衛の話は、愛玲から聞いたという。

何からどう守るのかは、聞いていないという。

「ああ、そう。なるほどね」

お多恵さんは頷いている。得心がいったようだ。貴久鉢は納得してない。眉をひそめた。
で、

「詳しく教えてくれ、でござる」

飛鴻がまた言った。

「えっと……」

お多恵さんの笑顔がひきつる。それでも、にっこりと飛鴻に微笑みかけてから、貴久鉢にも微笑みかけて、彼女は席を立った。おい！。

露骨に焦る貴久鉢に、彼女は電話をかける仕草をしてみせた。ああそうか、その手があったのか。逃げるのではないかと貴久鉢は少し疑ったが、さすがはお多恵さんだ。頼りになる。彼女は直接、愛玲に確認を取るつもりなのだ。頼りになる。貴久鉢はうんうん頷いた。

しかし。

彼女が部屋を出て、1分が過ぎ、2分が過ぎた。

その間にも、少年の表情はどんどん曇ってくる。眉は下がりっぱなしだ。貴久鉢は、何か話しかけねばと口を開けたが、声は出せず、しばらくして閉じた。

そんな貴久鉢をこちつこちつと、時計の音がせかす。蝉の鳴き声がせかす。クーラーの音がせかす。埴輪惟道のしゃくりあげる声もせかす……というか、かなり鬱陶しい。隣の権六は、そわそわしている。

「わしい、ちよつとトイレに……」

気弱に告げて席を立とうとする権六の足を貴久鉢は踏みつける。彼はすくすくこと座り直した。

3分が過ぎ、4分が過ぎ、やはり逃げたのだと、此処に至って山田貴久鉢は確信した。だいたい彼女、携帯持ってるし。

「教えて、欲しい」

と、飛鴻が小さい声で言った。その声は震えている。

貴久鉢は、祈る気持ちで扉を見た。しかし扉は開かない。お多恵さんは帰ってこない。

限界だ。

「いや、いい……」

と飛鴻が呟いた。全然よさそうな顔では無い。泣きそうだ。貴久鉢も泣きそうだった。

貴久鉢と飛鴻が泣きそうで、権六がテーブルの端を睨んでいる中、
「致し方、ありませんな！」

おもむろに立ち上がった者が居た。

執事長、埴輪惟道である。

いつの間に泣きやんでいたのか、今の今まで部屋の隅でうずくまっていたくせして、ずいぶん偉そうな態度だった。

「お話し、いたしましょう」

惟道は、一座を見回して、勿体ぶって言った。言外に、「私に任せあれ！」といった強気の状態がにじみ出ている、貴久鉢と権六は、ついつられて頷いていた。

惟道は言う。

「敵は、柳生です」

「柳生！」

と驚きの声を出したのは、飛鴻ではなく貴久鉢と権六だった。敵は柳生か？ という驚きではなく、なぜに柳生？ どこから柳生？ という類の驚きだった。

「そう、柳生忍者です」

惟道が馬鹿にしたように冷やかな目で、二人を眺める。

柳生……忍者。

なるほど。貴久鉢も得心がいった。

手紙の主の艾愛玲という女性は、強烈なエセ忍者つ子だった。柳生忍者と対決する、と称して12さいの時に中国から日本にやってきたほどのなんちゃって忍者ぶりで、柳生忍者なんて居ない、せめて伊賀か甲賀にしてくれと、何度頼んでも聞いて貰えなかった。もちろん、柳生忍者と対決する、という本懐は遂げられずに帰国している。帰国の時、最後に呟いた言葉も、「やぎゅう……」だった。彼女に育てられた飛鴻は、影響を受けているかもしれない。この話に乗ってくるかもしれない。もし乗ってきたとしても、話を余計にややこしくするだけで、現状打破に繋がるとは思えない……気もしないではないが……。

「やはり、柳生で、ござるか」

雄々しく立ち上がって、飛鴻が言った。

震えている。武者震いだった。その証拠に、惟道に向けられた瞳は怯えでも呆れてもなく、今までとは打って変わってキラキラと光り輝いている！ 飛鴻は愛玲の影響を色濃く受けていたのだ！ ……毒されていると言うべきなのか。

「続けてくれ、でござる」

と言って輝く瞳を惟道に向けつつ、少年は両腕を胸の前で組んで、2、3度頷いた。

予想以上の好反応に、さしもの惟道もつばを飲み込み、ひるんだ。惟道は咳払いを一つしてから、

「柳生の狙いは、秘伝の書です」

と、話し始めた。その秘伝の書には、

「なんと！ 古今東西、世界中からありとあらゆる忍術が集められ、納められているのです！」

と、景氣の良い話を、握り拳で続けていく。

じじい二人は、ひいている。しかし飛鴻は、瞳を爛々と輝かせて聞き入っていた。

「なぜ、山田貴久鉢が秘伝の書を保管しているのか、ござるか？」という少年のもっともな問いには、

「山田家は……將軍家の末裔ですからな」

あり得ないことを惟道はしれつと答えた。

「だから陽子様はお姫さまと呼ばれ、旦那様も、ついでに殿と呼ばれています」

自信満々言い切った。少年は深く深く頷いている。

この次に、本題に入った。

「旦那様は、お命を狙われておわしめしませ」

惟道は、苦渋に満ちた声で、怪しい日本語を使った。

飛鴻が身を乗り出した。

貴久鉢には、惟道の思惑が理解できた。ようするに、「貴久鉢は秘伝の書を所持している」「だから、柳生忍者に狙われている」「そう言う筋書きだ。」

「なぜなら！」

惟道は、くわつと目を見開いた。

「秘伝の書には、忍者的封印が施されているからです！」

よくわからないことを、叫んだ。

「忍者的封印を施したのは、時の山田家当主、山田貴春様です。秘伝の書を狙う柳生忍者との数百回に及ぶ激戦の末、山田家將軍・貴春様は傷つき力尽きて、ついに本能寺に追いつめられました。もはやこれまで。貴春様は言いました。この秘伝の書は、絶対に柳生の手に渡してはならぬ。奴らの手に渡れば、この山田町は灰燼と化すだろう。だから、だから秘伝の書はまるの命に代えても、忍者封印してみせる！……しかし忍者封印の儀式はあまりにも複雑怪奇で

危険なため、使用がワシントン条約で禁じられた忍術です。貴春様は一人、天守閣へと上り……そう、天守閣で……天守閣で……」

ここで、ちよつと、間が空いた。

惟道、あごに手を当てて、必死で続きを考えている。ちらりちらりと、少年を盗み見ている。無駄に風呂敷を広げすぎたが、オチが思いつかないようだ。

しかし飛鴻は、相変わらずのキラキラお目々を輝かせていた。身乗り出すようにして、握りしめた両手もテーブルの上に置かれている。

惟道は、ごくりと、つばを飲み込んで。

「……封印は、成功しましたにんじゃ」

肝心な部分をすつ飛ばして、ギャグで誤魔化した。

「その忍者的封印を解くためには、山田貴春様の霊を呼び出さなくてはなりません。そのためには、山田家の血筋を引いた旦那様の血が必要なのです。約500mLほどです。それを知った柳生忍者どもは、旦那様をつけ狙っているのです」

かなりぐだぐだとしてはいるが、惟道は、何とか無駄に広げた風呂敷を強引にまとめたようだった。

「山田町には、戦国時代に暴れ回った巨大カラクリロボットも封印されていていましてませ」

せつかく折り疊んだ風呂敷を、豪快に広げ始めた。

秘伝の書には、その巨大カラクリロボットの在処と、操る方法も記されていて、巨大カラクリロボットは、秘伝の書に記されたすべての忍術を会得していて、核搭載型で、口から火を吐き目からビームを出し、大阪城をたった一機で壊滅させた実績があり、13年前にも一度起動しかけたが、陽子様の手によってまた闇に葬りさられるその時、「柳生忍者が居る限り、巨大カラクリロボットは何度でも復活するのだあー」と言い残し、「そんなことはさせないわ。たとえ何度復活しても私が必ず封印する！」と陽子様が仰ったと惟道の話が膨らんだ辺りで、お多恵さんが戻って来た。

愛玲は不在だった。

白虎寺の知り合いに尋ねたところ、彼女は日本に来ているそうで、連絡は取れなかったそうだ。

考えてみれば、あの過保護の艾愛玲が少年を一人で寄こすわけもない。何処か近くに潜んでいるのだろう。

そういうわけで、山田貴久鉢は、よくわからないけど柳生忍者に狙われていて、山田飛鴻は、めでたく用心棒に就任したのである。

一章 山田貴久鉢、忍者を雇う（二）

ここのところ、山田貴久鉢が山田タワーに向かうとき、愛車フライングダックの助手席には秘書のお多恵さんが、後部座席の貴久鉢の隣には、医者の方六が同乗している。

貴久鉢は、

「えーい、医者などに張り付かれると気が滅入ってしょうがない！ 降りろ！」

と車中でよく権六に文句をいう。権六も、

「うるさいわ！ わしだって乗りとーないが仕事じゃから我慢しとるきに。お前も我慢してたまつとれ！ 暑かしい！」

と、やり返す。

運転手が、

「申し訳ございません。ちゃんと日陰で冷やしておいたのですが」とクーラーの利きをしきりに気にするが、そんな話をしているわけではないので、いつも無視される。

「おのれの仕事などわしの知ったことか！ 白ヒゲじいめ！」

「何をぬかす。嫌々ながらもお前のために乗ったつとるこの博愛精神のお医者様に向かつて。恩知らずの青力ビもやしっ子が！」

「ぬかせ。この出来損ないの藪医者めが！ 誰もたのんどらんぞ！ さあ、降りろ降りろ。地球から降りろ！」

「うるさいわい！ 死に損ないが！ 星から降りるのはお前が先じや！ 多恵にいえ、多恵に！ お前んとこの秘書に無理矢理押しつけられて迷惑しとるきに！ わしだって帰って寝たいわい！」

言い争いながらも、不思議と二人はお多恵さんには何も言わない。彼女も素知らぬ顔で窓の外を眺めていたり、寝ていたり。運転手だけが、はらはらとしてしまって、

「お二人とも、お二人とも。もう、おやめくださいませ」

と小さく訴えるが、聞こえているのかいないのか、やはりいつも

無視される。

ある日。

「お多恵さん、お多恵さん。止めてくださいませ。お願いします」
と、気の弱い運転手は、寝ている助手席の秘書を揺り起こして、頼んだことがある。

お多恵さんは、めんどくさそうにのびをして、あくびをかみ殺してから、

「おじいちゃんも、権六さんも。いい加減にしないと、雄一ゆういちさんが、うるさいぞつ、だまれお年寄りども！ て、言ってますよ」

と、あらぬ事を言った。彼女は、寝起きがたいそう悪いたちだった。言うだけ言って、またむにやむにやと目を閉じた。

じじい二人の攻撃が運転手雄一に襲いかかり、「すいません、すいません」とか、「お多恵さん、お多恵さん」とか気の弱い運転手は必死に謝ったり助けを求めたりしていたが、ついに、

「うう、わたし……死んでお詫びします」

との泣き言を、本当に泣きながらいった。アクセルを踏み込み、ハンドルにしがみ付いたものだから、車が急加速しつつ、小刻みに揺れた。

慌てたのは、貴久鉢と権六。

「よ、よさぬか雄一！ 死ぬならおまえ一人で死ね！」

「そ、そうじゃ、医者巻き添えにすると祟られるぞい！」

「お多恵さん、お多恵さん！ 一大事じゃ！ 起きなさい、起きてください！」

交通量が疎らとはいえ、町を通過道でそうそう飛ばせるモノではなく、すぐに前の車と接近して速度が落ち、おまけに赤信号に捕まって止まった。

年寄り二人は車から転がり降り、ひとしきり運転手を罵倒してからなだめすかし——休憩してから、車に乗り込んだ。

貴久鉢と権六は後部座席で肘をつつけ合い、ごによごによと小声で責任をなすりつけ合っていて、運転手は泣いている。お多恵さん

は、素知らぬ顔で窓に寄りかかり、微睡んでいる。

いつも、と言うわけではないが、車内の人間関係は、だいたいそんな感じである。

罵倒し合うことは、この二人のお年寄りにとっては大の娯楽で、運転手はちよつと情緒が不安定だが、免許上では、無事故無違反だった。

しかし、今日はお年寄り二人が、妙に大人しく、お多恵さんも起きている。さらに乗ってる車は、大衆車のフライングダックではなく、山田自動車で一番の高級車・女王だった。

それは少年が一人、加わっているからだろう。
もちろん飛鴻で、もちろん護衛のためである。

走る車の中、お多恵さんが、窓から見える景色を飛鴻に説明していく。貴久鉢や権六も、それを一緒になつて聞いている。律儀に相づちを打つ。別にそれほどの町並みでもないのに、驚いて見せたりもする。

そんな彼らの目的地は、もちろん、山田グループの本社・山田タワーである。

貴久鉢は、よく働く。

日曜も祝日も、よく働く。

だから今日も仕事をする、と言うわけでもなかった。

自分の築き上げた山田グループを、山田タワーを孫に自慢したい、と思ったのだ。

そついうわけで、山田タワーに到着すると、

「護衛のためには、会社の中を良く知って置いた方が良いでしょう」
猫なで声で、昨日と似たようなことを言った。昨日そつ言つて、少々屋敷の中を案内したのだった。もっとも執事長の惟道の方が屋敷に詳しい話面白いので、少年の興味は完全にそちらに引きつけられて、とても悔しい思いをした。

考えてみれば、屋敷は貴久鉢のテリトリーと言うよりも、妻や娘の勢力範囲だった。彼女たちの従順たる下僕である惟道は、娘に指示されるままに、貴久鉢の池にワニとかオモチャを放して、まったく悪びれないほどの猛者である。使用人の9割以上も、妻や娘が雇った者で、貴久鉢にとって山田屋敷は敵地に等しい。

しかし、山田タワーなら、そのようなことはない。

ここは、山田貴久鉢の城なのである。天まで届いたバベルの塔である。ここでの貴久鉢は、神をも凌いでいる。

到着早々。

当然のように山田タワーは、蜂の巣にラリアットを食らわせたような大騒ぎになった。

総裁・山田貴久鉢が、孫を引き連れて各部署を視察していくのだ。誰もが仕事の手を止めて、貴久鉢と少年に、跪かんばかりに挨拶をする。重役たちが次から次へと飛んできて、飛鴻ひえいふあんにお愛想を浮かべ、おべっかをつかう。

仕事どころではない。

各部署とも、清掃に狂奔した。机の上を片づけて、床も掃き清めた。そこかしこで、ほうきや掃除機、ぞうきんの争奪戦が繰り広げられていた。

ビル内には、怒号が渦巻いている。しかし一行が接近すると、騒ぎの質が、一変する。勤勉な会社員の姿が其処に出現する。

貴久鉢は得意満面だった。

どうだ！ と叫びそうなほどだった。妻や娘の勢力下である山田屋敷と違って、山田タワーの山田貴久鉢は、とことん偉いのだった。一階、二階、三階と練り歩いていく。どこでも、大歓迎が待ちかまえている。

そんな絶好調だった貴久鉢の袖を、控えめに秘書のお多恵さんが引っ張った。

「……総裁」

と、困ったように言ってから、何か耳打ちする。

貴久鉢はそつと少年に視線を落として、顔色を変えた。

「そろそろ、わしの部屋に行こうか。ジュースでも飲もう。見晴らしが良いぞー」

貴久鉢は諸国漫遊を切り上げると、エレベーターで最上階へと向かった。

勢いよく昇っていくエレベーターの中で、貴久鉢はバツが悪そうに頬を掻いていて、権六は欠伸をしている。お多恵さんは苦笑していて、少年は、心底ほつとした表情をしていた。

101階の高さを誇る山田タワーは、町内どころか県内でもずば抜けて高い建造物である。

最上階は、貴久鉢の総裁室と、お多恵さんの秘書室がある以外は大きな一室となっている。四方の壁は、すべてガラス張りになっており、山田町どころか、隣町も、沖合に浮かぶ島々も一望に見渡せた。此処では小さなパーティーが開かれたり、会議が催されたりもする。普段は展望室として解放されている。もっとも総裁室のあるフロアなので、利用者はあまり居ない。

今も、貴久鉢たちしかない。

しかし、ここは、少年のお気に召したようだ。

飛鴻は、強化ガラスにべったりとかじり付いていた。

お多恵さんがそのそばに腰をかがめて、あれこれと遠望を説明している。飛鴻はいちいち頷いている。権六は上がって早々、ソファに寝転がってイビキをかいでいる。

貴久鉢は、飛鴻のことをお多恵さんに一言頼んで、総裁室に引きこもった。

山田貴久鉢は、多忙だった。

なんと言っても、細胞数が千社を超える山田グループの総裁なのである。

だからといって、もちろん山田グループのすべてを、山田貴久鉢

が管理しているわけではない。貴久鉢が直接指揮を執る企業は……
……実は何もなかった。1年前に、企業の経営からは完全に身を引いたのだ。

それでも、貴久鉢の机の上には、書類の山が積もっていた。
一つ一つ丁寧に目を通し、ハンコを押していく。この作業が貴久鉢は大好きだった。何とも言えない至福の時だ。

書類は大雑把に、企画の山と、報告書の山に積み分けられていた。
企画の山には、山田グループの未来が詰まっていた。

報告の山には、山田グループの過去が詰まっていた。

二つの交差する此処に、山田グループの今があった。

書類を眺めていると、妻や仲間たちと一緒に頑張って悪戦苦闘を繰り広げた日々が、まぶたの裏に蘇ってくる。熱い血が体中を駆けめぐっていく。大きな達成感が、山田貴久鉢を穏やかな気持ちにさせてくれる。

夢と思い出の結晶、山田グループは、今も元気に走り続けていて、これからも走り続けていくのだ。沢山の書類たちが、それを証明してくれている。山田貴久鉢の人生を、丸ごと肯定してくれている。たとえ貴久鉢が居なくなろうとも、山田グループは続いていく。貴久鉢の青春は、新しい誰かの青春へと続いていくのだ。
しかし。

今日は印鑑を5つ押したところで、貴久鉢はいらいらとした。次の書類は少々手荒に読みとばす。総裁・山田貴久鉢のもとに届く企画書は、とことん吟味された後なので、斜め読みでも問題はない！
……のだ。

そうやって、10枚ほど、印鑑を押した。徐々に――加速して――
――雑になる。

しまいには、報告書には目を通さずにハンコを押した。報告書は、すでに終わったことの報告なので、見なくても問題はない！……
……はずである。

貴久鉢はちらりと時計を確認した。20分が経過していた。

しかし目の前の書類はあまり減ってはいなかった。ああ、そうだと書類は昨日休んだ分も丸々たまっているのだから、2日分に相当する。少々無理があったのだ。

そう結論づけて、貴久鉢は書類をさつと並べて景気よく押していた。仕方のない出来事が2倍速を要求しているのだった。企業人・山田貴久鉢としては、柔軟に対応していきたかった。いつそのこと、男・山田貴久鉢としては、4倍速、いやさ8倍速で戦っていきたい。そう思っただけで8枚連続でトントンと押したら、インクが擦れた。いらいらする。

印鑑を朱肉にぐりぐりと押しつけて、再開する。時計を見ると、すでに30分が経過している。いらいらと押していく。

貴久鉢に残された時間は少ない。

こうしている間にも、飛鴻が退屈しているかもしれない。

書類の山は、やつとのことで、4分の1を消化した。

やってられるか。あと何時間、こんな事をせにやらんのだと、ついに貴久鉢の堪忍袋の緒がはじけ飛んだ。

貴久鉢が書類をシュレッダーに流し込んで証拠隠滅を謀ろうとしたときに、総裁室のドアが開いた。

お多恵さんに見つかったかと思ひ、貴久鉢、あたふたとする。

しかし其処には天下無双の駄目社員、土方八兵衛が立っていた。

ほつとすると同時に、貴久鉢は名案を閃かせた。

「八兵衛。良いところに来たな。お前はどうせ暇だろう？ いやいや、わかつとるわかつとる。其処に座ってワシの代わりにコレをついとれ。いいな？」

ぽんぽんと肩を叩いて、何か言おうとする彼に印鑑を押しつけて、貴久鉢はさつさと部屋から逃れ出たのだった。

山田飛鴻は、山田町を見下ろしていた。

「あそこ。見える？ 丘の上に一つだけ大きなお屋敷が見えるでしょ？ あれが貴久鉢おじいちゃんのお屋敷よ。周りの建物も、お屋

敷の一部なんだけどね」

山田タワーから見て北西の方向に、小高い丘が連なって見える。その一角、比較的町に近い大小三つくらいの丘を、ぐるりと堀が囲んでいる。三つを選んできれいに囲っているわけではなくて、丘の高いところや低いところをうねりながら、丘を切り取るように囲っている。堀の周りには、桜の並木が連なっている。その堀には、大きな門がどつかりと付いていた。飛鴻が愛玲と一緒に張り込んでいた門で、貴久鉢の車を止めた場所だ。

大きなお屋敷は、囲いのちょうど真ん中あたりに、けっこう小さくちよこんとあった。まるで模型のようだった。敷地内に点在する建物も、中庭にある鯉の泳ぐきれいな池も、小さく小さく、とても小さく見える。飛鴻は目をこらしたのだが、鯉はもちろん見えなかった。

「どう。大きいでしょ？」

お多恵さんの問いかけに、飛鴻は素直に頷いた。山田屋敷の敷地は、彼が育った白虎寺の敷地よりも広かった。端から端まで冒険するには、かなりの日数が必要になりそうだ。

「はい、どうぞ」

そう言っ、お多恵さんが大きな双眼鏡を、少年に手渡した。飛鴻が見入っている間に、秘書室から取ってきた愛用の一品だ。

軽くお辞儀して、飛鴻は双眼鏡を覗く。

池で跳ねる鯉や、庭で植木を刈り込んでいる使用人の姿までが見えて、飛鴻はにんまりと口元を緩めた。

中庭に、人がよく出ていた。ちよこまかと動いている。マサやヤス、メイドたちが走り回っている。惟道もいる。紙切れを手にとって、あつちを指したり、こつちを指したりして、走り回っている。

丘の上のお屋敷は、町からは見上げる場所にあつて、屋根や堀しか見えないのだが、さすがに山田タワーからは見下ろせるから、よく見えた。

「あの奥の方に、変な建物があるでしょ？」

お多恵さんの言葉に、飛鴻はすぐに頷いた。彼も最初から気になつていたので。そいつは、圧倒的に目立っていたから。

山田屋敷の向こう。屋敷を囲う塀よりもさらに向こう側。小高い丘の上に、変な建物が建っている。

山田屋敷よりも随分と大きく、幅もずんぐり広い。だいたいは西洋風の城のようなのだが、所々、違う形式が微妙に混じり合っている。

その城の最上部は、日本式の天守閣になっていた。飛鴻からは見上げる位置だ。建物だけの高さなら、山田タワーの方が倍以上も高いのだが、丘の上にそびえている分、巨大建造物の頭は、山田タワーよりも高い位置に突き出ている。

その天守閣からは、大きな朱色の和風バルコニーが伸びている。あからさまに山田タワーを見下ろせるように張り出しているそれは、まるで、あつかんべーしている舌のようである。

そんな天守閣の屋根の上には、不釣り合いな白い西洋風の鐘がちょんまげのように揺れている。

「あれが、戦女神要塞^{バルキリー}。正式名称は、虹ヶ丘^{にじがき}愛天使教会よ。どう見ても教会には見えないけどね。あそこは、虹ヶ丘でもないしさ」

「愛天使……教会？ あれが？」
きらりん、と飛鴻の目が光った。聞いてた話とは随分と外見が違ふ。とか思いながら。

「そう。愛天使教会。陽子と飛龍君^{フェイロン}が結婚式を挙げた教会ね。まあ、教会っていうか、大聖堂は地下だけなんだけどね。あとの地上部分は……なんと、説明しようかなあ………うーん」

お多恵さんはひとしきりうなつた後、
「かざり？ かな？」

首をひねった。

二人とも、しばらく沈黙していたが、教会にはそれ以上ふれず。
「それから、丘の真ん中に見える赤い屋根の家が、私のお家」

お多恵さんは、自分の家を紹介した。

「いいお家でしょ？ おじいちゃんが建ててくれたのよ？」

山田屋敷と町のちょうど中間くらいに、赤い屋根の家があった。丘下に並ぶ家と比べてなかなか大きく、庭も広い。ただ、山田屋敷と愛天使教会を鑑賞した後では、かなりこぢんまりとして見える。

「アキラ……って、覚えてるかな？ 私の娘なんだけど、ちよつとお転婆さんなんだけど、遊んであげてね。きつと気が合うと思うわ。今度紹介するね」

飛鴻は少し逡巡したが、けっきょく頷く。

お多恵さんの指が動いた。

「あつちが、虹ヶ丘小学校。本当の虹ヶ丘は、あの小さな丘なの」
周りにある民家よりも、ほんのちよつぴり高い丘に、三階建ての細長い建物が三棟、寄り添って建っている。その近くに、小さなドーム型の建物があり、小さなプールがある。他にも小さな建物が、いくつかある。

お多恵さんの家よりも大きいが、やはり山田屋敷と比べるとかなり小さい。もし愛天使教会と取っ組み合いの喧嘩をしたのなら、一撃で踏みつぶされて跡形も残らない規模だった。

幾つかある校庭も、併せたところで山田屋敷の庭とは比較にならないほど狭かった。そんな小さな校庭の一つでは、同じ服を着た少年少女たちが、棒きれを振り回したり、球を投げたりと、野球に励んでいた。

「ここから見ると、ちよつと遠近感が狂って小さく見えるけど、大きな良い学校だよ？」

飛鴻の気のないリアクションに、お多恵さんが言い訳する。飛鴻はとりあえず頷く。お多恵さんは、

「逆からだったかなあ、紹介順。でもどうしてもお屋敷と教会が目立つちゃって、後回しにするのは不自然なのよねー」

と呟いていた。

それからお多恵さんは、気を取り直し、海の方角、ずいぶん離れた場所をびしっと、指し示した。

柔らかな表情の男が歩いてくる。少しだけ太り気味で、ちよつとだけ、日焼けしていた。体中から、好々爺とした香りをぶんぷんと漂わせている。

お多恵さんは、微笑んでお辞儀する。

「おはようございます。お義父さん」

「やあ、お多恵さん。おはよう」

土方八兵衛。

お多恵さんの旦那の父である。

八兵衛は二人のそばまで来ると、

「飛鴻君だね。初めまして」

うれしそうに、飛鴻に、握手を求めた。

飛鴻が握り返す。

「すいません。お義父さん。ずいぶんと長い間、家を留守にしてしまつて」

お多恵さんが、軽く頭を下げた。

「いやいや、大事な時期ですし、お多恵さんは山田グループの要ですからな。仕方がありませんよ」

「アキラは、ちゃんとしてますか？」

「毎日練習で忙しそうにしていますよ。試合が近いそうで元気にやつとるようですよ」

「そうですか」

お多恵さんがため息を吐く。お多恵さんは、ここ数年、体調の優れない貴久鉢の代わりに、方々を走り回っている。この一ヶ月ほどは特に忙しくて、立ち寄る程度にしか自宅には帰っていない。山田町に居るときも、山田屋敷に寝泊まりして指揮を執り、そこから山田タワーと往復している毎日だ。

八兵衛は、お多恵さんにもう一度挨拶してから、会長室に消えていった。少ししてから、入れ替わりに貴久鉢がイソイソと出てくる。飛鴻はまだ景色を見ていた。

当然、飽きそうにはなかった。

3人並んで、町並みを眺めた。

ソファで寝転がる権六は、薄目を明けてそんな総裁の様子を眺めつつ、口元を微笑ました。

夕食を食べ終わったあと、

「あしたのご予定です」

と言って、お多恵さんがそつと貴久鉢の前に、封筒を差し出した。貴久鉢は眉をひそめた。予定などない。きつとない。ちゃんと八兵衛に押しつけてきたのだ……もしかや八兵衛の奴、ちくつたのか？ 貴久鉢が言い訳を考えていると、

「いけませんよ、お多恵さん。明日こそは旦那様にはごゆつくり寝ていただきます！」

と惟道が、横からすごい剣幕で割って入った。貴久鉢の味方をするとというよりは、彼は彼で何かをたくらんでいたようだった。

しかしお多恵さんはにっこりと黙殺している。惟道はいそいそと席に座った。

貴久鉢も、しぶしぶ封筒の中身を確認した。

確認して、怪訝な顔をする。

中には、ファンシーランドのチケットと、パンフレットが入っていた。

取り出して、テーブルに広げる。がたつと大きな音を立てて、飛鴻が立ち上がった。覗き込んでいる。ぱらりつと貴久鉢はパンフレットを開く。少年の目は釘付けた。

「む、明日はどうしても外せぬ仕事があった」

貴久鉢、告げる。

少年の眉がへなる。

「絶対に、遊園地に行かねばならぬ！」

少年の眉が跳ね上がった。

二章 ファンシーモンスターは忍者羊の夢でも見てろ（一）

天気は曇りで、快晴とはいかなかった。

山田屋敷の上空は、どんよりとした雲に覆われていた。

しかし、今の時期なら、日差しのない方がかえって過ごしやすいのだ。遊園地日和と言ってしまっても良いだろう。きっと良い。

平日でもあるからして、少し空いてそうなのも良い。

体の調子も良い。

何もかもが良い。

間違いなく良い。

良いに決まっている。

………後は雨さえ降らなければ良い。

貴久鉢はどんより曇った天に祈った。

こうして山田貴久鉢は、ファンシーランドに出陣した。お孫様と、ちょっと不安な仲間たちを引き連れて。

お多恵さんは、大きな麦わら帽子をかぶっていた。

白を基調としたＴシャツに紺色のジーンズという格好だった。

即乾性が売りのシャツは、少し汗ばんでいた。曇っていても、夏は夏で……。特に今日は湿度が高くて、蒸し暑かった。

午前中いっぱい、彼女は飛鴻に付き合っただけで遊園地を巡っていたのだが、早めの昼飯の後は、別行動を取っていた。ある人物を捜すためだ。

今はファンシーランド内にあるオープンカフェに来ている。

予想通りの位置。

探すまでもなく、目的の人物は、いつもの席に座っていた。

お多恵さんは、額の汗を手の甲でぬぐってから、どんより曇った空を、疎ましそうに見上げた。汗でぬれた手をジーンズで軽く拭き取ってから、深呼吸を一つ。

それから、彼女に歩み寄った。

「久しぶりね」

お多恵さんが呼びかけると、彼女は、重たげに小さな顔を上げた。さらりと髪をかきあげてから。興味ないわ、とでも言わんばかりに、せっかく上げた顔をあっけなく下げて、「そうね」とだけ小声で呟いて答えた。

彼女は、夏だというのに、よれた黒いＴシャツを着ている。シャツのボタンは、二つ目まで開けられている。

彼女は、夏だというのに、その上に黒いジャケットをまとっている。よれよれで、ボタンは一つも閉じられてはいない。

彼女は、夏だというのに、ズボンも黒のスラックスだった。右足を上にして、放り出すように、長い足を組んでいる。

夏だというのに、靴も靴下も真っ黒で、夏だというのに、膝の上には、どこで見つけてきたのか、温泉の特集記事が広がっている。

黒々と着込んでいるが、不思議と暑苦しさを感じさせない。

それは僅かに見えている彼女の肌が、シミ一つもなく抜けるように白いからであり、顔をはじめとしたわずかに露出している肌も――着ている黒い服もだが――さらりと乾いているからだろう。

本人は鍛えているから暑さなんて平気なんて言っていたが、そんな馬鹿な話はない。汗を掻かないのはまだしも認められようが、日に焼けないのは認められない。鍛えたからといって、ふつうの人の肌は、紫外線に対抗できるように出来てはいない。ちなみにお多恵さんは日に焼けると黒でなくてピンクになる。

お多恵さんは、彼女が実は地球外生命体なのではないかという疑問を中学時代から持っていて、今もまだちょっぴり引きずっていたりする。

そんな彼女は、お多恵さんを無視して、温泉記事に見入っていた。切れ長の目元は、涼しげだった。

お多恵さんは何となく「むかつ」として、横から雑誌をかつさらった。

ワンテンポ遅れて、彼女は気怠そうに顔を上げてから、さらりとした黒いショートのを、ゆったりと掻き上げた。眠たげだった目は、少しだけ鋭くなって、お多恵さんを睨んだ。

「何？」

言葉にも、少しトゲがあった。

彼女が、アイアイリン艾愛玲だった。

「なつかしいな」

睨め付けてくる友達に平然と微笑んで、お多恵さんは対面に座った。ぽんつと畳んだ雑誌をテーブルの上に置く。店員にファンシードリンクを注文する。

「いつ以来かな？」

愛玲の瞳をのぞき込んで、にこやかに微笑えんだ。

一分くらいそうしていると、不機嫌に睨んでいた愛玲が、目をそらした。彼女は睨めつこに、特に泣き顔や笑顔に弱い。

「二週間ぶりよ」

そつぽを向いて答え、「分かり切ったことを」と続けて吐き捨てた。もちろんお多恵さんも覚えている。白虎寺でだ。

二週間前に、お多恵さんが飛鴻を引き取りたいと申し出て、大げんかをして別れている。その前も、その前の前も、二人は会うたびに飛鴻のことで、大喧嘩をして別れていた。全部彼女が悪いのだが、お多恵さんにも、彼女が構える気持ち、ほんの少しだけ、まあ分かる。

「違うわよ。ここのこと。ファンシーランド……、久しぶりでしょ？」

だから、につこり笑んで、まず話題を転換する。

「ああ。そうね」

愛玲は、気の抜けた返事をしてから、目を細めて周りを見渡した。ファンシーカフェ。

彼女たちが一緒にファンシーランドに来た回数は、それほど多いわけではないが、来ると必ずファンシーカフェで休憩をした。オリ

ジナルドリンクであるファンシードリンクを飲んだ。甘ったるくてあまり美味しいジュースではない。ここ以外で飲みたいとは思わないが、何となくここに来ると飲んでしまうし飲みたくなる。

愛玲の前にも、ファンシードリンクが置かれていて、お多恵さんはくすりと笑ってから、自分の分のファンシードリンクを飲んだ。記憶以上に甘ったるくて、眉をしかめた。

「ほんと、なつかしいな……」

呟いた愛玲は、遠くを見ていた。

お多恵さんも、そちらを見る。愛玲の見たる先には、蛇行したジェットコースターのレールがあった。

ファンシーコースター。

全長1700メートル。高低差50メートル。

疾走する車両に合わせて、コースの各所からファンシーな動物の縫いぐるみが飛び出して来る仕掛けが売りだった。動物たちは、鳴き声も上げる。ファンシーランドで根強い人気を誇るアトラクションだ。

縫いぐるみには防水加工も施されていて、結構お金がかかっている。

弁償したことがあるから、お多恵さんにはよく分かった。

別にお多恵さんが壊したわけではない。

愛玲だった。正確には愛玲の放つ【手裏剣】が、すべての縫いぐるみを、ずたぼろに引き裂いたのだ。唆したのは、もちろん山田陽子。

「あなたにこの試練が乗り越えられて！ 一流の忍者はみんな、乗り越えてきたのよ！」

陽子は楽しければ何でもありの女だった。思いついてしまったが最後だ。あり得ない忍者の歴史がまた一つ捏造されて、忍者つ子がそれを信じた。18体の幻想的な縫いぐるみたちは、数分にして、死滅した。

「やるじゃない！ 愛玲」はやし立てる陽子に、「当然よ！」威張

とても嫌な予感がしたが、お多恵さんは（アッキーはあれで頼りになるから）、と後を任せたメイドを信頼する……ことにした。あの意味、とても嫌な予感がしたから、そういうことにする。

お多恵さんは、ファンシードリンクを一口飲んで、呟いた。

「……美味しいなあ」

そんなお多恵さんを見て、「変な奴」とすっかり機嫌の直った愛玲が呟いている。

無性に腹が立った。でも我慢した。

モーターによって巻き上げられ、高い位置まで引き上げられたコースターは、落ちるだけである。なぜなら、ジェットコースターにエンジンは積まれていないから。ジェットコースターは重力と惰性でのみ、走り続ける乗り物なのである。

だから。

——動き出したら止まらないわ。ノンストップで駆け抜けるの——絶対に待つてはくれないし、外してもやり直しはきかないわ愛玲の言葉だった。

山田飛鴻は、ファンシーコースターに搭乗していた。

当然のように、先頭車両だ。隣にはメイドがいる。

ゆっくりと、滑るように、コースターが動き出した。

搭乗口にある屋根の下から、飛鴻とメイドの体が、曇り空の下に流れ出た。

年若い、されど明らかに飛鴻よりはお姉さんのメイドさんが、隣できやいきやいとはしゃいでいる。

「私い、これ乗ったことがないんですよ。えっ、良いんですか？私と一緒に乗っても？」

そんなことを言っていた。

メイド達の合議で、見届け人は彼女に決した。飛鴻も頷いた。

だが、山田飛鴻にはさして関係のない話だった。誰でも良かった。居なくても良かった。山田飛鴻はたとえ見届ける者がいなくとも、

ごまかすような男ではないからだ。

飛鴻は、自らの懷に手を伸ばした。確認するまでもなかった。そこには、使い込まれた鉄の感触が。

【手裏剣】

それは、忍びの魂である。

指を動かし、撫でるように、握りしめる。

彼に合わせて造られた特製の手裏剣は、しつかり手に馴染んでいた。誰もが手に出来るような代物ではなかった。忍びの世界で認められた、超一流の職人が鍛え上げた業物なのである。山田飛鴻も、世界に名だたる忍者マスター・艾愛玲の弟子でなければ、手にすることは出来なかっただろう。ちなみに、艾愛玲は世界忍者大会女子の部で、五年連続優勝の偉業をおさめていた。男子の部に参加しても、おそらく優勝するだろうとも言われている。

ガコン、ガコン、ガコン――

山田飛鴻の足下。登りに差し掛かったコースターが、音を奏で始めた。

機首が、ゆっくりと空へ向かった。飛鴻も、もちろん空を見上げる。

ガコン、ガコン、ガコン――

コースターが頂点へと近づいていく。やつが、近づいてくる。

山田飛鴻は、強く手裏剣を握りしめた。手のひらが汗ばんでいた。袖で、汗を拭き取る。手裏剣を、握り直す。最初の、敵が迫ってくる。頂上に居座る、あの鳥のぬいぐるみ。火を吐いている、あの鳥のぬいぐるみ。

ガコン、ガコン、ガコン――

強敵が、近づいてくる。直ぐ其処に、迫っている。

ガコン、ガコン、ガコン――

――すきありっ！

山田飛鴻の手が翻った。

ぼすっ

手裏剣が寸分変わらず、縫いぐるみの腹に突き刺さった。

山田飛鴻は僅かに口元をほころばせた。

「え？」

隣でメイドが妙な声を出して……、しとめた鳥を見て……、鳥が……、白い内蔵をまき散らして……。

ガコン――

時を待たずして、ファンシーコースターが、急降下――駆け下りる。

ここからが、本当の試練の始まりである！。

「きゃーーーーー！」

メイドが絶叫した。そこかしこで悲鳴が上がる。

予想以上の風圧に、山田飛鴻も表情を強ばらせた。それでも、手は次の手裏剣を握りしめていた。目を瞑るわけにはいかなかった。そこに、すぐそこに新手が待ち受けている。

コースターが降りきったところに、どう猛な、（しかしファンシーな）虎が！

――速い！

虎と飛鴻の間には、かなりの距離があったはずだが、虎は一瞬の間に、間合いを縮めてきた。飛鴻に肉薄する。虎が、凶暴なうなり声『にゃー』をあげたとき、

――すきありっ！

飛鴻が手裏剣を放った。

コースターが走り去る。

駆け抜けざま、手裏剣が虎の首筋に突き刺さった。虎の首から、綿が散る。『にゃー』

――危なかった。

食うか食われるか、ぎりぎりのタイミングだった。

だが、安堵する間はなかった。

コースターは斜めに傾き、急旋回する。このカーブの合間にも、敵が潜んでいた。死角から、まさに忍び装束を纏った（ファンシー

な）猿が、『うきやつ』と、襲いかかってくる。一閃、二閃——一匹、二匹と凶悪な猿が、引き裂かれる。綿がコースターの風に巻かれ、勢いよく飛び散る。『うきやつ』

「ちよっ、ちよっ——うーうー！」

隣のメイドが奇声を発した。

この時点で、すでにコースターのあちこちから、色々な感じの悲鳴がほとばしっていた。

だが、飛鴻の快進撃は止まらない。

人型のネズミ、人型のカバ、ロボット型の猫と、着実に葬り去っていく。

——いける！

山田飛鴻は、そう確信した。

そのときだった。

まるで、その隙を待っていたかのようにだ。

コースの斜め前方、障害物の死角から、巨大なコアラが襲いかかってきた。

コースを塞ぐように、大きく口を開けて！ 『こあらあー！』

——飲み込まれる！

一瞬の錯覚——

身構える飛鴻。

コースターが急旋回急降下して、コアラの鼻先をかすめ通過する。

『こあらあー！』

——しまっ！ すきあっ！

カッソッ

慌てて放り投げた手裏剣は、こあらあ頭上を超え、鉄のフレームにはじかれる。勝ち誇るコアラ。『こあらあー！』

ぱすっ

跳ね返ってきた手裏剣は、メイドの顔をかすめるように座席に突き刺さった。

「ひいっ」

短く息をのんで、両手を胸の前に組んで眠りにつくメイド。

山田飛鴻は齒を食いしばった。

——絶対に待つてはくれないし、外してもやり直しはきかないわ
愛玲の言葉が、胸に痛かった。

赤、青、緑、黄色にピンクのぬいぐるみが5匹同時に登場する場所
で、地味に後ろにいた緑を仕留め損ない、山田飛鴻の挑戦は終了
したのである。

「うう、飛鴻様。どうかご無事で」

ファンシーコースターが走り去った後、ホームではハンカチを噛
みしめた惟道が、しばしの別れに涙ぐんでいた。

「5分もしたら戻りますよお」

あきれ気味に、アッキーことメイド長・芝内秋子しばうちあきこが惟道を慰める。
連れてこられたメイドは全部で3人だった。その内の一人は、飛
鴻のお供としてコースターに乗っている。彼女たちこそ、総勢36
名のメイド隊から選ばれた精鋭なのである。

前日のうちに、そのメンバーの選考会があった。

飛鴻と貴久鉢は当然として、お多恵さんと権六は同行者として確
定していた。

他に、誰を連れて行くのか。

あまり大勢でも困るが、10才の少年を飽きさせずに遊園地で楽
しませるには、この顔ぶれでは心許ない。と言うより不可能だった。
一緒にアトラクションを回れそうなのは、お多恵さんしかいないの
だが、そのお多恵さんも、途中で用事で抜けるという。

選考会は、意外と紛糾した。

まず、惟道これみちがこねた。

私も行きとうございます、と。

お前が来ても、何の役にもたたんだろう、と貴久鉢は切り捨てた。
お多恵さんも曖昧に笑って取り合わない。邪魔じゃ、と権六は更に
手厳しい。惟道が来ると、何かとややこしくなるのは目に見えてい

たし、じじいばかりが増えても意味がない。まさしく邪魔になる。その論争だけで、30分を無為に費やした。

結局、貴久鉢が折れて、おとなしくする条件で、惟道も連れて行くことになった。少年の扱いは、惟道がもつとも得意だったからでもある。……だからこそ、貴久鉢は連れて行きたがらなかったのだ。

夏場の遊園地にじじいが二人も行くのか！ と権六は顔を覆って嘆いた。

ふん、あんたもじじいだろ、とその横で惟道が小さく呟いて。また2、3分口論が続き、お多恵さんが微笑んだままテーブルを叩いて……やつと、本格的な人選が始まった。

白羽の矢が立ったのは、お多恵さんの娘、アキラだった。年は10才。飛鴻と同じ年だ。

お多恵さんが自宅に電話をすると、3コールでアキラが出た。

「もしもし、おかあさんだけど。元気にしてる？」

「ん、してるよ。それだけ？ じゃっ」

切ろうとする。お多恵さんは慌てて用件を伝える。

「明日、おじいちゃんや飛鴻君と遊園地に行くんだけど、あなたもどうかなくて」

「あした？」

「そう、あした」

「あしたー、あー、無理。あさって試合だから。沈没船と。さすがに休めない」

気のない電話の声に、歓声が重なって、それはすぐにアキラのため息に変わった。どうやら、野球放送を見ているようだった。

「あー……っ、くそう」

アキラの声と、クッションを叩き付ける音。「いたっ」という旦那の声。

「じあっ」

そう言って、アキラはまた切ろうとする。

「あつ、待ちなさい！ それじゃ、夜で良いから一度お屋敷に顔を出しなさい。飛鴻君を紹介するから」

「えー………」

「えー、って何よ。それよりちゃんと夏休みの宿題はやってるの？ 野球ばっ——」

「わかった。いく。練習終わったらおじいちゃんち」

「じゅあ、待つてるから。それと少しは宿題——」

『うったー！』 実況と同時に、ガチャン　っーっーっー

「……も……やらないと……」

お多恵さんがため息をついて、携帯を机に置く。首を横に振った。結局、無難な線で、メイドから選ぶことになった。

誰を連れて行くのか。メイド長のアッキーこと、芝内秋子にまず打診。と、言うよりずっとドアの隙間から覗いていたので、とりあえず声をかけた。

「行きます」

「じゃあ、後2人、適当に決めておいてくださいね」

お多恵さんが言つて。

そうやって選ばれた精鋭の一人が、アッキーの袖を引いた。

「なあに？ まみちゃん？」

まみちゃんと呼ばれたメイドが、恐る恐る指さした。

鳥を。

ファンシーコースターの番人たる、火吹き鳥を。

ひゅーっつと風に吹かれて、はらわたが散っていく、お鳥さんから。

アッキーは袖を振つて、まみちゃんの手を振り払った。

「……眼鏡が曇っていて、見えないの」

しかし今日のアッキーはコンタクトレンズで、眼鏡をかけていない。

「そつ………ですよね………関係ないですよね」

まみちゃんが納得する。

火吹き鳥のお腹の中で、きらりと手裏剣が、光っていた。
火吹き鳥が、泣いた。

「かぁー」

それは、とても悲しそうで、執拗な鳴き声だった。

「かぁー」 「かぁー」 「かぁー」 「かぁー」

「かぁー」 「かぁー」 「かぁー」 「かぁー」

「かぁー」 「かぁー」 「かぁー」 「かぁー」

ぶっちゃけ、配線がショートしていた。

「……眼鏡が曇っていて何も聞こえない」

アッキーが耳をふさぎながら呟いた。

「そう……ですよね……聞こえないですよね」

まみちゃんも急いで耳をふさぎながら、納得する。

バチッ と火花を散らしてから、鳥は泣きやんだ。

まみちゃんは、ほっと胸をなで下ろした。

「おお、おお、飛鴻様！ 飛鴻様！」

惟道が狂喜乱舞する。コースターが帰ってきたのだ。

バタバタとハンカチを振り回して出迎える。邪魔なことこの上ない。バイトのお兄ちゃん達は、迷惑そうにしている。

「すばらしいライディングでしたぞ飛鴻様！ ここまでファンシーコースターを乗りこなした英雄はファンシーランドの長い歴史の中にあっても飛鴻様が始めてでございます！ 陽子様以来でございますよう！」

ジェットコースターと日本語の常識をはなから無視して、惟道がおだてている。

しかし降り立った飛鴻は、浮かない表情だった。

隣のメイドは、ヨダレと鼻水を垂らして、気を失っていた。

「ノンちゃん！ ノンちゃん！ ああノンちゃんが白目向いてる！」
まみちゃんメイドが、眠っているメイドに取りすがって、揺すぶっている。

「ふえ、飛鴻様。いったいどうなされたのですか？」

しょんぼんとしている飛鴻に気づいて、惟道は愕然とした。

「はっ、まさか！」

思い至る惟道。

「きつ、きさまっ！ きさまが粗相をしたのかー！ー！」

怒りの矛先を気を失っているメイドに向けて、惟道は揺さぶった。

「ああ、やめてあげてやめてあげて、ノンちゃんを許してあげてー
ー！ー！」

自分も激しく揺さぶっていたくせに、惟道に縋り付いてお願いするまみちゃん。

「ああ、クマしゃんが、クマしゃんが死んじゃうによ〜」

と、揺さぶられつつ呻くノンちゃん。

さらに、同乗していた客たちが降りてきて、

「何考えてるのよ」

「頭おかしいんじゃない」

と女子中学生の集団が飛鴻に詰め寄っていく。

「げっ、なんだこれ！」

シートに突き刺さった手裏剣を見つけ、係員。

停車場はちよつとしたお祭りになった。

惟道は、ノンちゃんを放り出すと、糾弾者と飛鴻の間に割って入った。

「ええい！ 黙りなさい愚民ども！ 飛鴻様に向かってなんたる無礼！ 何たる言いぐさ！ 山田陽子様がご子息にして、新しい山田町の主・山田飛鴻様をなんと心得るかあ！ この糞尿どもめがあ！」

つばを飛ばして惟道が激昂する。

停車場は静まりかえった。少ししてから、そこかしこで、飛鴻を盗み見つつ、ひそひそ話が始まる。

飛鴻はとりあえず傲然と腕を組んで、ふんぞり返っている。

「あのう、執事長」

搭乗者や飛鴻から簡単な聞き取りをしたアツキーメイドが、鼻息

の荒い惟道の袖を引いて、臓物をまき散らす火吹き鳥を指さし、
「愛玲さんの縫いぐるみ惨殺事件……覚えてます？ あれ、真似し
ちつやたみたいですよ」

てへ、と舌を出して、自分の頭を軽くこづくアッキー。

「それで、二匹はずしちゃって、落ち込んでるみたいですよ
てへつとまた舌を出す。

烈火のごとく怒る惟道。

「縫いぐるみの配置が悪いのです！ おのれいつ！ 勝手に難易度
を上げただろう！」

惟道は、騒ぎを聞きつけて飛んできた園長の胸ぐらを掴んだ。

「申し訳ございません、ああ、申し訳ございません」

と園長は平謝り。

「油断した。次は、必ず成功させる」

飛鴻が傲然とふんぞり返ったまま、拳を握りしめた。

「……………でござる」

付け足す。

「おお、その意気ですぞ！ 飛鴻様！」

怒りの涙から感動の涙に転換して、吼える惟道。園長を放り捨てる。

結局、メイドに預けていた荷物から手裏剣を補充して、飛鴻は再
挑戦することになった。同乗するのは、惟道と2人のメイドと、な
ぜか園長。

二回目の挑戦は見事成功して、二発目を食らった獣たちは、見る
も無惨な姿になった。しかし、すでにぬいぐるみに刺さっている手
裏剣に新しい手裏剣が命中して金属的な音を轟かせたりして、惟道
と飛鴻を除く3人は、それなりに怖い思いをした。それ以前に、手
裏剣を補充する段階からして、まみちゃんは震えていたし、ノンち
ゃんは気を失ったまま停車場に放置されていた。

もちろん、ファンシーコースターは、本日これ以後休業になった。

テーブルの上には、ファンシーランドのパンフレットが開かれていた。

「なに？ これ？」

愛玲が地図の一片所を指さして、尋ねる。

「ああ、それね。ファンシーコースター快、ね」

お多恵さんが地図をのぞき込んで、答える。

「ファンシーコースター……改？」

「そう。ファンシーコースターはジェットコースターとしては旧式だからね。快は、オリジナルよりアップダウンが強烈になっているの。エグイくらいスクリーしてるし。——ちょうど5年くらい前に出来たのかな？」

「ファンシーコースター……改」

「だめよ。絶対に手裏剣を投げちゃ。もう子供じゃないんだから」

お多恵さんはとりあえず怖い顔を作って、言っておく。

「ぬいぐるみ、昔より高くなってるんだから。殺つても私は弁償しないからね」

愛玲がファンシーランドを最後に訪れてから、十年は経っている。彼女の知らないアトラクションが幾つか増えていて、知っているアトラクションが、幾つか消えている。新しいアトラクションは、彼女が好きそうなやつばかりだった。お多恵さんはちょっと危険な香りを感じた。

「飛鴻君、すっかり遅しくなってたね」

だから、とりあえず話をそらす。飛鴻とは二週間前に会っているから、本当は全然変わっては居ないけど。

「そうでしょう」

うつとりと愛玲はつられた。忍者の話と飛鴻のことなら、必ずのってくる女なのである。

「さすがに、白虎寺では目立たないけど、こっちに来るとすごいよね。マサ君とヤス君が……でもさ、いきなり車の前に飛び出してきたときはビックリしたわ」

お多恵さんは、思い出して付け加えた。

愛玲は言い返した。

「向こうの子供の中でも本当は一番強いわ……優しいだけよ。それに、車にひかれるほど、飛鴻は鈍くさくない」

「鈍くさくないって。そう言う問題かなあ。雄一さんがすぐ気づいたから良かったようなものの、もしブレーキ踏むの遅れてたら大怪我してるわよ」

「私だって、死ぬほどびっくりしたわよ」

惘然とこたえる愛玲。

「まあ……そうだろうけどさ」

「私はただ、ここに隠れて待っていたら貴久鉢翁が車で出てくるから、飛び出して脅かせてやれって言っただけなのよ。車の前には言ってないわ。——でもね、あの子、きつと自信があったんだと思うわ。車の動きを見切ったのね！ 飛鴻ってやれば出来る子なのよね！」

お多恵さんは、半眼で愛玲を睨む。やっぱりあんたが原因じゃない。と言う意志を込めつつ。

「まあ……いいわ」

無理に笑って、お多恵さんは席を立った。

「今日は、喧嘩するつもりはないから。観覧車に乗りましょうよ。上からファンシーランドと山田町を解説してあげる。12年ぶりですよ？ 懐かしい山田町をご覧くださいわ」

戯けつつも、お多恵さんの頬はちよつとだけ引きつっていた。

二章 ファンシーモンスターは忍者羊の夢でも見てる（二）

お化け屋敷に響く、絹を引き裂く乙女の悲鳴。

「あー！ー！ー！ー！ お化けさんが！ お化けさんが白目向いてる
ー！ー！ー！」

まみちゃんが泣き叫ぶと。

「いやー！ー！ー！ー！ お化けさんが、お化けさんが死んじゃうよー
ー！ー！ー！」

ノンちゃんも叫ぶ。

虹色の光線に包まれていて、明るいお化け屋敷の世界には。
異形の者どもの亡骸が散乱していた。

山田飛鴻は、お化け屋敷を攻略していた。

「いやー！ー！ー！ 逃げてえ、お化けさあん！」

まみちゃんとノンちゃんが抱きあって叫ぶ。

「ふおおおおああー！ー！ー！」

「げふお！」

飛鴻が雄叫び、ファンシーなぬり壁が、みぞおちがありそうな位置を押さえて、うずくまる。それを見た一本傘お化けが、片足で跳ねるように逃げるが、バランスを崩してこける。

「ひいひいひい！ やめてくれえ！ やめてくれえ！ ああ！ あ

ああああ！ やめてくださあ」

彼の願いはむなしかった。

「げふお！」

這いずって逃げようとする一本傘の背中に、少年の膝がめり込む。
「どうしたっ」と叫びながら飛び出してきた正義感の強いいったんもんめが、飛鴻の跳び蹴りをあごに受けて、いったん悶絶する。

「ちくしょう！ このガキいつ」

鬼がまさしく鬼になって棍棒を振り上げる。

飛鴻の手が唸る！ 手裏剣が綿の詰まった棍棒に突き刺さる。

「ひっ、ひいいいっ………！」

「ふおおおおああ………！」

「がはあっ」

戦意喪失。綿の飛び散る棍棒を投げ捨てて腰を抜かす鬼に、飛鴻の旋風脚が鬼退治。

「わあ！ なんだ！ いったい何なんだよう！」

異変を察知して駆けつけてきた警備員。ちよっとファンシーな帽子をかぶっていた。

「げやふう」

問答無用で葬り去られた。

「いやあ、いやああああ………！」

隠れていた猫女が見つけれられ、引きずれ出される。

ファンシーコースターで二度と慢心しないと誓った飛鴻は、容赦なしだった。

「いや………！ もうやめてあげてえ！ もうやめてあげてえ！」

縫り付いて泣き叫ぶメイドたちを引きずって、少年の挑戦は続いていく。

「ああ、飛鴻様。あんな乳離れの遅い小娘どもに任せるんじゃないかった。怖いおもいをしていないでしょうか？ ひもじいおもいをしていないでしょうか？ こんなことなら、こんなことなら私が一緒にすれば良かった。うううう」

ファンシーお化け屋敷の出口で、惟道がハンカチをくわえて泣いていた。

「大丈夫ですよー……… ファンシーお化け屋敷は、それほど怖くないですし、まみちゃんも常にお菓子を携帯してますから………」

アッキーが慰める。が。声が幾分震えている。体もちよっと震えている。横では園長がおろおろとしている。

ファンシーお化け屋敷にいるお化けは、みんなファンシーだ。マスコットキャラ丸出しのお化け達が、物陰から「ばあっ」と飛び出してくる。それも隠れている姿が最初から見えるのだ。電柱の後ろに塗り壁が隠れていたり、透明なアクリル板の後ろに、猫女が隠れていたりする。

室内の照明も割と明るい。特にお化けの潜んでいる位置は、ライトアップされている。

ここは驚くためのお化け屋敷ではなく、滑稽なお化け達と戯れるためのお化け屋敷なのだった。キャラ商品の売り上げも好調なファンシーお化け屋敷は、ファンシーコースターシリーズと並んで、看板アトラクションである。

そんな中から、イヤな悲鳴が聞こえている。

それがだんだん出口に近づいて来ている。お化け屋敷の周りには、立ち止まる客が増えている。

心配そうに見守る彼らの前に、出口からカップの格好をしたあんなちゃんが、転がり出て来た。

「ひいひいひいーーーーー！ た、助けてくれーーーーー！」

「どうしたのですか？」

惟道がささず走り寄って助け起こす。

「み、みんなやられちゃったよお！ しよっ、少年が！ 少年Aが暴れてるんですよー！ そ、そうだ！ 児童相談所を！ 児童相談所をよばなきゃ！」

「お待ちなさい！」

走り出そうとするカップを惟道は、がばつと羽交い締めにはさえつける。

「カップはお化けではありません。妖怪です！ 妖怪がお化け屋敷から出てくるなんて不謹慎ではありませんか！」

「そ、そんなこと言ってる場合じゃないでしょう！」

「そんなことだとお！ おまえのような物の分別を付けられない若者がいるから、南極の氷が溶け始めておるんだぞお！」

「ああ、申し訳ありません。ああ、申し訳ありません」
横で平謝りの園長。

その時、

「うづうづつ、ごめんなさい、ごめんなさい、お化けさん。うづうづつ、ごめんなさい、うづ、ぐすつ　ぐすつ」

「ああ、お化けさん、お化けさんが……しんじゃ……」

すすり泣くメイドを引きずって、飛鴻が暗闇から出てきた。

「おお、飛鴻様！　ご無事でしたかああああ！」

「ひいひいひいひい！　出たあああ！」

惟道が駆け寄って、その隙にカッパが逃げていく。

飛鴻は憮然としている。

「どうも、愛玲さんが倒したお化けよりも、二人、数が少なかったようです」

アッキーが簡単な聞き取りをすませて、説明する。

激昂する惟道。

「おのれえ、一度ならず二度までも！　きさまあ、人数を減らしただろう！　嫌がらせか！　嫌がらせなのかあ！　飛鴻様に対する嫌がらせなのかあああー！　あああつ　あつ、あのカッパだあ！　あのカッパが逃げた分と……」

しばしの沈黙。

ぽんつと手を打つ惟道。

「皿の分だあああ！」

「ああ、申し訳ありません、あああ、申し訳ありません、あああああああああ」

ガクガクと揺さぶられつつ、謝る園長。

惟道はカッパの捕縛と3体のお化けを追加してのやり直しを求めたが、さすがに無理だった。タン力を担いだ病院職員たちが、出口と入り口をひっきりなしに往復していく。

両腕を胸の前で組みながらも、うなだれていた飛鴻が、顔を上げて、

「慢心していた」

重く重く呟いた。

「まだまだ、愛玲には遠く及ばない。愛玲はすごい！」

両腕を胸の前で組んで、晴れ晴れとした表情だった。

「……………でござる」

「おお、飛鴻様！」

園長を放り捨てて、よよと縋り付く惟道。

「だが、次に来たときには、きつと愛玲を越えてみせる、でござる」

「おお！ おお！ その意気ですぞ！ 飛鴻様！ 24匹どころか、

次はきつと30体は打ち倒せることでしょう！ この惟道がお約束いたしますぞ！」

叫んだ後、いそいそと惟道が不吉なメモを取っていた。

「……………ねえ……………愛玲……………覚えている？ あなたが、あなたが、お化け屋敷で、大暴れしたこと……………」

「大暴れ？ 何それ？……………ああ、あれね。退治した話ね。もちろんですよ」

「……………その話は……………飛鴻君に……………」
「もちろんよ」

中学二年の春。山田町にやってきた不思議忍者少女・愛玲に、山田町のお姫様・山田陽子が興味を示さないわけがなかった。特に愛玲が道場破りと称して空手部をまとめて病院送りにして部屋と部費を強奪してからは、陽子は何かと愛玲に嫌がらせ——もといちよっかいを出し始めた。

体の弱い陽子は、同じ生物とは思えないほど健康な愛玲が羨ましかったのだらう。そして友達になりたかったのだ。その方法がちよっとだけ、間違っていただけで。

と、そんな感じに当時のお多恵さんは好意的に解釈していたのだが、今となっては真相はわからない。

そんな二人。

陽子が初めて愛玲をファンシーランドに誘ったのは、中学二年の秋だった。

お多恵さんが、陽子に頼まれて、二人の仲を取りもった。

愛玲はずいぶんとはしゃいでいたし、陽子も大人しかった。

どこから見ても、三人は仲の良いただの女学生に見えただろう。

お化け屋敷に入るまでは。

ファンシーお化けの中身は、空手部と柔道部と剣道部の有志の皆さんだった。

24名、男のプライドと部の存続をかけた結構真剣な集まりだ。

剣道部と柔道部も、陽子に踊らされて愛玲の忍者部と対決して殲滅された経歴があった。

お多恵さんは、この悪巧みを何も知らされておらず、血反吐飛び散るお化けの世界で、とても怖い思いをした。

お化け達は、花の女子中学生なんっちゃって忍者艾愛玲の手によって、冥府の底に、まとめて葬り去られたのであった。

「なんだ。日本のお化けって……案外大したことないのね」

寂しげに呟く愛玲の前を、タン力で運ばれていくお化け達。

「あはははははははははっ」

その横で、なぜか勝ち誇って高笑いする陽子。

その時はお多恵さんも貧血を起こして——た振りをして——救急車で運ばれ一日病院にお泊まりしたのだった。この辺りからなんだがよく分からないうちに三人は一緒に行動するようになったのだが、今、三分の一程度の高さまで上がった観覧車からは、その記念すべき三人の仲を取り持ったお化け屋敷が、大変よくお見えになった。その前に留められた2台の救急車も一緒に。

「大丈夫よ」

同じ風景を見ながらも、愛玲は言う。

「そつは……、思えないんですけど……」

「あなた、飛鴻のこと、何も分かってないのね」

呆れたと言わんばかりに、愛玲がため息を吐いた。

「少しは信用してあげたらどうなの？」

「それは……私は、別に……」

走り去っていく救急車を眺めながら、お多恵さんは少しうろたえた。凶星を指された格好だった。確かに飛鴻のことを、殆ど理解できていない。

そう、飛鴻が何かをしたと、まだ決まったわけではない。そもそも、愛玲がやった奇行は、少年に出来る様なものではない……と思う。そんなことをお多恵さんが考えている間にも、新しい救急車がもう一台やって来る。

「大丈夫よ。心配いらないわ。あの子はやれば出来る子だから。だいたい、お化けに負けるような鍛え方はしていないわ。じやなきや、やってみなさいって言うわけじゃない？ 大丈夫！ 装備は一式渡してあるの。手裏剣は余分に持たしてあるし、煙玉や爆裂弾も渡しておいたから。万が一の時は信号弾を上げれば飛んでいくって約束してあるし。ぬかりはないわ」

愛玲が太鼓判を押した。でもちよつとだけ心配そうに。

お多恵さんは下を向いて、わなわなと震えながらも深呼吸をして、必死に自分を落ち着ける。まだ決まったわけではないのだ。少年が、何かやったとは。多分。きっとそうだ。……そうだといひ。そういうことにする。

お多恵さんが沈黙していると。

「貴久鉢翁、元気そうにしてたじゃない」

愛玲が、いきなり話題を変えた。いや、本題に入ったと言っているのか。今日、二人が会った時点で、話すべきことは決まっていたのだ。

「……そうね」

お多恵さんは同意した。確かに、貴久鉢は元気だ。元気になった。「どこが、死にそうだった？ あと……そうね。3年は生きるんじゃない？」

「……微妙な年月を言うわね。どうせなら後20年は大丈夫くらい

は言ってくれないと」

お多恵さんはじとりと愛玲を睨め付けてから、足を組み替えて、窓の外に視線を移した。

「あと1年、生きられるかどうか……だつて。結構、転移してて……」

「……陽子だつて、似たようなこと言つて、ずっと長く生きたわ」
「でも、死んだわ」

愛玲はそれには答えなかった。ぶすつと窓の外を眺めている。

「おじいちゃんが、あとさ、どれだけ頑張れるか分からないけど、出来れば一緒にいさせてあげたいじゃない。たとえ1年でも……5年でも……」

「5年つて！　だめよそんなに！　約束が違うじゃない！」

愛玲が身をのりだして叫ぶ。

それを無視して、

「ねえ？　あれつてどういふつもり？　……忍者でござる。あなたは命を狙われていますね？」

お多恵さんは尋ねた。

一度立ち上がったいた愛玲は座席に座り直し、そつぽを向いた。

「さあ」

「さあつて、あなたが吹き込んだんじゃないの？　つて言うかあなた以外の誰が忍者なんて吹き込むのよ？　それにあの手紙、完全にあなたの字じゃない？」

「さあ」

「あのねえ、愛玲……まさか、飛鴻君。おじいちゃんが、飛鴻君のおじいちゃんだつてことは、ちゃんと知ってるんでしょね？」

これが、お多恵さんの一番知りたかった事柄だった。少年の態度と言動が、祖父の家に帰ったというより、まるで知らない人の家に、用心棒として来ているといった風情なのだ。実際には少年は、お多恵さんや惟道とは白虎寺で何度も会つていて面識があるし、陽子の話や陽子の残した数々の遺跡には強い興味を示すので、ここが母の

生家だと知っているはずなのであるが。——だけど、おじいちゃんには、どこか妙に他人行儀というか、完全に他人の振りというか、おじいちゃんと一緒にいるときはお多恵さんや惟道にまで、微妙な壁が見え隠れするというか身構えているというか。そのため、おじいちゃんも少しシヨンボリしているし、お多恵さんも少年にどう接して良いのか、態度を決めかねていた。

「さあ」

と、愛玲が答えた。

お多恵さんは目を細め、苦笑した。何を聞いても愛玲はすつとぼける気だ。それならそれで、こちらにも考えがある。

「そう。じゃあ、とにかく、飛鴻君は山田貴久鉢さんのボディーガードに来てるわけよね？」

「……………そうよ」

少し考えてから、愛玲が答えた。
にんまりと、お多恵さんは笑う。

「じゃあ、悪い奴が捕まっておじいちゃんが安全になるまでは、10年でも20年でも頑張つて貰わないとね」

「ちよつ、ちよつと待つてよ！」

案の定、愛玲は狼狽えた。

「勝手にそんなこと決めないでよ！」

「勝手に？ 飛鴻くんとはちゃんと契約交わしたわよ？ 見たいの？ 見せてあげよつか？ そういう契約書？」

「飛鴻はまだ子供よ！ 保護者の同意なしにそんなこと決められないの！」

「保護者？ ああ。飛龍くんのことね。そうね。後で連絡を入れておくわ」

「私のことよ！ あの子を育てたのは、わ・た・し、なの！ 飛龍でも陽子でもない！ まして、あなたや貴久鉢ではない！」

愛玲が席を立つ。観覧車がぎぎつと揺れた。

「私がおしめ換えて、私が寝かしつけて、私がミルクをやって、私

が本を読んであげて、私が付きつきりで看病して、私がご飯を作
てあげて、私が学校に連れて行って、私が忍びの技を教えてあげた
のよ!」

「そこで何で忍びの技を教えるのよ!」

「悪い!??」

「悪い!」

お多恵さんも立ち上がって叫びながら、走り去っていく救急車を
指さす。

「だから、飛鴻を信じなさいって言ってるでしょう!」

睨み合う二人。

「ふう」

お多恵さんはため息を吐いてどっかりと座った。ぎぎつと観覧車
が抗議する。

お多恵さんはつんと顔をそらしてすまし顔で、

「とにかく、飛鴻君はもうずっと山田屋敷に居て貰うことになりま
すから。お返ししません」

「ちよつと、駄目よ! そんなことしてあんたの陰険が移ったらど
うするのよ!??」

「陰険って……おまえが言うか?」

「ああ! 分かったわ。そう言うことだったのね!? あんた、飛
鴻のことを狙っているんでしょう? ついに正体を現したわね!?

この女狐め!」

「……………だからおまえが言うか? だいたい私は亭主持ちなの」

「どうだか。あのへなちょこ捨てて乗り換えようって腹でしょ」

「……愛玲さん」

お多恵さんの声のトーンが、少し低くなった。

「な、何よ?」

「聞こえなかったな。——何かおっしゃったかしら? 何を捨てて
?」

「とつ、とにかく! ふえつ、飛鴻は私が育てたんだからね!」

目をそらし気味ににらみ付ける愛玲と、真つ向からにつこり微笑んでいるお多恵さん。

お多恵さんは、そろそろ妥協しようと思っていた。なにも、愛玲と少年を取り合う気など、最初からなかったし、そんな必要もなかった。愛玲が飛鴻と一緒にいたいのなら、彼女も山田町で暮らせば良いだけなのだ。山田屋敷には腐るほど部屋が余っているのだし、愛玲の部屋もそのまま残ってる。彼女が仕事する気があるのなら、それも紹介できる。

ただし、交換条件として、少年に何を吹き込んであるのかは、ここで洗いざらい吐いてもらうことになるのだが——その後、ちゃんと少年には、本当のことを話してもらうことになるのだが。

そのとき、お多恵さんの携帯電話が鳴った。
アッキーからだった。

「あのー、ちょっと色々あったので連絡しておきますね。まず、たいしたことはないようなんですが、旦那様がちょっと倒れちゃいましたー。ちょうどお多恵さんと別れてすぐくらいなんですけど。あつ、お多恵さんには言わなくて良いって権六さんが言ったので連絡しませんでしたー」

お多恵さんは顔をしかめた。

アッキーはてへつと笑ってから、お多恵さんの返事を待たずに、
「本当にたいしたことないそうですー。権六さんも、ちゃんとした先生もそう言っていました。今は権六さんが付いて、医務室で休まれているですよー」

ちゃんとした先生。——もしもの時のために、医務室にはあらかじめ主治医と看護婦を数人、お多恵さんが手配しておいたのだ。

「……そう……わかったわ。ありがとう」

「あつ、それとですねー」

アッキーの発言が続く。

「わたしは頑張ったんですけどー、楽しそうな、本当に楽しそうな飛鴻君を見てるとなんだか止めるにしのびなくってって言うかフ

アンシーコースターやお化けなんて止めようないですよー！。あはははっ。本当にたいしたことないんですけどちょっとだけ飛鴻君がはめ外しちゃったから後でよろしくお願いしますねそれじゃ！」
「がちゃっ。」

お多恵さんの返事を待たずに、最後らへんを早口で締めくくってアッキー連絡は途絶えた。

「つーつーつーつー。という音を聞きながら、お多恵さんは人選ミスを痛感していた。つーかお化けは止めれなくても少年は止めれるだろう……えっ？ ファンシーコースター？ ……あっちもやっちゃったの？」

お多恵さんの肩が震える。手の中で携帯がみしみしと軋んでいた。行き場のない怒りが哀れな携帯電話に襲いかかったのだ！ 危うし携帯電話！ がんばれ携帯電話！。

そのとき、わなわなと肩をふるわすお多恵さんに、愛玲がいたわりの声をかけた。

「どうしたの？ トイレ？」
と。

ぴたりと、お多恵さんの震えが止まった。顔を上げ、ぼんやりと愛玲を眺める。

——ああ、こいつだ。

お多恵さんは、すべての元凶を目の前に発見した。脳細胞に刻み込まれた数々の記憶が、「こいつが悪い」「全部こいつのせい」「こいつさえ居なければ」「こいつのせいにしてしまえ」と断定していた。こいつだけは、飛鴻の側に置いてはおけない！。

だから、お多恵さんは、にっこりと愛玲に微笑みかけた。

「な、何よ？」

愛玲はひるんだ。

「ねえ、愛玲」

お多恵さんは、これ以上ないほど、優しく語りかける。

愛玲は、じりつと後ろに下がった。観覧車がぎいいと揺れる。

「今まで、飛鴻君を曲がりなりにも、ずいぶんと曲がまくりなりにも育ててきてくれて、ご苦労様。後は私に任せてくださいね」

極上の笑顔でそう告げた。

愛玲は何かを言い返そうとして口をあげたが、結局何も言わなかった。

懐かしい笑顔だった。いつもは他人と視線を合わさないようにしているくせに、怒ると決まって、お多恵さんは、真っ正面から相手の目を見つめて、にっこりと微笑むのだ。特にある一定の【作り笑顔】に声の【粘り】が重なったときを、愛玲や陽子は『鮫の威嚇』と呼んで警戒していた。その笑顔が、愛玲の目の前で、鮫の歯よろしくざらりと輝いている。

観覧車は、……1分30秒後に無事に地上に帰還した。

お多恵さんは、観覧車から降り立つと、後ろも振り返らずに早足で歩き去った。今日これからの予定を頭の中で組み立てつつ。

肩を怒らして去っていくそんな親友を見送りながら、愛玲は憮然と呟いていた。

「……漏れそうなくらいで、そんなに怒らなくても……」

忘れたことなどないと思いこんでいた、陽子の誕生したときのこと、彼女が居なくなった日のことも、一挙手一投足に至るまでもが、切なく、心を掻きむしるほどに、鮮やかに目の前を通り過ぎていった。本当は何もかも忘れていたのだと思い知らされるほど、それは鮮明だった。

ああ、これが走馬燈なんだと、しんみり感じながらも。

山田貴久鉢は、夢を見ていた。

歪んだフィルムに映された、とても懐かしいアルバムを眺めていた。

貴久鉢は、妻を、山田万里子を恨んでいた。

万里子が、亡くなる前に告げたことを。

陽子が長く生きられないことを。

二十歳まで生きられないだろうことを。

自分の死期を告げられた娘に。何もしてやらずに、そのまま万里子は息を引き取った。

それでも、万里子の判断は間違っでは居なかっただろう。

子供の頃の陽子は、いつも勉強していたから。山田グループの総裁になるのだと、誇らしげに語りながら。いつも万里子は諭していた。総裁には、遊ぶことも必要なのだと。息抜きも必要なのだと。逆に陽子はそんな万里子を説教する。

陽子の病気を知ってから、万里子の慈しむ目には、つねに苦悩と迷いが宿っていた。

今も、目の前を流れていく記憶の陽子は、机にかじりついていた。その横で万里子は、疲れ果てた顔で微笑んでいる。

貴久鉢にも分かっていた。

陽子には知る必要があつたのだ。新しい未来に踏み出すために。限りあれども約束された時間を精一杯生き抜くために。山田陽子であるために。

それでも、貴久鉢は何も伝えてやることが出来なかった。

そして、伝えた万里子まりこを恨んだ。

母を失った娘に。夢を失った娘に。

貴久鉢には、何もしてあげることが出来なかったから。

ただ、見守ることしかできなかったから。仕事に、逃げることにできなかったから。

山田陽子は生きたまま死んでいた。

姪の圭子けいこが、二人の娘の手を引いて、山田町にやって来るまでは。多恵と出会って。

そこから、山田陽子の伝説が始まった。快進撃が始まった。

貴久鉢は、鮮やかに輝く思い出たちを、苦笑しながら眺めていた。屋敷の中で。山田町で。たまにはその外で。陽子が悪さをしている。

多恵にひきいられ、多恵をひきいて、悪さをしていく。

山田町に、山田陽子の名がとどろく。近隣の町に、山田陽子の名がとどろく。

やりたいと思ったことを、陽子はすぐさま実行する。多恵が一緒だと、必ず成功する。多恵が一緒だと、必ず大げさになる。

多恵がお淑やかに改心しても。山田陽子はお構いなしで。

愛玲が来て、三人揃うと手が付けられなくなり。

屋敷の電話は鳴りっぱなしだ。屋敷には沢山の建物が建ち始めて、使用人の数が増えていく。池にはラッコが泳いでいて、庭をパンダが徘徊している。

そんな陽子が、花嫁衣装をまとっていた。

貴久鉢は手を伸ばした。

ああ、陽子が去って行く。巣立っていく。

結局最後まで、貴久鉢は娘に何もしてあげることが出来なかったのだ。逃げ続けている間に、娘は、遠い土地に旅立ち、そして本当に二度と会えなくなってしまう。

貴久鉢は声を張り上げた。自分でも何と言ったのか分からない。

貴久鉢の耳にも、声はまったく聞こえなかった。

それでも、陽子が振り返った。

その輪郭が、ゆっくりぼやけていく。

貴久鉢は声を張り上げた。駆け寄ろうとした。

しかし声は出ない。足も動かない。

薄れてゆく陽子が、両手を広げた。

いつも、悪さをしたあと、そのいたずらを誇るように、その顔は、にんまりと嬉しそうに笑っていた。

両手の中から、何かが飛び出してきた。

少年だった。

少年が睨んでいた。

小袖の袖を、はたはたと揺らめかせながら。両腕を組んで、精一杯貴久鉢を睨んでいた。

貴久鉢は、にっこり少年に笑いかけた。

少年の口が動いた。

無音の世界に、その声だけが高らかに響いた。

『我が輩は忍者でござーる』
と。

「お、目が覚めたか？」

権六が言う。

「……ここは？」

「医務室じゃ。ファンシーランドの。ふん。少々、はしゃぎすぎたな」

「……忍者は？」

「楽しんどるよ。大丈夫じゃ。……惟道がついとるよ」

「……そうか……なら、大丈夫じゃな」

貴久鉢は、ごそりと布団の中で身体を動かした。

「陽子の、夢を見たよ……」

「そうかい。道理でうなされと思ったよ」

じとりと、貴久鉢が権六を睨むが、権六は気にした風もなく、

「向こうでは先輩になるんじゃ。せいぜい今のうちに挨拶でも考えておくんじゃな」

「……嫌なこと言うなあ」

貴久鉢は苦笑する。それから、真顔になって、

「わしは、死にとうない」

「誰でもそうじゃよ」

「このままでは、死にとうない。残したいんじゃ」

「心配せんでも、いっぱい残しとるよ。お前は」

「あの子に、残したい」

「……」

「わしの全てを。グループを。屋敷を。全てをあの子に継いでほしい」

「……無理じゃなあ」

権六は窓の外を眺めて呟いた。

「全部譲ると決めたんじやろう、お前が？ あいつらに？ 山田貴久鉢一世一代の大仕事！ 今更引つ込めるのか？」

権六は、げらげらと笑った。

「……………そうじゃな」

貴久鉢は、力なく、息を吐いた。

貴久鉢は全ての財産を譲渡する約束を、一ヶ月前に重役たちと取り交わしたばかりだった。

「もう遅いか……。それに、わたしにはそんな資格はないわな……。今さら、おじいちゃんを気取る……。資格なんて……」

貴久鉢の泣き言。権六はちらりは貴久鉢を見たが、すぐに興味なさそうにそっぽを向いて無視した。

「でも、残したかったなあ……。せめて、屋敷だけでも……。飛鴻に……。わたしには、他に何も残してやれる物など……。ないから」

「……………」

「何一つ、ないから」

「……………」

「せめて、屋敷だけでも……。陽子の思い出がいっぱい詰まった……。屋敷……。だけでも……」

貴久鉢は、ぐずぐずと泣いている。

はぁー、と権六はため息をついた。頭を掻き上げ、
「じゃあ、そうすればいいじやろう」

事も無げに言った。

「じゃが……。約束が……」

「まだ約束など、どうとでもなるだろうに。どうせお前は英雄にはなれんよ。孫煩惱の呆けじじいが良いところじゃ」

「……………じゃが」

権六は貴久鉢を正面から見据えた。

「この期に及んでまだ逃げる気か！ お前の一番駄目なところは、無意味に気位が高いところじゃ。格好を付けるな！ 周りを気にす

るな！　少しは、多恵の奴を見習ったらどうじゃ。舌の根乾かんうちに前言翻してにつこり黙殺する。今のお前に必要なのは、それじゃよ。たかが呆けじじいの口約束だろうが。相手もたった若造の100人や200人じゃ。どうということはない」

「……………わしには、出来んよ……………そんな芸当」

気弱に貴久鉢は顔を背けた。

「何もお前が全部やる必要はないわい。前言を翻せば、後は多恵がにつこり笑って黙殺してくれるわ」

「……………やって、くれるかなあ」

貴久鉢は疑り深そうに、権六を見た。重役たちとの約束を貴久鉢はお多恵さんにまだ言っていないかった。

「土下座してでも頼むんじゃな」

権六が突き放す。

貴久鉢がぐずぐずと泣き始め、権六はまた頭をかきむしった。

「ああくそつ、多恵のやつはもうとつくにしつとるわい！　確かに相当怒ったが、あいつが怒つとるのはいつものことじゃ、気にするな！」

どっかと権六は貴久鉢に向かって座り直す。

「その上で、あいつが指をくわえて見てるとでも、まさか思っまいな？　あの屋敷には、あいつの思い出も詰まっておるんじゃぞ？

だいたい1年前に、やる。すきにしろ——そう言っであいつに全部の権利書押しつけたのはおまえじゃろうに。印鑑から何からつけてそれも忘れたのか？」

「……………確かにあったな。そんなことも」

一年前。全て多恵に押しつけようとして……………。

「……………断られて、説教された覚えがある」

「その時決めたろうに。お前の孫が全部相続。20歳になるまでの管理を多恵がする、と」

「……………そうじゃったかな」

「そうじゃよ。あの時から一括で多恵が管理しとる。わしもそうし

ると多恵を説得した。……なのに次から次へと適当な約束ばかりしまくりやがって。この呆けじじいが。おかげでわしまで多恵に怒られた。それで今はお前がよけいな約束せぬよう、つかず離れず監視の日々じゃ」

「……すまぬ」

「しかしあいつらの喧嘩はもう少し折り合えんのかの。いつまでもガキであるまいに。少しは仲裁するわしの身にもなりやがれ」

ぶつぶつと権六が愚痴を言う。

「まあ、そう言うわけで、放っておいても多恵のやつがだいたいは勝ち取るだろう。少なくとも屋敷まで取られることはないわい。それでも、」

権六は真つ正面から貴久鉢を見据え、いつになく真剣な声で、
「お前から言うんじやな。お前が残したいのなら、お前が言え」
「うん……分かった」

貴久鉢は権六を見返し、うなずいた。

権六も満足そうに微笑み、うなずいた。

「ついでにわしは、総裁を引退するよ。最後の時間ぐらい、飛鴻と暮らすことにする」

「そうかい」

権六が呟く。

ちよつと間が開いてから、貴久鉢が、言った。

「……なあ、やってくれんのか？」

「……何をじゃ」

「きまつとる。総裁のお仕事じゃ」

「……何を馬鹿なことを……断るよ。わしにはつとまらん、あんな暇なもの。だいたい総裁なんてとくに飾りじやろうが。つかんでもいいハンコをぼんぼん押しおってからに。資源の無駄じゃ。いらんいらん」

「……おぬし、言うてはならんことを。……代理で良いよ。総裁がおらんと格好がつかんだろう?」

「とつくに隠居したはずのじじいがせつせと出社してハンコついたり方がよっぱど恥ずかしいわい。おまえの道楽に付き合っていちいち書類を用意する秘書の身にもなってやれ。なんなら八兵衛にでもやらせとけ。あんなもん」

「……山田グループの総裁が八兵衛じゃあ、格好がつかんだろう？……わしが八兵衛並みに見えてしまっぞ？」

「似たようなもんじゃ。なんなら家の猫を貸してやる」

「……約束してくれるだけで良いんじゃ。わしが死んだら止めて良いから。引き受けて三日で止めても良いから。わしの顔を立てると思つて、なあ？」

「いやじゃ！」

「そこを何とか、なあ？」

「いやじゃ！」

「………」

「………」

「そこを何とか」

「いやじゃ！」

「………」

「………」

「そこを」

「いやじゃ！」

「………」

「………」

「そ」

「いやじゃ！」

「………」

「………」

「………」

「いやじゃ！」

「……まだ何も言つとらんぞ？」

「いせじやー!」
「.....」
「.....」

三章 山田飛鴻に、アキラちゃんの挑戦状

真冬の彼女は、母親譲りの透き通るような白い肌をしているが、夏の彼女はこんがり和小麦色に日焼けしていた。少しウェーブのかかったショートカットの頭髪には、帽子のあとがくつきりついていた。

年相応の華奢な体をしているが、何を隠そうエースで四番。女ながらに虹ヶ丘戦女神という野球チームに所属していて、キャプテンを務めている。

土方アキラ。10才である。

野球チームでの通り名は、リトル小さな戦女神。いくさめがみ

戦女神とは、山田町に君臨していた山田陽子の愛称の一つである。他にも山田陽子には、女王や姫や魔獣使いや夢見やさんなど様々な通り名があるのだが、土方アキラは戦女神が一番気に入っていて、だからチーム名も戦女神にしたのだった。小さな戦女神と呼ばれることも、もちろん満更ではない。

「ねえ、飛鴻ってどんな子なの？」

「どすんつ、と迎えのフライングダックの後部座席に泥にまみれた荷物を放り込んで、彼女はその横に滑り込んだ。ユニフォーム姿のまま、やはりあちこち泥まみれだ。」

練習が終わったところだった。

運転手はいやな顔の一つもせず、お疲れ様でした、と笑って濡れたタオルと乾いたタオルを彼女に差し渡した。あなたが落としたのはどっちのタオル？ と言うことではなくて両方使って良い、という事である。それから、彼女の質問に答えた。

「それはもう、元気な男の子ですよ。本当に陽子様に似ていらつしやってねえ。本当に、旦那様もお幸せそうで……」

「戦力になるの？」

顔をふきながらアキラは尋ねる。

「それはもう、なるでしょうとも！ 陽子様に似て、それは元気なお子様でして。ええ、それはもう元気な……」

運転手は、興奮しているようで、半分涙ぐみながら譚言のように繰り返していた。山田町では、特に山田屋敷に勤める人の間では、山田陽子の人気は絶大だった。十年の歳月が、彼女の悪行をすら、美点として輝かせているのだ。船を沈めた行為ですら、やんちゃだったよね、の一言で済まされるくらいである。

「どのくらい、戦力になると思う？」

「それはもう、エースで四番は間違いございませんよ。中国拳法も達人の域でしてね、マサ君とヤス君が一瞬でノックアウトされたくらいですから！」

運転手は嬉しそうに、しゅっしゅっしゅっ、とシャドーボクシングのようなポーズを取って、はしゃいでいた。それから「あっ、すいませんね」と詫びて、ゆっくりと車を発進させた。

「……ふーん、そう」

たいして興味なさそうにアキラは呟いたが、実は結構気になっていた。

土方アキラは、誰もが認める【山田陽子の後継者】なのだった。友達も「アキラしか居ないよ」と言ってくれるし、町の人々も「陽子様に似てきたね」と言ってくれる。たまに「お母様のお若い頃にそっくりね」なんて言うトンチンカンなヤツもいるが、似ていないのをアキラは知っていた。母のアルバムを見ても、母より一緒に写っている山田陽子に、アキラは絶対似ているのだ。

その山田陽子の無二の親友である母・土方多恵は、山田貴久鉢の姪の娘だから、薄いながらも、アキラには山田陽子と同じ血が少しだけ流れている。

ついでに父は、山田陽子の幼なじみで、式中振られた土方歳三である。ほんのちょっと間違えれば、アキラの半分は山田陽子から生まれていたかもしれないわけで、因縁てんこ盛りだった。

そんな両親はどちらも山田グループの要衝を占めていて、特に母

は、大物揃いの山田町でも貴久鉢に次ぐ実力者である。

山田町において、土方アキラは誰よりも山田陽子に近い境遇に生まれている。彼女になれる位置を占めている。それは自他共に認められた事実で、土方アキラは誰もが認める【山田陽子の後継者】なのだ。

アキラ自身、そうなれるように、努力してきた。意識してきた。頑張ってきた。そのかいもあり、地は確実に固まりつつあった。もはや山田町で、アキラのことを知らない人間は居ないくらいだった。アキラの通るところ、子供でも大人でも警察でも極道でも政治家でも山田グループの重役でも、道を譲るくらいだった。

だがしかし。

その地盤がいま、揺らぎ始めていた。

震源地は、山田屋敷。

そこに、あいつが、現れたのだ。

山田陽子の息子。

山田飛鴻、その人である。

山田貴久鉢の孫で、山田陽子の息子という存在は、ただそこに居るだけで、山田町のすべての常識をねじ曲げるだけの権力を秘めていた。まるで怒れるナマズ様のように、貧乏揺すりの一発で、アキラの作り上げた10年王国を崩壊させるだけのジャイアン^{ジャイアンニッケパワー}的力を持っている。

飛鴻が、いつやって来るのか、いつ帰ってくるのか、それは山田町で最大の関心事だった。アキラが物心つく頃から、延々とささやかれ続けてきた噂なのだ。「飛鴻が来るぞー」アキラはそれを聞きながら育ってきた。

土方アキラも、もちろん、気にしていた。他の誰よりも山田飛鴻を意識して来ただろう。

しかし土方アキラは、気にしていない振りをし続けてきた。

飛鴻という言葉に、反応することはなかったし、自ら発することもなかった。彼のことにについて、誰に何を尋ねられても、素っ気な

くこたえてきた。「さあ？　どうかな？」と言だけ。

誰にも、たとえ母にも、知られたくはない事実だったのだ。

その山田飛鴻の襲来を知ったのは、二日前だった。

もちろん、母からの電話だ。そして昨日のファンシーランドお誘い電話。

正直、会いたくはないし、会うのは怖かった。

それでも、会わないわけにはいかなかった。

同い年であるのだから、夏休みが終われば、嫌でも学校で顔を合わせることになるのだ。

どうせ会わなきゃならないのなら、友達よりは先に会って、主導権を握りたい。さらに戦力になると言われては、可及的速やかに接触する必要があった。

パンダ杯は目前に迫っていた。

明日は明日で【沈没船】ちんぼつせんとのリーグ戦が控えている。

虹ヶ丘戦女神は山田リーグを代表するチームである。

去年はパンダ杯で優勝しており、山田リーグ戦でも優勝している。しかし、主力だった七人が、（アキラはかなり引き留めたのだが）今年の春に卒業してしまい、戦力は投打ともに著しく低下していた。ここまでの戦績はおもしろくない。補強はうまくいっていない。投手が足りない。外野も足りない。新戦力が欲しい。絶対欲しい。必要だった。

だから、山田飛鴻だ。

飛鴻の父である大飛龍は、世界最強と評される有名な格闘家なので、彼がその運動神経の百分の一でも継承していれば、激しく戦力になるだろう。

今すぐにも、欲しい逸材……だからといって、呼び出されて直ぐ出向くのは、將軍様に伺候する大名みたいで、アキラのプライドが許さない……かといって、あんまりぐずぐずしていて他のチームに先を越されては、洒落にならないことになる。ライバルチームが【山田飛鴻】を擁しようものなら、それこそ、アキラの王国は一瞬に

して崩壊してしまうだろう。

だから、今日である。

微妙な乙女心の狭間で苦しみ悩んだ末に、無難な日にちで、今日会うことに決めたのである。まさしく諸刃の剣である彼を、ついにこの手に掴む決心をしたのだ。

他愛のない運転手とお喋りも、貴重な情報収集の一環であった。マサとヤスを倒したのなら、少しは格闘技を使うのだろう。白虎寺の出身で、大飛龍の息子なのだから、当然だった。しかしマサとヤスが山田陽子の息子相手に本気になるとは思えないので——事実、アキラもマサとヤスには負けたことがない。絶対彼らは抵抗しないから——鵜呑みにはできないが、ちよつとだけはやれるのかもしれない。

だがしかし。

アキラはぐつと唇を噛みしめた。

エースで四番はあり得ない。

そこはアキラのポジションだった。

誰にも、特に彼にだけは、譲るつもりはなかった。

「まあ、乱闘要員にはなるかもね」

アキラは素っ気なく呟いた。

「や、山田家の時期御当主様を乱闘要員だなんて、滅相もございません」

運転手はぶるりと身震いする。

アキラは少し眉をひそめた。いつもと違う運転手の態度から、彼の忠誠心がアキラから山田飛鴻に移っていることを、素早く感じとったのだ。すでに人心がアキラから離れようとしている！ しかし彼は山田陽子の熱烈な信仰者だったので、仕方ないかもしれない。

「いつまで、居るのかな？」

「それはもう、ずっとおられますよ」

大きな声で太鼓判を押されたが、どこまで信用できるのやら。二日前、電話で母は「まだ決まってるじゃない、決まったら教えてあげる」

と言っていた。

アキラはあごに手を置き、窓の外を眺めた。車がゆったりと、アキラの家の前を通りすぎていく。山田屋敷を目指していく。練習の後で、ちよつと気怠かった。うつらうつらとしていると。

「お多恵さんも、先ほど白虎寺に飛ばれましたし」

さらりと、運転手がとんでもないことを言った。

「お母さんが？」

アキラは驚いて身を乗り出した。

紹介すると呼び出しておいて、居なくなるとは何たることか。

これでは話が違ってくる。

母の仲介を期待してたのに。

母がしつこく頼むから仕方なしに来てやった格好にしようと思っていたのに。

友達もなく、右も左も分からない帰国子女を、夏休みから優しく受け入れてあげるお姉さんを演じようと思っていたのにいいい！。アキラは前の座席の背もたれに、がっこんがっこんと八つ当たりした。

「ええ、なんせ山田家時期当主様のおお引越しに関わる手続きですからね。色々たとあるそうですよ」

運転手は座席ごと揺すられながらも、いつになく嬉しそうだった。

「そんなの、わざわざお母さんが行かなくてもできるでしょう？」

……電話でも良いじゃん」

アキラは背もたれから手を離すと、どさつと座席に収まり、不機嫌に言う。すでに眠気は飛んでいた。

「いえいえ、とんでもございません。転校手続きから、住民票の移動、国籍、親権その他の変更などと、お多恵さんでなければ成り立たないことがきつと沢山あるでしょうから。明日までに纏めてくる。と、それはもう、すごい張り切りようでしたよ。ええ、頼もしいお人です」

「国籍……って、そんなに簡単に変えられるモノなの？」

「それはもう、お多恵さんですから。他ならぬ飛鴻様のことですし」
車が、山田屋敷の門をくぐった。
ぶっちゃけ。

甘かった。

アキラが乙女だから恥じらっている僅かな間に、すでに小さな揺れは激震に変わっていたのである。

実の母すらが、アキラを見捨てて、山田飛鴻を中心に動き始めていようとは！。

背中に薄ら寒いモノが走った。自分の足下ががらりと崩れ落ちていくような感じ。そこから怪獣が這い上がってくる感じ。あんぎやーと火を吹く感じ。こんがりウェルダンに焼かれちゃう感じ。それはつまりミディウムでは勘弁してくれない感じ。

フライングダックが、停車する。山田屋敷の玄関前に。
運転手が邪気のない笑みで振り返る。

アキラはちよっぴり帰りたくなっていた。

しかし、ここからの帰宅は逃亡と取られかねない。

ええいつ度胸だ。

土方アキラは、蹴りつけるように――実際にドアを蹴ってから――
車を降りた。

負けてなるものか！。

「ああ、お嬢様！　よくぞ来られましたなあ！」

アキラが屋敷に入ってから、運転手がインターフォンでアキラの来着を告げたのだろうか？　廊下で惟道に迎えられた。いつになく声が弾んでいる。

アキラは舌打ちした。余計なことをする奴らだ。まるでこの家の住人のように堂々と一人で食堂に乗り込んでやろうと思っていたのに。

「こんばんは」

アキラは軽く頭を下げ、気のない返事をした。

「さあ、どうぞこちらに。飛鴻様にご紹介いたしましょう。決して
ご無礼のないようをお願い致しますよ」

無礼という言葉に何か言い返そうかとも思っただが、アキラは黙っ
てついて行くことにした。惟道など相手にしても仕方がない。今は、
母不在による作戦の変更で、おつむが忙しいのだ。

「それにしても。お多恵さんが散々お呼びしていらっしゃったのに、
なかなか来られませんでしたなあ。もう少し遅れると、首が飛ぶと
ころでしたぞあ」

カッカッカッと笑いながら、前を歩く惟道は自分の首を手刀で叩
く動作をした。

いつも態度のでかい惟道だったが、今日はいつも以上に態度がで
かい。

「まあ、今日のところはお多恵さんの働きに免じて、許して差し上
げましょう。しかし次は——」

と気前よく惟道は続けてほざいている。どうやら彼も、山田飛鴻
が来て気が大きくなっているようだった。つーかすっかり悪家老に
なっていた。

「そう、それじゃママにお礼言わなきゃいけないか」

と、アキラはトゲトゲで、呟いた。

とたん。

惟道は露骨に狼狽えた。

「いやいや、それには及びますまい。お多恵さんはあれでお忙しい
方ですので。カッカッカッ、ここだけの話、ここだけの話」

と大きな声で大笑してから、「言わないでくださいね」と悲壮な
声で付け足した。

家老職に就任しても、まだ母のことは恐れているようだった。

結婚式で、山田陽子が母に向かって「後を頼むね」と言ってから、
山田町では母が山田陽子の代理人と見なされていた。だから、山田
陽子が亡くなってからは、山田屋敷の人間を解雇出来る者は、土方
多恵ただ一人なのである。山田貴久鉢にも、なぜかその権利はない。

実際、貴久鉢は何度か惟道にクビを宣告したのだが、「何を寝ぼけたことをおっしゃいますか。旦那様にそんな権限はございません」と居直られている。さらに給料まで出続けているところは、山田屋敷の不思議というか、貴久鉢も人が良いというか。

ただ、こんな告げ口程度で母が怒るとはともアキラには思えないのだが、前を歩く惟道は、肩を落として静かだった。

アキラは知らなかったが、お多恵さんが中国に飛ぶ前に、惟道はファンシーランドでの一件で、コツテリと絞られていたのだった。専用機の用意が出来たために、後は帰ってから、と言う話になっている。飛鴻にくだらないことを吹き込むなつ、とも念を押されていた。微妙な時期でもあり、内心、彼は戦々恐々だったのである。どんな些細な告げ口でも、しゃれにならない。

さわらぬ多恵に祟りなし。

これは認知率99%に達する、山田町での格言である。

テーブルの上には、結構な料理が配備されていた。

アキラの知る限りでは、この無駄に長いテーブルに、端から端まで皿が乗っていることなど、数えるほどしかなかった。貴久鉢は吝嗇家というわけでもないが、無駄を嫌う人だった。食べきれないほどの料理が並ぶことは、珍しかった。

なのに、今日は、とてつもなく豪華な料理が、テーブルを覆い尽くしている。

なのに、椅子に座って食事しているのは、少年ただ一人だ。7人のメイドがかいがいしく働いていて、少年の皿に盛りつけていく。

彼が、山田飛鴻なのは間違いないだろう。

少年が、顔を上げて、じろりと、アキラを見た。

アキラは、ドアの横で、立ちすくんでしまった。

気後れしていた。心臓がぱくんぱくん言っている。生まれて初めてなのである。アキラは今まで、自分よりも【山田陽子に近い同世代】に会うことはなかったのだ。それに、彼はあの白虎寺で生まれ

て、白虎寺で育ったのだ。……日本語は通じるの？

「飛鴻様、ご紹介いたしましょう。こちらがかねがねお噂の土方アキラ様です。お多恵さんの娘さんですので、仲良くしてあげてくださいませ」

惟道が、につこりとアキラに微笑んだ。惟道の態度では、どうやら日本語が通じるようだった。アキラは「こんばんは」、と軽く会釈してから、テーブルに近寄った。

ぎらりと、少年の目が光った。アキラを、真っ向から見据える。

それから、少年は、横柄にうなずいた。

「さようで、ござるか」

日本語で返事が返ってきた。……日本語？。

「おれが、大飛鴻で、ござる」

続けて、少年が頭を下げる。慌ててアキラも、もう一度お辞儀した。ご、ござる？ 必死で動揺を押し隠した。

「さあ、アキラ様も遠慮なくお召し上がりください。お飲み物はいつものでようございますね？」

惟道が椅子を引いてアキラを促し、手を揉みながら言った。首がどうか言っていた割には、惟道の待遇は決して悪くはなかった。お多恵さんの娘さんですので、と言うところに相当力が入っていたので、本当につげ口して欲しくないようだった。言っておいて良かった。お噂と言うところには少し引かなかったが、そこは聞かなかったことにしておいた。

とにかく、アキラは少年の真向かいに座った。

少年は、まだアキラを睨んでいる。

アキラは、すうーっと思を吸い込んだ。

鼓動はもう、落ち着いていた。

そっちがそんな態度なら話は早い。

上等だ。やってやろうじゃない。

アキラは、顔を上げて、宛然と少年に微笑みかける。

少年が、こくりとうなずいた。

さあ、山田町をかけた一戦だ。

「飛鴻君は、日本語が話せるんだ」

「無論でござる」

「ござるって、変な日本語ね」

アキラは可愛らしく、でもちよつと意地悪く、くすつと笑う。それから、

「飛鴻君は、いまいくつ？」

知っているけど、尋ねる。

「アキラ様と同じ年でございますよ」

惘然として黙っている少年の斜め後ろから、にこにこ惟道が答えた。

「そう。同年なんだあ」

ほおづえを付きながら、にんまりと、アキラは微笑んだ。

「じゃあさ、誕生日はいつなの？」

「9月12日でございますよ」

また惟道が答える。

「そうなんだあ。わたしは9月7日生まれなの。つまり、私の方がお姉さんのね。ちゃんと、アキラお姉さんって呼んでね？ 飛鴻」
自分はいっきに、呼び捨てる。少年の眉が、ぴくりと跳ね上がった。強く、睨んでくる。アキラは、にこにこ黙殺した。

「いや、しかし、ですな、お嬢様。5日だけで、ございましょう？
それに、同じ5年生ですし、まだ子供ですし、……だいたい、そういう状況はお姉さんと言わないのでは……」

まさかこの土方アキラ様が、山田飛鴻なかと和気藹々と会話するとも思っていたのだろうか？ 小学生二人の醸し出す世知辛い雰囲気、惟道は激しく動揺しているようだった。いつもの惟道なら、誰にも理解できない論法で反論してきたはずだ。こ奴、本調子ではないな！。

にやりと、アキラは「おいらはいろいろ企んでるぜ！」的に笑っ

た。好機だった。母どころか貴久鉢までも居ないこの絶好の好機を見逃す手はなかった。一気に勝負を決してやる。さつきからふんぞり返っているこのくそ生意気なお子様に！ 世間の厳しさを！ 世間の厳しさを教えてくれようぞお！。

アキラは自分なりに役を作って、葡萄ジュースを一息に飲み干した。

「馬鹿ね惟道。油断してると5日でどれだけ順位が変わると思っているの？ 首位から最下位に落ちることもあるのよ？ 5日を舐めちゃいけないわ」

アキラは口元をナプキンでお上品に拭いた。はらり、とナプキンを床に落とし、笑顔で――意味はないけど踏みにじり。

「それに、こういうことは子供のうちからしっかりしておいた方が良いのよ。目上の者は敬わないといけないって、いつもママが言っていたわ。でないと、立派な大人になれないのよ。ねえ、飛鴻？ 言ってごらんさない？ お姉さんって？」

ママのところは惟道に向かってかなり強めに発音、飛鴻以降の言葉は、もちろん山田飛鴻に視線を移してアキラは言った。

人と人との出会いは、最初が肝心だという。

つまり最初に勝利すれば、それ以後の主導権は握り放題ということである。

ここで、もしほんの少しでも「お姉さん」と呟こうものなら、山田飛鴻は一生アキラに向かって「お姉さん」と呟いた宿命を背負って生きていかなければなくなるのだ。名付けて【永遠に忘れられない「お姉さん」って呼んじやったよ僕、心の傷大作戦】である。「いや……しかし……ですなあ……」

必死に反論しようとしている惟道は無視して、アキラは可愛らしく小首を傾げてもう一度、飛鴻を促した。

飛鴻はアキラを真っ向から見据え、両腕を胸の前で組んで、うなずいた。

「アキラは、10歳でござるか？」

「アキラお姉さんでしょ？ お姉さんだけでも良いわよ？ そう、10歳よ」

「では、同じ年でござるな」

「でも私の方がお姉さんよ、5日も」

「同じ年でござる」

「お姉さんよ！ 5日も！」

「同じ年でござる！」

なかなかやるな。思ったよりも手強いな。さすがは、山田陽子の息子だ。こいつは真剣に挑まないとおぼない。アキラは姿勢を正した……まあ、そんなに簡単に「お姉さん」って言うとは思って居なかったけど。

「まあ、良いわ。そのかわり9月7日になったら、ちゃんとお姉さんって呼ぶのよ？ なんとって9月7日のあなたはまだ10歳のヒヨツ子だろうけど、わたしは11歳の大人の女になってるんだから」アキラは妥協した。グラスに注ぎ足されたブドウジュースに口を付ける。

ちよつと逡巡してから、こくりつと少年がうなずいた。

「良いでござる」

なんでやねん！ とアキラは心の中で突っ込んだ。もう少しで口の中のブドウジュースを吹き出しそうだった。この了解は予想外だった。ある意味こいつは強敵だった。

とりあえず。9月7日になったら徹底的にアキラお姉様と言わしめてやる。そんな決意をアキラは咳き込みつつも、秘めた。

私がお姉さんだよってごらん坊や大作戦は、半分成功と言うことにしておこう。

それからアキラは、につこりと惟道とメイド達を見回した。でもみんな、目をそらした。

「惟道さんも空いている席に着いていただけませんか？ お食事中に立っていられると、わたし、なんだか落ち着かなくて——他のメイドさんたちも一緒に食事しましょうよ？ こんなに沢山ある

んですから、残したら勿体ないですよ？ ママに怒られちゃうわ」
パンパン手をたたいて、せかす。

惟道やメイドは、おどおどと少年に視線を向けた。こっくりと、少年がうなずく。

全員が席についたのを見計らって、

「それ、美味しそうね？ 取ってくださいる？」

アキラは飛鴻の前にある唐揚げを、フォークで指し示した。

「これでございますか？」

惟道が立ち上がったてすかさず取るうとする。アキラは、

「惟道」

びくりっ、と惟道の動きが止まる。

「わたしは、飛鴻に言っているの。彼の目の前にあるんだから。それとも、まだまだこの子はお子様だから、何でも大人にして貰わないと出来ないのかしら？」

「良いでござるよ」

飛鴻がうなずいた。声にちょっと——かなりのトゲがある。それでも、小皿に唐揚げを丁寧に取り分けて、アキラに渡す。

「ごころっ」

アキラは微笑んで——わざと少し間をおいてから——小皿を受け取った。

でも、そのまま箸も付けずに、脇に置く。

黙々と、食事が続いていく。ほとんど、アキラと飛鴻しか箸をつけないけれども。

しばらくしてから、

「アキラ、醤油」

手にした箸で、飛鴻がアキラの目の前にある醤油を指し示した。

「男の子でしょ？ それくらい自分で取りなさい」

厳しくしつける。少年がぎらりと睨んでいるが、知らない振りをする。

「あのう……アキラちゃん？」

アキラの一つ離れた席に座っていたメイドのまみちゃんが、たまりかねて口を出した。

「ジューズのお代わり欲しいなあー」

すかさず、アキラはまみちゃんに向かい、空のグラスをかざして要求する。すぐごとまみちゃんが席を立てて厨房に行く。

以上が、【わがまま女王様作戦】であった。

誰が山田陽子の後継者かを、誰が山田町の女王様かを、飛鴻に教えるだけでなく、浮かれている惟道やメイド達にも思い出させる必要があったのだ。

イメージ通り、アキラは山田陽子を演じきって見せたので、大成功だった。天国の山田陽子もさぞや感心していることだろう。

さあ、最後の作戦。

と、言うより本日の目的だ。

「ねえ、飛鴻？」

呼びかける。返事はない。でも、気にしないで続ける。

「野球やったことはある？」

返事はない。

「日本語難しくて、まだ分からないのかな？」

「やったことは、ないでござる」

「そう、それは残念ね。みんなが飛鴻はエースで四番だって言うから、すっごく期待してたのに……がっかりだわ」

本当にちよつとだけ、アキラはがっかりしていた。ちよつとは新戦力として、ライバルとして、楽しみにしていたのだ。

でもまあ戦力にならないのなら、それでも良かった。他のチームに取られる心配がなくなるのだから。肩の荷が下りた。

最後の作戦。【虹ヶ丘戦女神補強作戦】……不発。

それでも。

「まあ、いいわ。——でも、大丈夫よ。仲間はずれにはしないからお姉さんが一から教えてあげる。みんなにも仲良くするように言うてあげるわ。なんせ私はエースで四番でキャプテンでお姉さんだから

らね」

につこりと少年に笑いかける。

それから、思い出したように——実際に思い出して——手を叩いた。

「そうだ！ 明日さ。わたしの虹ヶ丘戦女神の試合があるんだけど、良かったら見に来ない？」

「いいでござるよ」

即答。少しへなり気味だった少年の眉が跳ね上がった。

「そう。じゃあ、明日の朝9時に大和市営球場ね」

言って、アキラは席を立った。

アキラはエースで四番でキャプテンで小さな戦女神である。

幾人もの少年少女を束ねるこの土方アキラの雄姿を見た少年は、きつと自信を失うだろう。誰が山田町の支配者かを、きつと理解するだろう。それで完全勝利である。

「ごちそうさまでした」

両手を合わせる。今日のところは、これで終了。後は、優雅に立ち去ろう。厨房に籠もったまみちゃんが、貴久鉢を呼び出さないうち。

厨房に入ると、いったいどれだけ料理を生み出す気なのか、未だ調理に没頭しているコックの茂浦^{しほはら}さんには目もくれず、まみちゃんはずかさず内線電話に取り付いた。貴久鉢の部屋へかける。

「あのお、旦那様の様態はどうですか？」

「ああ、大丈夫じゃよ。今は眠っておる」

返答は、付き添っている権六からだ。

「じゃあ、起こしてください」

「いや、だから今寝たところだな」

「アキラちゃんがリトルお多恵さんになって大変なんですよー」
電話の向こうで、ため息が一つ。

「とりあえず、わしが行くから」

「権六さんでは無理ですよー。今日のアキラちゃんえらく気合入っちゃってますからー。寝てて良いから旦那様引きずってきてください」

「まみちゃん」

「ひゃう！」

後ろから声をかけられ、まみちゃんは飛び跳ねた。

「ジューズもう良いわ。帰るから。茂浦さん、ごちそうさま」

「おう！」

茂浦さんがコテを振りかざして答える。

まみちゃんが振り向くと、厨房からてくてく歩いていくアキラの後ろ姿が見受けられた。鼻歌を歌いながら去っていく。

まみちゃんはもういちど内線電話に取りすがった。

「アキラちゃんがいじめるんですっー」

「とりあえず、ワシが行くから……」

と、幾分疲れた声で権六が返事した。

「まみちゃん、キングコロッケハンバーグが出来たよ！ 持ってきてきな！」

茂浦さんが言った。まみちゃんは皿を受け取って、その場でかじりついた。

屋敷を出ると、土方アキラは、空を見上げた。

山田屋敷に覆い被さるようにして、煌々と、明かりが灯っている。ライトアップされた【彼女】の威容が、夏の夜空に、妖しく浮かび上がっている。

彼女——愛天使教会である。

戦女神要塞とも呼ばれ、簡単に、お城とも、【姫様】とも呼ばれている。

アキラは、この光景が大好きだった。

のし掛かってくるような、この威圧感が、たまらなかった。

山田町はおろか、山田屋敷、さらには山田タワーすらも見下す姿

は、まさしく姫様——山田陽子そのままだ。

——決して火を絶やすことがないように。

彼女の残したとされる命令を、山田屋敷の人々は、今でも忠実に守り抜いているのである。

愛天使教会の建築は、山田陽子が中学生の頃からもう始まっていたという。

建造中の建物は、山田陽子の居城になるのだろうと、山田町の誰もが信じていたそうだ。貴久鉢も信じていたし、アキラの母も信じていたらしい。実際、山田陽子もそのつもりだったのかも知れない。しかし出来上がった要塞は、彼女が結婚式を挙げるためだけの教会になった。結婚式に使われた大聖堂は、地下の一部分だけであるけれども。

地上の城は、外側だけ完成して、中身は大半が空洞である。

最初から山田陽子は、城の中までは考えていなかったらしい。とにかく、山田タワーより高くすることしか、念頭になかったそうだ。内部のことを母が尋ねたら「あははははははは」と山田陽子は笑ってごまかしていたそうだ。

考えていなかったと言うよりは、山田陽子には、城の中身など造る必要も、造っている時間も無かったのだろう。東京ドーム50個分にも及びそうな城の総面積を綺麗に完成させるなど、彼女の限られた人生では、不可能だったのだ。

ただ、彼女は建てたかった。何かを残したかった。

それが真相なのだろうと、そうアキラは思っている。

「張りぼての城」——母はそう言っていた。

そんな未完成の城を、いずれアキラは、完成させるつもりで居る。世界一の城に。本当の女王に。

山田陽子が、山田万里子から受け継いだ財産と、すべての想いを詰め込み、溶かし込み、山田町に残していった愛天使教会。それをこのまま朽ち果てさせて、良いわけがなかった。

姫様が、山田陽子が、がらんだうなままでなど、良いわけがなか

つた。

愛天使教會を、完成させる。

それから、大聖堂で結婚する。

それから、城の天守閣で暮らすのだ。たった三日だけだったけど、山田陽子が暮らしたという天守閣で。山田町を見下ろしながら。

それが、土方アキラの野望なのだった。それが、山田陽子を継ぐことなのだった。

土方多恵と、土方歳三の娘である自分になら、きつと出来るだらう。

今更やってきた、散々拒んできたくせに。貴久鉢の死期を見計ら
 ってから、今更やってきた飛鴻などには、絶対に譲れない。遺産目
 当てのクソガキになど、愛玲になど、何一つ譲れはしない。山田陽
 子は譲れない。母と私で守っていく。

【山陽子】は山田町の人なのだ。

土方アキラは空を見上げる。いつものように。物心付いたときから、たぶんその前から、いつも見上げてきたように。

いつものように、明かりが、煌々と灯っている。アキラを優しくつつんでくれる。山田陽子の眼差が、山田町をつつんでいる。

——山田陽子は此処にいて。

——山田町で生きている。

…… やっぱり少しやりすぎたかな、とちよつと考えながら。 山田
陽子は、どう思っているかな、とちよつと考えながら。

土方アキラは、【姫様】を見上げ続けた。

なんとなく、山田陽子はちょっと困ったように、笑っている気がした。

「なんですつててててえええええー！！！」

愛玲の絶叫が迸る。

「あんのお、犬う！ また懲りもせずに人妻に騙されやがったのか

ああああああー！」

あの犬とは、愛玲と同じく白虎寺の同門の、梁一傑のことであつた。

陽子の結婚式を襲撃した面子の一人である。白虎寺では愛玲、飛龍、王毅と並んで、四天王と呼ばれている。

数多くの武術を会得していて、技の多彩さと正確さでは、白虎寺随一である。延々と流れ続ける演舞は、均整のとれた容姿と相まって、うっとりするほどに美しい。

実力でも愛玲を凌ぎ、飛龍に肉薄する白虎寺のナンバーツ一だ。まともな武術を飛鴻に教えているのも、彼だった。

今を時めく、売れっ子映画俳優でもある。

ぼろ寺である白虎寺が、それなりにやっていけているのは、彼の収入に寄るところが大きい。

しかし悲しいかな、彼は人妻であるお多恵さんに、ちょっと惚れている。

「飛龍は？ 息子の一大事に何をやっているの？」

愛玲が切迫した声で尋ねる。

「旅に出たよ」

電話の向こうで、王毅が説明する。

突然やって来たお多恵さんに、飛鴻の教育について、しこたま絞られたのだそうだ。横から梁一傑までが同調して、飛龍は泣かされて旅に出たという。

「ろ、老師はどうしたのよ？ 老師にかわってちょうだい！」

老師とは白虎寺の住職で、色んなところで捨て子を拾ってくる癖がある。愛玲や飛龍も拾われた口である。出自の怪しい秘拳九狸拳ひけんくだめきけんの使い手で、飛龍達の師匠でもある。秘拳九狸拳と言う名は、老師の創作である疑いも強い。そのせいか、真面目に秘拳九狸拳を極めようなどという者は、あまりいない。梁一傑はありとあらゆる武道を節操なく習い歩いていて、愛玲は忍術に凝っている。

「……１０００万円です」

王毅が言う。

老師は、金で釣られたのだ。梁一傑の収入に頼りきりで、多くの子供達を育てなければならぬ台所事情を考えると、致し方なし。もつとも臨時収入があっても白虎寺が豊かになったことはなく、臨時出費があつても生活環境が劇的に悪化したこともなかった。きつと、噂に名高い『老師の隠し財産』に出たり入ったりしているのだろう。と、愛玲始め、白虎寺の面々は何となく気づいているが、幾度にも渡る搜索作戦は、全て不発に終わっていた。

「くっ……あの女めえええ！」

老師が攻められないから、愛玲は怒りの矛先をお多恵さんに向けた。

諸般の手続きを全部終えて、お多恵さんは自家用ジェットで帰っていたという。更には白虎寺の約半数を、日本旅行にご招待。梁一傑を含めて、お多恵さんの手駒と化してしまっている。

（くっ、やられた）

愛玲は完全に先手を打たれたのだった。

山田陽子を、金と権力を駆使して大軍を率いる馬鹿殿様だとすれば、愛玲は単騎駆けの猛将である。それに対してお多恵さんは、兵糧、弾薬、その他の物品を買い占めて、外堀から内堀までをあつという間に埋め尽くしてしまう策士タイプの女だった。彼女が本気になる山田陽子ですら謝ってしまうほどに、それは迅速かつ徹底していて、手段を選ばない。山田町ではあの頭のいかれた惟道ですら、彼女の機嫌の悪いときには大人しくしているのだ。動植物でさえ、目を逸らすとさえ言われている。

しかしこのまま泣き寝入りする愛玲でもなかった。

「……何人くらい残っているの？」

「居合わせた奴は全員行つたよ。旅費滞在費全額負担でお小遣い5万円だぜ？ 運悪くその場に居なかった奴が、約半数……俺も行きなかったよ」

「そう。とにかく残りの全員連れて、至急こっちに来てちょうだい」

「無茶言つなよ……だいたい旅費がないよ」

「老師の１０００万があるでしょう？」

「無理だよ……老師は金が絡むと邪神だから」

「じゃあ、一傑の車を売りなさいよ。旅費ぐらい出るはずよ。後の費用はこつちで何とかするわ。こちらは一人頭１０万ずつ用意する！」

「馬鹿やろう。そんなこと出来るかよ」

あきれたように王毅。

「だいたいお前が金を出すと言って出た覚えはないぞ」

言ってみただけで今回も全く用意する気のなかった愛玲はそこは突っ込まず、

「何？ あんたこのまま飛鴻取られて平気だって言うの！？ もう二度と会えなくなるのよ！？ 殺されちゃうかもしれないのよ！？」

「ありえんよ」

「何言ってるのよ？ あいては多恵よ！？ あのも恵よ！？ 高校時代に微笑みながら嘘ついてそれがばれてもごめんね、実は、とか言つてまた平然と嘘ついたあの多恵よ！？」

はぁー、と電話の向こうでため息が一つ。

「……………分かったよ。何とかする」

こうして梁一傑の愛車が二台と、腕時計が三つ、売りに出された。

愛玲は電話を置いて、深い溜息を付くと、どっかりとソファーに寝転がった。

家の主・土方歳三が、彼女の前に、ティーカップをことりと置いてくれた。

「随分と荒れてるね」

「まあね」

愛玲は答えながら、カップを口に運んだ。

口の中に、上等な紅茶の味が広がっていく。白虎寺ではそう簡単に飲めない代物だった。山田町に住んでいた１２年前には、いくら

でも飲めていたけれど……。

「おいしいわね」

ゆっくり味わって、素直な感想を言う。心のとげとげが飛んでいく美味しさだ。

歳三はありがとう、とにこやかに言って、自分の分を口に含んだ。「すいませんね。せっかく遊びに来てくれたのに、多恵が居なくて。今頃どこをさまよっているのやら」

「ああ、別に良いわ。わたしは電話借りによっただけで多恵に会いに来た訳じゃないから」

愛玲が手をひらひらと振る。

「……それに、多恵にはファンシーランドでもう会ったしぶつきらばうに呟く。」

「それは良かった」

歳三は笑って言った後、惘然とした顔の愛玲に気づいて、

「……また多恵と喧嘩したんですか？」

「………ちよつと、ね」

愛玲は苦そうに紅茶をすすった。

歳三が楽しそうに苦笑する。

「せっかくですから、泊まっていかれてはどうですか？ 多恵も明日には帰ってくると思いますし、アキラも喜ぶと思いますよ？ アキラはあなたや陽子の大ファンでしたから……ああ、もちろん今もですよ？」

歳三は笑いながら続けて、

「それに洋服も随分汚れているようですから、洗濯して、お風呂にも入ったほうが良いですね。湧いてますから、お先にどうぞ」

「ありがとう、そうさせて貰うわ」

愛玲は素直に礼を言って、立ち上がった。

「服は多恵のヤツをひっぱり出して、適当に着てください。それと、山田町に滞在する間は意地を張らずに、うちか山田屋敷に泊まられた方が良いでしょう？ どうせもう来ていることがばれて居るんだし、

多恵のヤツが本気になって搜索しだしたら、山田町で隠れる場所なんてありませんから」

それから歳三は、「神父さんの教会はあまり若い女の人の泊まる場所では無いですしね」と笑って続けた。

「なんだ？ 知ってたの？」

愛玲が意外そうに言って部屋を出て行ったが、歳三はただ笑って見送った。

「それにしても、アキラ遅いなー」

壁にかけられた時計を見ながら、歳三は心配そうに呟いた。

いつもはゆつたりと纏められている髪が、ぎゅっとしっかり括られていた。

おでこには、真つ白い鉢巻きが巻かれていた。

眼鏡もかけている。伊達眼鏡だ。臨戦態勢のお多恵さんは、威厳を醸し出すために、無粋な黒縁眼鏡を好んで装備する。これらの装備は、容赦しないぞという意思表示でもある。

帰りの飛行機の中。

自分の居ない間に、くだんの親友が自分の亭主と一つ屋根の下とはつゆ知らず。もっとも知っていてもたいして気にも留めなかっただろうけど。お多恵さんはゆっくりと臨戦態勢を解除した。

髪を結ぶ紐をほどいて、ゆるめにゴムで留め直し、鉢巻きを外した。

眼鏡だけは忘れてそのままだった。

大飛龍と結婚した山田陽子は、大陽子を名乗らなかった。

大飛龍が、彼女に言ったプロポーズの言葉が、「俺は20歳までに世界一の格闘家になる。そうしたら、俺と結婚して欲しい」……という馬鹿馬鹿しいモノだったからだ。大飛龍はその言葉を実現すべく、20歳を目前にインド人のおじさんに挑んだが、……ギタギタのメタメタにたたまれて。

さらに飛龍はあろう事か慰める陽子に逆ギレするし。呆れた陽子

は歳三さんと結婚するとか言い出すし。歳三さんも陽子にプロポーズしちゃうし。招待状も送っちゃうし。式の日取りも決まっちゃうし。陽子をあきらめかけた歳三さんとひっそり良い感じになりかけていたお多恵さんはちよつと待ていという感じだし。

……すったもんだのあげく実現したラストチャンス of 敗者復活結婚式でも、あの大アホ大飛龍はなんと一時間も遅れて来るしで……絶対間に合うお膳立てをして置いたにも関わらず……最初は挑戦者の飛龍が大幅に不利になる予定だったのだが、女二人で段取りを話し合っている内に、いつの間にか逆転していたのであった。……お多恵さん、昔を思い出して、ちよつと旦那に懺悔した。もつともあの争奪戦を陽子に提案したのも、うじうじしてる飛龍を焚き付けたのも歳三さん本人で。最初から最後まで旦那が主犯だった面もある結局、大飛龍が約束を果たして世界一と名乗れるようになったのは、陽子が亡くなってからで……二人は結婚できずに終わっている。だから、山田陽子はずっと山田陽子で、飛鴻は、山田と大の二つの名を名乗り分けていたが、戸籍は、もちろん、山田飛鴻——そうなっている。

陽子は、

「大陽子なんて、名乗れると思う？ あんただったら名乗れる？
だーたえ 大多恵よ？ 大多恵なのよ！？」

などと言っていたのを覚えている。確かにわたしだったら絶対名乗れない。だいたい飛龍嫌いだし。でも、陽子の場合は負け惜しみだろう。

結婚して、綾小路多恵から土方多恵になったとき、報告がてら遊びに行ったら、ずいぶんと口数が少なかったものである。

ご亭主である大飛龍のほうも、かなり寂しそうではあったが、こいつは自業自得だ。愚か者め。もしも陽子が一時間も壇上で待たなかったらいったいどうしてくれるつもりだったのか。さすがにお多恵さんでも、あの状況での1時間延長はちよつとやれる自信がない。約束好きの山田陽子が何もかもをやむやににして、籍は別として

も実質的には結婚したのだから、よく譲歩したほうである。……それでも、五年も連れ添って子供まで居るのだから、結婚すれば良いような気もするのだが……。貴久鉢に似て、妙なところで頑固と言おうか、真剣に名乗りたくなかったのか。

お多恵さん。

くすりと笑う。

昔を思い出して、ちよつとだけ、涙が出た。

少年が、大飛鴻と名乗っていることが、ちよつとだけ寂しかった。何となく付いてきて、隣に座っている梁一傑が「どうかされましたか？」と聞いてきたが、曖昧に笑い返した。ハンカチを受け取って目端をふく。

帰りの飛行機には、梁一傑以外にも白虎寺の子供たちが同乗していた。

騒然としていて、殆ど修学旅行状態だった。

「飛鴻ばかりずるい！」と騒いだから、老師の許可を取って、連れてきて上げたのだ。

居なかった子供にも、ちゃんと連絡を入れて、希望者は後で全員呼んで上げようと思っていた。その方が飛鴻も喜ぶだろうし、はしやいでいる子供たちを見ると、そうして上げたくなった。

外の景色は、ひたすら変化のない真っ暗闇のはずだったが、子供たちは窓にかじり付いて見入っていた。お多恵さんも、座席のカーテンを寄せて、窓の外を見た。やっぱり延々と真っ暗闇が広がっていた。

それでも、今日は何となくそれは新鮮な景色に思えた。

周りから若さを分けて貰ったのかなあ、なんて思い、それはちよつと妖怪みたいだなと、一人で笑いを堪えていた。そのあと年齢を意識して、ちよつとだけへこんだ。

専用機は飛んでいく。いつになく騒がしく。

四章 山田グループの攻防

山田町近辺の少年少女野球チームには、彼らだけで行われる幾つかのタイトル戦があった。

栄光ある、パンダ杯もその一つだ。

王者の証、パンダ模様のコーヒークップを賭けた熱戦は、山田陽子と綾小路多恵（お多恵さん）の喧嘩から始まったとされている。

それがいつの間にか、山田町にある虹ヶ丘小学校と、同じく山田町にある桜野小学校との野球抗争に発展して、いつの間にか、山田町対抗戦になり、近隣の町まで参戦するトーナメント大会に発展した。

しかし、山田陽子が綾小路多恵から勝ち取って愛用したとされるその安っぽいコーヒークップ（実際には毎年新しく作られている）は、山田町の人間にとっては神器であり、他の町、特に大和市にだけは譲り渡してはならない山田町の至宝の一つである。

他にも、参加選手を集めるのに苦労する、お正月恒例山田ドームトーナメントや、負けるととても悔しい思いをする、春休み勝ち逃げ卒業トーナメントなどもある。

そして、山田リーグ。

年間を通して行われるリーグ戦である。

栄光あるパンダ杯と並ぶ、三大タイトルの一つである。
だから。

土方アキラは熱投していた。

試合は、すでに七回裏に至っていた。

リーグ戦のルールでは、この回が最終回だ。

二対一。戦女神のリード。

ツアアウトランナー、二塁。

山田の御曹司が戦力になるのなら、この試合から投入しようとも考えていたのだが、彼はルールすら満足に知らないという。

そんな彼は、今は一塁側スタンドの草原にパラソルを設置して、その下に大きな革の椅子を置いて座りながら、オレンジジュースを飲みつつ観戦していたりする。惟道とマサとヤス、それにメイドの数人が付き従っている。メイドが大きな団扇で風を送っている。見においてなんて気楽に誘うんじゃないかと後悔しつつも、「あの子誰だろ?」としきりに気にするチームメイトには、「惟道とまみちゃんの不倫の子。気づかないふりして上げて。埴輪はなわ敏夫としおくんって言うの」と教えて置いた。誰も信じてないとは思っけど。まみちゃんまだ高校一年生だし。

とにかくアキラは、そっちをいっさい見ないように注意しつつ、ゲームに集中する。

何はともあれ、あと、アウト一つだ。

大和戦艦6番バッターの眞田さなだは、なかなかの技術屋で、大和戦艦のキープレイヤーだった。

特に、守備において彼の活躍はすさまじい。彼の判断能力は、小学生の域に収まらず、すでに高校球児レベルに達していると、もっぱらの評判だ。

しかしバッティングにおいては、それほど怖い選手ではない。配球の癖や守備の穴、失投を的確についてくる嫌らしいバッターではあるが、いかんせん脆弱なのである。

彼は幼い頃の事故で、両手両足に爆弾を背負っており、あまり激しい運動には耐えられないからだ。もし、爆弾を抱えていなければ、攻守揃った恐ろしい選手となっていただろう。

コーナーぎりぎりにスライダーが決まって、ツーストライクノーボールとなる。

いける。

今日のアキラのコントロールなら、こいつに打たれることはない。アキラも消耗しているが、彼はアキラ以上に消耗している。奴の爆

弾はすでに破裂寸前だ、膝ががくがくと笑っていやがる。

三球勝負だ。

キャッチャーのサインに、アキラは頷いた。

セットポジションから、クイックで投げる。

内角高めへのストレート。

眞田が振る。力のないスイング。

バットはボールの下っ腹を掠める。

ちよつと曇り気味の空の中に、白球が弧を描いて、ふわふわと舞い上がった。

前進守備気味だったセンターのちよつと後ろにあがった、平凡なフライだった。

討ち取った！——土方アキラはそう確信して、マウンドでガッツポーズをした。ナインはそれぞれの位置で歓声を上げる。かたや大和戦艦のベンチからは、悲鳴がわき起こる。

だけど、ふわふわふわと漂うボールに、おろおろおろつとセンターは下がっていつて、すってんころりん、ぽてんつとボールはグラブを掠めるように落ちて。

歓声が悲鳴になり、悲鳴が歓声にかわる。

落ちた時点で、二塁ランナーはサードを回っていて、一塁ランナーはセカンドを回っている。センターが起きあがり、ボールを拾って、投げる。一人がホームインで同点。

一塁ランナーもサードを回って、ボールが帰ってくる。際どいタイミングだった。

しかし無情にもボールはそれて……一塁ランナーも生還。

項垂れる戦女神のナイン。

大和艦隊は、ホーム上で馬鹿騒ぎ。

「ぶわっはははははははははは。ざまあ、みさらせ非道アキラめ！」

大和艦隊のキャプテン古代が、今日三振三つの癖して、アキラを指さして爆笑している。

真っ赤な顔で、アキラはグローブを地に叩き付けた。

山田飛鴻は、敷地内を冒険していた。

山田町に来てからの日課である。

初日は、屋敷内の探索で、たっぷりあった時間のすべてを費やしてしまった。それでも、屋敷のすべてを解明することは出来なかった。だが、大浴場や母が創り出した各種の武道場、遊技場を発見できたことを考えれば、初日としては、大きな意義があったと言えるだろう。貴久鉢や惟道の先導があったおかげだ。

二日目は、山田タワーから帰宅した後、塔から見えた建造物のいくつかを探索した。この時も、貴久鉢と惟道の先導である。この日は、裏庭に隠された母や愛玲が修練を積んだ忍術修行場を発見することが出来た。さすがに本場だけあり、多少古くはなっていたが、白虎寺にあるそれよりも設備は充実していた。暗くなるまで、飛鴻はマサヤヤス、メイドたちを相手に修行に励んだ。

三日目は、ファンシーランドを攻略した後……土方アキラがやってきた。晩飯を食べて、とりあえず寝た。が、寝付けなかったので、庭をうろついた後、修行に励んだ。修行の後の大浴場が、すべての疲れを癒してくれた。寝た。

そして、今日。四日目。

土方アキラの試合を観戦した後。大変気持ちの良い昼飯後の散歩で、ついに奴を見つけたのである。

「何をして、ござる。」

山田飛鴻が訪ねると、奴は悪びれることなく、こう答えた。

「ああ、坊ちゃん。木を切ってるんでっさー」

「木を、でござるか」

「そう」

「なぜ？」

「なぜって……。そりゃあっしが庭師だからですよ」

庭師——俗に言うお庭番。屋敷に仕える専属の忍びのことである。

と、愛玲が言っていた。

「名は？」

「武田勝夫ただかつおと言いまっさー」

「そうでござるか……やはり、おまえが、熊くまなのでござるか」

「そうでっさー。愛玲さんから聞きましたか？ それとも陽子お嬢さんから？」

強大なはさみ（おそらく忍び道具）で枝を切っていた武田勝夫がその手を止めて、振り返った。山田飛鴻は飛びのいて距離を取った。反応が遅れていれば、あの枝のようにまっふたつにされていただろう。さすがは、山田屋敷のお庭番。強敵だから、軽はずみには手を出すと、わざわざ愛玲からも念を押されているほどだ。子供のかなう相手ではないと。

だが、山田飛鴻は、もはやただの子供ではないのだ。ファンシーモンスターを皆殺しにした、本物の忍者なのである。

「爆裂熊熊拳ばくれつくまくまを使うらしいな？」

飛鴻の鋭い指摘に、熊は苦笑した。

「使いませんよ……それはさすがに愛玲さんから聞きやしたね」

「一手、ご教授願いたい」

「拳法の修行ですか？ ようござんすよ。もっともあっしは拳法なんて使えませんがね」

熊はにっかりと微笑んだ。

「でも、忍術の修行とかは、勘弁してください」

熊が頼りなく笑う。

他人には軽はずみに技は見せられないと言うことか。それとも俺など、相手にならないということか？ 飛鴻は険しい顔で熊を見上げた。

「いいでござる……武道でやろうでござる」

こうして、山田飛鴻は熊と対決することになった。

山田屋敷の武道場。

熊と飛鴻。

二間の間を持つて、両者動かない。

山田飛鴻は、すり足で一間半まで間合いを詰める。

すでに、飛鴻の間合いである。

それでも、熊は動かない。

僅かに、飛鴻は膝を曲げる。その状態で数秒制止してから、予備動作なしに踏み込む。

右の回し蹴り。熊はよけない。蹴りは熊の腹を捉えた。

そのまま、腹にめり込んだ右足を支点に、左の蹴りを、こめかみにたたき込む。

だが、熊はそれを左手で受け止めた。飛鴻は受け止められた左足を支点に切り替え、手首めがけて右足を槍のように突き込んだ。

熊は掴んでいた足を解放して、後ろに引いてさけた。

両者。また、二間の間を持つて対峙する。

熊が攻撃してくることはなかった。

なぜ攻撃してこないと、飛鴻が訪ねるのに対して、熊は困ったように頭を掻いた。そして、こう言った。

「では、こうしましょう。あつしが坊ちゃんの攻撃で、膝をつくか、手をつくしたら、あつしの負けで良いです」

それから、一時間が経過している。

飛鴻の跳び蹴りが熊の鳩尾に突き刺さった。

一拍遅れて、熊が片膝を付く。

「いやあー、参りました」

だが、飛鴻は気づいていた。熊は、わざと、やられた振りをして見せたのだと。

愛玲からも、忠告されていた。まだ、熊にはかなわないだろうと。飛鴻も不承不承ながら納得していた。

山田町最強の人間。その肩書きは、伊達ではなかったのだ。まだまだ飛鴻では敵わない。武道の試合では。

それでも、飛鴻は晴れ晴れとした気持ちだった。

山田町に来て初めて、稽古らしい稽古が出来たのである。

「また、お願いします、で……」
「ござる」
頭を下げる。

熊は、嬉しそうに微笑んだ。

「いいでござんすよ。いつでもお相手します」

熊は仕事へと戻っていった。

山田飛鴻には、次の修行が待っていた。

野球の練習である。

アキラの試合を観戦して、だいたいのレベルは把握していた。
にやりとほくそ笑む。

惟道とマサヤスを従えて、山田飛鴻は野球の練習にいそしむのであった。

山田グループでは、創業時の七人を、ビクセブンと呼んでいる。

一人は、やまだきくはち山田貴久鉢——

説明するまでもなく、山田グループ総裁であり、財界一の巨頭である。ビクセブンびくせぶん、気が短い。

一人は、さとうけんろく佐藤権六——

通り名は医者いしやの権六。貴久鉢と同じ年。山田町にある山田総合病院の院長を務めているが、今は隠居同然である。ビクセブン、人望がある。

一人は、おおおかへいはちろう大岡平八郎——

当年106歳で、山田造船名誉顧問。94歳を越えるまでは、山田造船の会長を務めていた。何をトチ狂ったか、ヤマトを再現するんだと戦艦を作り出したことがある。それで、閑職に回された。グループの最長老であり、財界の妖怪という異名を誇る。ビクセブン、呆けている。

一人は、まつばやしあやま松林阿山——

山田製薬の会長を務める。いつも笑っているが、笑いながら人体実験出来ると噂される危ない人物である。薬を開発することに人生を賭けており、実験に明け暮れている。ビッケブナー、人望がない。

一人は、丸山幸二――まるやまこうじ

山田グループの裏の顔、軍需部門を担当していたが、ある日を境に姿をくらませた。山田町に帰ってきたときには浮浪者にまで落ちぶれていたが、今は愛天使教会の牧師をやっている。貴久鉢の4歳年下で、従兄弟である。ビッケブナー、ノンビリしている。

一人は、川路裕次郎――かわじゆうじろう

ビッケブナーでは一番若く、創業当時は10歳だったと言われている。

永年にわたり、貴久鉢の参謀的役割を演じていたが、8年前に他界している。山田万里子（貴久鉢の妻）と並んで、山田グループの両輪と称された人物でもある。ビッケブナー、有能だった。

一人は、土方八兵衛――ひじかたはちべえ

山田菓子子の企画十二課で、名誉課長を務める。最初から居たと言だけの人物である。際だったミスはあっても、何一つ業績を残しては居ない。人が良い……というよりも、簡単に人にのせられる習性があり、山田グループのお荷物と称される人物である。年は貴久鉢の一つ下である。ビッケブナー、うっかりしている。

最近では、土方八兵衛ではなくて、山田万里子やまだまりこがビッケブナーだったことになってしまおうという動きも、一部ではある。実際、グループ各企業が単独で発行する資料の約半分では、山田万里子になっていたりする。しかし山田万里子が参加したのは、創業より数年後のことで、本来の意味でのビッケブナーは、誰がなんと言おうと、土方八兵衛であった。

ビッケブナーの土方八兵衛が、息子の土方歳三とふたりっきりの

場所では、

「トシよ」

と呼んだ。今夜は何を食べるかの相談事も、二人きりの時は、

「今夜の晩飯、どうすべえ」

と、微妙に『燃えよ剣』の真似をした。もつとも、ふたりきりでなくとも、よく真似をしてはいた。

息子の歳三という名前も、もちろん新撰組副長土方歳三から拝借したものだ。

土方という名は、ちゃんと親から受け継いでいる。こういう名字だからこそ、八兵衛は土方歳三に憧れたのだが、土方歳三にはなれなかった。

名は体を表す。という。

八兵衛はどこまでも八兵衛だった。

「八兵衛はうつかりしてるな」

貴久鉢には、妙なあだ名を付けられてしまった。

だからせめて息子だけでもと、歳三というビツクな名前を付けたのだった。

土方歳三。

名は体を表さなかった。

どうしようもないお人好しに、生まれついてしまった。

どのくらいお人好しかと言うと、結婚式の真つ最中に武道集団に襲撃されて、花嫁を強奪されてもにこにここと手を振って見送ったほどに、お人好しだった。

新撰組に所属していたら、士道不覚悟で間違いなく切腹モノだろう。

だがしかし、平成の時代で良かったとは笑っては終われない。政財界の大物たちが見守る中で、泣くに泣けない事件だった。我が息子ながら、あまりに不憫で哀れだった。

財界一の巨頭・山田貴久鉢の娘で、日本一のお騒がせ者・山田陽子の結婚式だっただけに、（更に山田陽子が世界中のメディアを招

待していた為に)その映像が毎日のようにテレビで放映されたのは、耐えられない拷問だった。

あの日々のことは、未だに夢で見る。

山田貴久鉢は、古くからの同士で先輩なのだ。

張り切って、張り切って、張り切って、張り切って尽くしてきた見返りが、あの仕打ちじゃ、あんまりです。

「いやゝゝゝ、何で山田陽子があなただの息子を選んだのか不思議に思っていたのですが、こういう事だったのですね。はっはっはっはっは。納得できましたよ。はっはっはっはっは。でもまあ、考えようによつては良かったのではないですか。歳三君に陽子ちゃんの夫は務まりませんよ。はっはっはっはっはっはっは」

と、同じビックセブンの松林阿山は、慰めてるのか、なぶってるのか――八兵衛も実は山田陽子の夫は息子には無理だろうなあと思っていたのだが、ああいう事があつた後に、面と向かつてそんなこと言われると、実に腹ただしい。

だがしかし、息子ともども後ろ指をさされて、くすくすげらげら子供に笑われ、テレビでコントにされる日々は、そう長くは続かなかった。悪夢の二ヶ月の後。

「僕たち、結婚します」

なんと息子は、綾小路多恵を連れてきたではないか！。

これには山田貴久鉢も、松林阿山も絶句した。

サメを逃してイルカを釣った格好だった。「ネコザメからは逃げ延びたけど、ホオジロザメに喰われた」などと松林阿山はしつこく言っていたが……息子の悪口はそれ以後は言わなくなった。土方親子を見て笑う不届き者は、この世から居なくなつたのだ！。

この後、歳三は土方多恵の後ろ盾もあつて、メキメキと頭角を現し、虹ヶ丘電子戦線にしがあひせんせんというIT企業を設立するに至る。今では、虹ヶ丘山田土方電子戦線にしがあひせんせんと名を変えているそれは、理系の大学生がもつとも就職したい企業第一位なのである。

息子・土方歳三は、IT時代に誕生した新たな巨人なのである。

八兵衛は、大変ご機嫌だった。

なぜなら、いま八兵衛は、山田グループ総裁の証である、貴久鉢印を所有しているからだ。

3日前に山田貴久鉢から直接手渡された、正真正銘の本物だった。「おお、八兵衛か。ちょうど良いところに来た。お前、今からその椅子に座ってこのハンコを適当に押しといてくれ」

そう山田貴久鉢は言い残して、あたふたと部屋を出た。照れくさかったのだろう。

その後、お多恵さんがちらりと部屋に顔を出して、「すいません、お義父さん。後はよろしくお願いしますね」

と言った時に、土方八兵衛は自分が山田貴久鉢の後継者に選ばれたことを、悟っていた。

さっそく、孫のアキラに電話した。

「へー、おじいちゃん、おめでとう。頑張ってね」

土方八兵衛。苦節ウン十年ぶりに訪れた春だった。

自慢の息子夫婦と一緒に、新生山田グループを支配する姿を、にへらにへらと思い描きながら。彼はそれからずっと総裁室に引きこもって、ハンコを押し続けていた。いずれは愛する聡明な我が孫・アキラに、会社を譲り渡して——彼女がこの国のドンとして成長していくところまで、八兵衛の妄想は止めどもなく膨らんでいく。

山田グループは、あまりにも巨大に成りすぎた。

その巨大な怪物である山田グループを、やはり怪物である山田貴久鉢から容易く引き継げるほどの人物は、社内はもちろん、この国には居ない。

山田貴久鉢が怪物であり、そして山田貴久鉢である最大の理由は、その所有する尋常でない財産にあった。

元々、創業時の元手が、すべて貴久鉢の私財から出ているのである。それ以後の資金も、ほとんど貴久鉢から出ている。

高度経済成長の中。大きな成功によって大株主である山田貴久鉢の手にした莫大な利益は、残らず新たな業種に投入されて、グループを形成する新たな企業を産み出していった。そこから次の資金が生まれ――また企業となり。この繰り返しで山田グループは急速に成長して、貴久鉢の資産も際限なく増えていったのだ。企業の血液とも言える金のもとどが、貴久鉢から出て、貴久鉢に帰って、また出て行く。まさしく、彼がグループの心臓で、山田グループの命だった。

その代わりを務めることなど、余人には不可能である。

数十兆円の資産を持つ者など、山田グループどころか日本には貴久鉢以外に居ないのだから。

だから。

山田グループは怯えていた。

山田貴久鉢が死ぬことを。死んだ後のことを。

山田屋敷を含めた私有地、貴久鉢の持つグループの株、ありとあらゆる財産の大半は、相続税として失うことになるのだ。そして残った資産も、とある少年一人に、山田貴久鉢を恨んでいるとされる少年一人に、引き継がれることになる。莫大な資産が山田町から、山田グループから根こそぎ消滅することになる。

彼の持つ財産こそが、山田貴久鉢であり、怪物なのだった。その怪物が、半身を失い、残る半身は山田町を去ることになる。山田グループは、心臓を失うことになるのだ。

だから。

山田貴久鉢は、重役達と約束していた。心配しなくても良いと。

山田貴久鉢亡き後も、山田貴久鉢が山田グループを支えると。

山田貴久鉢のすべてを、残った資産のすべてを。すべてを山田グループに譲渡してでも。

朽ちた心臓から一滴残らず血を搾り取り。山田グループに直接注ぎ込んででも。

山田貴久鉢が必ずグループを支え続けて見せると。

それが山田貴久鉢の、最後の大事な仕事である。と。
そういうことを、山田貴久鉢は、重役達と約束していた。

山田貴久鉢が、引退したビックセブンまでも含めて、主要な重役すべての登城を請うたのは、昨日の夜のことだった。

連絡を受けたエリートたちは、すべての予定をキャンセルして、山田町を目指した。

貴久鉢から、重要な発表があるという。

あるものは、待たされていた資産の譲渡がやっと確定したのだと、小躍りした。

あるものは、土方多恵がついに動き出したのかと、警戒した。

あるものは、ただ純粹に貴久鉢と会えることを、喜んだ。

しかし多くの重役達は、ああ、帰ってきたあの孫に関係することだな、と漠然と理解していた。

山田グループでは貴久鉢に次ぐ大物である、現役ビックセブン・松林阿山がいる。

隠居して滅多なことでは公式の席に姿を現さなくなった最長老・妖怪大岡平八郎や、元闇の武器商人・丸山牧師などもいる。歳三の姿も、ついでに八兵衛の姿もあった。

地方や海外にいる重役たちの何人かは、急なことで間に合わないようだが、山田タワーの最上階には、そうそうたる顔ぶれが集結していた。

「残念ながらわたしの研究している不老不死の薬はまだまだ未完成でして、沢山の実験動物を必要としているのです。おそらく総裁は薬の開発を急がせようと、あなた達に被験者になるようお願いするつもりで呼び出したのでしょね。なに、これだけ協力者がいれば、総裁の蠟燭の火が消えるまでに間に合いますよ、ハハハハハ」

松林阿山である。彼のこの手の冗談は、たまに本気が混じっている、怖い。

大多数は笑い飛ばしているが、死を間近にした人間が何にすぎり出すか分かったものではないので、青い顔をしている者もある。山田貴久鉢が妖怪・大岡平八郎や、武器商人・丸山牧師のように壊れてないことを、祈るばかりだった。

「わっははははは」

人垣を割って、松林阿山に近づく者がある。

土方八兵衛だ。

「違う違う。そんなのじゃねえよ」

「へえ、どう違うのです？」

松林阿山が訪ねる。

重役の何人かは身を乗り出した。彼は土方多恵の義理の父なのだ。何かを聞いている可能性もあり得る。

八兵衛は勿体ぶってから、

「これさ」

貴久鉢印を、聴衆の前に突き出した。

「拾ったのですか？」

「ああ、印鑑が盗まれたから、盗んだ人は正直に手を挙げなさいという話ですか？」

重役たちが口々に言う。

「ちっがう！」

八兵衛が真っ赤な顔で腕を振り回す。

「どう違うのです？ うっかりさん？」

重役の一人が愛称で呼びながら、訪ねた。

「会長から、手渡されたのさ！」

「……」

「儂に、後を頼むと言っておったのさ。次の会長はこのビックセブンの副長、土方八兵衛に決まったのだ。思えば――」

「ところでそんな夢のような薬、本当にできるのですか？」

「もちろんですとも。何事も実験です。数多くの被験者を捧げれば、作れない薬などこの世にないですよ」

「それは魔獣使い山田陽子の、餌さえちゃんと与えれば懐かない動物などこの世に居ないのよ、に似ていますなー」

「わたしの方が先ですよ。それに似てないと思いますよ」

「不老不死の薬よりも、もっと優れた抗ガン剤を開発した方が早くないですか？」

「そちらの被験者も募集していますよ」

置いてきぼりにされた土方八兵衛が何事か叫ぼうとしたとき、エレベーター周辺から、おはようございます、といくつもの挨拶が沸き起こった。

お多恵さんと権六を引き連れて、山田貴久鉢の登場だった。

「わしは今日限りで引退する。これからは、権六が総裁を務めることになる」

山田貴久鉢の第一声だ。

右横では権六が苦虫を噛みつぶした顔をしていて、左側ではお多恵さんがにこにここと笑っている。

会場はざわりとどよめき、すぐに静まりかえった。重役たちは青くなったり、ぼけつとしたり。それぞれの顔で、言葉の意味を反すうしている。

貴久鉢が第二声を発しようとしたとき。

「ちよつ、ちよつと待ってくれ！」

土方八兵衛が人並みを押しのけて、転び出た。

「なんじゃい八兵衛？ 来とったのか？」

「こ、これっ。……こっこっ、これはどうなるー！？」

八兵衛がどもりながら印鑑を突き出した。

「おお、忘れとったわ」

貴久鉢はひょいっと気軽に受け取った。一年前に作った何ら公的な効力のない「きくはち」とひらがなで掘られた印鑑だった。

「将来的には、総裁は飛鴻が継ぐことになるが。それまで……」

権六に向き直り、印鑑を差し出す。

「権六にやつてもらうことにした」

「だが、権六はそっぽを向いて受け取らない。あうううつと八兵衛が両手を出すがとどかない。ごほんっ、お多恵さんが咳払いしてから、やつと権六が受け取った。八兵衛、すぎるようにお多恵さんを見る。お多恵さん、そつと視線をそらす。

「それから」

と前置いて、貴久鉢。

「山田屋敷は売らん……山田町の土地は一辺たりとも売らん。全部、飛鴻に譲る」

ざわりっ……というか、ぞわわわつと、重役たちがたじろく。

「わしのすべては、飛鴻に譲ることにした」

「グッ、グループの株は」

たまりかねて、重役の一人がうめく。

「譲る。孫に」

「そつ、総裁は常日頃から娘は勘当した。ワシには娘も孫も居ないと仰っていたじゃありませんか！」

別のところから声上がる。同調する声がそこかしこで上がる。

貴久鉢、狼狽えたように横のお多恵さんを仰ぎ見る。

お多恵さん、少し攻めるような目つきで貴久鉢を睨んだが、直ぐににっこりと微笑み、

「さあ？ わたしは聞いたことありませんが？」

百人を超す重役たち相手に、首を傾げてすつとぼけた。

「しっ、しかし！」

「まことに残念ながら、彼には法的な相続権がありますから。もちろん、グループの株も含めて」

にっこり笑って一座を睥睨する。

「そつ、それじゃ、山田グループはどうなるんです？」

「ごくりっ、とつばを飲み込んで重役の一人がかすれ声で言う。

「むっ無茶苦茶だ！ 株の譲渡は山田グループに全人生をかけてきた企業人、山田貴久鉢一世一代最後の恩返しで総仕上げだって仰っ

てたじゃないですか!？」

別の重役が声を荒げる。

貴久鉢、冷や汗を流しつつ、お多恵さんを再度見る。お多恵さん、にっこりと微笑み、

「さあ？ そんなこと言っていましたか？」

平然とすつとぼける。

「考え直してください」「社員が路頭に迷うことになります」「潰れてしまいます」「こんなにあんまりです」「艾愛玲が後見人なんですよ」「あんな女狐に山田グループが乗っ取られても良いんですか」「社員になんと伝えれば良いんですか」「日本経済が崩壊しますよ」「うちの母ちゃん怖いんですよ」……口々に重役たちは貴久鉢に詰め寄った。

だが、

「しるかあああ——！」

貴久鉢の堪忍袋の緒がはじけ飛んだ。

「わしの物を孫に譲って何が悪い！ もう全部飛鴻に譲るんじゃ。

決めたんじゃ。譲るんじゃ！ そんな潰れたいなら勝手に潰れるお

——」

「つつ、潰れたくないから言ってるんじゃないですかあー」

「総裁はいつも信用こそがもっとも大事だって仰ってたじゃないですか!」

「どんな約束でも約束した以上は守れない奴はカスだってあなたはいつも——」

お多恵さんがすつと片手をあげ、用意しておいた陸上スターター用の銃をぶっ放した。場がシーンと鎮まった。

「とにかく、総裁はすでにこの時をもって引退されましたので、今後は新総裁と話し合ってくださいませ」

お多恵さんが最後を締めくくって、興奮気味の貴久鉢をつれて部屋を出る。

矢面に立たされた権六は脂汗を流してうめいている。あつという

間に重役たちに取り囲まれ、縋り付かれる。

「わっ、わしは何もしらん。何も知らんのだぁー！。多恵が全部やるっていうから、名前だけだからって言うから総裁を引き受けたんじゃぁー！。」

「……か、かわいそうに」

狼に襲いかかれる羊を見つつ、松林阿山がうめいている。

「山田グループがここまで大きくなったのは、万里子さんと俺が居たからだ」

とビクセブンの一人にして、山田グループの参謀と呼ばれていた川路裕次郎は、お多恵さんに向かい、豪語していた。「総裁は、ただふんぞり返って金を出すだけだ」とも。

政界財界、その他諸々との摂行や、増え続けていくグループ企業の調整は、川路裕次郎が全部取り持っていたそうだ。かなり苦労したという。川路裕次郎が、そうばやいていた。お多恵さんも、今は痛いほど彼の気持ちがよく分かる。

山田貴久鉢はとにかく人がよく、その上、良い格好をしたがるのだ。泣き付かれると、弱い。それで、騙されたり、利用されたりする。そのくせ、短気だ。しかも、頑固だった。こうと決めたら、頑としても譲らない。説得が通じない。負けや失敗も認めたがらない。「それをなだめすかすのが、万里子さんの仕事だった」と、川路裕次郎は言っていた。佐藤権六は、「どやしつけるの間違いだろう」と指摘していたが、とにかく、二人が山田グループと山田貴久鉢を、うまく操縦していたのは間違いない事実だろう。

もっとも、山田万里子が死去してからは、川路裕次郎の苦労は飛躍的に増大した。山田貴久鉢の良い格好しいに、抑えが効かなくなつたのだ。数年もすると、よく分からないグループ企業が無秩序に増えた。それがバブル崩壊とも合わさって、山田グループは多くの問題と矛盾を抱え込むようになった。

そして、川路裕次郎までもが病を理由に引退を決意したのは、山

田陽子が山田町を去った、すこし後のことである。

そのとき、お多恵さんは彼に呼び出されて、秘書の仕事を押しつけられたのである。

「陽子さんが結婚なさって家を出られ、総裁はすさまじい落ち込みようだ。気丈に振る舞ってはいるが、仕事が手に付いていない。側で励ましてやってくれないか？」

と言うのが彼の言い分だった。

当時、まだ大学生だったお多恵さんは、娘と同列に養ってくれた貴久鉢への恩返しのためにもあり、軽い気持ちで了解したのだが、これは罠だった。実際にやってみると、励ますような仕事ではなかった。どやしつける仕事だった。

全く堪えていないふりをしたがる貴久鉢が重役たちに乗せられて、大きな仕事をしたがるからだ。まるで何にでもハンコを押してしまふ資産家のおじいちゃんである。その孫の気分で、お多恵さんは必死で奔走せざるを得なかった。彼女が頑張らなければ、今頃は山^オベレションフェニックス田町再生計画の名の下に、近隣を併合した山田町は超山田市と名を変えて、数本の高速道路や空港、三つの人工島に幾つものダムや河にかかる橋、超豪華ホテルに巨大な工場など、色とりどり取り揃えて完備してマザーズに上場していたことだろう。

この時から、お多恵さんと重役たちとの戦いの火蓋が切って落とされたのだった。

川路裕次郎は、「山田陽子に比べたら、山田グループなんて、子供みたいなもんだ。彼女の面倒を見ることに比べたら、なんて事はないよ」……と言っていたが、迫りくる子供の大群を迎え撃つのは大変であった。……もっとも、いま思えば、実際の子供、つまりはアキラと比べたら、ずいぶん手の届かない子供たちではあるかもしれない……。

とにかく、重役たちとの戦いは、彼女が初めて秘書に就任してから延々と繰り返されてきたことなのだ。幾つもの山田グループ史に残る大戦を乗り越えて、お多恵さんは、土方歳三をはじめとする数

々の協力を得て独自の組織を確立、重役たちとの抗争を乗り越えてきたのである。

そして、現在は、ハルマゲドン 最終戦争 と命名された最大規模の戦いを繰り広げている最中だった。

が、お多恵さんは個人的に 焦土作戦 と心の中で呼んでいる。それほどの決意と怒りに満ちている。

歴史ある山田屋敷を売らせてまで、多額の株を無償でグループに譲歩させてまで、自分たちは全く腹を痛めずにすまそうなどという重役たちの姿勢に、かなり憤慨していたのだ。それどころか、殆どの企業や重役たちは逆に肥え太ることになる。経営状態を偽り、起こるはずもない危機を大げさに吹聴している企業が大半なのだ。

ただでさえ人の良い貴久鉢が、大病のために、いままで以上に感じやすくなっているところにつけ込んだ、卑劣な行為だ。

たまらないことに、貴久鉢は、重役たちが嘘を付いていることを知っていた。ずっとグループに携わってきたのだから当然だ。それでも、それが寂しくて、認めたくないから、彼らの言葉を丸ごと受け入れる事によって、事実にしてしまおうとしているのだ。最後の最後まで、山田グループの総裁として、愛される巨頭でいようとしている。演じようとしている。スネどころか内蔵までかじられようとしているのに。——山田グループ一筋と叫び続けてきた貴久鉢の悲しさである。

だが。

お多恵さんは、認めない。

絶対に認めない。

彼女から見れば、これは逃げだった。

冗談ではなかった。

たとえ死のうと逃げることなど、お多恵さんが黙って容認できることではない。気力体力、どれほどつらかうと、このまま山田貴久鉢を退場させるつもりはなかった。

一万円騙されたのなら一億円かけてでも後悔させてやるのが、お

多恵さんの流儀である。このさい、貴久鉢にも 焦土作戦 につきあつて貰うことにする。

だからといって、彼女は、グループを燃やし尽くしてまでも、全ての資産を少年に……とまでは考えては居なかった。屋敷もグループも立ちゆく案の作成に、取り組んでいた。

川路裕次郎から譲り受けたラインと共に、彼女自身が開拓した謀報網をフル稼働させて、グループ各社の経営状態を事細かく再調査している最中だった。山田町に根を張る興信所や、警備会社からも人員を動員して、人手を補っている。

後二週間もすれば調査は終了して、三週間もあれば、個別の応対も決定できるだろう。

無償での譲歩は、いっさい考えていなかった。体力的に余裕のない企業は、株や不動産を貴久鉢から少年にそのままの形で相続すれば良いだけの話なのである。場合によっては、土方家で買い取つても良い。それなら、今までと何も変わらない。無償でくれてやる必要などないのだ。

体力のある企業や重役には、適量の株や不動産を買い取つて貰う。買い取りを拒否するなら、市場に流すか、適当な企業に買い取つて貰えばいい。なにも大株主が山田貴久鉢でなければならぬ理由などない。

さらに、経営状況を偽り、泣きつき、貴久鉢から多量の株や資産を無償でせしめようとしていた企業は——容赦するつもりはなかった。

明らかな放漫経営を行っている企業は、大株主の権限で、いっそ経営陣をそう替えにしても良い。

千社を超えるグループ企業全てが、自分たちでは企業努力を一切行わずに、ただ遺産だけを戴こうなど、虫が良すぎる話なのだ。山田グループ各社は、貴久鉢の有り余る財産の庇護の元で、あまりにもぬくぬくと過ごしすぎたのだ。

この際、荒波に放り込んで、いくつか傾いて貰うことにする。傾

いたら、傾いた企業だけ、条件付きで救済すれば良い。

千の企業が全く平穩無事にすませるコストなど途方もない額になるが、傾いた数十社の援助ならば、貴久鉢の財をもつてすれば、屁でもないのだ。

老朽化した山田グループを完全に改革する。それも、貴久鉢の存命中に。貴久鉢の手によって。

なにが焦土かは別にして、それがお多恵さんの 焦土作戦 だった。

調査報告書と新案が完成すれば、それを貴久鉢に突きつけて……

…… もとい説得して、強引にでもそれに切り替えるつもりで居た。

同時に、少年を、山田飛鴻を何としても山田町に呼び寄せるつもりだった。そちらの現実にも、貴久鉢には向かい合って貰うのだ。それが、お多恵さんのビジョンであつたのだが、ほんの少しだけ、予定が変わつたのである。

蒼白な顔で詰めよってくる重役たちを笑顔で黙殺して、助手席に乗り込んだお多恵さんは、笑いをかみ殺すのに、苦勞していた。後部座席では、久方ぶりに気を吐いた貴久鉢が、一息ついている。

お多恵さんとしては、今日の会見を開くことに、微妙な抵抗があつた。まだ調査が完全には終わっていないからだつた。当然、詳細な案も出来ては居ない。

出来ることなら、会見と同時にきつちりとした方針を提示したかつた。そうすれば、敵に準備をさせることなく、一気に攻勢に出られるのだ。

調査途中に波風立てることによって、調査が難しくなる危険もあった。ただ、問題がありそうなところや、大手企業の調査を優先して行ってきたので、残っているところは、比較的健全な中小企業だけだった。今回は、見逃してあげても良いだろう。

それらマイナス要素を考えた上で、お多恵さんが会見に同意したのは、もちろん、貴久鉢が自立的にやる気になつたからだつた。少

年が目の前に現れたことによって、貴久鉢に気力と欲が戻ったのだ。予定より早い少年の到来により、時期は少し前倒しになったが、この気を逃したくなかった。

お多恵さんは、重役たちの顔を一つ一つ思い浮かべながら、敵の出方を想像した。が、警戒すべき起死回生の一打は、何も思い浮かばなかった。有りはしないのだ。

昨日、山田貴久鉢が自分から、お多恵さんに頭を下げて、全部任せると言ったのだ。あれ程しがみついていた総裁の椅子からも腰を上げた。そして今日、重役たちの前ではっきりと全て孫に譲ると宣言もした。

貴久鉢は重役たちといくつかの約束を取り決めているが、その前に屋敷を含めた全ての資産は、土方多恵が正式な手続きの上で預かっている。だいたい彼らは嘘や誇張を交えて貴久鉢から約束を引き出しており、貴久鉢さえその気になれば無効にすることは簡単だった。

貴久鉢が屋敷に籠もってしまえば、もはや重役たちが会うことは絶対に出来なくなる。惟道を初めとする屋敷の人間が、重役たちを請い入れることなど、あり得ないからだ。貴久鉢が外出するとすれば、それはまず間違いなく少年と一緒に、そんな時に邪魔などすれば、それこそ貴久鉢の逆鱗に触れてしまうだろう。

更には、優しい権六さんが進んで総裁職を引き受けてくれて、矢面に立つてくれたのだ。

後は、とにかく、新案の作成を急ぎ、実行するだけである。

お多恵さんは、にやにやとにやけていた。顔を引き締めようとしても、自然と崩れてしまうのである。何年も積み重ねてきた苦勞が、報われたのである。

久しぶりに旦那と二人で温泉にでも行こうかしら、そんなことも考えていた。

山田タワーを中心に、山田グループは割れるような大騒ぎで

ある。もちろん、水面下での話。万が一、貴久鉢の発表が外部に流れると、それがどのような影響を引き起こすか、分かったものではないからだ。軟着陸できると信じられていた数十万人の乗るジャンボジェットが、パイロットの気まぐれで墜落の危機に瀕しているのである。貴久鉢の、お多恵さんの真意がどこにあるのか、どこまで本気なのか。最低でもそれが分かるまで、公表できる事ではなかった。

それを知るものを捜して、右往左往が始まっている。

真意など二の次で、せめてうちの株だけは売らないで。という工作を行う者もいる。

権六に詰め寄る者や、逆に彼らを押しつけて、権六に取り入ろうとする者もいる。比較的経営の健全な企業の重役に愛想を振りまき、コネを作っておこうとする者もいる。

特に超優良企業・虹ヶ丘山田土方電子戦線の社長を務める土方歳三の元には、すさまじい数の付け届けが一举に届けられた。彼は土方多恵の夫でもあるので、尚更のことであり、事の真相を知っている可能性も高いと見られ、電子戦線の接待室は、満員御礼となった。中には、貴久鉢の帰還よりも素早く山田屋敷に押しかけて、少年と昵懇になろうと企てる者もいて。……もつとも、すでにお多恵さんの指示が出ており、屋敷に入れてもらえた者は皆無だった。取り壊される予定だった屋敷の住人たちは、鬼気迫る勢いで押しつけてくる重役たちを、こちらもまた鬼の形相で排除していくのであった。十人十色。山田グループの大物たちは、それぞれのやり方で、自らの地位と、自らの属する組織の安定に躍起になっていたのである。

そして、ここに、もう一人。

全ての夢が、無惨にも砕け散って……。シヨンボリと家路へと向かう土方八兵衛の前に、一人の男が立ちふさがった。

山田建設社長の甲田^{こうだ}である。

「やあ、八兵衛さん。たいへんな事になりましたなー」

声をかけられても、まるで気づかず、とほとほとその横を通り過ぎようとする八兵衛に、甲田は気にした風もなく、

「それにしても、佐藤さんが新総裁ですか。わたしは、八兵衛さんが継がれるとばかりに思っていたんですがね」

さらに声を大きくして話しかけた。

「わっ、わしが？」

八兵衛が、驚いて振り返った。

甲田は、逆に驚いたと言わんばかりに、目を見張った。

「当然でしょう？ 息子さんは、今を時めく山田土方電子戦線の社長である歳三くんだ。その嫁は総裁の懐刀、お多恵さん。そしてあなたはビッケブンのお一人なんですから……すでに隠居を決め込んでいた佐藤さんよりも、よほど適任でしょう？」

「そっ、そうかね？」

嬉しそうに、八兵衛が笑った。

「そうですね。……しかし、残念ですよ。山田グループが崩壊するのを、座して見ているしか出来ないなんてね」

沈痛な表情で、甲田は足下に視線を落とした。

「……崩壊？」

気の抜けた声で、八兵衛が問い返す。自然と、二人は話し込む体勢に入っていた。

甲田は八兵衛の顔をゆったりと見返して。

「ええ、崩壊しますね。間違いなく……お多恵さんもさぞや口惜しいでしょうな」

「そ、そうなのかね？」

八兵衛の反応に、甲田はまた意外そうに目を丸めた。

「それはそうでしょう？」

そう大声で驚いた後、声を小さくして、
「あなたもご存じだとは思いますが……」

八兵衛に近づき、耳打ちする。

「実は株の譲渡案を取り纏めたのは、彼女だそうですね?」

「しかし、お多恵さんは随分と憤慨しておったような気がするが?」

八兵衛が首をひねった。

が、甲田はその疑問には答えず、

「しかしまさか総裁があそこまで耄碌されておられたとは。記憶障害、精神障害、人格崩壊……とてもグループの大きな仕事を出来る状態ではありませんな」

不穏な言葉を早口でまくし立てた。

八兵衛が眉を寄せて口を開きかけた。が、その前に甲田は素早く深々と頭を下げ。

「サポートするお多恵さんの気苦労、お察します! 彼女、最近お疲れでしょう?」

「あ、うん、そうなんじゃ。総裁のご病気もあるし、グループも大事な時期じゃからな。随分と苦労しておるようだな……」

八兵衛は、言おうとしたことを言いそびれ、口をぱくぱくしてから、顔を曇らせ、心配そうに呟いた。

甲田は、沈痛な面持ちで、

「何とか、私たちがお役に立てれば良いんですがね」

「うむ。しかし彼女のやっている仕事は他人に肩代わりできるような――」

「そうですね?」

八兵衛の言葉を途中で制して、甲田は語気を荒げた。

「私たちにも出来ることが、きつとあるでしょう? 良く、考えさえすれば、きつとある。あるはずです、考えさえすれば――私たちにも出来ることが。と、わたしは思うのですがね。八兵衛さんは、そう思いませんか?」

真正面から、八兵衛を見つめる。

八兵衛は、少し気味の悪いものでも見るように、甲田を見つめ返していた。

「八兵衛さんは、どう思いますか?」

あらためて甲田が問い直す。幾分、言い聞かせる様な柔らかいトーンで。

八兵衛は目を反らした。

「……むう。わしらに、出来ること、か……………」

思案するように、八兵衛は顎に手を当て、深くうなった。

甲田は、柔らかく笑って頷いた。考え込む八兵衛を、見るとともに観察している。

「ところで」

と甲田は言って真顔になり。八兵衛にすり寄った。

「お孫さんは、飛鴻君は殺されるかもしれませんね」
耳打ちした。

「なっ、何を馬鹿な！」

八兵衛が狼狽えて身を引く。

「彼さえ居なければ、山田グループはと思う不逞の輩も…………いや、失礼。忘れてください」

甲田は笑った。

「そんな人は、山田グループには居るわけがない。居ないと、信じたいですよ……ははは。たった、数十万人の中には……、一人も居ないと……たとえどんな噂が流れていたとしても」

「うわさ？」

八兵衛が険しい顔で、尋ねる。

「ええ、少々、よろしくない、噂を耳にしまして。少年を、どうこうすれば、山田グループを救うことが出来る、と企む輩たちがいる、と——ただの噂ですけどね」

甲田は深刻そうに呟いた。一転、微笑みを浮かべ。

「八兵衛さんも大変でしょうが、頑張ってください。なにせあなたはビクセブンの一人で、ご子息夫婦は、山田グループの両輪です。これから、多くの人が頼ってくるでしょう。わたしたちにいったい何が出来るのか、それは分かりませんが、わたしで協力できることがあったら、何でも言ってください」

甲田は八兵衛に深々と頭を下げると、無理矢理に名刺を握らせ、背を向け歩き出した。

その背を見送りながら、八兵衛は、先日会った少年の顔を、思い浮かべていた。

「……まさか、な」

不吉な想像を振り払うように、首を左右に振り。

土方八兵衛は、何かに追い立てられるように、家路を急いだ。

「やあ、八兵衛さん」

家の前には、山田造船の社長――。

「大変なことになりましたな！。実はここだけの話ですが」

この夜。その後も。

さして面識もなかった6人の重役が、代わる代わる八兵衛の元を訪れた。

会談は、不穏な言葉の断片と、ある一つの噂を核に、徐々に目的を形成。具体的になり……。いつの間にやら既成の約定となり。

少年さえ――

五章 柳生の魔の手——敵は愛天使教会にあり（一）

土方アキラは、山田飛鴻と並んで、歩いている。

だからといって、もちろんデートではない。

野球の練習に誘ったのだった。

車で送り迎えは丁重に断った。憑いてこようとする惟道をはじめとした山田屋敷の連中には、グランドの半径200メートル以内へは近寄るなど、かなり厳しく釘を刺しておいた。昨日のような状態は、絶対に勘弁願いたかったからだ。

アキラがわざわざ山田屋敷まで迎えに行ったのは、そんな理由である。

山田屋敷から、春には桜が咲き乱れる桜並木の道を——もつとも今は蝉がうるさいだけの道でしかないけれども——下りながら、二人は終始無言だった。

アキラの家は、母が結婚するときに、土地ごと貴久鉢から贈られたものだ。山田家の所有する山田山で、桜がもつとも綺麗な場所が選ばれていた。山田屋敷の正門からは、歩いて10分程度の距離にある。

アキラの家と山田屋敷の間は、山田家の私有地であり、他には一件も家がなかった。アキラの家を通過しても、当分は山田家の私有地で、やはり家はない。

だから人通りは、特にこの季節は、とても少ない。山田家の使用人達も、大方の人が屋敷に住み込んでいるので、彼らとすれ違ふこともほとんど無い。

アキラの家を過ぎて5分ほど歩くと、やっと大きな家がぼつりぼつりと現れ出す。家の数が増えてくると、家の規模が小さくなり。山田町桜坂から、山田町虹ヶ丘へと地名も変わる。山田山を下りきると、虹ヶ丘の上がり坂が待っていて。その坂を登り切ると、虹ヶ丘小学校が建っている。

目指すべき、決戦の土地であった。

グラウンドには、まだ半数程度のチームメイトしか集まっていなかった。練習開始の予定時間まで、まだ30分あるからだ。

もつとも、個人個人好き勝手に、すでに練習を始めている。

毎度のことである。虹ヶ丘小学校には、体育で使用する校庭とは別に、ナイター設備まで整った野球専用のグラウンドが付属しているからだ。他のクラブに遠慮することなく、練習が出来るのだ。もちろん、山田陽子が無理矢理——実質的には貴久鉢が——造ったものである。

グラウンドの横には、観戦用のベンチがずらりと木陰に並んでいる。その一つに腰掛けて、さらさらへアーに丸めがねの小柄な少女が、ノートパソコンのキーをトカトカトカと叩いていた。

アキラのクラスメイトにしてチームメイト、情報屋こと魔女つ子^{らとり}白鳥りょうこである。りょうこは良子や涼子ではなく、竜虎^{りゅうこ}と書く。その目立ちまくる名前を、アキラはちよつと羨ましいなと思っていたが、竜虎は何が気に入らないのか、いつも自分の名前を「りょうこ」とひらがなで書いていた。

「おはよう」

アキラが傍によって声をかけると、ワンテンポ遅れてから、竜虎は顔を上げた。野の花のような、可愛らしい笑顔が浮かんだ。

「おはっ——」

と言つて、少女は丸めがねの奥の目を丸くした。目線の先は、アキラの横の飛鴻である。あつという間に、マスコットキャラの顔から、学者の顔へと変貌している。

「……きのうの革椅子の！……埴輪敏夫くん？」

「……大飛鴻でござる」

飛鴻が、名乗る。心持ち釈然としない顔で。

「大飛鴻……山田——飛鴻！——やっぱり、そうだよね！」

竜虎は立ち上がると、手で丸めがねを持ち上げて、きらりと光ら

せた。色々な角度から飛鴻の顔をじっくりと観察し始めた。

トカトカトカツとノートパソコンのキーを叩く。

デジタルカメラを取り出してカシャカシャと撮りまくる。

また、トカトカトカツとパソコンのキーを叩く。

液晶画面を眺めて、満足そうに、にへへつと微笑んだ。

それでやつと竜虎は、思い出したように、所在なげに立っている飛鴻とアキラの顔を交互に見てから、にこっ——野の花のような笑顔で笑った。

「初めまして。山田君——私、白鳥りょうこといいます。5年1組でアキラとは同じクラスなの……たぶん、山田君も同じクラスになると思うけど、えへへっ、よろしくね」

「よっ、よろしくござる」

少年はやけに丁寧にお辞儀して、竜虎の差し出す手を握った。

きらりん——アキラは、その様子を見逃さなかった。アキラに対する態度とは、やけに違う。違いすぎる。

——こいつ、竜虎に惚れたな？。

アキラは飛鴻が未知との遭遇にただ戸惑っているだけとは思わな
いで、そう判断した。

理由はある。

竜虎は男の子に、人気があったのだ。

山田町近辺の小学生やちよつと大きなお友達の間で、彼女の浮か
べる野の花笑顔にだまされるものが後を絶たない。

食虫植物とも知らないで。

彼女は自らの知識を満たすためなら、親友であるアキラですらも
平然と裏切るような女の子なのであった。魔女っ子との異名は、何
も愛くるしい容姿から来ているわけではなかった。人の不幸を目の
前にして、黙ってメモを取って写真を撮って、インタビューまで出
来る女の子なのである。それをその後、言いふらしちゃえる女の子
なのである。知らない男の人にも目を潤ませて「ねえ、お兄ちゃん
？ お願いがああるの？」と言えちゃう女の子なのである。最近では

被害者の増加にもなつて、情報屋ではなく、ゲキラッチ（パパラッチの進化型――パパラッチ↓激パパラッチ↓ゲキラッチ）や、レクター博士と呼ばれ、恐れられることが多くなっていた。

そんな彼女が、もっとも興味を示しせつせと集める情報とは、視力検査の結果と山田陽子にまつわる伝説と、彼女の息子・山田飛鴻の情報なのであった。

竜虎を使つて山田飛鴻をいじめられるかも知れない。可愛らしさの演出を徹底しつつも飛鴻に質問をぶつけまくる竜虎を横目に、アキラはそんなことを考えていた。

チームメイトが練習を中断して、ぞろぞろとやって来る。アキラは飛鴻の袖を引いて、彼らの前に出た。

「えー、何となく分かると思うけど、敏夫の本性は山田さん家の飛鴻ね。今日から、うちのチームに入ることになったから。気さくに、飛鴻って呼んであげてね！ 呼び捨ててあげてね！」

うおおー！ と男子が歓声を上げ、女の子がきゃー！ と奇声を上げる。

そのまま、飛鴻を取り囲もうとする一同に、

「さあ！ 練習するわよ！ なんとんでも、パンダ杯は負けられないよ！」

アキラは手を叩きながら、大きな声で宣言した。渋々、人垣が散らばっていく。

野球に関してなら、アキラは人に教えるのが好きだった。たとえば相手が敏夫だとしても、差別はしないし、手を抜かない。

「野球のルール……は知らないんだよね？ でもまあ、ルールは別に無理に覚えなくても良いわよ。やってれば、自然と分かるから。じゃ、まずはバッティングからね。お姉さんが優しく教えてあげましょう！ こう、バットを持って、がつんっ！ わかる？ がつんっ！ よ？ がちんっ！ じゃなくて、こう、がつんっ！」

しかし、教えるの、あまり好評ではなかった。結局いつも、新人

には監督や他のメンバーが教えることになる。

今も結局、野の花笑顔を浮かべた竜虎がアキラの肩をばんばんと2度叩いてからアキラを押し付け、飛鴻を指導していく。手に手を添えて、握り方や振り方を教えていく。必要以上に密着している気がしないでもない。

「山田くーん！ 頑張つてねーん！」

バッティングゲージに向かう飛鴻に手を振ってから、竜虎はアキラの横にすり寄ってきた。野の花スマイルが、学者の顔に変貌する。

「あの子、野球出来るわよ？」

発光体を埋め込まれているとまことしやかに噂される丸めがねをきらりと光らせて、竜虎はささやいた。

「……え？」

アキラが竜虎に目を向けたそのとき、

——ぱっきーん！

快音が響き渡った。

バッティングピッチャーが振り返っている。内野手も——外野手も突っ立ったまま、後ろを向いている。

とおく、フェンスを越した向こうにあるケヤキの木が、がさりっ

と音を奏で、その下にぽんと、静かに軟球が落下した。

呆然と、アキラはボールから、飛鴻に視線を移した。

少年も、アキラの方を向いていた。

そして、にやりっと、

明らかに、口元をゆがめた。

——こっこいつうううう！

野球を知らないとは、嘘だったのだ！……考えてみれば、山田陽子の息子で艾愛玲に育てられて、野球を知らないなんておかしかった。彼女たち二人は、アキラの母・多恵とともに、山田町近辺に野球戦国時代を創り出した張本人なのだから。

ぱっきーん、ぱっきーん、それからも立て続け

に快音が響き渡った。

アキラは、呆然と見つめていた。

アキラの顔から、怒りの赤が、少しずつ引いていく。二発、三発とフェンスを越えていくボールを見送るたびに、アキラの瞳は輝いていく。脳裏には、栄光のパンダカップ。昨日の屈辱的な敗北と、桜野愛天使を率いる綾小路英主の剛速球。

か、勝てる！

こいつがいれば、奴らにも勝てる！

喜々としてにやけるアキラの横顔で、ゲキラツチの丸めがねがきらりと光っていた。

バッティング練習を終えて、どうだつと言わんばかりにふんぞり返っている飛鴻に、憎さよりもかわいらしさを感じつつ、土方アキラは、

「どうやら、打つほうは問題ないようね。次は、守備のテストをしましょうか」

と、とてもお姉さんの顔で告げたのである。

テストするポジションは、昨日拙い守備を見せたセンターである。「私が打つわ」

飛鴻が定位置に付いたのを見計らって、アキラはノックを開始する。まずは無難に定位置にフライをあげる。飛鴻は予想通り、難なくそれをキャッチした。受け方からして、間違いなく経験者だ。

それから。

バスンッ

矢のような送球が、ホームベース近くでミットを構える6年生目がけて飛んできた。

すっ、すごい！

アキラは内心の動揺を抑えつつ、ノックを続けた。

少しずつ、難しい球を上げる。強めのゴロを打つてみる。

少年は軽く捌いていく。矢のような送球が帰ってくる。

今までの動きから少年の足を計算して、届かない場所を見計らつて、打つ。

ぐつと、飛鴻は加速して——難なくキャッチ。

うおおおおお——！。

とチームメイトから歓声が起こる。

ここにいたつて、アキラの中で、悪魔がいひひと囁き始めた。

『おい！ アキラちゃん！ こいつはまずいぜ！ 危険だぜ！ 山田飛鴻がみんなの心をキャッチしちまったぜ！ ——野球だけにな——！』

それに天使さんが応える。

『そうよ！ アキラちゃん！ 早く排除しないと大変なことになっちゃうよ！ チーム乗っ取られちゃうよ！』

『がつんと、ど頭かち割つてしまえ！ 手っ取り早くよ！ ——野球だけにな！』

『そんなことしたら捕まっちゃうよ！』

『背に腹はかえられないぜ！ ——野球だけにな！』

『それもそうね……野球だけにね！』

アキラはぶんぶん頭を振つて、悪魔と天使の誘惑を振り落としたり。脳裏には、昨日の生意気な古代の顔があつた。桜野愛天使の綾小路兄弟の姿があつた。みんなで仲良く輪になってランバダを脳裏で踊つてやがつた。

たとえこいつがどんなに危険な存在であろうとも、パンダ杯が終わるまでは、この戦力は手放せない。絶対に手放せないのだああ！ 髪を振り乱して苦悩するアキラの横で、レクター博士が丸めがねを光らせていた。

最後は、ピッチングのテストになった。アキラはさせたくなかつたのだが、竜虎が、

「山田君ってすっごいボール投げるよね！ 絶対ピッチャーに向いてると思う！ わたしい、すっごく受けてみたいなあ—— えへへ

っ

野の花スマイルで、飛鴻に微笑みかけたのだ。飛鴻がうなずき、これでピッチングのテストが決まった。

投球テストは、グラウンドわきのブルペンではなく、マウンドで行われた。どうせ他の者も練習どころではない。

虹ヶ丘戦女神の正捕手は、竜虎であった。眼鏡をかけている時の彼女は、視力2.0である。もっともかけていなくても彼女の視力は2.0……眼鏡はただの商売道具だった。

山田飛鴻が、マウンドに立った。教えていないのに、ちゃんと足場を整える。プレートに足を添える。ゆったりと振りがぶる。……

このガキ、とことん、経験者だ。

アキラの憤りも何のその。

ズドンッ

ものすごい轟音を立てて、竜虎のミットからホコリが散った。

うおおおおおおー

と仲間たちが歓声を上げる。アキラも、ごくりと唾を飲み込んだ。2球目も、3球目も、すさまじい剛速球だった。それも、構えたところに寸分変わらず収まっている。アキラよりも明らかに球威はあり、コントロールでもタメを張っている。

「すごいわー。山田くーん！」

竜虎がきちゃっつとはしゃいで良い笑顔でボールを返す。もっとも、アキラには竜虎の笑顔は恋するそれじゃなくてネズミを視野に納めた猫のそれにしか見えなかったが。

20球ほど投げ終わってから、

「山田くーん！ なにか変化球投げられるー！ー！」

竜虎の一言に、山田飛鴻は明らかに動揺した。それから、ゆっくりと首を横に振った。

「投げられないで、ござる」

「そんな！ ひどい！」

竜虎が、うるうるする。

「投げれないで……ないでは……ないで……ござるが……曲がったことは、嫌いでござる」

狼狽えながらも、飛鴻がうそぶく。

「そうなんだー！ 山田くんって立派！」

竜虎が拍手する。みんなも拍手している。もちろん、アキラは拍手しないが。

飛鴻は両腕を傲然と胸の前で組んで、ふんぞり返っている。

とりあえず、変化球は投げられないようである。アキラは、ほつと一安心したが、こいつはかなり竜虎にあそばれるだろうなあーと、ちよつとだけ同情した。

アキラは、早々に練習を切り上げた。5時ちよつと前である。

今日は、山田陽子の誕生日であり、命日だった。

数年前までは、お祭りもなかったし、休日だったりするわけではなかったのだが、しかしここ数年は、少しずつお祭り化しつつあった。3年前から町内会は花火を上げるようになったし、出店も少し出るようになった。愛天使教会も鐘を鳴らすようになった。

アキラは物心付いた頃から、山田屋敷での食事を毎年の恒例としていた。それは山田陽子の後継者として当然の義務であり権利だった。でもお祭りがもうちよつと盛り上がってくるのなら友達と一緒に行ってみても良いかなって、それも山田陽子の後継者として必要なことなんじゃないだろうか。ちよつと思うそんなアキラの5メートルほど前方には、人だかりが出来ていたりする。もちろん中心には飛鴻がいて、取り囲んでいるのはアキラのチームメイトであつた。

「飛鴻ってすごいよなー」

「ほんとすげーぜ！」

5年生の男子が声を張り上げている。身振り手振りを加えて、飛鴻の今日の大活躍を賞賛している。

「ねえねえ、山田先輩って白虎寺に住んでたんだよね？ もしかし

て、梁一傑さんとか、知り合いだったりします？」

4年生の女の子が、男子を押しつけて尋ねたりしている。

「知り合いでござる。……武道は、彼から学んでござる」

凄まじいどよめきがあがる。特に女子の黄色い歓声は、米軍で正式採用されて居てもおかしくないほど、究極兵器的だった。

6年の男子生徒が女子を押しつけ、うわずった声で尋ねる。

「じゃ、じゃあさ、山田君。あのさ、大飛龍は？」

飛鴻がうなずく。歓声が起こる。

「当たり前じゃない。親子なんだから」

女子から突っ込みが入り、笑いが起こる。

「もつとすげーよ、それ！」

尋ねた6年生は、うわずった声で興奮している。

「じゃあさ、あ、愛玲とも知り合いなのか？」

少年がうなずく。それから、質問の嵐だ。愛玲のスリーサイズを聴く馬鹿な男子もいる。飛鴻は律儀に答えたりしている。ただし、アキラ達が集めた情報（情報源・土方多恵）と照会すると、大きな隔たりがあったりする。アキラの横では竜虎がてくてく歩きながら、「愛玲は見栄っ張りである」と、新たに入手したデータを独自に解析して、PDAに入力していた。

「じゃあさ、山田陽子と会ったことは？」

飛鴻がうなずく。大歓声。

「当たり前じゃない？ 親子なんだから」
で、また笑い声。

アキラのイライラはレッドゾーンを突破しそうになっていた。奴が白虎寺出身の時点で分かるだろうに。アイドルグループのメンバーに対して同じメンバーの子が知り合いかどうか、一人一人聴いてるようなモノなのだ。

「良いの？ アキラちゃん？」

輪には入らずアキラの横で入力作業を優先していた竜虎が、アキラの顔をのぞき込むようにして尋ねてくる。

「仕方ないわ。……昨日の試合、忘れた訳じゃないでしょう？ 今は……パンダ杯が終わるまでは、調子に乗せておけばいいわ。みんな、すぐに飽きるに決まってるし……」

「ふーん、そう。……ふーん」

竜虎が意味深に微笑んで、

「でも。かれ、思ったよりも求心力がありそうよ。さすが山田陽子の息子だよ……3週間もそのままだと、戦女神、乗っ取られちゃうかもよ？」

前の集団からは、

「すげーぜ！ 山田さん」

「先生って呼んで良いですか？」

「飛鴻さまは恋人とかいらっしやるんですかぁー？」

その危惧を裏付ける会話が、聞こえてくる。

「……ねえ、竜虎？」

「なーに、アキラちゃん？」

PDAを弄りながら、竜虎が答える。

「わたしたち、親友だよな」

「もちろん！」

竜虎はわざとらしく微笑んでから、PDAをしまい、うふふふつと両手を広げて走っていった。

「山田くーん」

可愛らしい声を上げて、輪の中に乱入する。周りの女子を押しつけて、少年の腕に腕を絡める。土方アキラは、もしかしたら竜虎は裏切るのではないかと思いつつも……竜虎は敵にするより味方にした方が（特に男の子には）毒になる少女なので、気にしないことにした。

山田飛鴻は学校からの帰り道。土方アキラと肩を並べて歩いていた。

二人だった。

つい先ほど、最後の一人、玉田くと別れたところだった。

二人きりになると、おもむろに、アキラは何かを取り出した。手で、ピコピコと始める。

「何をして、ござる」

飛鴻は尋ねた。

「うん？ メールの確認」

それを見つめたまま、アキラは答えた。

「ケイタイ……まさかと思うけど、知らないの？」

「いや、知っているでござる」

飛鴻は答える。

土方アキラは画面から顔を上げ、飛鴻をしばらく眺めてから、

「携帯……知っているでしょうけど、携帯……兵器」

「ケイタイ……兵器、でござるか……もちろん、知っているでござる」

「これ一台で、何でも出来るのよ。電話でも、世界征服でも、何でもござれ」

飛鴻に見せつけるように、ケイタイ兵器を左右に振ってみせる。

「世界征服？ も、もちろん。知っているでござる」

飛鴻の返事に、少女は、探るように目を細めた。それから苦笑し、画面に目を落とし。会話が途切れる。

飛鴻は注意深く、アキラの手元を盗み見ていた。

二人は、土方多恵の家の前を通り過ぎる。

道は、緩やかに曲がりくねっていた。道の両側には、桜の並木が、花のない状態で並んでいる。蝉がやかましく鳴いている。

そこに、車のエンジン音——屋敷からではなく、二人の後ろ、町の方から。

アキラが立ち止まり、振り返った。飛鴻も立ち止まり、振り返る。

2台の黒い乗用車。

一台は、二人の横を勢いよく追い越して、急停車。もう一台は、二人の手前で急停車。砂埃が舞い上がる。

「ちょっと！」

土方アキラが口元のホコリを払いながら、抗議の声をあげた。

「あぶないじゃ……ない、の……」

8つのドアが弾けるように開ききると、土方アキラは蒼白となり、その声も小さく途切れた。黒づくめに覆面を大人が8人、飛び出し、二人に向かい、駆け寄せてくる。

山田飛鴻は思い至っていた。

間違はなく、

どうしようもなく、

やるせなくて甘酸っぱいほど、

——柳生の襲撃だ！。

と。

山田飛鴻は駆けだし、先頭の敵に向かい、跳躍。

「ふおおおおあああ————！」

喜々として雄叫びをあげた。

足を伝わる確かな衝撃。予想以上の必中だった。敵忍者が、吹き飛ぶ。

着地して直ぐ、後ろから一人の忍者が掴みかかって来た。だが、とろい。身を沈めて、山田飛鴻はそいつのスネを忍者キックで蹴り飛ばした。遅れて前から近付いた二人にも、忍者肘の一撃と、忍者踵での一撃を見舞う。横から掴み掛かってくる敵忍者には、忍者跳躍しての忍者回し蹴りを忍者浴びせる。

ひとときの攻防が終わった。

残りの柳生者たちは、距離を取って立ち止まって、山田飛鴻を伺っていた。打ち倒した柳生たちも、よろよと起きあがる。山田飛鴻を取り囲む。

柳生忍者たちは、お互いに目配せを交わしあった。

三人の忍者が、前後から掴みかかって来た。

飛鴻は身を伏せた。地に両手について忍者支点として、両足を忍者斧のように振った。梁一傑に教わった覚え立ての技だった。一傑

はこの技で四方から寄せる敵を王毅まで含めて、一瞬で吹き飛ばしてみせた。

しかし飛鴻の脚力と技量では、完全にはじき飛ばすまでは行かず。二人の足下を刈り払って、二人の敵を転倒させ。その時点で転倒した敵と身体が絡まり、もつれ。致命的な隙が生まれた。残りのひとり、無防備な飛鴻の顔に、拳を打ち込んで来る。

飛鴻は顔だけを僅かにずらし。数センチの距離でかわして。伸びきった腕を掴んで引き崩す。素早く身を起こして、体勢を崩した敵のアゴを蹴り上げる。

そこに左右から別の二人が掴み掛かってくる。順歩と逆歩を素早く入れ替えながら、飛鴻は二人の間をすり抜け。殴る殴る蹴る殴る蹴る、距離を取る。

——おかしい。おかしかった。世知辛いほどおかしかった。

山田飛鴻は動揺していた。

忍者にしては、柳生忍者にしては、あまりに齒ごたえが無さ過ぎる。弱すぎる。決定的なチャンスにも、あのへっぱこパンチ。すでに8人中4人はへろへろで、涙を浮かべてゲロを吐いている忍者までいる始末だった。

まるで、ど素人のような動き。忍者大会少年の部でも予選落ちのような動き。

はっ、そういうことか！

山田飛鴻は思い至った。

ファンシーコースターを完遂した山田飛鴻は、すでに忍者マスター・艾愛玲のレベルに近づきつつあったのだ！ 柳生忍者すら寄せ付けぬほどの、パワーステーションを巻き起こしていたのである！。

両腕を腕の前に組んで傲然とふんぞりかえる飛鴻の前で、よろよろと起きあがった、かつての強敵たちは、気弱に目配せしてから、懐に手を伸ばし――。

得物を取りだした。突っ込んでくる。

が、飛鴻はひるまない。忍者であるからして、光り物は日常の風景だった。

「ふおおおおおおあああああああ————！！」

飛鴻は渾身を拳と化して、気持ちよく荒れ狂った。

一人、二人、三人、四人、五人と吹き飛び、忍具がカラカラと土の車道を走る。

そのとき、

「きやあああああああ————！！」

「動くな！ さわぐんじゃねー！」

振り返った先、柳生忍者が、土方アキラの首に腕を巻き付けて、小刀を突きつけていた。

飛鴻は一瞬、怯んだ。

その、僅かな隙——、隙が出来た。

バチバチバチバチッ

背中に衝撃が走る。

ばやける視界、土方アキラが何かを言っていたが、少年には聞き分けることが出来なかった。

帰りの遅い二人に、屋敷が少し騒ぎ始めた頃であった。

電話が鳴った。

会見の取り消しと、土方多恵の更迭を要求する。少年を預かっている。

誘拐宣言である。

五章 柳生の魔の手——敵は愛天使教会にあり（二）

「良い？ みんな！ 貴久鉢がくたばりそうだって惟道の馬鹿がほざくから、飛鴻を連れてきてあげたけど、あれは真っ赤な嘘だったのよ！ 判明したわ！ 騙されてたのよ！ 元氣いっぱい後千年は生きると、お医者様もお釈迦様もこの土方歳三さんも太鼓判を押してくださいさっ たわ！」

いや、わたしはそんなことは言っていないんですけど、と屋敷の主がお茶とお茶菓子を運びながら否定しているが、

「多恵のヤツは、飛鴻が目的だったのよ！」

愛玲はかまわず力説する。

土方家。

一室を借り切って、作戦会議が開かれている。

大きな座敷の中に、今さっき到着したばかりの王毅や、白虎寺の人々が居た。後から愛玲が呼び寄せた連中である。

最初は普通に旅客機で来る予定だったのだが、今を時めく山田土方電子戦線の社長・土方歳三の好意を受けて、山田グループの専用機を貸し切って、景気よく飛んできたのだった。梁一傑の車を売ったお金は、「ごめんね」と書いた封筒に入れて、梁一傑の部屋に置いてきてあった。

聴衆たちは、畳の上に正座して、真っ赤な顔や、青い顔を伏せて縮こまっている。

近代化著しい中国だが、白虎寺は人里離れた山奥の奥の奥にある修行寺の一つである。動物辞典に載っていない獣の目撃例が絶えない秘境中の秘境である。そんな環境で育った彼らには、一年前に愛玲に騙されてひどい目にあつた海外旅行（日本観光と騙されて行った世界忍者大会団体戦・雪原の覇者決定戦）を除いて、まともに旅行すらしたことがない者が多いのである。

それが突然、世界的大企業山田グループの豪華な専用機に乗っけ

られて、今度はいったい何処に連れて行かれるのかとビクビクしている、ついた先には豪華なバスが待ちかまえており、高級住宅街を抜けた先にそびえる一際大きな土方邸の門前で下ろされて、今さつき昼飯をご馳走になったばかりなのである。

今もせつせとご亭主様が使用人と一緒に、お茶とお茶菓子を、大量に振る舞ってくれている。

「あいつは出来の悪い亭主に愛想を尽かして、飛鴻を狙っていたのよ！」

なのに彼らの首領である艾愛玲は、とてつもなく失礼な悪口を、その豪邸の御当主様の前で言っているのである。恥ずかしくて恐ろしくてたまらない。しかもその御当主様は、白虎寺にやってくるたび、何かしらのおみやげを持って来てくれる女神様のようなお多恵さんの旦那様でもある。罰が当たるというか、御利益が無くなるというか、お土産とか貰えなくなるんじゃないかとか、後でお多恵さんが怖いんじゃないだろうかとか、みんな気が気じゃなかった。

「……それはあんただろ？」

と集団の中の一人が呟いたのも、致し方ない。

が、即座に愛玲の手裏剣が襲いかかる。

少年は間一髪で後ろに倒れるように、身を沈めてかわした。頬を掠めて手裏剣が過ぎる。

「そこ！ 私語は慎む！ 殺すわよ！」

「おい愛玲……無茶はするなよ」

びいびいびいと壁に突き刺さってまだ震えている手裏剣を見ながら、王毅が窘めた。

他のメンバーも「おいおい、どうするんだよ、この壁」といった表情で、揺れる手裏剣を見ながら、小刻みに振動している。金銭的な心配が先立って、仲間のことは心配する余裕もない。よけんじゃねーよお前、と言わんばかりの顔だ。

当主が相変わらず笑っているのが、せめてもの救いだった。

「とにかく、今から！ あの鬼のような多恵から！ 飛鴻を奪い返

すのよ！ 良いわね！」

誰も頷かない。

「良いわね！」

さつきよりも大きめの手裏剣を3枚構えて愛玲が念を押す。カクカクと大多数が頷いた。

これ以上、壁に穴を開けられては堪らないし、万が一、身に食らってきれいな畳を鮮血で汚すわけにもいけない。

それでも、「良いんですか？」と歳三の横にいた少年が、小声で歳三に尋ねた。

「ええ。こんなこともあっても良いんじゃないでしょうか。なんだから懐かしいなあ」

にこにこ歳三は楽しそうに微笑んでいる。

愛玲の計画は単純明快だった。

山田屋敷に押し入って、飛鴻を誘拐するというのだ。

「とにかく、電撃作戦よ！ 夜になったら一気に塀を乗り越え、山田屋敷をまっすぐ目指す！ 敷地の西側からの方が屋敷には近いけど、陽子の仕掛けた地雷や落とし穴がまだ残っている可能性が高いから、絶対に入らない！ まっすぐ正門付近から、道に沿って行軍する！ 外れると命はないわよ！ 飛鴻を確保したら、ネズミ花火百連発で屋敷を爆破して逃走！ ここまで帰ってきたら、バスに乗って空港行つて、専用機でハイさようなら！」

もう帰るのかよ！ と不満そうな顔ぶれを無視して、愛玲は注意点を挙げていく。

「まず、熊は強敵だから、王毅が責任を持って当たること。惟道はうるさいから殺しても良いわ。万が一、十兵衛が出てきたら「十兵衛、伏せ！」か「十兵衛、だめ！」とはっきり発音する。もし通じなかった場合は、一人か二人を犠牲にして通り抜ける。多恵の走狗になった梁一傑や他の者を見かけたら挨拶する振りして遠慮無く殺す。かわいいメイドが居ても、絶対に口説かない。あいつら人を惑わす生き物だから絶対これは気を付ける！ あなた達のためよ！」

良いわね！ 私の言うこと聴いておかないと、後できつとひどい目に遇わすわよ！？」

電話が鳴った。

「はい。土方です」

もちろん、歳三が出る。

「え？ アキラと飛鴻君が？」

歳三の顔色が変わった。

「うん……分かった……」

受話器を置いた後。

「多恵から？ 何の話？」

愛玲が警戒しながら問う。

歳三は僅かに躊躇してから、

「……………アキラと飛鴻君が、誘拐されたそうです」

山田町には、山田グループに関わるお金持ちが多く住んでいるが、同時に、多数の警備会社が軒を連ねていた。

防犯ブザーが鳴って1分もすれば、近辺の道が封鎖されて、3つ

4つの警備会社が駆けつけるだろう。

しのぎを削りあう警備会社は、三つの勢力に分かれていて、一社と契約していれば、勢力内の他の警備会社の恩恵も、受けられる仕組みになっていた。それどころか、他勢力も隙があれば、出しゃばってけることがある。

4年前に起こった引ったくり事件が、まさしくそのケースだ。

数十社の警備会社が、頼まれてもいないのに動員した人数は、500人に上ったとか。

警備会社の数は、飽和状態に達している。犯罪発生率は、どんどん下がっている。その為に、各社とも、殺伐としていた。どこもかしこも実績を上げようと、必死なのである。

実際、その引ったくり事件の時、他社や警察を出し抜いて犯人を取り押さえた警備会社は、飛躍的に契約数を増やしていた。

それ以後、引ったくりや空き巣などの犯罪は、全く発生していなかった。

山田町での犯罪は、成功しない。割に合わない。それは山田町近隣に住む人間にとっては、常識となりつつあった。しかし。

山田屋敷の周辺には、人家もなく、うっそうと山が広がっていた。さらに、今現在。

山田屋敷、および貴久鉢の所有する敷地の警備を担当している黒服警備会社は、山田グループ査察のために、半数近くが山田町を離れていたのだ。

町側から人数を減らすと、重役たちに感づかれる恐れがあったため、大半が屋敷周辺の警備から削られていた。

お多恵さんは、唇を噛みしめた。

悔やんでも悔やみきれない失敗だった。

今まで平和すぎて、安全に対する感覚が鈍っていた。少年が来たのが、予定外だったせいもある。貴久鉢が自分から決意して、浮かれてしまった。どちらにしろ、こういう事態は、まったく想定していなかった。すっぱり頭の中から抜け落ちていた。敵がここまでやってくるとは考えてもいなかった。

貴久鉢は、寝室で横になっている。何も、伝えては、いない。

発表の取り消しと、土方多恵の更迭。

これを要求してきたということは、ほぼ間違いなく、誘拐犯は、

山田グループの中にいる。

いまの貴久鉢にそれを知らせるのは、躊躇された。

お多恵さんですら、相当に堪えているのだ。

狼狽えて、すべての警備会社を動員しようとすらした。それは黒服警備会社を率いる村雨小五郎に、止められたが。

それぞれの警備会社には、懇意にしている重役が居るからだ。犯人がグループ内にいる場合、まず間違いなく、情報が漏れることに

なる。

さらに、二人の足取りが途絶えてから、すでに二時間が経過している。今から道を封鎖したところで、間に合わない。山田町に残っている可能性は、皆無に近い。三つの勢力を動員しても、統制の取れない混乱を起こすだけで、逆に子供たちを危険にさらす怖れがあった。

今取れる対策としては。

貴久鉢の名で、全ての重役たちに、ファックスを通知してあった。内容はこうだ。

——昨日の発表を取り消す。後日改めて会議を開く。臨機応変に対応する用意がある。ただし、各自の心根によつては、飛鴻財団を設立して、全額、寄贈することにする。

少年が死ねば、遺産は相続出来なくなる。だから殺そう——などと来られてはたまらない。

だから。

二人にもしもの事があれば、グループには一円も譲らない。それどころか貴久鉢の財産を完全に撤退させる。

これを明確にすることによって、逆にグループを人質に取り、二人の安全を確保するためであった。

山田屋敷には、重役たちから、ファックスの内容を尋ねる電話が、ひっきりなしに掛かってくる。埴輪惟道が、適当にはぐらかし、探りを入れながら応対している。村雨小五郎の部下が、それを盗聴している。

電話の向こうに犯人が居るかもしれない。そう思うと、お多恵さんは気が変になりそうで、黙ってその部屋を出た。

お多恵さんは、リビングの椅子に、膝を抱えるようにして座っていた。

少し離れた席には、梁一傑が座っている。

お多恵さんにやれることは、何もなかった。

搜索に関する事柄は、すべて小五郎に一任してあった。

ただ、待つだけである。敵の動きを。
それまで、素人の出る幕はない。

「どういうことよ!」

いきなり部屋に踏み行つて来た愛玲が、お多恵さんの胸ぐらを掴み、引きずりあげた。

「愛玲!」

梁一傑がその手を引き離そうとするが、愛玲は離そうとしなかった。

お多恵さんは、掴まれたまま、逆に愛玲をひっぱたいた。

「うるさい! もとはと言えばあなたがいけないんじゃない!」

叫んだ。目に涙をためて。

愛玲は、ゆっくりとお多恵さんの胸元から手を離した。それから、
「……………なに?」

険悪な目で、睨んだ。

「……………あなたが……………気まぐれで飛鴻君隠したり、連れてきたりするから……………」

「言い掛かりね」

ぐつと、お多恵さんは、唇を噛みしめた。うなだれて小さく、

「……………分かつてる……………ごめん」

「それを言えば愛玲。お前のも言い掛かりだ」

一傑がたしなめると、愛玲はそっぽを向いた。

「……………分かつてるわよ」

どさつと身を投げ出すように、彼女は椅子に座った。だが、小さく愛玲は続けた。

「可哀想な飛鴻、何も悪くないのに。……………馬鹿みたいな権力争いに巻き込まれて」

「愛玲!」

一傑がたしなめるが、愛玲はかまわず声量を上げて続ける。

「なにが私に育てる権利がないよ。ないのはあなたや貴久鉢の方じ

やない！」

お多恵さんが、きつと顔を上げた。

「うるさい！ 勝手なことべらべらと！ あなたの我が儘でどれだけおじいちゃんが——」

「我が儘はどつちよ！ 会いたければ、貴久鉢が来ればいいでしょうが！」

愛玲が叫んだ。言った後、彼女はあつと呟いた。

お多恵さんが、すつと目を細めた。冷たい声で。

「一度、会いに行ったよね、おじいちゃん。迎えに、行ったよね？ その時、隠したのだれよ？」

愛玲は目をそらした。しかし小さく、

「会いたければ、何度でも会いに来ればいいでしょうが」

「ふざけないでよ！ どれだけ、おじいちゃんが悲しんだと——」

「私じゃない！ ……わよ。あの子が、会いたくないって……泣いたから……」

「嘘つかないでよ！」

お多恵さんが、叫ぶ。

愛玲は、自嘲気味に笑って、お多恵さんを見返した。

「嘘じゃないって、言ってるでしょ。わたしは、そんな嘘はつかない」

「うそよ。いい加減なことを言わないで！」

「……本当は、分かってるくせに」

愛玲は口元を歪めた。

「山田貴久鉢には、会いたくない。山田町には、行きたくない、そう言ったの、あの子が……だから、……仕方なかったのよ、わたしには、一緒に隠れてあげることしか、出来なかった」

うつろに喋る愛玲の言葉に、お多恵さんは、泣きそうに顔を歪めた。

愛玲は、その顔をちらりと見て、顔を背けた。

「……そんなの………だって、おじいちゃんと会いたくない………」

なんて……」

お多恵さんのぐずる声。

少しして、愛玲は。

身体中から、ため息を吐いた。

「あんた、本当にお爺ちゃんのことばかりで、あの子の気持ち、全然、分かってないよね」

愛玲は、ゆっくりと椅子に座り直し。お多恵さんに向き直った。

「あのね、多恵。あの子はたぶん、本当は、会いたくなかったわけじゃない。来たくなかったわけじゃないの」

とつとつと語る。

「きつと、怖かったの。踏み出すのが。ずっと白虎寺で暮らして来て、そこから海を越え、世界に飛び出すのが、怖かったの。どれだけ怖いかな、あなたには想像もつかないでしょうけどね」

苦笑してから、愛玲は、思い出すように眼を細めた。

「私が白虎寺を飛び出した時、12歳だった。たった一枚の紹介状を手にとって。これを逃すと二度とチャンスはないって思った。これを逃すとずっとあそこで大人になって、ずっとあそこで弟たちの面倒を見るだけになると思った。嫌だっと思ってたの……陽子やあなたは気軽に考えてるけど、そりや確かに私は脳天気だったけどさ……それでも、死ぬ気で踏み出したのよ、その一步。後悔しながらね。もう二度と帰らないつもりで」

愛玲は顔を俯かして。それから、顔を上げ、疲れたような微笑み。微笑みをおさめ、真顔でお多恵さんを見上げた。

「母を勘当した山田貴久鉢に挑む勇氣。乗り込んで追い返される恐怖。帰る場所を無くす怖さ。あの子はね、やっと10歳になったのよ？ まだ、日本の子供がサンタの存在を信じるように、イギリスの子供が妖精の存在を信じるように、あの子はね、柳生の暗躍を信じるちよつと夢見るお年頃」

お多恵さんは少し眉を寄せて口を開きかけたが、何も言わなかった。

「去年は9歳、その前は8歳……あなたがおいちゃんを連れてきた時は、まだ7歳だった。そんなの、覚悟できるわけ無いでしょう？ あなたなら、踏み出せたの？ あんなだけど、父と母が居て、だからずっと、一人だけ特殊で、さ。あの子は、孤児の中で、両親がいることに負い目を感じてた……それで、陽子が亡くなって……ふさぎこんで……さ。それでも、やっとと自分の場所をもう一度、自分の力で作り直したのに。そんなときに……あの子は、会いたくないって。行きたくないって。ここに居たいって、みんなと一緒に暮らしたいって……それを引っ張ってこいって言うの？ 無理矢理連れて来いって言うの？ ……本当はね？ 私だって、来たかったわよ、山田町に……もっと早く……山田町に……あの子と、一緒に……」

室内に沈黙が降りた。

お多恵さんは俯いて唇を噛んでいる。

愛玲は椅子の上で両膝を抱えてうなだれている。

「けどあいつは、今此処に、山田町に来た。自分の意志で、その一歩を踏み出したんだ」

梁一傑が、言った。二人の口論はお門違いだ、そう言わんばかりに、力強い声だった。

二人の女性は、のっそりと顔を上げた。一傑を見る。

一傑は、微笑んだ。

「心配ないさ」

優しく包むような声で、続けた。

「あいつは、大丈夫だ。あいつなら大丈夫だ。あいつはここぞと言うときに、頼りになる。なんせ、俺が武術を仕込んでいるんだからな」

イタズラっぽく、一傑は微笑んだ。挑発するような目を、愛玲に向ける。

「当たり前でしょ。あの子はやれば出来るんだから。私が忍術を教えるんだから」

愛玲は強い光を瞳に宿して、自らを鼓舞するように、続いた。

一傑は、愛玲に頷いてから、お多恵さんに向かい、微笑みかけた。「そう、だから二人は無事に帰ってきます。山田飛鴻は、必ず、アキラちゃんを守り抜いて見せます。それが、山田飛鴻という男だ。師匠二人が、保証する」

それは励ますためだけの、まるで根拠のない言葉だった。

だけど、お多恵さんは信じた。

微笑み、うなずき、目元をぬぐい。

あの少年なら大丈夫。

あの二人なら大丈夫。

あの子なら、きっと、アキラを守ってくれるだろう、と。

山田町の隣にある大和市。

江戸時代には、古代候のお住まいになった大和城のある、由緒正しい町である。

しかし、大和藩11万石の中心地として栄えた大和市も、今や山田町の心ない子供たちからは、メインエンジン停止とか第三艦橋爆破とか言われるくらいに、経済的によろしくなかった。毎年のように出る山田町との合併話も、なんだかんだでうまく行っていないし、遙か昔は漁港として栄えた港も、今は水深が浅いために、小さな漁船や貨物船しか使用できずに、寂れる一方なのであった。

そんな町の、港の倉庫である。

表には、山田菓子株式会社と、看板が掛かっていた。

倉庫の前には、黒塗りの車が三台、止まっている。

倉庫に入ってすぐの場所で。

「たかがガキを一匹浚うのに、ずいぶんと大げさな怪我をしやがって」

暴力団鯨波組の若頭、大鳥敬吾おおとりけいごは、あきれたように、ばやいていた。

彼の前には怪我を負った舎弟たちが並んでいる。飛鴻を捕らえようとして、したたかに痛撃を食らった誘拐犯たちだった。

「しかし若頭。あの坊主、あの飛龍の息子なんですか？」

子分の口答えに、若頭は言葉を飲み込んだ。確かに飛龍の息子なら、凶暴かも知れない。拐かせただけでも行幸だ。

若頭・大鳥敬吾は、十数年前、飛龍にベンツを一台、お釈迦にされたことを思い出していた。その後、ボコボコにしばかれたことも思い出していた。その後、裸にひんむかれて海に投げ込まれたことも思い出していた。その上から立ちションされたことも、写真まで撮られたことも、思い出していた。

「ちよつと、大人の怖さを教えといてやるかい」

こめかみに青筋を浮かばせて、若頭は若頭として、部下たちの敵を取ってやろうと思った。けっして謂われのない私怨のためではなかった。ある意味、謂われは溢れるほどあるような気がした。

鯨波組に、山田飛鴻誘拐の依頼が来たのは、昨日のことであった。そして、今日実行。

普通は受けない。

急だからとかそう言う理由ではなく、たとえ極道といえど、誘拐の依頼など普通は受けないのである。依頼主が、山田町と山田グループの事実上の支配者・土方多恵で無かったとしたら。

準備らしい準備はなかった。車と人を用意しただけだ。

後はだいたいの帰宅時間を見計らって待ち伏せしただけである。

駄目なら日にちと方法を改めることになっていたが、初日からチヤンスが訪れた。送り迎えの車もなく、標的は徒歩の帰宅である。

この微妙な時期、山田グループ御曹司とは思えない大胆不敵、無防備さだった。

山田屋敷に至る私道は、桜の開花時期を除いて、人通りが極端に少ない。まさしく誘拐の絶好地だ。携帯で連絡を取り合いながら、町からも屋敷からも、ちょうど離れたポイントを選んで、少年を、さらった。

後は、簡単である。

山田海上警備の船が来るのを待つて、引き渡すだけ――少々、船は予定時間を遅れているようではあるが。

警察も警備会社も、動かない約束になっている。

大鳥敬吾は少年を監禁している小部屋の前に足を運んだ。

楽な仕事だった。これで鯨波組の未来は明るい。そう思うと、自然と顔がにやけてくる。大鳥敬吾は顔を揉みほぐし、表情を引き締め。

すうーと、息を大きく吸い込み、出来るだけいかめしい顔を意識しながら。

若頭・大鳥敬吾は、ばんっ、と叩くように少年を監禁している小部屋の扉を開けて、

「坊主、何か言い残すことは無いか？」

室内に入り、すぐんで見せた。

中は薄暗くて、よく見えなかった。それでも、

「うーうー」

と、うめき声が聞こえる。

ぼんやりとだが、うめき声の発生場所で、小さな固まりが揺れ動いた。中にはちよっぴりコーンの香ばしい臭いが、充満している。

「おい、間違っちゃいねえよな」

若頭が首をひねる。声が女の子のように聞こえたからだ。どこかで聞いたことがあるような気がする。

「へい、確かに。写真の少年です」

「そうかい」

若頭は納得した。子供の声だ、男も女も大差ないだろう。

「へっへっへっ。おまえを切り刻んで海の放り込んでやる。明日の朝には魚の腹の中だ」

「うーっうーっうーっ！」

影はいつそう呻いて、じたばたする。

「へっへっへっ。怖いかい。自業自得だな。恨むんならお前の親父

を——ではなく、じじいを恨むんだな」

若頭は、相手の反応に気をよくして、はっはっはっはっはっ、と大人げなく大笑しながら、影に近づいていった。

近づいて、よく目を凝らしてみると、もがいている人影の横に、じつと座っている子供らしき影が見える。

「……おい？ 二人、いやしねえか？」

「へえ、すみません。ガキがあまりに暴れやがるから、しかたなく一緒に居た女の子も——」

「馬鹿野郎！ そんなことは先に言え！ つーか、余計なのを連れてくるんじゃないよ！」

子分が全部を言う前に、若頭は一喝した。頭をかきむしる。一秒でも早く実行するようにと、警備会社も警察も動かない、多少の無理は押し通してかまわない、後ろに土方多恵が、山田グループがあるから、と旦那の手下からは言われているには居たが。

「ちっ、馬鹿野郎が。よけいな手間を増やしやがって。どうするんだよ、たくっ」

若頭はぼやいて、倉庫の電気を付けた。

こうなつた以上、ガキの身元を確かめてから、旦那に頼んで手回して貰うしかない。あの辺りの子供なら、山田グループ関係の、それも大物だろう。普段なら大問題だが、今回は逆にありがたい。土方家なら、それなりの椅子を条件に、穏便に話を付けられるはずだった。

ちかちかと、2、3度瞬いて、明かりが灯った。

少年と少女の姿が、はっきりと見えた。

うーっうーっうーっうーっ！。

泰然と座っている少年のそばで、少女が、涙と鼻水をまき散らしたものすごい形相でもがきながら、少女が、真っ赤な顔をして、傍の段ボールを見知った少女が、縛られた両足で、段ボールを、蹴りまくっていた。段ボールから、お菓子が——山田とんがらないコイン——がこぼれまくり、潰れまくっている。

若頭は呆然とした。

その呆然とした頭が思考を再開したとき、若頭・大鳥敬吾は、「ちよっぴり脅かしちゃったこと」を、かなり激烈に後悔していた。ぐちゃぐちゃに潰された【とんがらないコーン】が、自分の内蔵のように見える、おなかを押さえた。

ああ、依頼主の娘である土方アキラが、凄まじい形相で、彼を睨んでいた。

「ふ、私も明日の朝には魚のお腹の中か……」

拘束を解かれたアキラが、渡されたハンカチで顔を拭きながら、嫌みっぽく呟くと、若頭は、

「勘弁してくださいよー」

と卑屈に揉み手をしながら、何度も頭を下げた。

「ねえ、若頭は、お魚さんのお腹に入った事ってある？ イワシが良い？ サンマが良い？ それともリッチにマグロが良いかな？ 男らしく鮫でどう？」

「まっ、誠に申し訳ありません。ほっ、本当に手違いです。舎弟どもにはよく言って聞かせますから、かつ、勘弁してやってください」

若頭は、微妙に子分に罪をなすりつけた。

そんな若頭の顔はかなり青くなっている。だがしかし、とてもじゃないがアキラは許す気にはならなかった。顔の青さで競うなら、アキラだって負けてはいないはずなのだ。

誘拐されて魚の餌になりかけるなど、人生そう味わえるものではない。「死ぬんだ、私」と、とことん覚悟して薄く笑ったのは、土方アキラ、10歳の夏に訪れた生まれて初めての体験だ。

「で、どういふつもりなの？」

じとりと、横目で睨み付ける。

「へえ、そ、その。ちよいと脅かしてやろうと思ひましてね」

えへへっと頭を掻いて、若頭が愛想良く笑った。

「……へー」

「あああつ、もちろんお嬢さんじゃありませんぜ！ そっちのガキの方ですぜ！」

アキラの殺意がこもったジトメに、慌てて若頭が言い訳をする。

アキラはそっちのガキの方を見た。

「この子が誰だか知ってるの？」

驚いて訪ねる。

「へえ。山田屋の親父のお孫でして」

「それを知っていて、誘拐したんだ？」

頓狂な声を上げたが、考えてみれば、天下の大富豪の孫なのだから、誘拐のターゲットには、もってこいではある。

「いえ、その。営利とかそんな大それたもんじゃないんです。ええ、ただちよつと正義感から脅かしてやろうかと、そう言う話でして」

と、若頭は揉み手しながら言つて。続けて、

「だいいち山田屋の親父も孫とは認めてませんでしたし、将来的には山田グループはお嬢さんがお継ぎになられるってお話でしたでしょう？」

「何で私がグループを継ぐのよ？」

「ですが、旦那は……ああああつ」

「旦那は？ おじいちゃんね！？ おじいちゃんがどうしたって！？」

目をそらす若頭を無理矢理真正面から睨み付けながら、アキラは詰問した。

ちよつと、その時だった。

三和音のゴッドファーザーのテーマ曲が鳴った。

アキラの携帯ではない。アキラの携帯はウツトラウマンのウツ・タイマーメロディーだった。ウツトラウマンとは、虎と鵜の合成的な巨大ヒーローのことで、子供時代のトラウマを引きずり鬱に入つたヒーロー・ウツトラウマンが逃げちゃ駄目だと奮起して地球まで怪獣たちを追いかけてきてブチノメスというハートフルピュアスト

ーリーで。ちなみにウマンの部分にウーマンも掛かっているらしく、主人公は女性なのであった。

そんな話はまあ良い。

問題は、露骨に狼狽える若頭。

ゴッドファーザーは、若頭の着信音なのだ。

「お出に、ならないの？」

につこりと微笑んで、アキラは尋ねた。

「へ、へえ」

若頭があたふたと胸ポケットから携帯を取り出したとき、アキラは横から素早くかつさらった。「あつ」と若頭が声を上げた。液晶画面を見ると、予想通り、おじいちゃんの番号だった。

「どうぞ」

それだけを確認してから、につこりと、若頭に差し出す。

若頭は、数秒の間、逡巡していたが、「どうぞ」とアキラがもう一度はつきり発音してスネを蹴ってお薦めすると、電話に出た。

「あのう。もしもし。大鳥です」

若頭が、気の弱いサラリーマンのような口調でいう。

「おお、大鳥君か！ よくやった。ご苦労だったな。今さっき、鯨波君から成功したと連絡を貰ったところだよ。わっはははははは」

電話の向こう、気の大きい取引先社長のようにこたえる声は、土方八兵衛。アキラのおじいちゃんの声である。

「恐縮です。だっ、旦那にそう言っていただけと、有り難いやら、悲しいやらで」

冷や汗を流しながら、若頭は電話と仁王立ちするアキラに、ぺこぺこ交互に頭を下げている。

「わっはははははは。恐縮することはないよ、大鳥君。私が当初の予定通りに総裁に就任したら、君にも山田グループ重役の椅子が待っているからね。待っているからね」

「あのう……ですね」

「わっはははははは。何だね大鳥君？ 言いたまえ言いたまえ。何

でも遠慮無く言いたまえよ」

「実はですね。少々手違いがありまして、それで、アキラさんに、少々事情を知られてしまってますね」

若頭はけっこうソフトに事情を報告するタイプのようなった。

「……………」

「……………」

「……いま、なんと……………」

「その、部下どもにも、悪気はないのでして…………ええ」

「ごっほん！」

アキラは大きく咳払いした。

「……………」

「……………」

大人二人の会話が止まる。

しばらくしてから、

「あー、大鳥君。あー、えー、あー、今の声は、もしか、すると……………」

「……へい。……そうでした」

「……………」

「……………」

アキラも黙っていると、おじいちゃんは、電話の向こうで語り出した。

「あー、会社みんながね…………次の総裁はおじいちゃんしかいないって言うてくれてね…………あー、おじいちゃんは総裁と違ってみんなの意見を良く聞く人だからってね…………グループを救うためにね…………その…………だね…………お母さんも困ってるそうだからね…………悪の組織が、飛鴻君の命を狙っていてだね…………会社みんながね…………飛鴻君のためにもね…………おじいちゃんは…………みんなに頼りにされているからね…………一番、良い方法をと…………みんなで一生懸命話し合ってる……………」

「……………」

「……………みんなで話し合って……………ね……………」

「……………」

「……………どっきりの企画を考えたんだ」

「……………」

「へい。そうでした」

若頭が相づちを打ったが、アキラは無言で蹴飛ばして黙らせると、電話をひったくった。

「どうだね？　大鳥くん？　飛鴻君は驚いていたかな？」

「ええもう、すぐく驚いちゃったな、わ・た・し・が・だ・け・ど！」

「……………」

アキラの声に、八兵衛の返事がつまる。やっぱり少ししてから、
「いや、そうかそうか。それは良かった。ところでアキラちゃんは何か欲しい物があるかい？」

「お母さんは知っているの？」

「……………いや、お母さんは忙しい人だから知らないと思うよ。うん。どつきりはおじいちゃんたちで考えたんだ」

「じゃあ、教えてあげようね」

甘い声でささやく。

「いや、お母さんはとてもお忙しい人だから……………内緒にしておこう
ってみんなも言うし……………」

震える声が、答える。

「へっ、お多恵さんはご存じないので！？」

と若頭が横で頓狂な声を出した。

「ど、どういう事ですか！？　旦那！？　お多恵さんのご意志だつて聞いたからあつしらは安心してさらったってのに！？」

アキラから引ったくるように携帯を取り返して、若頭が猛抗議した。

「……………いや、みんながね、大鳥君たちにはそう言うことにしといた方が良いつて……………みんながね……………」

八兵衛の返答に、若頭が真っ白になって固まった。
その尻をけっ飛ばし、アキラは携帯を再度もぎ取った。

「ああああ、どうしよう、どうしよう。鯨波組はもうおしまいだ――パンダの餌にされちまう――！」

と若頭は頭を床に打ち付けてからローリングでもがいている。

鯨波組は、大和市に根を張る極道ではあるが、本業は警備会社を営んでいる。もちろん、仕事は山田グループ関係だ。

昔は名前の通りに鯨を捕って暮らしていたそうだが、外交的な問題で獲れなくなって転職したと、若頭からアキラは聞いたことがある。町の噂では山田陽子に船を沈められて引退したとも言われている。

どちらも本当のようだ。

母に聞いても曖昧に笑っていたが、アキラたちの捜査した結果では、そう確定された。

とにかく大鳥啓介は毎年欠かさずアキラの家に挨拶にやってくる。母は嫌がって会わないのだが、おじいちゃんが代わりに嬉しそうに会っている。アキラも会って、お土産は受け取っている。

「とにかくだね？ アキラ」

「馴れ馴れしく話しかけないでください」

「いや……その、アキラちゃん……」

「誘拐犯の元締めに馴れ馴れしくアキラちゃんなんて呼ばれる覚えはありませんの」

「だから、どつきり……」

「まだ言う気なの!?」

「ご、ごめんなさいごめんなさい……………お母さんには言わないでね?」

「ごめんで済むかあほ――！ 言うに決まってるでしょどあほ――！」

「……………アキラちゃんは、何か欲しい物はないのかな？ なんて、何か欲しい物はないのかな？ 本当に、欲しい物は……………」

アキラは呆れた。この期に及んで、これだけのことをして、まだ物で釣ろうとしている、誤魔化そうとしている。孫をなんだと思っているのか。我がおじいちゃんながら、なんと浅ましい行為なのだろう。

だいたい、この状況なのだ。もう腸が煮えくりかえって煮えくりかえって、欲しい物など咄嗟には思いつかない状況なのだ。

だからアキラは。

「とりあえずお菓子一年分、後でそれプラス何か考える！」

叫んで、電話を切った。

どつと疲れが出て、しゃがみ込んでしまいそうになるのを、アキラは堪えた。

とにかく事件は解決した。

と言いたいところだが、背中に痛いほどの視線。

もちろん、山田飛鴻だ。

アキラの後ろで、アキラと若頭との会話やおじいちゃんとの電話を聞いて、誘拐犯がアキラのおじいちゃんだと知ってしまった彼が、いったい何を考えているのか、何を要求してくるのか。

アキラには手に取るように分かるような気がした。

（さて、どうしようかな？）

振り返るのが、ちょっぴり怖い。乙女の夏の到来である。

（そうか、そう言うことでござったか）

山田飛鴻は、全ての真相に気づいていた。

目の前の光景。土方アキラが敵と和気藹々と語り合っていることで、それは確定的だった。

土方アキラは、柳生忍者、それも中忍だったのである！

考えてみれば土方アキラがあ程度の忍者にナイフを突きつけられたくらいで、悲鳴を上げるのはおかしかった。すべては、土方アキラの演技だったのである。山田飛鴻を捕らえるための、名演技だったのだ。土方アキラの白い歯なら、ナイフくらい、バリバリと噛

み砕いてしまはずだった。と飛鴻は惟道から仕入れた情報でそう考えた。

「とりあえずお菓子一年分、後でそれプラス何か考える！」

報酬の交渉だろう。それを終えて、土方アキラは電話を切った。

電話の相手は、きつと、そう――

アキラは電話を切ると、深呼吸して、――とりあえず振り返って、につこりと微笑みかけた。

少年は両腕を傲然と組んで、凶悪にふんぞり返っている。

少し……だけ、……怒っているっぽい、ようだった。

よくよく考えるまでもなく、超大企業山田グループの御曹司の誘拐なのだから、世間に知られると、全国規模で一面トップは間違いなしだった。

――うっかり八兵衛、うっかり孫ごと山田陽子の息子を誘拐。

洒落にならない。アキラまでお茶の間の人気者だ。

「その……どう説明して良いか分からないけど……、悪気はなかったのよ？」

アキラはしどろもどろで言い訳する。何とか誤魔化さなければいけない。しかし説明になっていないことは自分でも理解していてお顔は真っ赤だった。

少年は、ゆっくりと首を横に振った。

「全て、分かっているでござる」

語気荒く、飛鴻が告げる。

アキラは唇を噛みしめた。やはり。どうしようもない弱みを握られてしまった。一生、こいつに頭が上がらなくなる。きつとこれから一生、事あるごとにお菓子をたかられてしまうのだろう。給食のヨーグルトを強奪されたり。呼び捨てにされたり、スカートを捲られたり。なんて破廉恥なヤツ。アキラは上目遣いで飛鴻をにらみつけた。

そんなアキラに対し、飛鴻は、両腕を胸の前で組んで、その胸を

反らして、告げる。

「全て、分かっていたでござる。柳生が、手段を選ばないということとは！」

「……はい？」

アキラは素っ頓狂な声を出した。

驚く土方アキラを前にして。

山田飛鴻は、両腕を傲然と胸の前で組んで、頷いた。

「畏だと最初から気づいていた。わざと捕まったのだ。さあ、石舟斎の元へ連れて行くがいいでござる」

畏とわざとの所に力を込めて、はっきりと発音する。ここの誤解だけは、是非とも解いておかなくてはならない。

「……せ、せき？」

土方アキラが聞き返した。

「せ・き・しゅ・う・さ・い」

「せ・き・しゅ・う・さ・い？」

土方アキラは一語一語、ゆっくりと飛鴻が言うとおりに、なぞつて言った。

「そうだ」

と山田飛鴻は満足げに頷いた。

「それって……なに？」

土方アキラは、この期に及んでまだすつとぼける気のようにだった。いや、山田飛鴻がどれだけ柳生の内情を知っているのか、探りを入れているのだろう。上等でござる。

「柳生石舟斎。柳生新影流の太祖だ。人を殺す殺人剣は駄目だとか、人を生かす活人の剣が良いとか言っている人だ」

「……ヘー……。立派な人ね……。いや、何となくで、私には分からないんだけど……」

山田飛鴻は首を横に振る。柳生忍者め。柳生石舟斎を美化しようとしても、その手に乗る山田飛鴻ではない。山田飛鴻は違いの分か

る男なのである。

「表向きだ」

「表向き？」

「そうだ。影では柳生忍者を養成して、戦国の世を悪夢と混沌に陥れた忍者大魔王だ」と

「……へー……」

「愛玲が言っていた」

「………へ、えー……」

「さあ、すべての元凶、柳生石舟斎の元へ連れて行くでござる！」
土方アキラは、ぐうの音も出ないようだった。

飛鴻が何を言っているのか、アキラには理解できなかった。理解できないけど、でもきつと山田家的なユーモアなのだ。それは分かる。貴久鉢もわけのわからない歴史上の人物の話をして、一人で上機嫌に笑っていることがあるから。こいつもアキラの辛い立場を考えて、冗談で済ましてくれようとしているのだろう。こんな目にあつたのに、冗談で済ましてくれようなんて。なんて、なんて出来た男の子なのだろう。山田飛鴻という男は。

アキラは、俯いて、両手をぎゅっと握りしめる。

少年の顔を見るのが、なんかちよつと、恥ずかしい。生意気で破廉恥なヤツだと思っていたけど、不器用なだけで、本当は話の分かるヤツだったとは。一方的に敵視していた自分が、恥ずかしい。恥ずかしくて、アキラはぐうの音も出なかった。

だけど、少年が元凶の元へ連れて行けと言っているところに、アキラはちよつとだけ引かかっていた。暗に誘拐を企てた八兵衛おじいちゃんの所に連れて行けと言っているのかもしれない。

だから、彼のペースに合わせて、冗談で進めてしまふべきか、ちゃんと謝って許して貰うべきなのか、二者択一で、アキラは少し悩んだ。

が、答えは最初から出ていた。

この土方アキラが——お姉さんなのに——情けを掛けられた上、
山田飛鴻に——年下の男の子なんか——謝れるわけがないじゃない！

とアキラは乙女だから恥じらった。

「分かったわ」

何かなんだろと、子供の冗談で押し通すのだ。誤魔化すのだ。
せつかくの好意を踏みにじるのは良くないし。それできつと、二人
は対等の親友——あわよくばアキラが優位の親友——になれるだろ
う。

「忍者大魔王の元に、連れて行くわ」

明るい声で、アキラは笑った。

少年は満足そうに、こくりと頷いた。

……とはいえ、さあ、どこに連れて行けばいいのか？

山田屋敷にも行きにくいし、自分の家は問題外。さあ、誰がいい
？ どこがいい？ 忍者大魔王とその秘密基地は……。

（ああ、あった！）

一力所だけ。思いついた。

山田町には戦女神要塞がそびえていて、そこには丸山神父が住ん
でいたのだ。

よくある、男女間の誤解だった。

第六章 問答無用の要塞戦（一）

鯨波組の馬鹿たちをぞろぞろと引き連れて……と言つか彼らの車に乗ってだが、アキラは忍者大魔王、つまりは神父さんの教会へとやって来た。もちろん飛鴻も一緒だ。

少年は、首が折れるほどのけぞって、教会を見上げている。

「……………」

言葉も出ないほどに、彼は驚いているようだった。

教会の高さは、山田タワーの半分にも満たないが、横幅は何倍も広い。入り口に面した外壁は、300メートルの幅がある。奥行きなら、500メートル。

真下から見上げたときの、そのし掛かる威圧感は、山田タワーの比ではなかった。

山田陽子の結婚式でこの教会に招待された各界の代表者たちが、未だに夢でうなされるといふほどだ。うなされる最大の理由は、聖堂が地下深かった上に、生き埋めにされそうな恐怖を味わったからだとも、言われてはいるが。ちなみに「大聖堂は、核を打ち込まれても簡単に埋まるほど柔ではないわ」と母が変な自信で小鼻を膨らまして断言していた。

車の音を聞きつけて神父さんが、ひよこひよこ出てきた。

「やあ、アキラさん、いらっしやい。飛鴻君もいらっしやい。お茶はどうですか？」

神父さんは、いつもと変わらない落ち着いた態度で、にこにこ二人を手招きした。湯飲みが足りるかなあーと嬉しそうに呟いている。小さな背中が、彼の教会に入っていく。

神父さんの聖堂は、超高層ビルの一階に間借りしているコンビニのように——実際間借りしているようなものだが——虹ヶ丘愛天使教会の真ん中あたりに、ちょこんと埋め込まれていた。

虹ヶ丘愛天使教会の中で、本当に教会と呼んで差し障りない部分

は、この神父さんの小さな聖堂と、地下深くの大聖堂だけである。

他は、混沌の迷宮だ。だから入るな、と母から何度も注意されているが、アキラは時たま仲間を引き連れては忍び込んでいる。

アキラは神父さんの後ろ姿を笑顔で見送ってから、飛鴻を促して教会の中に入った。

外はすでに暗いが、聖堂内は明るかった。ステンドグラスに照明が反射して、優しくきらきらと輝いている。冷房など全くかかってないが、外よりは少し涼しいような気がした。

夜中の教会はとても優しく、神々しかった。今度、竜虎たちと一緒に来よう、とアキラは思った。

神父さんは、小さな聖堂を通り抜けて、奥の部屋に入っていた。お茶の用意をしに行ったのだろう。扉の奥には、神父さんの寝泊まりする生活圏がある。四畳一間と台所にトイレ、物置で行き止まり。迷宮内部に続く道は、祭壇の裏側に設けられている。他にも要塞内部に進入する道は沢山あって、アキラも9つばかり把握していた。アキラは聖堂に並ぶ長椅子に腰掛けた。少年にも薦めた。

月明かりの下、聖堂の前には、鯨波組の面々が所在なげに立っていた。呼んで上げようかとも思ったが、止めた。聖堂に彼らは似つかわしくないし、何よりあんな大勢に入ってこられては、中が暑苦しくなる。

神父さんが、湯飲みをのせた盆を持って、帰ってきた。

アキラは立ち上がって、それを受け取った。少年の前に一つ置いてから、教会前の鯨波組に届けてやった。

男たちは、恐縮して……というか、怯えながら受け取っていく。毒殺されるところだと思っているのか、怖々湯飲みの中を覗いている。きよろきよろと、誰かが飲むのを待っている。指を突っ込んで、風にかざしたヤツまで居る。

アキラが若頭の足を蹴りつけたときに、神父さんが残りのお茶とお茶菓子を抱えて戻ってきた。お茶菓子はもう鯨波組には届けてあげなかった。

聖堂でのお茶会は、愛天使教会ではごく普通にある光景だった。神父さんの説法というか雑談を聴きながら、お茶を飲んで、お茶菓子を頬張るのだ。

一番よく訪れる客は、アキラである。神父さんのお墨付きだから間違いない。

だからといって無銭飲食しているわけでは断じてなかった。手みやげとして、家からお茶の葉やお茶菓子をちよるまかしてきては、ちゃんと納めている。

お茶を飲みながら、身振り手振りを色々交えて、神父さんと談笑した。

だいたいアキラが話をしていて、時たま神父さんが相づちを打つ、少年は黙って聞いている。

ひとしきりアキラは話したあと、一息ついて、欠伸をした。なんだからすぐく疲れていて、とても眠い。そうそろ帰ろっかな？ そう思ってたアキラは、少年に視線を移した。

少年が、ゆっくりと頷いた。

そして、神父さんに向き直った。

「お前が、柳生石舟斎で、ござるか？」

厳しい口調で、尋ねる。

寝ぼけ眼をこしこし擦っていたアキラは、しばらく固まってから。「あ」

と呟いた。アキラはすっかり、まったりとしていて、不覚にも忘れていたのだった。

「はい？ 何のことでしょうか？」

神父さんが、首をかしげていた。

ちらりとアキラを見た。アキラはあたふたした。

神父さんは微笑んで、胸を張った。

「ああ、そうですよ。私が柳生石舟斎です」

何も分からないままに、神父さんは察してくれたようだった。アキラは胸をなで下ろした。

が。

だが。

しかし。

少年が、立ち上がった。

ぽんつと背もたれを乗り越えて、神父さんの横に飛び降りる。

神父さんは怪訝そうに首を傾げて、それでも笑顔を絶やさずに立ち上がった。

そして。

「ふおおおおあああー！ー！」

「げふう」

飛鴻の拳骨が、神父さんの腹にめり込む。

丸山神父が三つの長いすを巻き込んで、吹っ飛んでいく。

倒れた長いすの向こうから、神父さんの足だけが天井を指し示して、突き出ている。

それが、ぴくっぴくつと2、3度痙攣してから、ぱたりっと落ちた。

「……あ……れえ？」

アキラ、呟いた。

少年が、ゆったりと振り返った。目前のアキラを見据えて。

「違う」

少年が、呟く。

「これは、柳生石舟斎ではない」

アキラは座ったまま、ごくり、とつばを飲み込んだ。

「柳生石舟斎はどこだ？」

少年が問う。

「……………でござる」

ちいさく付け足した。

ふるっふるつと、アキラは、ただ、首を横に振った。とりあえず、お茶を一口飲む。

よくある男女間の誤解は、早めに解いておかないと大変な騒動に発展することがある。

「何事ですかあつ、お嬢さん！」

鯨波組若頭・大鳥敬吾が異変というか異音を察知して、聖堂の中に駆け込んできた。後ろから鯨波組の面々がぞろぞろと付き従う。

「こつ、これはっ？」

聖堂内の惨状を目にして絶句する若頭に、アキラは口をぱくぱくした。涙目だ。

「おつ、お嬢！ ご無事ですか！」

若頭が駆け寄ってくる。

少年は、彼を敵と認識した。

「ふおおおああああ」

「げふう」

おたけぶ飛鴻。

しばかれる若頭。

立ち止まる鯨波組の面々。——何がどうなつてこうなったのか、鯨波組の彼らには理解できていないようだ。呆然とした顔をしている。自慢ではないが、アキラもてんで理解できていなかった。ついでに、鯨波組は一度飛鴻に手ひどくやられていて、少年の危険度を身を持って把握していた。足が止まるのも無理なるかな。

少年がアキラを見据えて言う。

「さあ、本物の柳生石舟斎はどこにいるでござる？ 火を吐き、雷を呼び、雲とかトナカイとかタクシーとかに乗る柳生石舟斎はどこでござる？」

……なにそれ？

「そんな人、知らないわ」

アキラは毅然とした表情を作って言った。

今、分かった。確信した。

こいつは最初から難癖を付けてアキラを痛めつける気だったんだ。

わたしから、山田町を奪い取るために！

愛天使教会を奪い取るために！

訳の分からないことを言っているのは、心神喪失で無罪になる為少年法だけじゃ飽きたらず、刑法39条とのダブルパンチで無罪になるつもりなんだ！

少年は、じつとアキラを見下ろしている。

アキラも負けじとにらみ返す。二人は微動だにしない。

それを確認してから、恐る恐るといった体で、鯨波組の面々が忍び足で進んでくる。若頭の転がる地点まで進軍すると、取り付いて揺すり起こす。

「お……お嬢を……お守り、しろ」

若頭が、絶えそうな息で命じる。

鯨波組に緊張が走る。いやだよう、と顔に書いてあるのが、アキラには読めた。

それでも、

「うつ、うつわっ……！」

震える足を叱咤して、一人の若者が駆けた。

「ふおおおおああああああ！」

「うぎゃあ」

転がって戻っていく。

それを契機に、鯨波組は覚醒した。極道さんのプライドを取り戻したのだ。

「一人ずつじゃ駄目だ、取り囲めえ！ 数人で取り押さえるんだあ！ いくぜ、こらあ！」

乱戦となる。

狭い聖堂内を、椅子の破片や、湯飲み、人間の血や体（別に千切れてはない・丸ごと）が、飛び交った。

アキラはあたふたと、這うようにして壁際に逃れた。

一人、二人、三人と転がっていくにつれ、血のにおいが漂い始める。

もちろん鯨波組の面々で、少年は健在だ。

「おじょー、今のうちですぜ！ お逃げ下せー！ー！」

と言うやくざ者の声で、アキラは我に返った。

少年とアキラの距離は開いていた。

少年とアキラの間には、三人のヤクザ者が立ちふさがっている。

他の人は、見えない。やられたのだろうか？

出入り口からの脱出は不可能だった。少年が待ちかまえている。となると逃げ道は一つしかない。アキラはそう判断して聖堂の奥へ駆けた。

少年が、前に進む。極道が立ちふさがった。少年が拳を振るう。

「あべしっ」

また一人、鯨波組が倒された。

アキラは祭壇の裏側に回ると、フタを引きはがした。

「ひでぶっ」

鯨波組が一人、壁にはじき飛ばされた。

アキラの前に、階段が出現する。アキラが片足を其処に突っ込んだとき。

「ぶげごげえ」

うめき声と同時に、アキラの直ぐそばにある祭壇に何か――たぶん最後の一人――がぶち当たり、大きく揺れた。アキラは身をすくまし、瞬間的に目を閉じ。

そして。目を開けたとき。

アキラの視界の中に、運動靴。泥に汚れた、運動靴。

アキラは、ゆっくりと、見上げた。

両腕を胸の前で傲然と組んで、血にまみれた少年が、アキラを見下ろしていた。

アキラの唇が、引きつった。だめだ、逃げれない。そう思ったとき、視野がきゅんと、狭くなった。手足も石化したように、動なくなった。

ふと。少年が、視線を落とし、足元を見た。

アキラも、彼の足元を、見る。

若頭・大鳥敬吾が、少年に縋り付いていた。

「お、おじょー！ お逃げくだせー！」

若頭が、ひび割れた声で、叫ぶ。

その声で、アキラは、びくりと身をすくめた。石化が解けて、身体が動いた。急いで階段を駆け下りる。

ちよつとして、

あべしつ——ひでぶうつ——ぶげつ——ごげええええ——

という断末魔が、地階のアキラの耳にも、反響しながら響いてきた。

腹部を四度蹴られて、若頭の手は、その力を失った。

自由になった少年が、ゆったりと祭壇の裏に消えていく。

若頭・大鳥啓介はかすれた視界の中でそれを見ていた。

聖堂内には子分たちの無惨な亡骸が散乱している。幾人かは死んだふりをしているような気がしないでもないが、確認する余裕はなかった。若頭のあばらは、明らかに幾本か折れていた。

若頭・大鳥啓介は自らの意識がさよならする前に、スーツの胸ポケットをまさぐった。震える手で、携帯電話を掴み出す。

組事務所、組長宅、自宅、娘の携帯、うっかりの旦那の携帯、愛人宅、土方家など、幾つかの番号が並んでいる。

どこに架けるべきかは、分かっていた。今は一刻を争う緊急事態だ。

電波は飛んだ。大鳥敬吾の執念をのせて。

山田町の女帝の携帯へ。

「もしもし？」

緊張した彼女の声が聞こえる。

「お……じょうさんが……おぼっちゃんに……きょう……か……い……まる……やま……に」

最後の力を振り絞って、其処までを伝えてから、やるべき使命を

終えてから、若頭は力尽きた。真つ白な灰になりながら、深い深い、眠りへと落ちた。

階段を駆け下りた時点で、アキラは冷静と言えないまでも、思考力を取り戻していた。

アキラは何度も教会には忍び込んだことがあった。地の利なら得ている。逃げ切れる自信はあった。

少年はきつと迷うだろう。アキラが過去に何度も遭難したように……もつともそのせいで教会の大部分の部屋は封印されて入れなくなってしまったが……それ以前に、大半の場所は元から入れなかったし、ぶつちやけ未完成ばかりだったが……とにかく、アキラは迷子になって泣き叫ぶ少年を尻目に、知っている出入り口の一つから、そつと抜け出すだけでいい。

……そんな考えを抱いたのは、最初の三秒ほどだった。土方アキラは、必死になって走っていた。全力疾走だ。後ろから少年が追ってくる。

祭壇裏から進入できる地下一階は——倉庫だった。

沢山の倉庫部屋以外は、一本のふとーい廊下なのであった。個々の倉庫にはアキラが過去に忍び込んで、崩れた荷物で生き埋めになりかけて以降、鍵が掛かっていて、隠れる事は出来ない。もし鍵が開いていたとしても、少年が背後から見ているので、隠れる意味もない。逃げ込めば袋のネズミで、倉庫の赤いシミに転じる。

廊下は500メートル、ひたすら直線なのである。

障害物もない。誰か何か物置いとけよっ！ と叫びたいくらいだが、あまり使われていないのだから致し方ない。

ひたすら、駆け抜けるしかない。

走力には自信があった。虹ヶ丘小学校の5年生の女子の中では二番目に速いし、クラス男子にだって持久力では勝っている。だけど、必死で走った。山田飛鴻の走力と体力は、今日のテストで嫌になるほど思い知っていたから。

反響する足音が、段々と近づいてくる。

恐怖でちびりそうになる。涙で目がかすむ。

息も絶え絶え、アキラが反対側の階段に到達するときには、悪魔の息吹は、背後にまで迫っていた。

階段を駆け上がる。悪魔くんも追って来た。

一階に上がると、外への出入り口があった。だけどアキラは逡巡することなく、あえて廊下に飛び込んだ。外へ出てしまうと、それこそ隠れる場所がない。

コンクリートの廊下を駆ける。

アキラの肺と心臓は、悲鳴を上げていた。

少年が、追ってくる。至近距離に迫っていた。

足が重い。つらい。肺が痛い。限界だ。アキラの速度が落ちる。

少年との距離が一気に詰まった。アキラの腕に、少年の手が食い込んだ。

アキラの身体から力が抜け、前のめりに倒れた。

少年も引きずられるように、転倒した。

ぜえぜえはあはあ。ぜえぜえはあはあ。ぜえぜえはあはあ。

汗にまみれ、二人して息が静まるのを待っていた。

「……さあ……せき……しゅうさい……の……もとへ……つれていけ」

三十秒ほど経ってから、少年が言う。

アキラは答えなかった。

まだ息を整えるのに必死だった。せつかく吸った酸素を無駄に使う気にはならない。それに捕まっただけからは、不思議と恐怖は薄れていた。酸欠で、頭が朦朧としている為もありそうだが。

じつと、二人は見つめ——もとい、にらみ合った。

「おや？ 坊ちゃん、嬢さん、どうしなさったんで？」

本当にすつごく偶然にまたま戦女神要塞の廊下を散歩していた熊が、通りがかって言った。

「あああ、熊さあん！」

アキラは、がばあっと起きあがり、喜びの声を上げた。

通称、熊。

元、横綱、にほんかいくま日本海熊こと武田勝夫。

現在は庭師。

熊は山田町最強の人物で、だから少年よりもきつと強いのだった。

「山田町には、熊がいるわ」

山田町へと至る船の中で、愛玲が言っていた。

「そいつはね、鉄の体を持ち、爆裂熊熊拳ばくれつくまくまを使っわ。まだ今のあなただでは敵わないわ」

山田飛鴻は不服だった。

だが、熊とのファーストコンタクトで、飛鴻はそれを認めざるを得なかった。熊との手合わせで、嫌と言うほど思い知らされてもいた。

熊は明らかに、飛鴻よりも強い。一目見て、それが分かった。体全体から闘気が漏れ出ていた。仕合までもない。やれば負ける。そう悟った。それでも、戦った。そして、負けた。飛鴻の攻撃では一度として、熊にダメージを負わせることは出来なかったのだ。

鉄の体を持つ男。

それを打ち破るには、鉄すら引き裂く父や愛玲で無ければ無理なのだろうか？

否！。

山田飛鴻は、両腕を胸の前で組んで、傲然とふんぞり返った。

目の前にはかつてない強敵である熊の巨体がそびえ立っており、その後ろには柳生の少女が隠れていて、あっかんべーをしている。

熊を撃破しない限り、柳生と雌雄を決することは、出来そうもない。そう言う状況なのだ。いや、熊すらもが柳生の走狗なのかもしれない。恐るべしは柳生！

呼吸が安定するのを待って、山田飛鴻は、ゆっくりと両腕を解いて、構えた。くい、くい、と熊を手招きする。

熊は躊躇しているようだ。何かを察したのかも知れない。少年を見て、背中の少女を見た。

「やっちゃって、やっちゃって。あいつ悪い奴だからやっちゃって！」

柳生の少女がはしやぎながら、飛鴻を指さしている。

山田飛鴻は、もう一度熊を手招きした。

「しょうがないですなあー」

熊が嬉しそうに頭をかいて、構えた。

山田飛鴻の誘いに乗って、熊が突進してくる。ゆっくりだけど

かかった！

飛鴻の手が翻った。

一閃、二閃、三閃、四閃、五閃、六閃、七閃、八閃――。

熊の体に次々と手裏剣が突き刺さる。

崩れ落ちていく巨体を前に、

「急所は外して、ござる」

飛鴻は、告げたのである。

鉄の体を持つ男。それを打ち破るには、鉄すら引き裂く父や愛玲で無ければ無理なのだろう。そう、武道の試合ならば――。

だが山田飛鴻は、ただの武道家ではなかった。

純然たる忍者だったのである！

熊の敗因は、それを見誤った事と、己の方が強いと慢心していたことだろう。目には目を、歯には歯を。鉄には鉄を！

崩れ落ちた巨体の向こうで、柳生の少女は、信じられないという顔をしていた。彼女も、熊の力を過信していて、山田飛鴻を見誤っていたのだ。

ひとで……って言うか手裏剣が、一つ、二つ、三つ……なんだか沢山、武田勝夫の体の上で、光っている。白い光だけでなく、なんだか、あかーく光っている。

悪夢を振り払うように、アキラは頭を横に振った。

それでも、目の前には武田勝夫が寝転がっていて、体のあちこちに赤い花が咲いている。

私は、どこに迷い込んだのだろうか？。

ああそうだ。ここは姫様の中だ。巨大戦艦を沈めたとか、石油コンビナートを爆破したとか、とある町のガチャガチャを全部買い占めたとか、そういう類の伝説を沢山持つ魔女の腹の中なのだ。

そして今日は彼女の亡くなった日であり、誕生日であり、目の前にいるのは、彼女の血を引いた人間……アキラのすべてを打ち碎くべく山田町にやって来た少年。ゆつくりと、少年が、武田勝夫から、アキラへと視線を移した。アキラの血の気が引いていく。

「いつ、いつ、いつ、いつやあああああーーーーー！」

土方アキラは逃げた。

要塞の奥深くへと。

両腕を胸の前で組んで傲然とふんぞり返っていた飛鴻は、柳生の逃亡を前に、慌てて両腕をほどいて追いかけようとした。

とどのつまり、山田飛鴻は、熊の横を気軽に通り抜けようとしたのだ。

その時！。

「うっ、いてててて」

血まみれの熊が、のっそりと起きあがった。

「はうううううっ！！」

山田飛鴻は驚いた。飛び上がった驚いた。

落下してから、這うように距離を取った。じたばたと胸元から手裏剣を引き出し、構えた。

「坊ちゃん駄目ですよー。子供がこんなもの使ったら」

体に突き刺さった手裏剣を一つ抜き取って、熊が怖い顔で説教してくる。

「……………う、ござる」

山田飛鴻はカクンカクンと精一杯うなずいた。

山田飛鴻は愛玲の話を思い出していた。

——爆裂熊熊拳……はくれつくまくま そいつはね、巨木すらもたやすく引き裂く必殺の殺人拳なのよ！

船の中で、愛玲は叫んでいた。とても真剣な顔だった。

——もしも、どうしても熊と戦うのなら、爆裂熊熊拳はくれつくまくまを出される前に終わらせなさい。でなければ、

——くまくまで、死ぬわ！

叫ぶ愛玲の後ろで、どばーんっと高波が踊っていたのを覚えている。

飛鴻の背筋を、冷たい汗が這っていく。膝ががくがく笑っていた。震える手が、手裏剣を落としそうになる。握る手に、力を込めた。手裏剣は、残り16枚。装備できるだけ持つてくるのだったと後悔したが、もう遅い。これだけで、勝負を決めねばならない——いや、他にもいくつかの忍具を所持していたが、たとえ何が幾つあったところで、常識的に考えて子供が手裏剣とか投げたくらいで鋼鉄の肉体を打ち破れるわけがない。慢心していた。何でそんな気になったのかすっごく後悔した。とりあえず飛鴻は手裏剣をしまつて正座した。

「まったく。愛玲さんにも困りもんですなあ」

熊が頭をかきながら笑っている。服が所々赤くなっている。手裏剣が光っている。でも熊は頭をかきながら笑っている。

飛鴻は力一杯、首を縦に振って同意した。白虎寺でお多恵さんに怒られたとき以上に同意した。

「あれ？ アキラお嬢さんは？」

熊はきよろきよろと辺りを見回していた。

それから熊は、飛鴻を見て——飛鴻は首を竦ませた——言う。

「ああ、鬼ごっこだったんですか？」

飛鴻は力一杯首を縦に振った。愛想笑いも忘れなかった。

「そいつは邪魔しやすいやせんでした。全く、アキラお嬢さんは勝ち気だから。いくら捕まりたく無いからって、毎度のことながら、

子供の遊びに大人を障害物に使うのは反則でっさね」

笑う熊に、飛鴻はやっぱり出来るだけ大きく同意した。

熊が、ゆっくりと横に移動した。

「もう行つて良いですよ」

道は、開いた。

飛鴻は、恐る恐る熊の横を通り抜ける。

「ああ、でも坊ちゃん？」

真横での熊の一声に、ぴきりつ、山田飛鴻は固まった。

狙い澄ました距離だった。この距離は危険だった。爆裂熊熊拳を

食らうと5回はくまくまで死ねる距離だった。

くまくまの間合いの中。熊が続けて言う。怖い顔を作つて、くま
くまな声音で。

「危ないから、か弱い女の子にそんな物、投げつけちゃいけやせん
よ？」

飛鴻は、カクツカクツと頷いた。

熊が、にっこりと微笑んだ。

飛鴻はカクツカクツと歩き去る。

愛玲の言つた通り、まだまだ熊は彼の敵う相手ではなかったのだ。
土方アキラとの、距離は開いた。

しかしながら、とにかくにも、山田飛鴻は女の子には手裏剣を
使わないという交渉の末に、独力で熊の砦を突破したのだった。

所変わつて要塞一階——神父さんの聖堂。

「和尚さん。ちやお」

丸山神父が覚醒したとき、目の前には美女が居た。

愛玲だ。屋敷でお多恵さんと若頭の電話を盗み聞いてから、ここ
まで最短距離を走つてきたのだった。後ろには、汗をかいた王毅が
いる。

「ああ、愛玲さん。お帰りなさい。お茶はどうですか？」
にこにこ神父さんが言う。

「ごめん。後にする。先に飛鴻を探してくるわ」

「ああ、飛鴻君……はて？ 先ほどまでそこに？」

神父さんは、首を傾げている。

愛玲は、気まずそうに微笑み、祭壇に歩み寄った。それから、振り返って、

「そうそう和尚さん。多恵のヤツが来ると思うから、足止めしといてね？」

「はいはい。分かりましたよ」

うんうんと、丸山神父が安請け合いした。

要塞内部・二階――。

アキラは必死に走っていた。

ただひたすら走っていた。

二階にも脱出できる出入り口はある。そして二階は、要塞の中でもっとも隠れるのに適した階だった。

縦横に廊下が走っていて、幾つもの部屋がある。部屋と部屋は繋がっていて、半分ほどには鍵も掛かっていない。ほどよく物も置かれていて、障害物になる。簡易迷路といった有様だ。

じっさいアキラはこの2階を友達との隠れんぼに利用していて、構造も熟知していた。

ここのなら、逃げ切ることも可能だった。上の階に進めば進むほど、面積も少なくなるし、未完成のために、動ける範囲は狭まっていく。隠れる場所はなくなっていく。

常識的に考えれば、この階に隠れて救助を待つか、2階に2つある出入り口の一つから、素早く脱出するのが妥当なのだろう。が、アキラはその逃げと守りの選択肢を選ぶつもりはなかった。この一つ上の階には、もっと安全で、もっと確実な生きるための手段があった。

アキラは立ち止まることなく、ひたすら走っていた。

彼女は、階段を駆け上がった。

目の前に、大きな扉が迫る。ぶち当たるように、その扉を押し開いた。

涼しい風が彼女の体に吹き付けてくる。

木々の鮮やかな緑が彼女の目に飛び込んでくる。

うがーうと獣の叫びが彼女の耳に飛び込んでくる。

彼女は足を止めた。

その場にへたり込んだ。

獣が、彼女の姿を見つけて、走り寄ってくる。

「うふふふふふ」

汗にまみれた土方アキラは、笑っていた。

「そっちがその気なら、こっちにだって、考えがあるんだから」

愛おしそうに、獣を抱きしめる。

「絶対、懲らしめてやるんだから」

口元を歪め。

土方アキラは、山田陽子の後継者は、微笑んだ。

「誰が山田町の支配者かを、教えて上げるんだから」

山田町最強の獣を、伝説の魔獣を、抱きしめながら……獣は少し、毛に汗が付くのを、嫌そうにしていたけど。

山田飛鴻は、眉をへならせながら、2階の迷宮を探索していた。
ひとつひとつ、扉を開けていく。

「ござる？」

呼びかけてみるが、反応はない。人の気配もない。とても不安な気持ちになる。

ばぁんっ——左斜め上から、大きな音が、扉をぶち開ける音が、小さく響いてきた。

数秒、天井を見上げた後。

くりつと眉を凜々しく上げ、山田飛鴻は駆けだした。

柳生はすでに、この階には居ない！

愛玲の到着から少し遅れて。教会の前に、沢山の車が到着した。
お多恵さんと、梁一傑率いる白虎寺の精鋭たちだ。

「牧師さん！ 大丈夫ですか！？ アキラは！？ 飛鴻君は！？」
お多恵さんが、急き込んで尋ねた。

辺りには椅子や砕けたステンドグラスが散乱していて、床や壁には血痕や吐瀉物が張り付いていて、鯨波組が転がっていて……牧師さんがお茶を飲んでいる。

「はいはい。来られましたよ。先ほどまで一緒にお茶を飲んでいたのですが……さてさて、どこに行ったのか？」

牧師さんが首をひねる。

「大丈夫です。二人とも無事で、怪我もないようですよ」

鯨波組の男たちから簡単な聞き取りを終えたアッキーが、お多恵さんに報告した。

「どうやら誘拐は、八兵衛さんが山田グループの重役連中に踊らされて、鯨波組を使って実行したようです。それなら鯨波組はすっかりアキラちゃんまで掠っちゃって、『これはまずい』と慌てて解放したんだけど。なんだか飛鴻君が柳生忍者の犯行だと勘違いしたみたいで『柳生石舟斎の元まで連れて行け』と、言い出してさあ、大変。でも、おじいちゃんが犯人とはいにくいアキラちゃんは『これはしめしめ誤魔化してしまえ』と神父さんの教会に連れてきたみたいです」

お多恵さんは、眉をひそめながら聞いていたが、

「……とにかく、無事なのね」

「はい、無事です」

とアッキーがはっきり答える。

「………よかった」

お多恵さんは、深々と長い息を吐いて、溶けるように、その場にしやがみ込んだ。

その前をメイド達が往復し、負傷者を収容している。

「……それで、二人は？」

お多恵さんがしゃがんだまま顔を上げた。

「けど、神父さんが『わたしは柳生石舟斎だよ』って言っちゃった瞬間、飛鴻君が正拳入れちゃったみたいで、神父さんは気を失っちゃって、『こんなのは柳生石舟斎じゃない。本物はどこだ?』って飛鴻君がアキラちゃんに詰め寄ったみたいで、そしたら大鳥さんが『お嬢さんをお守りしろ』と鯨波組と飛鴻君の乱闘が始まって鯨波組はたった三分で全滅。アキラちゃんは要塞内部に逃げて今は飛鴻君が『うひょひょーう』って追いかけているようです」

「……………何? それ?」

お多恵さんが半眼で呻いた。

梁一傑を始め、白虎寺の人間たちは、出来る限りお多恵さんの視界に入らないように工夫しつつ、聞こえないふりをした。

「で、先ほど愛玲さんがやって来て鯨波組をしばきあげて二人の無事と居場所だけを端的に聞き出して、『予定通り、飛鴻は一旦連れて帰る。変更はなしよ』って王毅さんに言った後、牧師さんを起こしてから『多恵が来たら足止めしておいてね』って言い置いて後を追いかけたようです」

「……………そう、あの宇宙人、飛び出していったと思ったら……………車よりも先に着いちゃったんだ」

お多恵さんは、頭を振ってから、立ち上がる。

「ああ、そうそう、お多恵さん。お茶でもどうですか?」

神父さんが足止め工作をする。

お多恵さんはそれを無視して、白虎寺の精鋭たちにてきばきと指示を出す。精鋭たちは、小隊を結成して続々と要塞内部に突入していく。

全ての部隊が降り終わった後、お多恵さんが降りようとした時、神父さんは再度、足止め工作を施した。

「お多恵さん」

「はい?」

階段を半分降り駆けていたお多恵さんが、呼ばれて顔を出した。

「お茶を飲んでいきませんか？」

お多恵さんは、いつものように、やんわりと微笑んで、

「またこんどね」

降りていった。

足止めは二秒ほどで終わったが、神父さんは満足そうに頷き、お茶をすすった。

一分ほどしてまた次の車がやってきて、マサとヤスや他の使用人たちが降りてきた。神父さんに、「おじゃましヤス」と挨拶してから、祭壇の後ろに消えていく。

神父さんはいそいそと立ち上がって、奥の部屋に引っ込んだ。

しばらくしてから、紙とテープを持って戻ってきた。

入り口に紙を張る。

紙には、入場料300円と書かれていた。

その後7台の車が入場者を乗せてやって来て、6人がお金を払ってくれて、4人がお茶を飲んだ。

何の意味もない。

しかし神父さんは、にこにこと微笑んでいた。

山田飛鴻は、土方アキラを追いつめていた。

愛天使教会の三階だ。

ここは、ぶち抜きのワンフロアになっていた。

天井が高い。二階分ほどの高さがある。

そしてこんもり山があって、林があって、川が流れている。

外壁以外に、一切の壁も見あたらない。所々に木に模した柱が、木に混じって建っているくらいだった。青空ペイントの施された天井がなければ、まるで屋外の様相だ。

もちろん、壁にも背景としてチョモランマやネス湖や宇宙要塞がペイントされていて、閉塞感はない。

向こうの方では青空から、雨まで降っているし、空調によって下の階よりも、室温湿度が低い。

維持費では大聖堂よりも金を食うこの広大なフロアが、魔獣使い山田陽子が、彼女の忠実な僕にして最強の魔獣のために創り出した魔獣の園であることを、山田飛鴻はまだ気付いていなかった。

だから、山田飛鴻は、柳生の少女を捕縛したと誤認した。

もはや、逃がしはしない。そう、気負っていた。

だが、追いつめられたはずの柳生の少女は、広大な笹林を背に、両腕を胸の前で組んで、傲然とふんぞり返っている。

山田飛鴻も、負けじと同じポーズで対抗した。

少女が、にやりと笑った。

「遅かったわね。待ちくたびれちゃったわ」

落ちていた土方アキラの態度。まるで待ちかまえていたかのような、せりふ。山田飛鴻は、心中、僅かに動揺した。そして感じる、彼女の背後、笹林から漂ってくる強大なプレッシャー。分かりやすく言うと、獣の臭いと呼吸音。笹林から漂ってくる――獣の――。まさか、此处は――。山田飛鴻の頬を、冷や汗が流れ伝っていく。

そして、山田飛鴻は、思い至る。

襲撃してきた忍びと思えないほど貧弱だった柳生忍者たちも、あの爆裂熊熊拳の使い手・熊も、石舟斎の影武者だった老人も、すべて彼女を中心に動いていたではないか。すべての命令は、彼女から発せられていたではないか！

山田飛鴻は、今の今まで土方アキラを、柳生の中忍だと考えていた。

しかし、違ったのだ！

追いつめたのではなかった。みごとに、誘い込まれたのである！すべては、演技だったのである！土方アキラは、演技派だったのである！

土方多恵の娘にして、演技派の少女、土方アキラ、彼女こそが、

柳生の――

「……石舟斎」

苦渋に満ちた声で、山田飛鴻は呟いた。

土方アキラは、きょとんと少し首を傾げた。それから、すべてを悟った山田飛鴻をあざけるように、にやりと、今までにない禍々しい表情で、唇を歪めた。やっと気づいたの？ でも、もうおそいわ。彼女の凶相はそう語っているようだった。

笹林からは【うがーう】と小声で出番を催促するかのような、獣の鳴き声。

それに応えるように、演技派の少女が、叫んだ。

「じゅうべええー……！」

愛玲や母から伝え聞いた、山田町に住む、伝説の魔獣の名を！
うっがー……うっ！

笹林の奥で、魔獣の咆吼が爆発する。

ざざざっと何かが笹林を掻き分けて、向かってくる。

危険を察知して、山田飛鴻はアキラから飛び離れた。

山田飛鴻の鼻先を掠め、二人の間を引き裂くように、巨大な体躯が通り過ぎる。一度通り過ぎてから、アキラの横に、戻ってくる。

「ふふふっ、洗い熊の十兵衛じゅうへえよ！」

土方アキラが紹介する。

その横で「うがうっ」と魔獣が後ろ足で起立して、こめかみに手を当て敬礼する。

白と黒の愉快な模様。右目が、糸のように閉じられている。

人を遙かに凌駕するその巨体は、どう考えても洗い熊には見えな
い。

俗に、と言うか一般的に【パンダ】と呼ばれている凶獣だった。

飛鴻は本場の中国で、何度かこの獣と対峙したことがあるが、笹ばかり食べているとは思えないほどに素早く、強力な膂力を持っている。

「あいつら陰では、牛を襲って食べてるからね」

と愛玲が言って、梁一傑が否定していたが、愛玲の方が正しいと思う。

怯む飛鴻の前に、ふふふっ怖い？ という形に、土方アキラは口

元を歪めた。

そして演技派の少女は、人差し指を高く真上に指し上げた。それをゆっくりと下ろし、

「十兵衛！ 懲らしめてお上げなさい！」

飛鴻を指さして、叫んだ！ 死の宣告を！

続けて、「十兵衛。おんぶ」とはつきり発音して命じた。

うがっ——う

隻眼の魔獣が、唸った。

黒と白の強大な質量が、突っ込んでくる。

飛鴻の手が、翻る。

ひゅっ、ひゅっ。

風を切りさいて、手裏剣が迎え撃つ。

がう、うがーう

ぺち、ぺち。

獣は咆吼し、強靱な前肢で手裏剣を容易くはたき落とした。飛鴻は、飛び退く。そこを獣が通過していく。

野獣十兵衛——伝説の魔獣にして艾愛玲の一番弟子。

人族を遙かに凌ぐ戦闘力を誇るパンダ族の中でも群を抜いた実力を持つパンダ。

——あの子には数々の戦闘忍術を教え込んだわ

と愛玲も言っていた忍者の兄弟子。

恐るべしは柳生一族！ 恐るべしは土方アキラ！

まさか野獣十兵衛すらも手駒にしていようとは、誰が想像できただろう！

初めて相まみえた兄弟子を前に、山田飛鴻は死を覚悟した。

己の油断と増長を恥じながら——。

少年が愛らしいパンダにまで手裏剣を投げつけたとき、正直アキラは焦ったが、アキラの変化球ですら容易く打ち返す十兵衛は、少年の凶器ですらも、いとも容易くはじき飛ばしたのだった。

さすがは十兵衛。虹ヶ丘戦女神の切り札、九割打者の貫禄だ。

十兵衛は右目を失明している。山田町に伝わる伝説では、山田陽子の激しい修行で負った怪我だと言われているが、母の多恵は相変わらず否定している。拾われたときにすでに怪我をしていたというのである。

とにかく、野獣十兵衛。山田陽子が魔獣使いの称号を不動のモノとする切っ掛けになった動物である。

すでに風、林、火、山と言う名の四頭の猛犬や、伝書鳩の代わりにダチョウを飼っていた山田陽子だったが、さすがに子パンダを拾ってきて飼いだしたときには、国際的な問題になりかけた。なんせパンダは中国四川省以外には、ガラパゴス諸島やアマゾン川流域、西表島に極わずかに生息しているだけの少数精鋭絶滅危惧種からだ。ちなみに十兵衛は西表島系のパンダだった。

しかし文化庁パンダ課通称「マルパ」の査察に対して、山田屋敷は、パンダ模様の洗い熊だと言い張って切り抜けたという。当初は【闇に落ちかけて所々黒くなっただけのシロクマだ】と主張したそうだが、「シロクマも飼っちゃ駄目」と言われてしまい、アライグマに切り替えた。

山田屋敷の広大な敷地内に隠蔽してしまえば、発見など出来ようはずもない。言った者勝ちである。だから文化庁パンダ課も「洗い熊なら問題ないよね？ちゃんと飼育するんだよ？」と最終的には手を引いた。もちろん、裏では結構なお金が掛かったようではあるが――。

十兵衛は、その後、山田陽子や多恵、愛玲の慈愛を受けて、彼女たちを母親代わりにすくすくと育っていき、今では名実共に山田町で最強の生物となってしまうた。

人を襲うことはない。命令しなければ。

だが、野獣は命令を受けた。他ならぬ土方多恵の娘・アキラの命令だ。

うがう、うがーう、と十兵衛は少年を追いつめていく。

西表島系のパンダはどう猛だ。国際パンダ学会でも、ジャイアントパンダの中でも特にジャイアント的だと定評があった。

十兵衛の前足が少年のかかとを捕らえた。少年は無様に一回転半ひっくり返される。前足でくるりと少年をもう一度ひっくり返してうつぶせにする。十兵衛が覆い被さる。

まるでネズミをいたぶる猫のようだが、十兵衛は心得ていて、子供を怪我させることはない。細心の注意を払って少年を転がしたからこそ、今まで時間が掛かったのだ。十兵衛が本気で飛鴻を攻撃していたら、2秒待たずして肉塊と化しているだろう。伝説ではライオンを5秒で引き裂いたとも言われている十兵衛だ。

十兵衛が、のっし、と少年の背中に乗っかかる。

十兵衛が仕込まれた数多い【技】の内の一つだった。

十兵衛おんぶ。

子パンダ時代は愛らしい動作だったらしいのだが、今となつては必殺の攻撃だ。乗られた者は、泣こうが喚こうが誰も逃れられないのだ！ ちびらない限り。ちびるとさすがに十兵衛はどく。

アキラは勝負がついたことを確信して、ゆっくりと歩み寄った。

「どう？ 降参する？」

少年は十兵衛の下で、首を横に振った。

「そう？ 後悔しても知らないわよ？」

アキラは無情にも次の指令を送った。もっとも降参しても命じるところだったけど。

「十兵衛——舐める」

十兵衛が、うがーうと了解して、飛鴻の顔を後ろから舐めまくった。

「十兵衛——終わり」

少年が随分とへこたれたことを確認して、アキラが言う。

「どう？ 降参する？」

少年は首を横に振った。十兵衛の唾液が飛び散る。アキラは慌ててつばの射程範囲から飛び退いた。

絶対謝らしてやると決めていたアキラは、なおも十兵衛に命じようとした。首がもげるほど舐めさせてやると。

だが――、

「十兵衛——どく」

涼しげな女性の声が、アキラの指令を遮った。どけと言われた十兵衛が、少年から離れていく。

声のした方、斜め後ろをアキラはぱつと振り返った。

そこに、黒一色の衣装をまとったショートカットの美女が、婉然と立っていた。

切れ長の眼はアキラを素通りして、十兵衛と少年を見て笑っている。

形の良い赤い唇が、優しく微笑んでいる。

さらりとした黒い髪を、気怠そうに細い指で掻き上げる。

その仕草がとてもかっこよくて、つい釣られてアキラは真似しそうになった。

うがうつ、十兵衛が彼女の元にすり寄っていく。彼女は愛おしそうに、十兵衛の頭を撫でた。

彼女の外見はどちらかと言えば吸血鬼然としていた。だがアキラは何故か、雪女をイメージしていた。その理由ははっきりしていた。室温が下がったのだ！ 体中から一気に血の気が引いていくようだった。背筋の汗が冷たくなって、腕に鳥肌が立っていた。

こうしてせっかく決着が付きそうだった少年と少女の清々しくも愛らしい追い駆けっこは、大人たちの思惑が複雑に絡み合っても、うちよっただけ続くのであった。

何はともあれ、艾愛玲の参戦である。

第六章 問答無用の要塞戦（二）

山田飛鴻はべとべとになった顔を拭おうともせず、打ちひしがれていた。

涙とよだれでかすむ視界の中、愛玲がゆっくりと歩み寄ってくる。彼女はかがみ込むと、黒いハンカチを取り出して飛鴻の顔をふいた。

「飛鴻。大丈夫？」

優しく問いかける愛玲に、飛鴻はうなずいて肯定した。

「まだまだ十兵衛にはかなわないわ——教えておいたでしょ？ いつもみたいに無闇やたらに挑んじゃ駄目だって。十兵衛は、王毅よりも強いんだから」

諭すように愛玲が言う。

飛鴻は分かっていると言ったかわりに、そっぽを向いた。

そうすると、愛玲は、

「大丈夫よ、飛鴻。あなたはやれば出来る子なんだから。いつか必ず十兵衛よりも私よりも、きっと飛龍なんかよりも絶対強くなれるから」

飛鴻を抱きしめて言った。飛鴻は強く頷いた。

「相変わらずこいつは良いところに暮らしてるな」

振り返ると、そこに何故か王毅が居て、十兵衛の頭を撫でていた。

「ああ、愛玲に呼び出されてな」

飛鴻の視線に気付いた王毅が、自ら説明した。

そして、愛玲が告げる。

「飛鴻。帰るわよ」

飛鴻は愛玲の顔を見上げた。逡巡して、首を横に振る。

「良い子だから」

愛玲が飛鴻の頭を撫でる。その手を飛鴻は払った。
「約束が残っている」

「大丈夫よ。心配しないで」

「引き受けた以上は最後までやる」

「大丈夫。もういいの。もう解決したから」

「嘘だ！」

「嘘じゃないわ」

愛玲が首を横に振る。

山田飛鴻は、爪が食い込むほど、両手を握りしめる。

掠われて、何も出来なくて。熊にも負けた。十兵衛にも負けた。とても無力で。一傑や愛玲みたいに強くないけど。

だけど。

アキラにだけは。

負けたくない！

「まだやる！ ござる！」

飛鴻は精一杯に、愛玲を睨み付けた。

「聞き分けのない子は嫌いよ」

愛玲が悲しそうにため息を吐く。

山田飛鴻は、愛玲から飛び離れようとした。

一步速く、その手を愛玲が無造作に、だが、やさしく掴む。

飛鴻は、愛玲の手を自らの手ごと蹴り払おうとした。予想通り、愛玲が手を放した。

飛鴻は、至近距離から手裏剣を三つ放って、跳びのく。

が、愛玲はすべての手裏剣を片手でつかみ取りながら歩み寄ってくる。距離をつめて、しゃがみ込み、飛鴻の頭をくしゃくしゃとかき回す。

「さあ、帰るわよ」

飛鴻は首を横に振った。

「駄目、帰るのよ」

愛玲が飛鴻の手を取って、きつく言った。

「ござる！ にんにん！」

飛鴻は愛玲の手を払って、足払いを仕掛けた。ひょいと愛玲が

足を上げてかわす。

彼女に敵わないことも、分かっていた。

それでも飛鴻は反抗した。

今はまだ、今はもう……。

飛鴻は拳を放つ。

愛玲はかわさずに腹でそれを受けた。二発、三発と繰り返し飛鴻はお腹を殴った。

愛玲は抗うことなく、ただ愛おしそうに少年の頭を撫で続けていた。

アキラの目には、駄々っ子と、それ以上に駄目そうなお姉さんが映っていた。

端から見ていると、顔が赤くなるほど恥ずかしい光景だった。そのためなのか、元々人付き合いが苦手なのか、連れのおじさんは二人を見ないようにして、パンダとじゃれあっていた。気持ちとはともよく分かる。もし町中でこの二人に声をかけられたら、アキラも知らない人どころか、聞こえないふりをして走って逃げただろう。

ああ、私は絶対人前ではこんな醜態は晒さないぞっ、と心に誓いながら、アキラは取りあえず事件は終わったんだなあということを、何となく感じていた。

なんか妙にさめてしまっている。疲れもどっと吹き出てきた。もうどうでも良いから早く帰って眠りたい。大きく伸びをして、欠伸を一つ、ぶちかます。

少年がこのまま連れて行かれることは、間違いなさそうだった。期待の新戦力が居なくなることは惜しかったが、こんなヤツは恐ろしくて実戦でも練習でも使えない。連れて行って貰えてほっと一安心だった。

この女性が愛玲なのは、アキラも知っているのだが……。「愛玲は言葉が通じないから疲れる」と母はぼやいていたが、かなり流ちょうに日本語を話している。

それにしても、あれほど凶暴なターミネーターが子供扱いとは、世界はとても恐ろしい。ひょっとして向こうの世界には、こんな化け物ばかりがゴロゴロいたりしているのだろうか？ もしそうならば戦女神の戦力補強にちよつと良いかもしれない。プロ野球にも外国人枠が有ることだし。そろそろ山田リーグもグローバルスタンダードな視点を持つ時期に來ているのではないだろうか、などと考えているうちに、ちよつと雲行きが変わりつつあった。

少年は殴るのを止め、泣きべそを掻きながら、愛玲を睨んでいた。愛玲が心持ち、おろおろとしている。

「駄目よ、飛鴻。もう決めたんだから」

などと言っているが、声の調子が、さっきよりも明らかに弱い。

「そんな悲しい顔しないでよ。あなたのために想って言っているのよ？」

少年がふくれっ面でそっぽを向く。

「飛鴻、分かつて」

そう言う彼女の声は、泣き出しそうだ。

三十秒ほどそんなことを繰り返していて、

「ああ、飛鴻」

と言ってから、

「分かったわ。あなたのやりたいようにしなさい！ わたしも協力しちゃうから！」

すべて吹っ切ったように、お姉さんは元気に晴れ晴れと宣言した。おいっ、なんでやねんっ、とアキラは心中激しく動揺しながらも、一人虚空に向かって声を出さないように、突っ込みを入れた。

お姉さんには、今さっきまでの気怠さが無い。雪女がシンデレラに変わってしまったようだった。

少年が傲然と両腕を胸の前で組んで、アキラを振り返った。

続いて愛玲がきりつと振り向く。十兵衛も、うがう？ 一緒になつて振り向いた。

「はあー、やっぱこうなつたか」

とパンダと戯れていたおじさんだけは、下を向いて嘆息していたが、アキラはそれどころではなかった。

飛鴻、愛玲、十兵衛がにじり寄ってくる。

超強力なジェットストリームアタックを前にして、アキラは骨ぐらいは残ってくれることを祈っていた。

「おい愛玲、おまえ無茶苦茶だぞ？」

パンダと戯れていたおじさんが、消極的ながらも愛玲を止めてくれた。

アキラは人類の設計上、限界の角度でもって、首を縦に動かした。「なんで？」

愛玲が不思議そうに言う。アキラは、「その態度の方がなんでやねん！」と激しく心で突っ込んだ。そろそろ疲労が脳の隅々にまで、やばいくらいに行き届いているようだった。それを理解した上で、「耐えるのよ、アキラ」と、ことのついでに自分を慰める。このハイン状態を維持しないと、青春の厳しさにくじけてしまいそうだった。

「何でって……そりゃ……」

パンダのおじさんはそれで黙ってしまった。うちの父より情けない。泣けてくる。

自分で頑張って生きるしかない。改めて覚悟を決める。

アキラは精一杯少年を真似してふんぞり返った。息を吸い込む。

「三人がかりなら勝てるって！　へん、バカにしないでよ。年増に泣き虫にアライグマごときが、この虹ヶ丘戦女神の四番でエースでキャプテンを務める土方アキラさまに勝てるとも思っているのかしら！？……野球で勝負しないかな？　っていうか何でそんなに堂々とそこにいるのよ十兵衛！？　あんたリングとか差し入れて上げた恩を忘れたの！　もう餌やんないよ？　家族が路頭に迷っても知らないよ？」

激しく啖呵を切った。

うがーう、と十兵衛は情けなそうに、愛玲とアキラを見比べた。そろりと、ばつが悪そうにこちらに歩いてくる。

とにかくアキラは、力では億に一つも勝てないから、口げんかか、もしくは野球に持ち込もうとした。十兵衛の引き込みに関しては、それほど期待していなかったし、彼が向こうでもまさか襲ってくることはあるまいとタ力をくくってはいたが。

愛玲の目が、険悪に細くなった。

ひゅーっつと世界が氷点下になる。

十兵衛が慌てて彼女の後ろに駆け戻っていく。

「年増つて……あんたの母よりも若いのよ？」

明るかった声が一気に沈んで低くなった。

口げんかに持ち込む前に、いきなり禁句を言ってしまったようだった。確かに今の言葉は母の年代には最高にデンジャーな発言だったかもしれない。反省点である。

「じゅうべー、じゅうべー」

心細くなったアキラは友達を優しく呼んでみたが、うがぁう、と小さく答えるだけで、顔も合わせようとは、してくれない。

あつという間に雪女に戻っちゃったお姉さんが睨んでいる。

少年がふんぞり返っている。

十兵衛はそっぽを向いている。

パンダのおじさんはため息を吐いている。

アキラが土下座しようかと本気で思案していたとき、

「うわぁー！　なんだよここ！　建物の中だったんじゃないのかよぉ！」

ついにお多恵さんの放った救助隊の一隊が、到着したのであった。

その数、四人。

アキラは彼らが敵か味方か見定めようとしたが、知らない顔ばかりだったので、敵だと認識した。何で今日に限ってこんなに知らない

い奴らが多いねんつ、と泣きたくなる。こんな大勢の敵を前に、孤立無援は生まれて初めてだった。

その一人が、案の定、愛玲に歩み寄った。

「愛玲さん。飛鴻を捕獲したんですね？ よかった。そちらがお多恵さんの娘さんですか？」

「そうよ」

ぶつきらばうに、愛玲が言う。続けて、

「遅かったわね」

「すいません。道が混んでいたもので」

「多恵の一派とは遭遇しなかった？」

「ええ、出会いましたが、やつつけてやりましたよ！」

ガッツポーズする。

パンダのおじさんが割って入って、彼らに事情を説明する。

「飛鴻を連れて帰るのは止めだとき。こいつの好きなようにさせるつてよ」

ちよつと投げやりだ。おそらくおじさんには何の権限もないのだろう。哀愁が漂っている。

「へー。そうなんですか」

別に驚いた風でもなく、新手の彼がそう答えた瞬間、彼の仲間が二人、突如、愛玲に襲いかかった。

それも無言、至近距離、死角からの挟撃。

愛玲は一つをかわしたが、もう一つは避けきれずに脇腹に命中した。だが、浅い。愛玲は素早く体制を立て直し、続く攻撃を捌いていく。攻撃した二人は奇襲が失敗したことを悟って、間合いを取った。アキラを守る形に展開していた残る二人と合流する。

彼らは、アキラを振り返ると最高の笑顔でもって揃ってこう告げた。

『おじょうさん。ご安心ください。白虎寺の（ほにやら）が来たからにはもう大丈夫です。悪い（ほにやら）を（ほにやら）してご覧に入れましょう！！』

ほにやらのところは重なってよく分からなかったが、みんなの意志はよく分かった。

「どういうつもり？」

愛玲がすこむ。四人の勇者は黙している。

「そう……多恵に買収されたのね？」

愛玲が目を細めた。冷気が漂ってくる。

「覚悟は出来ていて？ 裏切り者には……」

四人の勇者が蒼白な表情で、しかし決意を秘めて身構える。

「お仕置きよ！」

愛玲の手が唸った。いつのまに取り出したのか、手裏剣の投てきだった。それも、速い！ 飛鴻よりも数段に！。

野球で動体視力を鍛えているアキラにも、辛うじてキラリと光ったのが見えたぐらいで、受け止めたり打ち返したり避けたりは、とても出来そうにない。メジャー級の速度だった。それを、同時に（おそらく）8本も！。

しかし三人の勇者はそれを散開してかわした。彼らも人間離れしていた。が、残る一人は避けきれずに、腹部に2本、被弾する。

それでも、彼は倒れなかった。凄い根性と体力だ。そしてアキラは、すぐに理解した。違う！ 逃げれなかったのではない。彼はあえて逃げ無かったのだ！ 後ろにアキラが立っていたから！ ……たぶん位置的に当たらなかったとは思うけど。けっこう斜め後ろだったから。

とにかくにも、彼はまだ其処を動かこうとしなかった。意地でもアキラの盾となる気なのだ！ その証拠に、彼はアキラを振り返って、にっと笑うと親指を立てて見せた。

それから気づいて、こそこそとアキラの前に位置を修正した。これで名実ともに安心設計の盾になった。

これは勝てる。盾の勇者に親指を立てて応えながら、アキラは確信した。超絶キラーマシン愛玲でも、この四人なら間違いない葬り去れる。かあちゃん、すごいボディーガードをありがとう。今日だ

けは素直に母の愛に感謝した。

が、

「ぐはあ」

「うはあ」

「がはあ」

期待とは裏腹に、三人は5秒で打ち倒されてしまった。愛玲、恐るべし。

ゆったり歩み寄ってくる愛玲に、一人残った腹部に傷のある勇者も怯えている。それでも逃げないところは、さすが勇者様と言えよう。

「ぎゃはあ」

けつたいな悲鳴を上げて、最後の勇者が地に沈んだ。

「まったく」

愛玲は事も無げに髪を掻き上げている。今気付いたが、彼女は汗一つ掻いていなかった。服や顔に、汚れらしき物も全く見えない。まさしく魔女である。

今、立っているものは――愛玲と、ふんぞり返っている少年と、アキラと、十兵衛と、ついでにパンダのおじさんだけ。もはや愛玲を止められるものはない。アキラの命運はつきようとしている。

「王毅さあん……協力してくださいさあい」

死んだと思われていた勇者の一人が、這い蹲ったまま、勇者らしくない懇願をパンダのおじさんにする。

「協力ったつてお前ら……いきなり愛玲に突っかっていったのはお前らだろう？」

パンダのおじさんは無情に突っぱねた。

パンダのおじさんの顔にも苦悩の色が濃くにじみ出ていたので、リストラされた後かも知れないとアキラは想像をすることで、パンダのおじさんを恨むのを我慢した。

勇者さまは、しつこく食い下がった。

「王毅さあん。飛鴻を捕らえるか、お嬢さんを保護した人はお多恵

さんから報奨金がたんまり貰えるですよ。ダブルだと凄い額になりますよー。でももうその権利は王毅さんに譲っちゃいます。……なにせミッション成功したら協力者全員がお小遣い倍増で、滞在期間も倍ですから。もちろん滞在費も食費も旅費も全額負担してもらえて、東京でも京都でも日本全国行き放題……山田グループの一流ホテルですよー。このタイミングで頑張った僕たちって実はすごく美味しいんですよ。……もちろん僕たち、後から愛玲に騙されて連れてこられたメンバーでも参加オーケーなんですよ。今からでも遅くはありませんよー。すでに王毅さん以外はみんな寝返っていますよー」

少年の切実な哀願は、パンダのおじさんの魂を震撼させた。

パンダのおじさんの目が、金色に光った。

体中からも、ずおおおおおとんと、と黄金色のオーラが立ち上ったようだった。巨体は、三回りほど大きく輝いて見える。

「何をしているお前たち。速くアキラさんを保護して、飛鴻を捕らえなさい。我は――」

洪い声で、パンダのおじさんは告げたのである。

「愛玲を始末しよう」

パンダのおじさんは修羅になったのだった。

「くっ」

愛玲は素早く王毅から距離を取った。構える。

白虎寺四天王の実力は、大飛龍、梁一傑、艾愛玲、王毅の順番できつちりと並んでいる。

試合では、大飛龍は梁一傑に十に七は勝利したし、実戦ならおそらく百に百、大飛龍が勝利するだろう。愛玲も大飛龍にはまず勝てないが、王毅には負けない。たまに禁じ手を使って、梁一傑を破ることがあるが、この四人の並び順は滅多なことで入れ替わることがなかった。四人の間には相性もあるのだが、確実な力量の差があった。

だからこそ、寺のまとめ役を押しつけられた最年長の王毅は、最強の武人である大飛龍、お金を稼いでくる映画俳優の梁一傑、女番長で色々な世界から妙な人望のある艾愛玲のあいだで、とても苦慮している。最近ではめっきり老け込んでしまった。

だが王毅は、誰が何と言おうと、いくら影が薄かろうと、老師の一番弟子なのである。

そのためか、王毅は恐ろしい特性を、もっとも色濃く老師から引き継いでいるのである。

それは秘拳九狸拳の性質と深く結びついていた。九狸拳は気を重視する。気の充実が、そのまま拳の充実に繋がるのだ。長い期間をかけて内気孔を練りに練り、それを短期間に爆発させる。普段はあえて寝ることによって、ここぞという時に、しゃっきりと景気よく目覚める。それが九狸拳の秘技『狸寝入り』。普段の王毅は、眠っている状態なのだ。

そして、気の充実とは、老師や王毅に限って言えば、お金なのである！

驚くほどすっきりと、目覚める。

王毅の実力は、そのちらつかされる金額次第では、艾愛玲を遙かに通り越して、梁一傑をも凌駕するのだった。

いま、黄金色のオーラが、彼の周りで揺らめいている。

王毅が、いやさ黄金マンが、ずいっと一步を踏み出した。

気に接触した大地が、ちゃりんちゃりんと鳴動した。

「イヤアアアアアア！」

愛玲が渾身の力を込めて、王毅目掛け、手裏剣を放つ。

ちゃりんちゃりんと、黄金色のオーラが横に流れる。王毅の姿も横に流れる。手裏剣が残像を切り裂いて通り過ぎる。ドガスト

遠くの方で、木に手裏剣が突き刺さった轟音がした。

「ちいっ」

愛玲が険しい顔で、走る。黄金色のオーラがその後をちゃりりりーんと追っていく。

子供たちを置き去りにして、大人たちの不毛な戦いは、林の中に移っていったのであった。

林の方では、モクモクと黒煙が上がっている。おそらく愛玲が使用した煙玉が火炎玉だろう。ズツドーン、とものすごい衝撃の後、木がメキメキと倒れていくのは、王毅の拳が誤爆したからだ。覚醒した王毅は愛玲の手にも余る強敵だった。だが、飛鴻は救援に駆けつけようとは思わなかった。行っても足手まといになる。飛鴻の如何なる攻撃も、あなつた王毅には通じないのだから。

そして山田飛鴻には、やるべき事が残っていた。

柳生と勝負を決するのだ。そのために愛玲は魔神となった王毅を引き離してくれたのだろう。

飛鴻は両腕を胸の前に組んで、傲然とふんぞり返った。

その前には、柳生の少女が、同じ格好でふんぞり返っており、二人の間には、白虎寺の仲間が同じ格好で立ちふさがっている。普段なら、一対一でも難しい相手だった。それが四人。とても敵う状況ではない。だが、彼らは愛玲に破れ、少なからぬ傷を負っている。勝機はある。

飛鴻がゆつくりと両腕を解きほぐして、構えた。くいつくいつと手招きする。

それを切っ掛けにして、それぞれが構えを取った。

『ふおおおおおおおおあああああああ！！』

5人、絶叫する。

こちらはこちらで、熾烈な戦いが始まった。

その横で、崩壊していく林に向かって「うがっ、うがっ―――う」と、泣きべそをかきながら、十兵衛がおろおろしていた。

魔獣の園はかつてないほど、争乱に満ちている。

両腕を組んでふんぞり返ったまま、アキラは「うっふっふっふっふっふっ」と怪しい笑いを発していた。彼女の前には相変わらず勇

しかし二人は、じりっじりっと紛争地帯に近づいていった。

ヤスとマサは、一度外に出てから、三階部分に設けられた魔獣の園の裏口から再進入していた。この出入り口は、パンダの十兵衛一家が人工的な庭園に飽きたときに、外で遊べるように作られたもので、常時通ることが出来る。

そして、マサとヤスは別の指令を、お多恵さんとは別の人物から受けている。惟道だ。

「何があっても飛鴻様に尽くすのです。それが、山田屋敷に務める者の義務なのです。宿命なのです。存在意義なのです。さあ、お行きなさい！」

言われるまでもない。

マサとヤス。

ちんぴらである。

マサは18歳。ヤスは17歳。

山田陽子と知り合って、14年。

孤児院、陽子園に引き取られてから、14年。

山田陽子が山田町から居なくなつて、12年。

山田陽子がこの世から居なくなつて、4年。

二人が山田陽子の約束通り、山田屋敷に雇われて、3年。

ヤスとマサ。

山田陽子の子飼いの戦士である。

二人の接近に、女王様のご子息にたかっていた三匹の蠅どもが、警戒する。

マサとヤスは満面に笑みを浮かべて、彼らに歩み寄った。

「いやあ、お多恵さんから手伝うように言われましてね」

蠅どもは安心したようだ。彼らから二人に対する警戒がなくなった。背中を向け、「必要ありませんよ」と無愛想に言った。

きらりん、マサとヤスの目が光った。それぞれの獲物に目掛け、後ろから抱きついた。

バリバリバリバリッ

『うわああああああ』

最高出力の埴輪スタンガンの一撃を食らって、二人の少年が崩れ落ちていく。

残る一人は、すぐさま飛び退いて距離を取った。飛鴻とマサとヤスの間。ちょうど中間地点。敵はどうやら、ダメージを負っている。動きに精細がない。この事態にあたふたしている。

「ふつ。ざまあーねえーぜ？ 坊や。震えてるじゃないか？ 仲間がいなきゃ、一人じゃ何も出来ないのかい？」

「ここは男の修羅の花道！ 坊やにや荷の重い世界かな？」

マサとヤスは、ポーズを決めて鼻で笑った。

坊やはおろおろと狼狽えている。

「行くぜヤス！」

「おうさマサ！」

二人は格好良く掛け合いながら、手負いで自分たちより年下で初対面の少年に向かって、埴輪スタンガンを振りかざし襲いかかっていった。

『雷神様のお通りだー！ー！ー！』

ハモって叫ぶ。

ガスッゴスッ——マサとヤスは、撃退されて気を失った。

だが、少年には致命的な隙が生まれた。

「ふおおおおああああああ」

飛鴻が飛んだ。大技だ。

「うわああああああああ」

振り返ったがもう遅い。直撃を食らった少年は、大げさに吹っ飛んでいって、ぴくりとも動かなくなった。

その血塗られた大地。マサとヤスも併せると計5人が転がっている眼前で、山田飛鴻が両腕を胸の前で組んで、傲然とふんぞり返っていた。

アキラの前には、壁役のお腹から血を流してふらふらしている少年がただ一人。

飛鴻が振り向く。

その時には、すでにアキラは暗黒街のマフィアを廃業して、上階を目指して撤退を開始していた。

「ふおおおおああああ」

「ぎゃはあ」

最後の勇者の断末魔が響いた。

アキラは後ろも振り向かず走り去りながら、「なんでやねん、なんでやねん」と繰り返していた。

「はあーーーーー」

どうしようもないほどに深いため息を吐いて、お多恵さんはしゃがみ込んだ。続けて、

「やってられない……」

魔獣の園には沢山の犠牲者が転がっていて、奥の方で愛玲とその連れが暴れ回っている。今、それを梁一傑が白虎寺の少年たちを率いて、止めに行っている。

遊園地の後始末も、まだ完全には済んでいない。山田グループも大変な時期だ。で、このお粗末な誘拐騒動……はあからさまに山田グループ絡み。でもって実行犯が鯨波組と来て、お多恵さんが旦那に娘の無事を電話で報告すると、義理の父が「旅に出ます」と書き置いて行方不明中と判明。

さらに小五郎からの連絡では警察に、「山田菓子子の湾岸倉庫で怪しい一団が何かをしている」との通報が時間と表現を変えて5件も入っているらしく、警察や警備会社が搜索中。

……どうやらこの誘拐騒動は、脅迫だけが目的ではなく、土方家に罪を擦り付けてお多恵さんを失脚させるのが主目的だったようである……お多恵さん、唇を噛みしめた。

二人の無事が、此处で伸びていた白虎寺の子供からも確認できた

ので、まずは一安心だが。いったい何が起こってどうなっているのか、此处では此处でこの馬鹿騒ぎ……温泉旅行どころか、当分、ともに眠れそうになかった。

「うがっーーーーう、あーーーーう、うがうがぁーーーーう！」

十兵衛がお多恵さんの姿を見つけて、半べそを掻きながら走り寄ってくる。

「ああ、十兵衛……わたしを慰めてくれるのね？」

お多恵さんは両手を広げて十兵衛を迎え入れる。

「うがう！　うがーう！」

と十兵衛は前足で林を指し示しつつ首を振っているが、お多恵さんは無理矢理に十兵衛を抱きしめた。

「ありがとう十兵衛。ちよっと元気でたわ……………ちゃんと後でおうち直してあげるって」

現金な十兵衛が「うがーう」とすりすりしてくるのを、よしよしと苦笑混じりであやしながら、お多恵さんは立ち上がった。

騒音は止んでいた。しばらくして、林の中から小さく縮こまっている王毅と、ふて腐れた愛玲が、くだらんと連行されて来る。

お多恵さんは、大きく息を吸い込んで、叫んだ。

「しゃきしゃき走れーーーーこの馬鹿女ーーーー！」

「随分と破壊してくれたものね」

お多恵さんが一同に、特に愛玲に向かって、やんわりとトゲのある声で言う。

「私じゃないわよ。王毅よ」

愛玲が言い訳をする。河に落ちたのか、水浸しだ。

「って、それ私の服じゃない!？」

「今頃なに言ってるのよ？　黒い服はみんな私の服よ」

「そんな無茶な……」

「歳三が着て良いって言ったのよ」

「ちくしょうあいつめ」

お多恵さん、唇を噛みしめる。

「その、王毅さんはアキラさんを守るために愛玲を止めようとして……」

白虎寺の一人が恐る恐る口を差し挟む。「そうなんです」他の仲間も同意する。「うがーう」十兵衛もお多恵さんの後ろから同意する。

「ちよつとこら、何でよあんたたち！ あんたらが一方的に突っかかってきたんじゃない！ わたし、なにもしてないじゃない！」

愛玲が異を唱えた。

お多恵さんが頷いた。

「分かっています。分かっていますとも。ええ、もちろん分かっています。すべて愛玲が悪いってことは！」

びしつと愛玲を指さす。

「何でよ！？ 何でいつも私のせいにするのよ！？」

「何ですって！？ よくそんなことがそんな小さな胸して私の服着て平然と言えるわね？ あなたはいつも破壊するだけけど、その後私がどれだけ苦労しているか考えたことはないの！？ 壊すよりも直す方が千倍は大変なのよ！？ ……あなたさえ暴れなければ今頃は飛鴻君もアキラも保護できていて、ここだけでも破壊されることなく、すべて何とか辛うじてちよつとは丸く収まっていたかもしれないって言うのに……」

「何言ってるのよ？ あなたの胸が無駄に大きすぎるだけよ！？」

私が駆けつけなかったら今頃あの子はあなたの家のゴンタクソの命令で十兵衛に食べられていたのよ？ Gカップ八方美人」

「私の胸は普通です！ それにFです！ だいたい十兵衛は人を食べません！ このAカップ吸血雪女宇宙人！」「うがーう！」

十兵衛も一緒に同意する。

「Bよ！ ……元はと言えばあのゴンタクソが悪いのよ。あんたより若い私に向かって年増って言ったから」

「たった2日の差で若いって言い張るなっ！　だいたいそんなことでこんなに暴れるなっーーーー！」

「いや、それが原因ってわけじゃないけどさ」

「まったく。丸山さんの教会は滅茶苦茶だし、鯨波組の人たち、特に大鳥さんは重傷だし、熊さんは全身手裏剣だらけで血まみれだし、十兵衛のお家もぼろぼろだし、白虎寺のこの子たちも怪我してるし……何がどうなったらここまで……はあーーーーー」

「え？　熊が手裏剣？　血まみれ？　飛鴻がやったの？」

愛玲が驚いた顔をした。

「そうよ」

じとりとお多恵さんが愛玲を見る。

「やるじゃない、飛鴻。見直したわ」

愛玲がうつとりと言う。

「何でよ！」

「何でって？　熊に勝ったのよ？　凄いいじゃない？」

「——もう、ぜんつぶ、何もかもあந்தのせいよ！」

「何で？　熊を倒したのは飛鴻よ？　ぜんぶ私の手柄にしたらせつかく頑張った飛鴻が可哀想だわ。だいたいここにいる四人を倒したのも飛鴻なんだから。あந்த本当に飛鴻のこと、分かってない。子供扱いしてないで、あなたもいい加減飛鴻の実力を認めて上げなさいよ！」

「あなたの育て方が悪いって言ってるんです！　あなたがそんな過保護でしかも変な武術を教えるから！」

「言いがかりね……あの子に武術を教えたのは一傑よ？」

「一傑さんが、手裏剣投げを教えるかーーーーー！」

「それは私が教えたわ。武術ではなく忍術よ」

「はあーーーーー」

お多恵さんがしゃがみ込んで、頭を抱える。

「……………やってられない」

深く深く沈んでから、いじいじと指先で地面をいじって「こいつ

ころしたい」と書いた。

暫くしてから、立ち上がった。

きりつと一同を見渡して、すうーと息を吸い込んで、

「何がなんだろうと、飛鴻君は、今後私が責任を持つて育てます。

ええ、育てますとも。もうあなた方というか、愛玲にはあの子を任

してはおけません。人生を大きく誤る前に、陽子やあなたの毒を抜

き取り、殺伐としたあの子をきつちりと矯正してみせます！ まと

もな人間にしてみせます！ もう二度と会わせませんからね——山

田町も、立ち入り禁止」

最後は愛玲を指さし、にっこりと微笑んだ。愛玲が叫ぶ。

「そんな無茶な！ だいたいあなたが育てるつたって……………」

あなたも娘の子育てに失敗してるじゃない？」

「うっ」

お多恵さんが呻く。

「確かに、あの子は何かあるとすぐに私の名前とか使っちゃうし…

…大人の言うことなんて全然聞かないし……友達のこととも全然

聞かないし……もちろん私の言うことも全然聞いてくれないし……

ちよつと町で評判のお転婆さんで……じゃいあんとか呼ばれてるけ

ど……………でも……飛鴻君ほどひどくはありません！」

最後には立ち直って断言する。

「程度の差よ！ あの年頃の子供には誰でもあることなのよ！」

愛玲が言う。

「そうかもしれないけど……………」

お多恵さんが同意する。

白虎寺の面々は「そうか？」と声に出さず顔中で表現してたが、

「あの年頃って一番難しいのよね」と二人はしみじみ頷きあっている。

白虎寺の一人が口を開いた。至極真つ当なことだった。

「あのお、飛鴻とお嬢さんを放って置いて大丈夫なんでしょうか？」

「大丈夫よ」

愛玲が即座に答えた。

「あの子はやると言ったらやる子だから！」

お多恵さんは、真っ青な顔をして駈けだしていた。

「飛鴻は？」

目を覚まし、貴久鉢は呟いた。

「多恵たちと城に行っておるよ」

すぐに答えが返ってきた。権六の声だった。

権六は立ち上がった、部屋のカーテンを引き開けた。

月明かりが柔らかく、暗かった室内に注ぎ込んでくる。

貴久鉢の寝室からは、まるで設えたかのように窓の枠いっぱい、
愛天使教会が見える。

「そうか……城にいつとるのか」

まぶしそくに、貴久鉢は目を細め、見慣れた城を見上げた。

最上階のテラスの向こう。陽子の部屋に、灯りが灯っていた。

「アキラと追いかけてこしとるそうじゃ……けが人もでとる。あいつは真正銘山田陽子の息子じゃ。これから山田町は騒がしくなるぞ」

ため息混じりに、権六。

それから、にやりと、貴久鉢に視線を移し。

「おまえも、覚悟しとくんじゃな。あの子たちに付き合うのは、相
当に骨が折れるぞ？」

貴久鉢は気弱そうに、権六の視線を避けた。

権六は、訝るように貴久鉢を見つめる。

「なんじゃ？ まさかまた多恵にばかり押しつけるつもりじゃある
まいな？ 総裁を辞めたおまえじゃ。忙しいなんて言い訳はもう通
用せんぞ？」

「……あの子は、わしのことを……」

貴久鉢のつぶやきに、権六はため息を吐いた。

「おまえは気にしすぎなんじゃよ。誰だって最初はぎこちないもんじやろうが。あの子は戸惑っておるんじゃよ、おまえと一緒に。新しい環境に。新しい肉親に。十年の空白は、五日やそこで埋めれるもんじゃあるまいに」

「わかっとなる」

「ならば、うじうじ言ってないで」

「……わしにはもう、その時間が残されておらん……埋める時間が残されておらん」

拗ねたように言っつて、貴久鉢は布団に潜る。

「またか、たわけが」

小さく権六が吐き捨てた。

「ぐじぐじぐじと！ いつもいつもすぐに弱気になりよって。おまえは死にかけのじじいか？」

「……わらんぞ？」

貴久鉢の抗議を権六は無視した。

「おまえは時間を気にして時間を無駄にしすぎなんじゃ。おまえはとにかく難しく考えるのが良くない。おまえもわしも、この年になつたら大して残りに違いなどないわい」

「乱暴なことを言うなあ、……医者のかせに」

布団の中から、貴久鉢が呆れた声をあげた。

「医者だからじゃよ。人の一生なんて、どれだけ生きても最後はあつけないもんなんじゃ。……人の五分の一しか時間がないのなら、人の五倍、元気良く生きればいいだけじゃない」

権六は、窓枠に手をかけ、まぶしそくに城を見上げて。

「これはまあ、多恵のやつが陽子に言っためちやくちな論法じゃが……ある程度は的を射とる。曲がりなりにも医者として、色んな人を看取ってきたわしが言うんじゃ、間違いないわい。時間なんて使い方でどうにでも変わる。そう考えると人の百倍は元気に生き抜いたおまえの娘は、立派な勝利者じゃな」

からからと笑う。

「なあに、一年も死ぬ気で頑張れば、おまえごときにもそれなりのことが出来るわい。世の中なんて終わつたと思つたもんから終わるじゃ」

権六は、布団の上から貴久鉢をぽんぽんと叩いた。

「大丈夫じゃよ。心配しなくともおまえはこの五日間、ちゃんとおじいちゃんやれとつた。きっとあの子にも気持ちが伝わるよ」

いたわるような声音に、貴久鉢が布団から顔を出して、意外そうに権六をのぞき見た。

「忙しくなるぞ？ 明日からは毎日が戦争じゃ。子供の一年はとてつもなく長いからな」

権六はいたずらっぽく微笑んでいた。

「うん。わかつとる。頑張るよ」

ごろりと貴久鉢が転がって、また城を見上げた。

「もうじき、腹を空かせて帰ってくるじやろ。そしたら食事じゃ。坊主の友達がようさん遊びにきとるからな、騒がしいぞ。帰つてきたら、呼んでやる。それまでは、ゆっくりやすんどけ」

権六は言つて、カーテンを閉めた。

「……………開けておいてくれ」

権六は笑い、カーテンを端に寄せた。

ゆっくりと、権六はいつものソファーに寝転がり、

「世話の焼けるじいじや」

軽く、楽しそうに呟いた。

「……………すまん。頑張るよ」

貴久鉢は、まぶしそうに城を見ながら。

透き通つた表情で、苦笑した。

終章 姫と忍者の要塞戦（一）

山田飛鴻の世界が動き出したのは、2週間前のことだった。

いつものように、お多恵さんが来て愛玲と口論をして帰ってから。いつものように、埴輪惟道が白虎寺を訪れて。

惟道が、帰っていった後に。

「飛鴻、行ってくれないか？」

いつもとは違う声で、父・大飛龍が飛鴻に向かい、そう言った。

飛鴻は首を横に振った。

「貴久鉢おじいちゃんが、危ないんだ。父さんの代わりに行ってくれないか？」

諭すような声だった。

しかし飛鴻は首を横に振った。

大飛龍は、悲しそうな、困ったような、そんな顔をしていた。

飛鴻は首を左右に振り。背を向けその場を走り去った。背中に父の呼び止める声が掛かる。飛鴻は止まらなかった。振り返らなかった。父も追ってまでは来なかった。

しばらく飛鴻は、ひとり、忍術の修行場でしゃがんでいた。

頭の中を、色々な想いが駆けめぐった。

母や愛玲に聴いた沢山の話が。山田町の話が。

ファンシーランド。山田屋敷。虹ヶ丘小学校。母や愛玲の、いくつもの武勇伝。

行ってみたいと思っていた。でも、今はもう思わない。

山田町は、母や愛玲の思い出であり、歴史であり、飛鴻には関係のない世界だったのだ。母が死んでから、山田飛鴻はそのことに、気づいた。

飛鴻の世界は此处にあった。飛鴻の思い出は全てここに、白虎寺に詰まっている。だから山田飛鴻は、白虎寺で生きることを決めている。白虎寺の人間として。白虎寺の仲間と共に。いまさら、山田

町に行きたいとは思わない。

ゆつくりと、愛玲が微笑みながらやってきた。

「駄目じゃない、飛鴻。日が陰ってから1人でこんなところに来て、また狼に襲われてもしらないわよ？」

飛鴻は愛玲を見上げた。微笑んだまま、愛玲は、

「……約束、破っちゃうの？」

優しい声。飛鴻は顔を伏せた。

愛玲は、仕方ないかという感じにため息を吐いた後、飛鴻の横に座り、

「陽子と約束したんでしょ？ おじいちゃんを守るって——」

——おじいちゃんをお願いね。

山田陽子が飛鴻に告げた幾つかの言葉の一つ。遺言となった言葉の中の一つ。飛鴻は確かにその時頷いた。だけど。

山田飛鴻は愛玲を睨み上げた。

「行かない」

「だめよ飛鴻。陽子との約束だけは守らないといけないわ……約束したんでしょ？」

愛玲は微笑んでいる。

飛鴻はうつむいた。

「……だけど」

行きたいようで、裏切るようで。飛鴻は唇を噛みしめ、首を横に振った。

愛玲は、柔らかく微笑み。それから、飛鴻の頭を抱きかかえた。

「飛鴻。あなたは男の子でしょ？」

こくりと、飛鴻はふて腐れたようにそっぽを向きながら、うなずく。

「飛鴻。男はね——」

愛玲はそこで止まった。

それから、言い直した。

「飛鴻、あなたは忍者でしょ？」

ちよつと考えて、こくりと、飛鴻がうなずく。

「では、山田飛鴻くん。きみに忍務を与えます。山田町行って山田貴久鉢を守りなさい」

重々しい声で、愛玲が言う。

飛鴻は顔を上げた。まじめくさった愛玲の顔が、正面にあった。

飛鴻が見つめていると、彼女はくすぐったそうに、目を細めた。照れたように、飛鴻の髪をくしゃくしゃとかき回す。

「なにも難しく考えることはないの。あなたは私の一番弟子として、ただ陽子との約束を果たしに行けば良いだけなのよ。わたしも一緒に行つてあげる。陰からずっと見守つていて上げる。わたしが誰にも文句は言わせないから。山田飛鴻は山田町で山田貴久鉢を守る。それだけ。わたしの一番弟子として。その後のことは、それから、ゆつくり、ゆつくりと、一緒に考えたらいい」

いたわるように言つてから、愛玲は励ますように、飛鴻の両肩を掴んで。

「さあ、飛鴻！ 行きましょう。陽子が驚くくらい、山田町で暴れようよ！」

飛鴻は、ゆつくりと頷いた。それでも、どこか不安そうに。

愛玲は愛おしそうに微笑み、自分が崩した飛鴻の髪を、手櫛で整えながら、

「じゃあ、準備しましょうか？ 忍者に必要な道具、一番良いのを全部そろえてあげる。欲しかったもの全部よ。解らないことは、何でも教えてあげる。貴久鉢に手紙も書いてあげる。忍者にふさわしい手紙。大丈夫よ、飛鴻。あなたならやれるわ。本場の忍者にも負けはしない。私の一番弟子なんだから。立派な忍者なんだから」

飛鴻は、力強くうなずいた。

愛玲が飛鴻を抱きしめた。

それから、愛玲はちよつと首を傾げてから、にへらつ、と笑つた。「とりあえず、忍者らしい言葉遣いから入りましょうか？ そうね、

にんにんって最後に付けると良いんじゃないかしら？ 忍者はみんなそう言っていたから、本場の日本では」

「わかった……にんにん」

愛玲は破顔した。

飛鴻を抱きかかえて頬ずりする。

「そうよ、飛鴻。ゆつくり練習しましょうね」

しかし飛鴻の操る「おはようにんにん」を耳にした梁一傑が、

「おはようにんにん？ だと？ お子ちゃまだな、飛鴻。おまえはお子ちゃま忍々か？」

と鼻で笑ったために飛鴻 がヘソを曲げて、愛玲のもくろみはついた。結局大人でもしゃべる忍者用語「ござる」に落ち着いた。

色々な気持ちを保留して誤魔化して。決意と呼ぶには、弱々しい決意だったけれど。

艾愛玲に手を引かれて、忍びうごめく山田町に、山田飛鴻は降り立ったのである。

約束を、果たすために。

数々の犠牲と屍を乗り越えて、アキラはあてのない逃避行を繰り返して来た。

敵の手は、もう、すぐそこまで迫っている。終着駅も迫っている。ボニー & クラウドの心境だった。

逃げ場のない逃避行だ。

ああ、私たちに明日はないのよ。二人で死のバレーを踊りましょう。

そんな気分浸ってみたり。

だけでもボニーが一人で死んでは、様にはならない。迫り来るクラウドを撃破して、きつと生きてみせると、アキラは誓う。

ええ、そうよ……生きてみせるわ……たとえ、場合によっては、謝ってでも……と。アキラはくるくると踊って見せながら。一人で限界まで壊れていた。

アキラはすでに仲直りの言葉を考えていたりする。ものすごく憂鬱な気分に見まされながら。「どつきりでした」とか「なに？ アキラちゃん探してるの？ ここには来てないわ。え？ わたし？ わたしは双子の妹のミユキちゃんよ」とか。

アキラが弱気な理由は、この階までは、何度か進入したことがあるからだ。

幾つか扉は付いているのだが、全部鍵が掛かっている。今日も、色々を押したり引いたりけっ飛ばしたりしてみたのだが、一つも開きやがらないのである。

この角を曲がると行き止まりだった。

ボニーの墓標はそこに立つのか？ ポパイは助けに来ないのか？ そんな事を考えつつ気を紛らわそうにも、当然紛れるモノでもなく……お腹がぐーっと鳴ったりしやがると、もう全部まとめてどうでも良くなつて来たりもする。

ものすごく憂鬱な気分に見まされながら、アキラはお腹を睨みつつ、その角を曲がった。

立ち、止まる。

ごくりと、つばを飲み込み。

はやる気持ちを抑え、アキラはゆっくりと歩み寄った。

明かりが点っていた。——いつもは沈黙している、そこにあるエレベーターの制御板に！。

アキラの心臓が、どくんどくと鼓動している。

開くの、ボタンを押してみる。

音もなく、ドアが開いた。

中にも、明かりが点っている。

心臓の鼓動が、速くなる。

駆け込んで、階数表示を見る。

今いる階は、7階。だから、エレベーターの現在階は、もちろん7階を示していて、

そして、アキラの目線の先には——階数表示の最上段には、天守

閣の「天」の文字が！

頭に血が上って、真っ白になる。ふわふわ泡の上を歩いているようだった。何の泡かは別にして。

震える指で、ゆっくりと押す。天守閣の数字を。

ドアが、音もなく閉まった。

ゆっくりと上昇する感覚がある。

アキラは、胸を押さえた。

憧れに憧れた愛天使教会の最上階に、ついに乗り込む時が来たのだ。

竜虎ですら、このエレベーターを動かすことは出来なかった。母に聞いても「あれはもう動かない古時計よ」と、訳の分からない回答しか得られなかった。

そんなエレベーターが何故動くのかなど、今は考えもしなかった。山田飛鴻のことも、思考の中からちよつと消え去っていた。一階も表示されて逃げられたのだが、そんなものは見えなかった。

恋い焦がれていた山田陽子の部屋が、そこに待ちかまえているのだから。

エレベーターが止まる。

音もなく、扉が開く。

躍動する自らの胸を、壊れ物のように両腕でそつと抱えながら、土方アキラは、ゆっくり足を踏み出した。

丸い円形のフロア。総檜張りの壁に、大理石の床が広がっている。そこから、一段高くなつた檜張りの通路が太く延びていて……廊下の奥の曲がり角には、タコさんウインナー？ とイ力さん……何だろう？ の描かれた屏風があつた。

あの先に、山田陽子の部屋があるのだ。

土方アキラは、伝説の地、山田タワーですらも見下ろすあの山田陽子の部屋へと、ついにたどり着いたのである。

「来ました。……ああ、違いますね。アキラちゃんだ。まあ良いで

すよね？ アキラちゃんなら一緒にでも」

モニターを覗いていたアッキーこと、メイド長・芝浦秋子が告げた。

惟道は、につこりと微笑んで頷いた。

場所は虹ヶ丘愛天使教会の中枢管理室。

お多恵さんですら知らない秘密の部屋だ。彼ら二人は、ここから最上階の天守閣【山田陽子の部屋】をモニターで監視している。

こういう部屋や入り口は、愛天使教会に数多く存在していて、惟道はそれを殆ど把握している。把握していなければ、役目を果たすことは出来ないからだ。山田陽子の命令を受けて、建築を監督したのも惟道たちだった。当初、恐怖の大王対策だった地下の核シェルターは地下野球場を経て、大聖堂になったりと、色々な変更はあったけれども。

アッキーから報告を受けて現状を把握した後、惟道は、そうした彼ら専用に進られた入り口の一つから、進入して来たのである。

惟道はモニターを見つめていた。

どこか遠くを見つめるように。穏やかな笑みを浮かべて。

ついに此处まで来てしまった。

虹ヶ丘愛天使教会、最上階の天守閣だ。

山田陽子の居室。

アキラは尻ポケットから携帯電話を取り出し、若頭から返して貰った後、電源を切ったままなのに気づいて、電源を入れる。そして記念撮影。あとで竜虎に自慢してやろう。携帯を尻ポケットにしまふ。

土方アキラは室内に踏みいった。もちろん、靴は玄関で脱いでいる。廊下を突き当たって、大きなドアを開ける。壁を手探って電気をつける。

明かりが灯って、もっとも最初に目に入っただのは、突き当たり、リビングの一面のガラス窓だった。漆黒の闇が、大きく一面に広が

っていた。

アキラは窓辺に歩み寄った。

窓の外には、羨望に見上げ続けてきた、伝説のテラスが広がっていた。

鍵を外して、アキラは窓を開けた。びゅーっと強い風が吹き付ける。とつさに髪を押さえ目を瞑って。少し慣れてから目をあけ手を離す。風の中、ゆつくりと、テラスに踏み出す。

フェンスまで歩み寄ると、はるか下に山田町が広がっていた。闇の中に、町の光が広がっていて、そこに光の塔が建っていた。山田タワーだ。

まるで。漆黒の闇の中。広がる宝石の海に。建っている宝石の塔。土方アキラ、精一杯のポエムだった。

「ああ、きれい」

なんてうつとり両手を併せて目を潤ませる。

山田タワーが見下ろせる——との触れ込みだった愛天使教会だが、実際にここから山田タワーを見下ろした人間など、数えるほどしか居ないだろう。業者を除くと、山田陽子と母の土方多恵、それに愛玲ぐらいじゃないだろうか？。

土方アキラは、今まさに、山田タワーを見下ろしていた。

あの山田タワーが、いつも見上げることしかできなかった山田タワーが、アキラの頭よりも下にあるのだ。

アキラは佇んでいた。山田タワーを見つめながら。

風が、気持ちよかった。最初の内は。

2分くらいしてから。ぶるりと身震いして、室内に入る。夏とはいえ、この時間この高さを通る風は、半端でなく冷たかったりする。次にアキラは、白い革張りのソファーにダイビングした。しこたま跳ねた後、テーブルの上に置かれていたりモコンで、プラズマテレビに電源を入れる。映像が点り、四方に配置されたスピーカーから、音が聞こえる。ニュース番組。じたばたとソファーの上で、泳ぐ。たつとソファーから飛び降りて、絨毯の上を駆け回る。

土方アキラは、伝説の山田陽子の部屋を堪能していた。
きやーつきやーつ、はしゃぎながら、一人でかけずり回った。

もはや世界は私のモノ。そんな気分でいたりする。

そこではたと気がついた。敵が迫っていることを。

この場所を手放すわけにはいかない。譲ることは出来ない。ここはわたしが見つけたオアシスなのだから！ 総員迎撃体制に入れ！
全細胞に活を入れる。

とにかくアキラは、戦わなければならなかった。ざっとあたりを見渡してみる。当然のように、リビング以外にも、幾つかの部屋がある。何か武器になるモノはないのか。順番に開けて回る。

寝室には、大きなダブルベットが鎮座していた。もちろん、アキラはダイブした。おお、なかなかのクッションだ。どうやら山田陽子は、ふかふかのやわらかめが好みのようなだった。ひとしきりはね回ったあと、押入をあけてみる。空っぽだった。

風呂場は、渋い檜張りの湯船だった。当然、お湯は入っていない。とりあえず、服を着たまま、湯船に座る。ここも一面のガラス張り。で、山田町の夜景が見渡せる。向こうからは覗かれないのだろうか。と、ちよつとドキドキしながら考えてみたりする。

ふと、アキラは鼻をヒクヒクとさせた。二の腕を鼻の前に持つてくる。

……臭い。

今日一日の荒行で、アキラは全身汗まみれの埃まみれだった。意識すると、身体中が痒くなつて、かりかりと首筋を搔く。

湯船から出て、蛇口を捻ってみた。水が出た。しばらく出していると、お湯も出た。眉根を寄せて考える。寝室に洋服ダンスがあったことを思い出し、駆け戻る。引っかき回すと、Ｔシャツや下着、ズボンなどが見つかった。

脱衣場で服を脱ぎ散らかし、シャワーを浴びる。一面のガラス張りには、ちよつとどきどき、怪しい気分になりそうだった。

さっぱりしたあと、バスタオルで身体を拭いて、大きめのシャツ

をかぶる。サイズが合っていないせいか、ズボンの中で、パンツがかなり垂れてるぽかった。が、はいてないのもあれなので、そのままにしておいた。風呂場にも、武器になりそうなモノはなかった。

といれっと。水が流れるのを確認してから、ちよっと使ってみた。

武器になりそうなモノはなかった。強いて言えば、トイレットペーパーぐらいだった。期待していた掃除用系統の武器はなかった。あれがあれば、奴の人生にぬぐいようのない精神的ダメージを与えられたというのに。アキラはかわいく舌打ちした。

次に開けた部屋は、大きな机のある書斎だった。

もちろん、一番最初に椅子に座って、ぐるんぐるん回ることを忘れない。山田タワーの貴久鉢の椅子よりも、秘書室の母の椅子よりも、なんかゴージャスな気分浸れた。さすがは山田陽子の椅子である。アキラは回りながらも感心しきりだった。

書斎だけあって、大きな本棚が壁面を覆っていた。中身はぎつちりと詰まっていた。殆どが、漫画やアニメビデオだったりするが、中には忍者関連の本とかもあったりして、これはきつと愛玲の趣味だろう。他には母が好きな漫画もあって……おいおい、このシリーズ、先月出た最新刊まで揃ってるじゃん……まさか、母ちゃん、ここに来てゴージャス気分で読んでるんじゃないだろうな。アキラの中でむくむく疑惑がわき上がる。

急いで、机の二番目の引き出しを開ける。数種のお菓子の箱に紛れて、梅昆布が姿を現した。母は会社でも、二番目の引き出しに梅昆布をため込んでいる人なのだ！（秘書仲間からは陰で梅昆布大王と呼ばれている）。消費期限を確認して、アキラの疑惑は確信に変わった。母ちゃんはアキラに黙ってこの部屋を独り占めにしていたのだ！。

……とにかく、裏切り者の制裁は後で考えることにして。

何か武器になりそうなモノはないのか、アキラはファンシースティックやファンシーチョコを頬張りながら、引き出しを開けていっ

た。

最後に開けた、一番上の引き出しに、拳銃が入っていた。手に取ってみると、ずっしりと重い。おそろおそろ、グリップを握る。持ち手の下から、弾の入ったカートリッジを取り出す。……中身、詰まってる。

アキラは、ごくりとつばを飲み込んだ。か、かあちゃん。そっと元に戻した。

見なかったことにしよう。

きつとモデルガンだよ。自分に言い聞かせる。

次の部屋は……ゴミ捨て場？ 乱雑に、部屋中をいろんなモノが覆っていた。何故に3日しか暮らさなかったはずの山田陽子のこの家に、こんなにがらくたが詰まっているのか、アキラには皆目見当も付かなかったが、ここには確かに武器になるモノがあった。黄色に輝く、プラスチックバットがそれだ！。

……もちろん、他に有効な武器はないのか、搜索は続行した。

こうして、アキラは一つの可能性を持ったアイテムを見つけ出した。

俗に言う【パラシュート】という奴だ。袋に緊急脱出用と書かれている。

がらくたの山から、引っぱり出す。そこその重さがある。使い方は知っている。アキラはスカイダイビングを保護者同伴で三度もやったことがあるのだった。ずるずると引きずって、テラスの部屋に持って行く。テラスに出て、風の確認。随分と強いが、しかし飛べないほどではないだろう。下を見て……ごくりとつばを飲み込んだ。

頑張れアキラ、ここが根性の見せ所だよ。自分を励ます。

室内に戻り、パラシュートの袋をほどく。

「穴があいてるけど、飛べないほどではないよ？ 陽子」

と書かれた紙が出てきた。パラシュートを確認する。穴だらけで

飛べそうもなかった。

何か大事な思い出があつて記念にとつて置いたのか、それともたんなる嫌がらせなのか。嫌がらせだとすると、ちよつと非道い。人命に関わるギャグだ。もつとも逃げるのならエレベーターで逃げればいいだけの話だつたし、逃げては本末転倒なのだが。

アキラはいそいそと袋に戻す。物置に返した。

モニターの向こうでは、土方アキラが山田陽子の部屋を縦横無尽に荒らし回っている。こういう事がないようにと、今まで彼女の進入だけは断固として防いできたのだが……主にお多恵さんの要請で、しかしそれも今日まで。今日をもって要塞・山田陽子は子供たちの遊び場として、スタートすることになる。

あそこのリビングと玄関には、カメラとマイクに、スピーカーも仕込まれている。だから注意は出来るのだが、そんな無粋なことはもちろんしない。せつかく自称・山田陽子の後継者が、十年越しの夢を堪能しているのだ。

惟道はアキラの暴れっぷりからお多恵さんの若かりし日を思い出して、くつくつと笑っていた。やはり子供は元気が一番。

「ああ、来ました。今度こそ若様です。他の人は……見えません」
アッキーが告げる。

「では、邪魔の入らない様にエレベーターの電力を切りましょうか」
惟道が指示する。

20歳まで生きられないと言われた山田陽子が20歳を過ぎて産んだ息子に、残したビデオレター。でも、ただのレターじゃ面白くないよね？

惟道はそれを託されていた。

「じゃあ、流しますね？」

アッキーの指が、ボタンに伸びる。

「いえ、もう少し待ちましょう」

惟道がアッキーを止める。

「これはあの子たちにとっては大切な意地の張り合いです。ここで邪魔をするのは無粋の極み。一生二人に恨まれることになりますよ。せつかくですから、二人の決着が付いてからにしましょう」

につこりと惟道は微笑んだ。無粋は惟道のもつとも嫌うところだった。

「そうですかね？ アキラちゃんには感謝されそうな気がしますけど？」

少しアッキーは若さ故か、釈然としていないようだったけれど、結局は惟道に従った。

山田陽子のビデオレター！。

最初に撮影したのは、飛鴻が生まれて直ぐだった。惟道には昨日のこのように思い出せるが、もう十年も昔になる。些細なお使いのようだが、惟道にとっては人生をかけるに値する仕事だ。

何年も、本当に何年も、この時を惟道は待つてきた。自分が生きている間に、実現することはないのではないかと、不安に泣いたこともある。しかし少年は今此処に居る。今さら、ほんの少し、ほんの少しを待つくらい、どうということではなかった。

さあ、もうすぐですよ！ 陽子様。

惟道は熱くなった目頭を押さえていた。

それはアキラが、武器としてプラスチックバットとビニールボール3つ、絵の具と虫取り編みを選別した後であった。

アキラが武器をこっそり抱えてリビングに戻ると、そこに、奴が立っていた。

ジェイソン・飛鴻。略してジェイフォン、その人である。

土方アキラは、夢の世界から現実の世界へと、瞬く間に帰還した。まずい、と思った。この武装では、まだ奴とは戦えない。

それでも、アキラはにらみ返した。

両腕を胸の前で傲然と組んで、にらみ合う二人。

先に、少年が口を開いた。

「おまえが、柳生石舟斎で、ござるな？」

「……………」

土方アキラは、眉をひそめた。

柳生の少女が、傲然と両腕を組んで、ふんぞり返っていた。その後ろには、日用品やバット——恐らく偽造した忍び道具、愛玲がよくつかう手——が見える。

山田飛鴻は躊躇していた。

たとえ相手が極悪非道の柳生石舟斎だと分かっていても、貴久鉢の命を狙う忍者大魔王だと分かっているから。

人を殺めるのは、忍者の道に反しているから。

愛玲も言っていた。

——飛鴻。忍者はね。半殺しが基本なのよ。

だから山田飛鴻は半殺しでとどめようと思っていた。それが正しい忍者のあり方【忍者道】だからだ。……そう思っていたのだが、しかし今、山田飛鴻はそれすらも躊躇していた。

それは、彼女が土方多恵の娘だからだった。

半殺しになんかしたら、後でお多恵さんのお仕置きが半端なく怖い。恐るべしだ！ 柳生石舟斎！

だから山田飛鴻は妥協することにした。

「諦めろ。そうすれば、全てを水に流してさしあげますでござる」
諭すように、ある意味ではお願いするように、言った。

「……何を？」

少女が、問い返してきた。何処か、期待した眼差し。救いを求める声で。

「全ての野望を」

山田飛鴻は言った。

秘伝の書を。

巨大絡繰りロボットの復活を。

貴久鉢を狙うことを。

それさえ諦めれば、見逃してやろう。それで、飛鴻は忍務を果たすことが出来るのだから。だが、もしも少女が諦めないというのであれば――その時は――お仕置きを覚悟してでも――

土方アキラは、

「諦める……ですって」

表情を陰しくして、震える声で呟いた。

諦めるですって？ 全ての野望を。つまり山田陽子を継ぐことを。愛天使教会で暮らす夢を。

確かにこいつは山田陽子の息子だ。それを要求する権利がある。だけど。

アキラは顔を伏せ、両手を強く握りしめた。

「わたし、諦めない」

小さく呟いた。

「諦めないから」

きつと、顔を上げ、少年を睨む。

「この教会はあなたになんて、絶対に渡さないから！ 今更来たって、あんたになんか何も渡さないから！」

アキラは堂々と胸を張った。両腕を胸の前に組む。山田陽子の後継者として。写真の中で、いつも彼女がしていたように。

ふん、と挑発するように鼻で笑ってやる。

「山田陽子の息子だからって、調子に乗らないでよ？ あんた、このお城の権利書とか、お屋敷の権利書とか、みんな貴久鉢おじいちゃんが持つてるって思っているでしょう？ だからもう全部自分の物だっと思ってない？ 馬鹿ね、今はわたし（正確にはお多恵さん）が持つているだから。おじいちゃんが好きにしろって言ったんだから（正確にはお多恵さんに）。だから、わたしが、全部継ぐんだから！ 私こそが、山田陽子の後継者なんだから！ 愛天使教会はわたしの物よ！ あなたになんか絶対に渡さないんだから！」

アキラはたまりに溜まったものを、ぶちまけた。

少年は、打ちのめされた顔をしていた。

山田飛鴻は、愕然とした。

「そうか、そう言うことでござったのか」

飛鴻は震える声で、呟いた。

「動くので、ござるな？」

「……………はい？」

「とぼけても無駄でござる！」

飛鴻は、語気を荒げた。

土方アキラは、微妙な空気の断絶に気づいた。

何か、おかしいよこの子。と。

山田飛鴻は、すでに全ての真実を悟っていた。

まさか誰が想像できただろうか？

秘伝の書が、すでに柳生石舟斎の手に渡っていたということ！

山田飛鴻は身震いした。

そして。

何もかもが、そう、何もかもが、全ての謎が、繋がったのである。
愛玲が言っていた。

柳生は闇に生きる種族だから、滅多なことでは姿を現さないと。

その柳生が、それも石舟斎が、山田飛鴻の前に姿を現したのだ。

柳生は、山田貴久鉢の命を狙っている。

そう今まで、信じていた。だから、鉄壁の守りを見せつける山田

飛鴻の前に、姿を現したのだと。

だが、山田飛鴻は柳生の目的を見誤っていたのだ。

柳生の狙いは、山田貴久鉢ではなく、彼の中に流れる【山田家の血】だったのである。約500ccほどだ。貴久鉢でなくても良い。山田であるのなら。そう、飛鴻で良いのだ。その血は、飛鴻にも流れていたのだ。

柳生の目的は、山田飛鴻だったのだ！ 山田飛鴻は、見事に誘い込まれたのである！ 此処に、そう此処。

柳生の目的。

それは、巨大絡繰りロボットの復活。

そして、山田町に封印された、【絡繰りロボット】とは、

「動くので、ござるな？」

柳生の少女に向かって再度、問う。

「……………えっと、わたしのこと？」

土方アキラは自分を指さし、すっとぼけた。

「ちがうつ！ 絡繰りロボットでござる！」

絡繰りロボット……………その言葉を口にするたびに、飛鴻の中で男の浪漫が大きく膨れあがる。それを手に入れば、飛鴻は名実ともに忍者マスターに……………ぶんぶんと頭を振って邪念を振り落とす。

「動くのだろう……………いや、言わなくても分かっただござる。この教会こそが、惟道の言っていた巨大絡繰りロボットだったのでござる！ この教会こそが、口から火を吐き目から光線を出して大阪城を破壊して母に封印された絡繰りロボットでござる！ この城の権利書とは、ずばりこの城の封印を解く【秘伝の書】で、この教会こそが！ つまりは巨大絡繰りロボットだったのでござるござる！ そうでござる！」

理路整然と、飛鴻は告げる。ずっぴしとポーズを決めて。

「……………」

「……………」

「……………ま、さか……………」

出会ってから今までの記憶を照合していく。

ま、まさか、こ、このガキ 本気で。

本当にそ、そんな訳の分からない惟道オーラ満載のたわ言で……………こんなにもか弱い乙女を追いかけて回してやがったのか……………！！。アキラの怒りは、漫画の主人公なら謎の力を発揮しそうなレベル

に達していた。育ってきた環境が違うから好き嫌いは否めないとかで許せる話ではなかった。これでは死んだ熊や鯨波組の面々および四人の勇者さまと神父様があまりにも不憫だった。

アキラは、背後にある数々の殺人アイテム……だったらいいなあ……に手をのばす。プラスチックバットを握る。

アキラは決意していた。

思い知らせてくれよう、と。

必殺の意志を込めて、飛鴻をにらみ返した。

飛鴻は、土方アキラのやる気を肌で感じた。

やはりあの黄色いバットは何らかの忍び道具なのだろう。そうではなくて、あそこまで自信たつぷりに構えることは、この山田飛鴻にも不可能なことなのだ。もし出来るとすれば、愛玲クラスの忍ぐらい……どちらにしても、油断は出来ない。

「やはり、そう来たでござるか」

当然だった。巨大絡繰りロボットを諦めろと言われて、簡単に諦められる忍者など忍者ではない。土方アキラは意地でも絡繰りロボットに乗り込む気で居るのだ。乗り込んで、絡繰りロボット気分に浸る気で居るのだ！

平和のためにも、断固として阻止しなければならない。

飛鴻は懐の手裏剣に手を伸ばした。そこで、熊との約束を思い出した。

——坊ちゃん、か弱い女の子にそんなモノを使っちゃだめですよちょっとだけ、躊躇する。

約束は守らないといけないのだ。

だが、

——それはそれ、これはこれよ

愛玲のよく言っていた言葉だった。

——忍びはね、それとこれの区別をつけないといけないわ。それとこれの混同は………なんだかねで公私の混同にも繋

がりがねない気もする危険な行為なのよ。

そう言って愛玲は一傑との約束を守ったことはない。

山田飛鴻は今こそ、愛玲を見習うことにした。公私の混同は良くないから。

それに、この土方アキラは、

断じてか弱くないのである！

だから、山田飛鴻は、遠慮なく、手裏剣を使うことにした。

少年が、ゆっくりと自らの懷に手を差し入れる。引き抜かれた右手にはお星様のように輝く手裏剣。手裏剣が蛍光灯にきらりと映える。少年が構える。アキラを、にらみ付けて。

アキラは決意した。

すさんだこの子に、話し合う大切さを教えてあげようと。

それがお姉さん（５日だけ）の役割なのだ。

死んだ熊や鯨波組の面々および四人の勇者さまと神父様のためにも、この子に話し合う大切さを教えてあげよう。このままではいけないよ。

「ねえ、飛鴻くん」

につこり微笑んで、優しく語りかける。

少年は顔を歪め、ずざざざと後ずさった。凄まじくむかつくが、それでもアキラは笑顔を維持してのけた。この辺は大人の女になせる技だろう。

とにかく、少年に感動できる話を聞かせてやって、泣き崩れる彼を慰めてやるのだ。それがお姉さんクオリティ。

「クララが立ったときの話をするわね。クララはね……」

終章 姫と忍者の要塞戦（二）

アキラが五分くらいクララを語って、少年が聞き入っていたときに、

「うっー！、うっー！、うっー！、うっー！、うっー！」

ウツトラウマンのウツタイマーが重低音で鳴り響いた。

「うひゃう！」

と、ソファアに腰掛けていたアキラは奇声を発してテーブルに飛び乗った。見ると飛鴻も、反対側のソファアから飛び上がって撤退、ソファアの後ろに隠れるようにして、手裏剣を構えている。案外、奴も気が弱いのかもしれない。

アキラはお尻で鳴っているウツタイマーを引き抜いた。心臓がバクンバクン言っている。機会があれば、着信音を変えようと思う。序でに着信音量を下げる。

「ごめん。電話」

右手を軽く上げて、少年に断ってから出る。少年は、こくりと頷いている。

「やつぴいーアキラちゃん、わたしわたい。ビックニュースよよ！ ビックニュースなのよー」

アキラの返事を待たずに、携帯電話は脳天気な声で、しかれど威勢良くしゃべり出した。

声は魔女っ子こと、白鳥竜虎のモノだった。

「な、なに？ 今、立て込んでいるから後にしてくれない」

「冷たいなー、アキラちゃん。相変わらずなのねん」

しんなり言ってから、竜虎はけたけたと笑い出した。どうやら、「お宝情報ゲットだぜ」モードに入っているようだ。それもかなり重度に。彼女がこの「お宝情報ゲットだぜ」モードに入ると、なくなしっこかった。アキラは携帯画面を見つめながら、げんなりした。

そんなアキラの気持ちも何のその。竜虎はご機嫌だ。

「あのねあのね？ アキラちゃんにあのね？ アキラちゃんがすごく知りたがっている情報なんだよ？ 新人君のことなんだよ？」

「……しんじんくん？」

つまりは飛鴻、奴のことか。ちらりと見る。分かっているのか、いないのか、少年はこくりと頷いた。

「あの享楽殺人カンフーファイターね……」

「え？ なに？ なんて言ったの？」

「いや、何でも……」

「えー……？ なんでー？ 教えてよー……。アキラちゃんのいじわるー。いじわるさんだー……」

竜虎はけたけた笑っていたが、

「それでね、2日前のことなんだけどね？ ファンシーランドにすごい人が現れたって情報をキャッチしたのよ！」

マイペースに自分の話しに切り替えた。彼女の得意技なので今更アキラは驚かない。

「すごい人？」

「うん、そうよ。すごいのよ。すごくすごい人なのよ、そのすごい人。なんとそのすごい人ね………何したか解る？」

「………いや」

突然、プチクイズ出されても。ぶっちゃけヒント少なすぎだし。

「えー……！ なんでー……。まじめに考えてるー？ アキラちゃん？」

ヒントが【新人君】と【すごい人】だけでは、こいつが何をしかしたかまでは、さしものアキラにも……、

「もしや、人殺し？」

………くらいしか想像出来なかった。

「ファンシーコースター完全制覇を成し遂げちゃったのよ！」

「………へー………」

「誰だか分かる？ 分かるかなー……？」

電話の向こうで、竜虎が、わかるっかな、わかるっかな、ふふふふふふんと勿体ぶって鼻歌を歌っているの、仕方なしに「……飛鴻」と答えた。

「ぴんぽんぴんぽーん。大正解♪ よく分かったわねー
さすがアキラちゃん。ツーカーだね」

誰と誰が？。

「つか新人君のことと最初に言っておいて、分かるもくそもない。
そんなことはお構いなしに竜虎は喋りまくる。

「すっごいのよー！ー。なんとね、カオルのお兄ちゃんがちょうどその時ファンシーランドに居ただけど、それでファンシーコースターに乗っていたんだけど、もう縫いぐるみ、ぐうっしゃ、ぐしゃ」

「…………ぐしゃぐしゃ」

「そう。一つ残らず、ぐうっしゃ、ぐしゃ」

ぐしゃぐしゃのところにやけに拘って、情報屋は抑揚を付けた。
「最初にいる不死鳥さんなんて、お腹と首に本物の手裏剣を食らって、お腹から全部綿を出しちゃうし、首はもげちゃうしで」

竜虎の楽しい口調にあわせて、アキラはお腹を押さえて、首すじを押さえた。

「出来るんだね。完全制覇。五匹レンジャー絶対無理ってアキラ怒ってたけど、みんな見事に引き裂かれていたそうよ。カオルのお兄ちゃん、目の前で見たんだって。飛び散っていく、はらわた。風になびく、取れかけた腕や首。キラリと輝く手裏剣。きゃー！ー！ー！ 私もなりたかったなあー！。歴史の生き証人に！」

「…………私は、出来ればなりたくないなあー」

少なくとも、手裏剣の突き刺さった生き証人にはなりたくない。
ある意味、生き証人じゃ無くなるし。恥も外聞も要らないから、最悪、土下座しても命乞いしようと決心していた。

竜虎は生き生きとした口調で、手裏剣の形状を語っていたが、それは熊に突き刺さった手裏剣と同じっぽくて、すっかり思い出して

しまった。

「それとねー。3組のミーコのお姉ちゃんの友達がファンシーランドでバイトしてるでしょう?」

でしよう? と言われても、他のクラスで面識のない子の姉の友達の日常まで、アキラは知らない。お構いなしに、竜虎は話を続けていく。

「そのお姉ちゃんの友達が、いつものようにノリノリで猫女のバイトしていたのよ。もちろんお化け屋敷で。そうしたらさ、出たんだって。十歳くらいの男の子が」

十歳くらいの男の子という辺りに、竜虎はおどろおどろしいアクトを付けて言った。

「ファンシーお化け、皆殺しだって!」

「……………そう」

手裏剣の突き刺さったファンシーお化けの亡骸たちが、やけにリアルに想像の中で転がっていた。その中にはアキラもなぜか混ざっていたり……。

「こうなると愛玲の伝説も本当かもしれないわね。つまりそれは山田陽子の伝説にも脚色がなかった証拠にもなるし、実際に伝説の要塞もしっかり存在するわけだし、その時に撮られた映像も残っているわけだし、大飛龍がぶち抜いたってコンクリートの壁も細工とかじゃなくて、本当かも知れないわ。あっそうか、飛鴻君って彼の息子でもあるんだ! あり得るあり得る。きつと全部本当のことだったのよ。これは凄い発見よ。一からまた全部の伝説を洗い直さなきゃいけないわ。ああ、こうしちゃ居られないわ。まずは新生ヤマトを撃沈した噂の検証からね」

其処まで一気に独り言を言ってから、竜虎は、

「あつ、そうそうそれでね、ファンシーお化け皆殺しの中には3組のミーコのお姉ちゃんの友達も猫女として参加してたわけだけど」
別に彼女は皆殺しに参加したわけでは無いと思う。

「彼女、お化けたちが殺されていくのを目の辺りにして、怖くなっ

て隠れていたそうなのよ？ でね？ でね？ なのにね？ 見つけられてね？ 引きずれ出されちゃったのよー！ きゃー！

「……………へ、えー！」

「でね？ でね？ でね？ 必死で泣き叫んで命乞いしたそうなんだけど、問答無用なんだって！ きゃー！」

……………おまえは人の不幸がそんなに楽しいのか？。

「その男の子は眉一つ動かさずに、縋り付く二人の女の子を引きずったまま——」

竜虎は、そこで声を低くした。アキラはかなり離し気味にしていたケイタイを、耳に近づけた。そしたら竜虎は、

「ふおおおおああああー！」

電話の向こうで叫んだ。驚いてアキラは電話を落としそうになる。つて、叫び声を聞いた後、お腹に痛みを感じて、その後の記憶がないんだって。気が付いたときは病院のベットでね。隣には一緒にバイトしていた人たちが寝ていて。フランケンシュタインなんて、肋骨2本も折られていたそうよ？」

「……………へー！……………そう……………なの……………」

アキラのビジョンが、がらがらと崩れていく。命乞い作戦は却下した方が良さそうだった。と右耳を押さえつつ左耳で聞きながら思った。

「幸い彼女はただの打ち身で済んだらしいけど、ヨッピーがミーコから聞いた話だと、ミーコのお姉ちゃんの言うには友達は毛布にくるまっでずいぶんと怯えていたそうなのよ？ 子供怖い子供怖いって……………本当に最近の子供って怖いよね」

おまえもな。

それだけ遠回りしてきた情報なら、信憑性も低そうで、アキラは僅かに希望を取り戻した。と、同時にそんなトラウマを持ちたくないなー、と強く思ったが、今日の出来事はすでにトラウマとなって心に刻まれてる気もしたし、何か人として大事なものをなくしちゃ

つてる気もしていた。

「でね。わたし今、病院に居るんだけど――」

看護婦怒れよ。

「さっき3組のミーコのお姉ちゃんの友達に会ってきたのよ。そうしたら噂と違って、ずいぶんとご機嫌でね」

「なんだあ。おどかさないでよー」

やっぱり脚色されていたのだ。いくら何でも命乞いする乙女を無下に殺したりするわけがない。いくらこいつでも。ちらりと飛鴻を見る。分かっているのかいないのか、飛鴻はこくりと頷く。

「あつははは。ごめんね、アキラちゃん。でね。お腹にある大きなアザを見せてくれてね？ すごく嬉しそうにこれで、50万円よ？ なんて言うのよ。治療費や入院費は別に負担して貰えるそうだし、アザも後には残らなくて骨や内臓にも問題ないらしくって。はしゃいでた、はしゃいでた」

「……………そう」

「やっぱり伝説は本当なのよ！ アキラのお母さんは否定してたけど、山田陽子の暴れた後を山田グループは金ですべて誤魔化してきたのよ？ おかしいと思ったのよねー。最初に尋ねたときは、おかげさまでいくら戴いたとか、仕事を紹介して貰ったとか、二階級特進できたとか嬉しそうに話してた町の人たちが、お多恵さんは否定してたって言った途端、黙り込んで何も知らない、勘弁してくれって、泣き出すんだもの。やっぱりアキラのお母さんも伝説のように裏世界のボスなのよ、きっと。逆らったら消されちゃうのよ。アキラには知られたくないんだろうね、だから笑って否定するのよ。あのお父さんは隠れ蓑なのよ、きっと。でもアキラもいつかは家業を継がないといけないんだよね。その時はインタビューに答えてよね？ 友達だもんね？ 答えてよね？」

けっこう失礼な事を言っているが、いつものことなのでアキラはもうあまり聞いていなかった。

「……その情報。出来れば、もっと早く知りたかった……」

ぼつそりと呟いた。二日前にヤツの本性を知っていれば、こんな事にはなっていなかったのに……と思う。

「え!？」

電話の向こうで竜虎が驚きの声を上げた。

「本当？ 本当なの!？ アキラちゃんにそんなこと言って貰えるのって、すつごく嬉しいな！ 本当はね？ 一昨日の内にこの情報掴んでいたんだよ？ でも確証もなかったし、アキラちゃんって無責任なうわさ話が嫌い——というか、面倒くさがって聞いてくれないじゃない？ それに山田さん家の飛鴻君のことだったし、裏がとれるまで黙っていたの。すつごく辛かったなあ、えへへっ」

情報屋はご機嫌で可愛く笑い飛ばした。えへへっが出たのでどうやら「お宝情報ゲットだぜ」モードは終了したようだ。

「でもそんなにアキラちゃんが興味持ってくれるんなら今度から最初に連絡するね？ さつきからずつと電話かけっぱなしで疲れちゃたけど、こんなに喜んで貰えるなら頑張ったかいがあったもん。アキラちゃんが最後のよ、電話」

今度生まれ変わるか生き延びるかしたら、最初に連絡して貰えるように、友達からの電話やメールには愛想よくしようとかアキラは思った。

「じゃね、アキラちゃん。おやすみなさい」

「じゃあね。さよなら、竜虎」

アキラは今生の別れになりそうなさよならを告げた。

「終わったで、ござるか」

律儀に待っていた少年が手裏剣を手に、ずいっと前に出る。

「ちよつ、ちよつと待ってよ!」

アキラはにへらと引きつった笑みを浮かべ、手に持っている携帯電話を前に突き出した。

何故だが、少年が怯んだ。携帯電話を目を見開き睨んでいる。しばしの沈黙。

ぴかりんつとアキラの頭脳でひらめく思考があつた。

——いつつ・ざ・携帯兵器！

後ろを向いて、こそこそとボタンを押す。

再度、今度は強気に携帯をつきだした。

「どう？」

でもちよつと弱気に尋ねる。

液晶画面には、「バクハツするぞー」と書かれていた。

少年が、いよいよ怯む。

アキラは、にたりと笑った。かつて文明と遭遇した未開の住民達は、科学的日用品を魔法のアイテムと勘違いし、侵入者達を神のごとく恐れ敬ったという。

恐れさせてやろっじゃないの？ このストコドッコイを！。

「どう？ 爆発するわよ？ これでもその手裏剣を使う気なの？ この教会もろとも散っちゃうわよ？」

アキラはけっこう涙目で、強きに足を踏み出した。テーブルの上からテーブルの上に。

山田飛鴻は後退った。

柳生の少女は悲壮な表情で、じわりつ、と前に進み出た。何がそこまで彼女を追い込んだのか？ 土方アキラは死を決して挑んできたのだ！。

やはりクララの話は時間稼ぎだったのだ。さすがは演技派忍者。

見事に騙されてしまった！。

「あなたの負けよ。この携帯兵器の高性能爆弾が発動すると、教会どころか、銀河系ごと、消滅することになるわ」

土方アキラは、そう言つてまがまがしい笑みを浮かべた。

「さあ、手裏剣を捨てなさい。捨てないと、まずは手始めに、山田屋敷を爆発させちゃうわよ？」

山田飛鴻は、躊躇した。まさかそこまでは出来まい。そうも思う。だが、相手はただの忍びではない。柳生石舟斎で、他ならぬあの土

方多恵の、あの土方多恵の、あの土方多恵の、娘なのだから。

山田飛鴻は、ゆっくりと手裏剣を足下に落とした。

「他のも全部よ！………まだ持っているんでしょ？」

懷に手を入れ、残りの手裏剣を足下に放り出す。

「……………他の武器も全部。変なことはしないでね。したら、すぐに爆発させちゃうから」

ぐうつと、飛鴻は呻った。さすがは柳生の頭領。まきびしや火炎玉、鎖がまに、トンファーを出す。そつと足下に置く。

「……………武器以外も、持っているものは全部出して」

飛鴻は煙り玉や鍵縄、各種薬剤を足下に置いた。

「……………こんもりと盛り上がった忍び道具を見つめてから、柳生の少女は、……………これで全部……………なの？」

上目遣いで尋ねてきた。

山田飛鴻は頷いた。

「……………もういつそ、上着も脱いでくださる？」

山田飛鴻は、躊躇した。上着には、武器になる長さ2メートルの布が仕込まれていた。その下には鎖帷子を着込んでいる。これまで没収されると、飛鴻の防御力は、格段に低下することになる。更にズボンには、足を守る役目も果たす、ヌンチャクが仕込まれている。このままでは、それまで見つかつて、全部没収されることになる。玄関で靴を脱いできたことが悔やまれた。あれには擦るだけで煙を発する機能と棒手裏剣が隠されていたというのに。彼女も靴を脱いでいたので、ついつい真似してしまったのだが、罠だったのだ。

非道なり、土方アキラ！。

山田飛鴻は、唇を噛みしめた。

少年と少女の決闘は、やっとこさ終演を迎えようとしていた。

だが、しかし、唐突にわき上がった魔神の咆吼が、二人の戦いに割り込むことになる。

「ようこおおお………」

という、鼻水も一緒に垂らしてそうな、だみ声である。

音源は、誰もいないはずのテラス——清水の舞台だ。

この日最後にして、最強の魔神の登場であった。

大飛龍、その人である。

いつの間にか現れた侵入者に、アキラはカーテンを身体に巻いて隠れつつ、躊躇しながらも、声をかけた。

「あのぉ。もしもし」

「やや、脅かせてしまったかい？ すこし、ノスタルジックにとらわれてね。世界を旅しようと思ったんだが、つついここに来てしまったよ。陽子との思い出が詰まったこの山田町にさ」

鼻水をぬぐいつつ、彼はアキラに気づくと語りかけた。

それから、彼は、同じく反対側のカーテンに隠れている飛鴻の存在にも気づいた。

「わっ、我が息子よ。なぜにここに！」

大げさに驚いてから、彼はアキラと少年の顔を交互に見比べた。それから、震えだした。

「あ、逢い引き！」

……なんでやねん。アキラはもはやこの程度では心の中ですら、強く突っ込む気にはなれなかった。

「逢い引き！ 逢い引きなのか、飛鴻！ なんて、なんてお前はませているのだ、このおませさんめええええ！」

天に向かって絶叫する飛龍。

「だが、まあいい。いいだろう。それもまた良いよ、飛鴻。さあ、息子よ！ 来るが良い。父さんが母さんを勝ち取ったように、お前もこの父を超えてみせるが良い！ 彼女を、勝ち取ってみせるがよい！」

嬉々として叫びながら、父は子に拳を向ける。

……なんでやねん。

それでも、アキラは、あえて訂正しなかった。今度こそ、安全を

確保したのだ。彼は、頭はあやしそうだが肉体的には世界最強の男である。小僧つ子などにはかなうはずもない。現に飛鴻は、かなり嫌そうに必死で首を横に振って否定しているではないか……なんかむかつくが。

とにかく、アキラは、かつてないほど強力な仲まを召喚したのだった。

召喚獣の後ろからあっかんべーをする。

飛鴻は、必死に顔を左右に振りつつも、涙目で、鼻水まで垂らしていた。

「どうした飛鴻！ その程度か！ お前の想いはその程度なのかああ……！」

飛びかかってくる息子が無情にもはじき飛ばしつつ、大飛龍は絶叫した。手加減はしているのだが、もちろん愛玲のようにには、手加減しない。飛鴻の体は、ゴム鞠のように吹っ飛ばされては、壁や椅子、テーブルに激突する。

呻く息子の襟首を掴み、引きずり上げて、大飛龍はまたも叫んだ。「どうした飛鴻！ その程度か！ お前の愛はその程度なのかああ……！」

「あつ、あのさ、おじさん。もうその位で許してあげては——」
さすがのアキラも気弱に止めに入る。

きつ、と飛龍がアキラを振り返った。

たじたとアキラは後ずさった。

「お嬢さん。君の気持ちは分かる。ああ、分かるよ。だけど、だけどさ。男ならこれは必ず乗り越えなければならないことなんだよ。それほど結婚すると言うことは、大変なことなんだよ。20回くらいは死にそうな目にあっても、叶えられない夢なんだよ」

飛龍は、寂しそうに俯いた。

それから、

「おまえは、おまえは、その程度で父さんを差し置いて結婚できる

「思ったのかぁー！！」

手にぶら下げた息子を、投げる。

「いや、あのね」

「結婚をなめるなぁー！！」

蹴る。

「だ、だからね。おじさん？」

アキラを振り返って。

「ああ、しかし懐かしいなぁー。この子とこうして汗を流している
と、初めて武道を教えた日のことを思い出すよ」

「初めて武道を？」

「ああ、あれはこの子が三歳の誕生日を迎えたときのことだったよ
ね？」

「いや、だったよねって問われてもさ……わたしや、知らないし……」

「陽子にせがまれてね。三歳になったら、私がこの子に武道を教える
ことになっていたんだよ」

遠い目をして、おじさんが語っている。

「だけど、おじさんは子供に武道なんて教えたことがなかったんだ
よ。困っちゃってさ。だから、とりあえず先人に学ぼうとしたんだ」
アキラは黙って聞いていた。天下無双の武道家・大飛龍が、息子
をどの様に鍛えたのか。今日一日、少年の出鱈目な強さを見せつけ
られたアキラは、興味津々だった。

「ライオンは実の息子を千尋の谷に突き落とすというから、とりあ
えず突き落としてみたんだ」

「……いや、それはセンジンの意味が違うやろ！ 心の中で、アキ
ラ突っ込む」

「……そうしたら、陽子の奴、二度とおまえは飛鴻に武道を教える
なと……指一本触れるなと……多恵や愛玲や一傑まで一緒になつて
……袋だたきにあつて……結局、武道は一傑が教えることに決まっ
たんだよ」

おじさん、寂しそうに俯いている。

シーンと冷え込んだ部屋に、アキラの携帯が小さく、
うつうつと

と鳴った。

とりあえず、出る。

「あつ、お母さん」

ほっとした声を上げる。

「うん……うん……大丈夫……だと思う」

だがしかし、アキラの眩きは、大飛龍の耳を打った。

——お母さん………お母さんだと？ お多恵さんか！！。

——お多恵さんなのか——！

大飛龍の脳裏に、二日前のまがまがしい記憶がよみがえった。彼が旅（家出）に出る切っ掛けになった出来事だ。正座する彼の前で、つばを飛ばして激高する彼女。口答えするたび、八回も蹴られた。飛龍は思う。彼女を可愛いと言う一傑は、きっと変態だ。

目の前の息子を見る。口の端から、血を流しつつ、よろよろと起きあがっている。構え、飛龍を睨んでいる。

「えっと……今ね」

アキラが、飛龍の方を見ながら、電話に言った。

——まずい！

大飛龍は思った。

彼の鍛え上げられた肉体は、脳の要求にタイムラグなく応えた。目にもとまらない速さでアキラの傍に滑りよると、獅子がウサギに對するように、一切の油断を廃して、携帯を捕らえた。へし折った。驚き見上げる少女に、

「認めよう。二人の仲を」

にっかりと微笑んだ。

「飛鴻よ——我が息子よ。よくぞ此処まで成長したもんだ。天国の母さんもきっと喜んでいるよ」

「ちよつ、ちよつと」

少女が声を上げるのを首を振って制して、

「どうやら、飛鴻の想いは俺を超えたようだ。君たちの熱い熱い想いのタケは、私の凍った心を熱く打ち砕いてくれた——いや、もう、それは見事に！」

そう言つて飛龍は、舞台の欄干に駆け寄つた。

「達者でな。飛鴻。——それに、お嬢さんも。お、おた……おた……いや、みんなには、僕のことは内緒に置いて置いてくれないか——息子を心配してやつて来た過保護の父とは思われたくないからね——」

そう言つて飛龍は来た道を——壁面を——ものすごい速度で去つていったのであつた。

「まって——まってくださあ——いい——いい——。こらまでおやじいいいい——！」

と叫ぶ、少女の悲痛な願いを置き去りにして。

壊れた——正確には壊された——ウツタイマーを手に、アキラは呆然と鬱つていた。

結局この世で信じられるものは、己一人なのか——つか、二度と飛鴻の関係者は信じちゃいけないと心に刻み込む。

少年が、こんな荒んだ子になつたのも、分かる気がした。

バファリンの半分は優しさで出来ているが、少年の半分は大飛龍で出来ているのだ！……残り半分は山田陽子。

アキラは半分だけでもぱつとしない父親から生まれていることに、ちよつと感謝した。これがもし土方多恵と、大飛龍級の馬鹿から生まれていたとしたら、コイツよりももっとタチの悪い子に育つていただろう。刃物を片手に的確に同級生を刺殺していく（横で竜虎がウケケケと写真を撮っている）自分を想像して、頭を振る。

しみじみと遺伝の恐ろしさを噛みしめるアキラの横で、よろよろになつた少年は、床に手を伸ばして、鉄塊を掴んだ。もちろん、手

裏剣である。

目はかつて無いほどに血走っていて、痛いほどの殺気が迸っていた。

「あー、何の話だったかな？……そうそう、クララが初めて月面に立ったときの話だったわね。月にはね——」

「クララの話はもう良い」

……少年は一段と荒んでしまったようだった。もはや優しいお姉さんの声は届かないのか。

「……つづくので、ござるな？」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……ええ、そうよ、動くのよ！」

アキラは、開き直った。少年の話を思い出して。

「この教会は、からくりロボットで柳生さんよ！　どうよっ、まいった！？」

両腕を腰に当てて、胸を張る。

少年は首を横に振った。

参ってくれないようだった。疲れ果てた表情からは、彼もぎりぎりっぽい気がしないでもないが。

アキラは少年を指さし、叫んだ。

「野球で勝負よ！」

少年は怪訝な顔をしている。

「……まさか、知らないんじゃないでしょうね？　野球って、柳生から来てるのよ？　……似てるでしょ？」

少年は目を見開いた。だが、

「もちろん、知っているでござる」

うそぶいた。

「……当然よね。野球ってスポーツは、柳生忍者の修行か

ら来てるって……愛玲が言ってたわ」

とりあえず、アキラは愛玲のせいにした。

「だから、野球で勝負しよう！」

「いいでござる。で、どうするでござるか」

「そうね……。簡単にいきましようよ」

廊下の先、玄関のドアを閉めて、アキラはその上にマジックで四角い線を引く。

「交互に一球ずつ投げ合って、この枠の中に三回当てた方の勝ちね。バット——バットはもうわかるよね、つまりその棒で枠に当たらないように、打ち返したりすればいいわけ」

ドアにストライクゾーンを書き終わると、アキラは絵の具を引っ張り出してきて、ボールに塗りたくった。いまいち腑に落ちない顔をしている飛鴻に向かい、

「まあ、なんだ。その枠がお殿様だと思いーね。護衛任務ね。2回までは気力で耐えるけど、3回当たたらお殿様は死んじゃうのよござる？」

「ござる」

飛鴻も律儀に答える。アキラは満足そうにうなずいた。

「まず、きみから投げなさい」

アキラが言って、どろどろのボールを飛鴻に手渡した。それを手に持って飛鴻が廊下の端に行く。もちろん、廊下のはしには、マウンドの代わりに床に線が引かれている。アキラの手で。

アキラはストライクゾーン、もとい四角いお殿様の横でぐつと構えた。

はつきり言って、分の良い勝負ではなかった。野球なら負けるつもりはないが、この勝負は野球であって野球ではなかった。投げて打つ、それだけしかない。それもゴムボールだ。やわらかすぎて軽すぎて、軟球のような変化球が投げられない。いわば、アキラの得意球が使えない勝負なのだ。……殴り合うよりはマシだけど。

飛鴻が構え、振りかぶった。うなりをあげたボールが、お殿様を

襲う。

（速い！）

かろうじて、アキラははじき返した。白木の床と壁に、ぴちっぴちつと絵の具が飛んだ。野球なら平凡なピッチャーゴロである。アキラは少し唇をかんだが、それでもルール上は問題ない。勝ったことにすることにした。

「次は、私の番ね」

不敵に笑んで、アキラはバットを置いた。

どろどろのボールを飛鴻から受け取る。念のために絵の具を付け直した。絵の具がちゃんとお殿様に付かないと、難癖を付けられるかもしれないからだ。

内角低めを目掛けて、投げた。

ぼうつ

がんつ

プラスチックのバットが、ボールをとらえた。あつという間に、アキラの後ろ、リビングのソファーにボール型の絵の具が付着した。唇をかみしめる。やはり、こいつは相当できる。

ちよつと遅いけど、リビング側のドアを閉める。

その後、7回に及ぶ投げ合いの間、両者引かずに、お殿様を守りきった。

8回目、アキラのバットは空を切った。

つまりは、少年のボールが、お殿様を捕らえたのだ。

両腕を胸の前で傲然と組んで、少年がふんぞり返っている。

アキラは色とりどりになった手で、これまたどろどろのボールを拾い、深呼吸をする。

どうやら、魔球を使うべき時がきたようだった。ゴムボールにも慣れてきたし、距離感もつかんだ。板の跳ね具合も理解した。

アキラは渾身の力を込めて、投げた。――床に。

ぼんつと球が跳ねて、ワンバウンドで飛鴻のバットをかいぐぐり、お殿様をとらえる。

鼻を下をこすりつつ、アキラはにやりと笑った。

これで一対一。

後二つ先にとった方の勝ちだ。魔球を持つアキラの方が有利である。

だが。

飛鴻が投げる。――床に。

球は跳ね返って、ストライクゾーンを打ち抜いた。

にやりと、飛鴻が笑う。

――や、や、ろおおー！。真似しやがったあー！。

これで、ぶっちゃけアキラに後はなくなってしまったのである。

「これで勝負は決まりましたね」

モニターを覗きながら、アッキーは呟いた。

こちらの呟きも、幾分疲れが混じっている。

アキラが魔球を使ったときアッキーは、おいおいと思ったが、二人揃って魔球を体得した以上、もはや勝負は決したのだ。

あれをバットに当てるのは、至難の業だろう。魔打法を編み出さない限り、土方アキラに勝利はあり得ない状況となった。

それでも、まだアキラは勝負を諦めていないようで、天井にぶつけて投げ下ろすという、更に難易度の高い魔球を披露してきた。

モニターの向こうで、アキラはにやりと、飛鴻に笑いかけた。

「アキラちゃん……誘ってますねー！」

飛鴻がアキラに対抗意識を燃やして、いまの魔球を投げようとすれば、枠を外す可能性があった。それほど、天井に当て下ろす魔球は、床をバウンドさせる魔球に比べて、難易度が高い。それは室内野球を堪能する者たちにとって、周知の事実であるだろう！さらには万一、飛鴻がその上を行こうと天井と壁に連続で当てて二度バウンドさせる多段バウンド高級魔球にチャレンジしたら。それこそアキラの思いつきである。室内野球を堪能する者たちにとって、（略）。

だが、飛鴻は冷静だった。

飛鴻が投げる。

床に。

シングルで跳ね返ったボールは。

だが、お殿様でなく、アキラの体を捕らえていた！。

アキラが、お殿様の前に、立ちふさがっていたからだ！。

沈黙をはさみ。

アキラは「うふふふ」とかなり疲れ気味に笑った。

「次は……私の番ね」

「……さすがアキラちゃん、汚いですねー……いろんな意味でアッキーが眩く。」

もちろん、飛鴻も同じようにお殿様の前に立ちふさがって……要塞戦は、最後の最後も……やっぱり泥仕合へと突入していった。

飛鴻が26回、アキラも26回身体を呈して守るべきモノを守ったあと。

すでに二人の姿は絵の具魔神へと変貌しており、力の源である絵の具も大半が尽きていた。その分廊下はアートの極みに達していて、今も、飛鴻が放った絵の具の固まりが、アキラの身体に命中する。アキラは、自らの身体に当たって落ちたどろどろのボールを掴んだ。遠い目で、手の中の泥玉を見つめる。どこで人生を間違えたのか？ 何故人は戦わねばならないのか？

「うつわぁー……」

ついに、土方アキラはぶち切れた。

その場で振り返って、お殿様にぶつける。

ぜえぜえはあはあ、息をしてから、

「エイドリアー……ン！！」

叫んだ。

それから、振り返って飛鴻に告げる。

「三回当てたわ……私の勝ちね」

がつくりと、膝を屈する飛鴻。

「なんでやねん！」

とモニターの向こうでは惟道とアッキーが叫んでいた。

だが、飛鴻は即座に立ち上がった。

飛鴻は、ひとりで重々しくうなずいてから、手裏剣を取り出し、

「秘伝の書を、渡して貰おう」

言った。

「なんでやねん！？ 勝負はあたいの勝ちやがな！？」

今度はアキラが激しく突っ込んだ。

「それはそれ、これはこれでござる！」

両腕を胸の前に組んで、飛鴻はふんぞり返った。

でも顔はけっこう耳まで真っ赤だった。

そっぽを向いてふんぞり返っている飛鴻を、アキラはしばし睨みつけていたが。

「……わかったわ」

シヨンボリ頂垂れて言った。

確かに少しだけ、ずるっこかったかもしれない。そんな自覚は年頃の乙女並みに持っていたから。

「ちよつと待っててね」

そう言って奥の部屋に走っていく。

少ししてから、アキラは奥の部屋から一冊の書物を引っ張り出してきた。

「秘伝の書よ」

ひでんの書と、大きく書かれている。

まだ乾いていない絵の具で。

その下には、ものすごく堂々と、タウンページと印刷されている。いわゆる、電話帳である。

「ほら。持って行きなさい」

つき渡す。

受け取った飛鴻は怪訝な顔をしていた。

ちらりとアキラを盗み見る。

「忍者暗号で書かれているけど、もちろん君には読めるわよね？
私は、まだ半分も解読出来ていないけど」

「もちろんでござる」

飛鴻はうなずいた。

こうして、二人の勝負は終了した。

鼻の下を絵の具まみれにして欠伸している少女と、眉をへならせ、
電話帳を眺めている少年。

どちらが勝利者かは、この時点では何ともいえないだろう……き
つと。

二人の戦いは、これから延々と続いていくのだろうか……き
つと。

とりあえず、

「……………終わった、みたいですな」

疲れ切った声で、アッキーは呟いた。見ているだけで、寿命が縮
むおもいだった。この二人が大人になって山田町を背負う日がきつ
と来るのだろう。そして飛龍とか愛玲とかが入り浸ったりするのだ
ろう。アッキーは家を建てるなら別の町にしようと決意した。

「そのようですな」

惟道が微笑む。

とにかく、終わったのであった。

「押しますよ？ いいですね？」

アッキーが惟道に念を押す。

「はい」

惟道が頷いた。満ち足りた、透き通った微笑みを浮かべて。

カラン、カラン、カラン、

と鐘が鳴り響いた。

屋上に備え付けられた、巨大な鐘だ。

今日は彼女の誕生日。時計を見ると、山田陽子が生まれた時間を

少し過ぎていた。

遠くではすでに花火が上がっている。

アキラは急いでテラスに出ようとした。

その時、ぶーんっつと、プラズマテレビが唸った。

アキラは立ち止まる。飛鴻も、それを見上げた。

「ふふふ、山田町へようこそ。

初めまして？ それともお久しぶりかな？ 山田飛鴻くん。

三つの謎を解き明かし、よくぞここまで辿り着きました。

わたしの名は、山田陽子……とりあえずはミスターXと名乗っておきましょう。

君はまだ知らないだろうけど、山田町には沢山の宝ものが隠されているぞ。

君はどれだけ見つけられるかな？

さあ、探してみよう。山田飛鴻君！

愉快的仲間をかき集めて。

君の挑戦を待っているぞ！

——まずは、この部屋に隠してあるファンシープリンを見つけれられるかな？」

古ぼけた映像の中で、嬉しそうに若かりし日の山田陽子は、笑っていた。

遠くで上がる、花火の音を、BGMにして。

記念すべき、山田陽子の最初の挑戦状をお届けした後。

中枢ルームでは、今さっきまで微笑んでいた惟道が汗を垂らして青くなっていた。

段取りは大きく狂っていた。飛鴻にミスターXからの挑戦状を手渡して、惟道が用意した三つの謎を飛鴻が仲間たちと突破してから、此处に導く予定になっていたのだ。

しかし貴久鉢が飛鴻を離さないし、お多恵さんも干渉してくる。なかなか飛鴻が暇をもてあます時間もなく。惟道が飛鴻を長く独占する時間は取れそうになかった。急がないと少年が帰国してしまう不安もある。だから今日の騒動に便乗して、急遽決行することになったわけ。

つまり、急なことであり、致し方ないことであり、惟道は、山田陽子から隠しておくように命じられていたファンシープリンを、すっかり隠し忘れていたのであった。

モニターの中では、絵の具でどろどろになった少年と少女が、部屋中を引つ掻きまわして、ファンシープリンを競い合って搜索している。惟道は罪悪感に苛まれながら、どうかファンシープリンが見つかることを祈っていた。

山田陽子の部屋のドアは開け放たれ、玄関には、子供の靴が二足並べられていた。白木の廊下には足の踏み場もないほど、絵の具が飛び散っていて、壁どころか、天井にも、ボールの跡がべったりへばり付いている。しばし、呆然として、はっと我に返るとお多恵さんは、靴を履いたまま廊下を突き進んだ。

小さく開いている扉を押し開け、リビングに踏み込む。廊下ほどではないが、此处もどろどろで、無理矢理なくらい、散らかっている。まるで数十人の盗賊団か、それとも山田陽子の襲撃を受けたようだった。窓は開け放たれていて、カーテンが強い風になぶられている。プラズマテレビは、ざーざーざーと、ものすごく不自然な砂嵐を放送している。

全ての部屋の電気が付けっぱなしにされているようだ。半開きの扉たちから灯りが漏れていた。

二人が何処かに潜んでいることは、間違いなさそうだった。なのに、静かだった。二人が神隠しに遭ったのかと、不安になるほど、それは場違いな静かさだった。

と思うまもなく、砂嵐のざーざーざーやカーテンのバタバタ

とした音に混じって、きゃいきゃいとしたアキラの声が、聴こえてきた。

ほっとして。

それからゆっくりと、何となく足音を立てないように注意して、お多恵さんは、声の聴こえてきた部屋を、書斎を、そつとのぞき込んだ。

座り込んでいた。アキラと飛鴻が。並んで。

部屋中に、いっぱい書籍が、お菓子とともに、広げられている。いや、違う。本ではなかった。アルバムだ。

陽子のアルバムや、貴久鉢のアルバム。

押し入れから箱ごと引き出されて。折り重なるように広げられている。

アキラは身振り手振りを交えてきゃいきゃいと、飛鴻は時折首を捻って、首を傾げて、頷いて。二人がアルバムを鑑賞している。

お多恵さんは、小さく微笑むと音を立てないように、そつと、リビングに戻って。ソファに身を沈めて、大きくため息を吐いた。身体中から、力が抜けていくようだった。

お多恵さんは、冷蔵庫を開けて、コーラの缶を取り出して。遅れてやってきた愛玲にも放り投げつつ、のどを潤しつつ、壁に飾られた『遊び心』の習字を睨むように眺めつつ、さて、どう怒ったものかなと……。

数分後……。

「おのれらああああー！ー！そこになおれえー！ー！ー！ー！」
というお多恵さんの怒号が、天守閣に響き渡った。

山田貴久鉢は、玄関横の待合室で、権六と囲碁を打っていた。
屋敷の外から、車のエンジン音に続いて、がやがやとした話し声。
「おっ、帰ってきたか」

山田貴久鉢は、急いで碁石を片づける。

「わしの中押し勝ちじゃな」

権六が白石をじゃらじゃらと集めながら、ほざく。

「馬鹿を言え、時間切れで引き分けじゃ」

貴久鉢は席を立った。権六が後ろで何か喚いているが、それどころではない。

部屋を出ると、ちょうど飛鴻とアキラが、靴を脱いでいるところだった。

「あつ、待て、上がるな！ 靴下もそこで脱ぐ！ あっきー！ 雑巾とバケツ持ってきて！」

お多恵さんが金切り声で叫んでいる。

飛鴻とアキラが、情けなそうに、貴久鉢の顔を見上げていた。

「ハイカラな服じゃなあ。遠慮はいらんぞ。そのまま上がりなさい」
笑いながら言ったら、お多恵さんに怒鳴られた。

貴久鉢は小さく首をすくめた。

陽子とお多恵さんが、絵の具まみれで帰ってきたのは、確か6年生の卒業間近。貴久鉢はその日も仕事で、二人の雄姿を見損ねたが、台風少女の二人組は、どろどろのまま、廊下を駆け抜けて言ったと聞いている。

「大人になったもんじゃ」

笑いながら感傷に浸っていると、お多恵さんに睨まれた。

山田陽子が居なくなつてからは、8月14日にダンスホールが賑やかなのは、ずいぶんと久しぶりだった。

純白のシルクに覆われた丸テーブルが所狭しと並び、料理の花を咲かせている。

その周りを、白虎寺の子供たちが走り回り跳び回り、騒々しくも楽しそうに会食している。愛玲は相変わらず、果物ばかりを食べている。王毅はどんぶり飯に山盛りのおかずを乗っけている。梁一傑の周りにはメイドたち。部屋の隅ではおかつぱの女の子がうずくまって、アイスクリームを食べている。時たま、頭がきーんと来たの

か、ごろごろと転がっている。

しかしホールの一角に、暗雲のたれ込めたテーブルがあった。

飛鴻が座っていて、その横にお多恵さん、さらにその横に、土方アキラが座っている。

三人に向き合う形で、貴久鉢と権六。

お風呂上がりのお子様二人は、そんなにお腹が空いていたのか、競うように、がつがつとむさぼり食っている。時たま小さく身振り手振りと視線で挑発し合い、でも何も言わず、またがつがつと食っている。

二人の間でお多恵さんが、時たま、ため息をついて、時たま、口に料理を運んで、時たま、二人をしかって、時たま、頭を振っている。

貴久鉢は、何か言おうと、開きかけ——た口を閉じて。頼りなく笑った。

「わし、ちょっとトイレに」

気弱に呟いて立ち上がるうとする権六の足を、踏みつける。

山田貴久鉢は、途方に暮れていた。

途方に暮れていると、顔を上げた少年と、目があった。

山田貴久鉢は、ぎこちなく、微笑んだ。

少年が、ぎこちなく——。

エピソード

山田陽子は、ベットで半身を起こして、答案を採点していた。

それから、にんまりと、ほくそ笑んだ。全問正解。大変良くできました。もともと、一桁の足し算ではあるけれど。小学校にもまだ通えない子供にしては、この成績はすばらしいのではないだろうか？。

「これなら、アキラちゃんに勝てそうね」

まだ幼い息子に笑いかける。

「あきらちゃん？」

不思議そうに息子——飛鴻は尋ねてきた。

重々しく、山田陽子はうなずいた。じっさい、少し重たかった。

「そう、土方アキラ。多恵の娘よ」

「……たえの」

多恵と飛鴻は旧知の仲だった。彼女は二ヶ月に一度くらいは、愛玲と喧嘩するためにやって来るので。もともと多恵は仕事のついでとか言っていたけれども、こんな所に何の仕事があるのやら。

「かわいいわよ。惟道の話では相当の gön たくそらしいけど」

ちなみに、惟道も飛鴻のお知り合いだった。彼の場合は、月に一度は白虎寺にやって来て、色々と身の回りの世話をしてくれている。飛鴻は私が育てたと言い張る——実際その通りだけど——愛玲とは犬猿の仲で、いつも口論している。

山田陽子は、ベットの脇に置いてあった写真を手に取った。写真はつい先日、惟道が撮ってきたものだ。飛鴻に手渡す。

生意気そうな顔をした女の子が写っている。大きなお屋敷を背景にして、両腕を胸の前で組んで、傲然とふんぞり返っている。

それを見ながら、不思議そうに、飛鴻が首をかしげていた。

山田陽子はくっくつと喉のおくで笑いながら、

「手強いわよ」

「てごわい？」

「そう、手強いわ。なんせ、多恵の子だからね。理屈っぽくてずる賢いくせに、理屈もへ理屈も一切通じないところなんて、多恵とそっくりだそうよ」

惟道の評である。多恵とは違い、裏表なく、随分と大雑把な性格をしているそうだけれども。その分、手に負えないやんちゃではあるようだ。

じつと、少年が写真の少女を見つめている。

打倒、多恵ちゃん。神童・綾小路多恵が初めて山田町に来てから、山田陽子の少女時代の大きい目標になったそれは、けっきょくうやむやなまま、果たせずに終わっていた。

……うやむや、と言うより勉強も運動も口喧嘩も、一度として勝てたことはないけれども。……やっぱりこれは負けたのかな？

山田陽子は首をひねった。

仕方ない。認めよう。山田陽子は、重々しくうなずいた。

でも、大丈夫だ。負けた分は、きつと出来た息子が取り返してくれるから。

「敵討ちね」

「かたきうち？」

「そう。敵討ち。つまりは何があっても、アキラちゃんだけには、絶対に負けちゃ駄目ってこと」

こくりと、少年がうなずく。

少年はまだ不思議そうに写真を見つめている。

山田陽子は、ゆっくり身を横たえた。

20を上回ること5年。とうとう25歳の大台だった。……けっこん、しとけばよかったなあ。と思わないでもない。

山田陽子は、小さくため息を吐いた。

愛すべき夫は、まだ部屋に籠もって泣いているのかな？ 世界最強の格闘家になるために。またも挑んで負けてきて。

山田陽子は、もう少し大きなため息を吐いた。

飛鴻が、心配そうに見上げていた。

慌てて陽子にはにんまりと微笑んだ。

懐かしい山田町で。大きくなった飛鴻が、写真の少女と張り合う姿を想像しながら。張り合いながらも、仲の良い二人の姿を想像しながら。陽子と多恵の関係そのままに、少女のうしろを、とことこ追いかける飛鴻の姿を想像しながら。山田陽子は、にんまりとほくそ笑んだ。

飛鴻の頭をなでる。ゆっくりゆっくり時間をかけて。

沢山沢山用意している。この子がいつ、山田町を訪れても良いように。どれだけ遊んでも飽きないくらい。沢山沢山の挑戦を。それを一つ一つ積み足していくことが、山田陽子の密かな楽しみだった。さあ、山田飛鴻！

私の育った山田町を冒険して。私の造った迷宮をさまようのだ！

……惟道はうまくやるだろうか？ このじいにお任せあれ！

と胸を叩いていたけれど。あとで念を押しておこう。

でも本当は。

「いつか、きつと、一緒に行こうね？ 山田町に」

少年が、こくりと、頷いた。

きつとたぶん、無理だろうなと思いつつ。でももしかしたらと思いつつ。山田陽子は微笑んでいた。山田飛鴻の頭を撫でながら。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6748h/>

山田町ようこそ

2010年10月8日13時54分発行